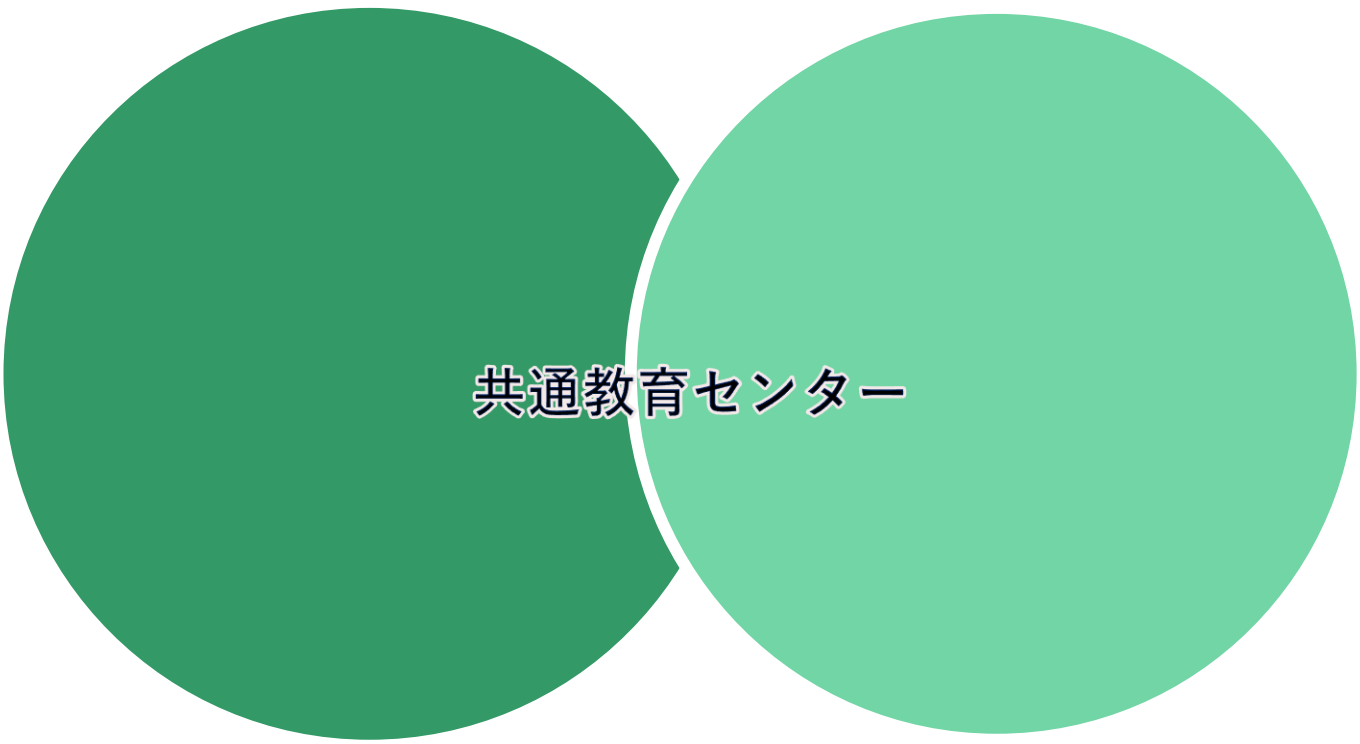
Ⅳ
鹿児島大学
の
ＦＤ活動

第２部

各学部・研究科の
ＦＤ活動報告

目　　次

■共通教育センター・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
■法文学部、人文社会科学研究科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
■教育学部、教育学研究科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
■理学部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
■医学部医学科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
■医学部保健学科、保健学研究科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
■歯学部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
■工学部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101
■農学部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
■水産学部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153
■共同獣医学部、共同獣医学研究科　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 177
■理工学研究科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 201
■医歯学総合研究科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 223
■臨床心理学研究科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 235
■連合農学研究科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 257


共通教育センター

令和 7 年度 共通教育センターファカルティ・ディベロップメント活動報告書

文責：令和 7 年度共通教育センターファカルティ・ディベロップメント委員会委員長　井村隆介

本報告書では、令和 7 年度に共通教育センターで実施したファカルティ・ディベロップメント（以下、FD）活動とその成果について報告する。本報告では、FD 活動計画に基づく企画 1～5 を順に紹介し、最後にまとめに代えて FD 参加率を示す。なお、各 FD 企画で実施したアンケートへの回答については、記述の一部を整理・編集した上で掲載している旨、お許しいただきたい。

企画 1：授業改善に資するアンケート及び「授業改善メモ」の提出

共通教育センターでは、教育の質および学位の質保証に関する取組の効果と課題を継続的に検証するため、各ターム末に全科目について受講生に対して「授業改善に資するアンケート」を実施している。各教員が学生による授業改善に資するアンケートの結果を振り返り、自身の授業の中で取り組んだ内容を検証し、当該授業における新たな改善策と学習成果の向上が期待されている。そのためには、各科目におけるアンケートの回収率が重要となる。科目によって受講生数が異なるので、一概には並べることはできないが、回答率は 90%を超える科目もあれば、0%の科目もあり、大きなばらつきが見られる。

共通教育科目全体としての回答率は、令和 7 年度前期が 38.2%、後期が 35.1%であった。全学的にも、各種アンケートの回答率低下が課題となっている。共通教育センターFD 委員会でも先生方に「講義中の紹介」をお願いし、manaba 上でも学生に呼びかけを行ってきたが、改善には至らなかった（令和 6 年度の回収率は前期 53.2%、後期 36.2%）。学生からは「多数求められるアンケート全体への疲れ」の声も聞かれており（学部 1 年生と 3 年生には別途「授業・学習アンケート」が 10 月 20 日～11 月 30 日の間に行われている）、今後は全学的な対応の検討が必要であろう。

科目担当教員には、アンケート結果を踏まえて、授業内容・授業方法の分析や授業改善案等を「授業改善メモ」として提出してもらうこととしている。令和 7 年度前・後期のその内容はすでにホームページに掲載されている。近年、学生へのアンケートの自由記述欄には学生からの不適切な記述も散見されるようなので、教員自身や科目・研究分野における授業哲学等が、それらによって歪められることのないように注意が必要である。

企画 2：共通教育センターFD 講演会（外部講師招聘）

共通教育センターFD 委員会では、学位の質保証をはじめ専門教育との接続や高大接続の問題、リメディアル教育、数理・データサイエンス教育、生成 AI の問題等、多岐にわたる課題に適切に対応できるよう、識者に提供していただく情報や知見を教職員が共有するための講演会を企画することとしている。今年度は、共通教育センターFD 委員会独自の企画だけでなく、理工学研究科の FD 委員会と合同で 2 件の外部講師による講演を企画した。いずれの講演会に対しても 20 名以上の共通教育センター教員の参加を得ることができ、円滑に実施することができた。

1）2025 年度鹿児島大学工学部・理工学研究科・共通教育センター合同 FD 講演会

■演題：生成 AI は大学教育と業務をどう変えるか：実践事例と展望

■講演者：島田敬士　先生（九州大学）

■日時：令和 7 年 10 月 15 日（水） 13:00～14:00

■場所：理工系総合研究棟 2F　プレゼンテーションルーム

対面・Teams 利用のハイブリッド開催

■講演概要とそれに対する意見等：ChatGPT をはじめとする生成 AI が、大学における教育・研究・業務の現場に急速に浸透しつつある中、導入方法や効果に対して、戸惑いや疑問の声も多く聞かれる。講演では、授業準備の効率化、教材・課題の生成、フィードバックや成績評価の支援、授業中のインタラクティブな活用、学生相談への対応補助、問い合わせ対応の自動化や業務効率化まで、九州大学における大学教職員の日常業務を支える多様な活用事例が紹介された。また、情報系以外の分野でも実践可能な工夫に重点を置き、生成 AI を授業や業務に無理なく取り入れていくための段階的な導入法についても紹介された。

単にレポート文章の作成だけでなく、大学内の様々な作業の効率化への生成 AI の可能性が示された。理工学研究科との共催であったが、参加された共通教育センター内の文系の先生方にも大きな示唆を与える内容であった。日進月歩の技術であるので、教職員・学生の使用のルールも常に組織全体として考えておく必要性や、知識だけでなく意識の重要性などが意見交換で示された。

2）2025 年度鹿児島共通教育センター・理工学研究科合同 FD 講演会

■演題：総合探究世代」に向けたアクティブラーニングのポイント

■講演者：福島創太　氏（株式会社 教育と探求社 開発部マネージャー）

■日時：令和7年 12 月 12 日（金） 15：00～16：30（講演）、16:45～17:45（意見交換会）

■場所：共通教育棟 2 号館 1 階 213 号講義室

対面・Teams 利用のハイブリッド開催

■講演概要とそれに対する意見等：2022 年度の高校指導要領改訂により「総合的な探究の時間」を中心とした探究学習が全国で展開されている。現代の高校生や大学 1・2 年生は、学校の正規の授業を通して探究に取り組んだ「総合探究世代」である。さらに中学校での経験や先行実践を含めると、「探究学習」は現在の大学生の共通体験となりつつある。探究学習は、主体性や創造性、対話や協働を重視して推進されてきたが、実践の質には大きなばらつきがあり、「やらされ探究」「探究疲れ」といった声も生まれている。講演では「今どきの大学生」がそもそもどういった特性を持ち、「探究学習」で何を体験し、いまどんな状況にあるのかが示された。そのうえでこの約 10 年間にわたり探究学習および学び手主体の研修デザインに携わってきた講演者の知見を基に、「総合探究世代」にアクティブラーニングを通して主体的、協働的に学びに取り組む機会を提供するためのポイントが示された。

意見交換会では、大学の卒業研究では本当の（未知の）探求をするので、その準備期間として初年次教育の「探求教育」が重要であること、グループワーク時のフリーライドの問題等について話し合われた。

企画 3：共通教育懇談会

共通教育センターFD 委員会では、共通教育が抱える諸課題や専門教育科目との接続について情報交換を行い、学士課程の一部を担うものとしての共通教育の改善に向けたアイデアを得ることをねらい、「共通教育懇談会」の企画を提案していた。しかしながら、令和 8 年度にむけて共通教育のカリキュラム改革が進行中で、意見交換等をするための十分な議題を設定できなかったため、今年度の「共通教育懇談会」の実施を見送った。令和 8 年度からの共通教育新カリキュラムの検証に関しては学年進行の状況を見ながら検証される必要があり、令和 8 年度入学生が学部での講義が主となる頃以降に学部等の意見交換が行われるのが望ましい。

企画 4：個別自主研修

共通教育センターFD 委員会では、令和 5 年から桐蔭学園トランジションセンターが運用する Tulip メーリングリストを利用し、オンラインかつ無料のイベントを FD 委員長が選んで manaba 上で紹介してきた。個々の教員が自身の都合や関心に応じて多様なテーマの企画に参加可能となることを目指してのことであり、今年度も取り組みを始めた。

しかしながら Tulip メーリングリストでは毎日 4～5通以上の案内が届く。件名から内容の概要は把握できるものの、各メールを開いて内容を確認し、一覧表へ転記したうえで manaba に掲載する作業は大きな負担となった。その結果、委員長の本務である授業や学生指導に支障が生じる状況となった。FD 委員会のメンバー全員で分担することも考えたが、結局それぞれのメンバーが同じことに陥る可能性が予想されたので、FD 委員会で審議した後、今年度からは学内外での FD 活動の紹介を以下のようなリストを manaba 上に掲載することに改めた。このことは共通教育センター運営会議で報告し、了承いただいた。

manaba に示した FD 紹介リスト

先日の共通教育センター運営員会で報告しました通り，学外の FD 講演会・メーリングリスト・メールマガジン・イベント紹介ページについて，以下のとおり紹介いたします．

〇芝浦工業大学教育イノベーション推進センターの国内 FD・SD 情報まとめ

様々なメーリングリストから集められた情報をカレンダー形式で案内されています．

google カレンダーと連携しているのでとても便利です．

https://edudvp.shibaura-it.ac.jp/fdsdcal/

FD に参考となるメーリングリスト・メールマガジン・イベント紹介ページ

FD のメーリングリスト・メールマガジンには様々なものがあります．これまでに個人で登録さ

れている方も多いと思いますが，いくつか紹介したいと思います．有料や対面のイベントも送られてきますし，リマインドも含めてたくさんのメールが送られてきます．それなりの覚悟が必要かと思います．

○桐蔭学園 tulip メーリングリスト（昨年度まで大野克彦先生がリモート・無料のものを抜粋して manaba で紹介されていたものです）

https://www.toin-tc.com/tulip-ml

○愛媛大学ぼっちゃんメーリングリスト

https://web.opar.ehime-u.ac.jp/mailinglist/

youtube で愛媛大学 FD・SD チャンネルを公開しています．

https://www.youtube.com/@aidai_fdsd

○地域科学研究会 メールニュース

http://chiikikagaku-k.co.jp/company/mailmaga/sample2.html

○九州大学次世代型大学教育開発拠点メーリングリスト

https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/

https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/mailinglist

○公益財団法人 大学コンソーシアム京都 教育開発事業部「教まちや」メールマガジン

https://henews.consortium.or.jp/

https://submitmail.jp/FrontReaders/add/5789

○大学コンソーシアムひょうご神戸イベントリスト

https://consortium-hyogo.jp/event/

企画 5：優良授業実践賞受賞者による公開授業

共通教育センターFD 委員会では、学生の満足度や評価が高くかつ教育効果の優れた授業を参観し、自身の授業を振り返るというねらいをもって優良授業実践賞（ベストティーチャー賞）受賞者による公開授業を行っている。

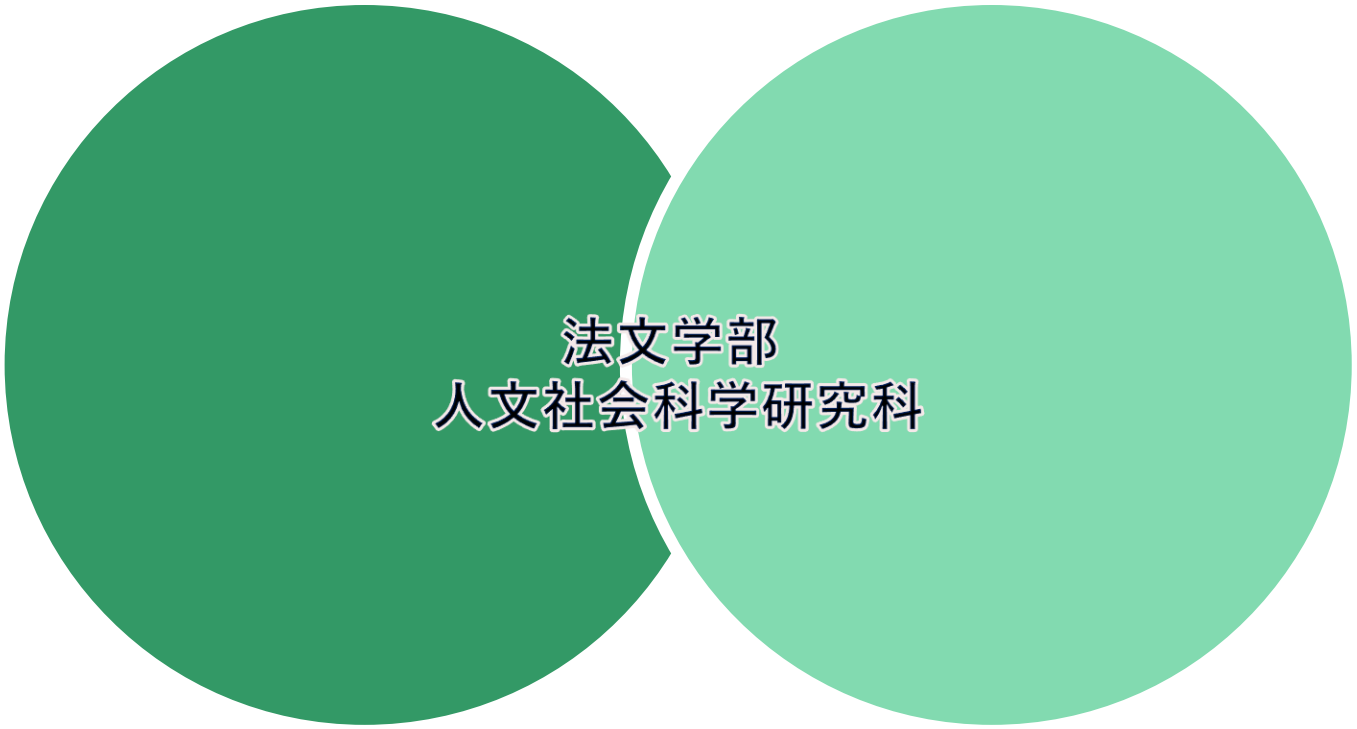
令和 7 年度は、最優秀ベストティーチャー賞を受賞された日髙佑郁先生に「英語ⅠB」の講義を 6 月 27 日（金）2 限に公開していただいた。他学部の先生の参加があるなど、公開授業は有意義な取組となった。シラバス上の正規の講義を公開することは、講義スケジュールにも影響を及ぼす可能性があるため、公開授業の仕方については十分に調整しておく必要がある。

まとめに代えて

FD 活動報告のまとめにかえて、令和 7 年度共通教育センター専任教員の FD 企画参加率を以下の表に示す。合計参加率は休職者 1 名を除く専任教員 33 名中 31 名参加の 93.9%であった。昨年度(93.8%)と同様に 90%を越える高い水準を維持しており、令和 7 年度も必須目標の 75%をクリアすることができた。特に 10 月 15 日に開催された理工学研究科との合同 FD 講演会は、新たな企画であったが、4 割を超える方々に参加いただけた。今後も他学部と連携し、同様の取組を継続・発展させていく必要がある。

令和 7 年度専任教員の FD 参加率

合計参加率		**93.9**	**%**	**(基幹教員等**	**33**	**名中**	**31**	**名 参加)**
企画別参加率	(全学) FD・SD 合同フォーラム	24.2	%	(基幹教員等	33	名中	8	名 参加)
	(全学) 教学 IR 研修会(第 2 回)	3.0	%	(基幹教員等	33	名中	1	名 参加)
	(全学) FD・SD 講演会	3.0	%	(基幹教員等	33	名中	1	名 参加)
	共通教育ｾﾝﾀｰ・理工学研究科 合同 FD 講演会(R7.12.12 開催)	33.3	%	(基幹教員等	33	名中	11	名 参加)
	R7 年度前期「授業改善メモ」提出	60.6	%	(基幹教員等	33	名中	20	名 参加)
	ﾍﾞｽﾄﾃｨｰﾁｬｰ賞受賞者による公開授業	3.0	%	(基幹教員等	33	名中	1	名 参加)
	理工学研究科・共通教育ｾﾝﾀｰ 合同 FD 講演会(R7.10.15 開催)	42.4	%	(基幹教員等	33	名中	14	名 参加)
	共通教育ｾﾝﾀｰ外国語教育部門 英語教員 FD ワークショップ	90.0	%	(基幹教員等	10	名中	9	名 参加)
備考:共通教育ｾﾝﾀｰ外国語教育部門英語教員 FD ワークショップは、外国語教育部門英語教員方々が独自に行われているものである。								
※ 専任教員 1 名を除く(休職者)								


法文学部
人文社会科学研究科

令和７年度法文学部ファカルティ・デベロップメント活動報告書

はじめに

令和 7(2025)年度に法文学部では、組織的な FD 実施として「１．教員授業参観」、「２．エクセレント・レクチャラーおよびベストティーチャーの選出」、「３．学生への授業アンケートと教員による『授業アンケートへの所感と対応』アンケート」を行った。また、ＦＤ成果の把握のために「４．教員対象 FD アンケート」、上記学生授業アンケートに対する「３．授業アンケートへの所感と対応」アンケートを行った。これらを含む令和７年度の状況について以下、報告する（以下、年月日を含め原則的に西暦記載）。

目次

第１章　教員授業参観
第２章　エクセレント・レクチャラーおよびベストティーチャーの選出
第３章　学生への「授業アンケート」および「授業アンケートへの所感と対応」
第４章　教員対象 FD アンケート
第５章　ＦＤ活動率
第６章　卒業生アンケートの分析

第１章　教員授業参観

１－１．概要及び改善

法文学部では、学部実施のＦＤ活動の主要項目として教員授業参観を長年行っている。法学、経済学、文学、学術といった異なる学位を授与するコースを包含し、学部全体で幅広い専門授業を提供する本学部では、少なくとも３つ以上の学部に相当する分野の教員が授業を担当している（授業担当教員=基幹教員 68 名）。そこでは各分野ごとに当然の授業方法や備えるべき研究スキルが異なり、教育上の学際分野の結びつきはさらにより細かい専門分野やテーマに応じそれぞれであり、現任教員の専門性に従った様々な可能性が個々の教員に委ねられている。

そのような中で、本学部では、部局として授業期間中に連続する２～３週間程度の参観期間を設定し、全コース（法経社会学科法学コース、地域社会コース、経済コース、人文学科多元地域文化コース、心理学コース）よりそれぞれ例年３科目を選出し情報を提供、参観者は自己のコースに限らず任意の授業を参観し、参観後に「授業参観報告書」を提出、その後法文学部ＦＤ委員会担当者が取りまとめて参観授業提供者に提供することにより、参観授業提供者および参観教員の両方の授業改善に役立てるという形で授業参観の企画を行っている。さらに、授業参観報告書の自由記載内容については、ＦＤ委員会担当者においてまとめ、以下のコースコンテンツに掲載し、部局内での情報共有を行っている。

具体的には、近年は参観授業募集のうえで担当者名、提供授業名、内容、授業形態、参観方法、参観期間中の実施時限を manaba の当該年度「法文学部 FD 関連情報」のコースコンテンツに記載の上、法文学部所属教員へのメール通知および教授会での呼びかけによる参観を促している。

本２０２５年度は、前年度に引き続き、教員負担軽減のために前期授業期間中のみの実施とすること、また参観者ニーズの高いオンデマンド授業を確保するために、全コースより選ばれた教員がオムニバスで対応する「法文スタンダード科目」である「人文社会総合論」の担当者３名より参観期間中に相応する３コマ分の提供をいただいた。

本年度の改善点としては、昨年度においては５コース各３科目の計１５科目以上の提供とは別に上記「人文社会総合論」の授業提供としたところを、教員負担軽減のために各３科目に含め

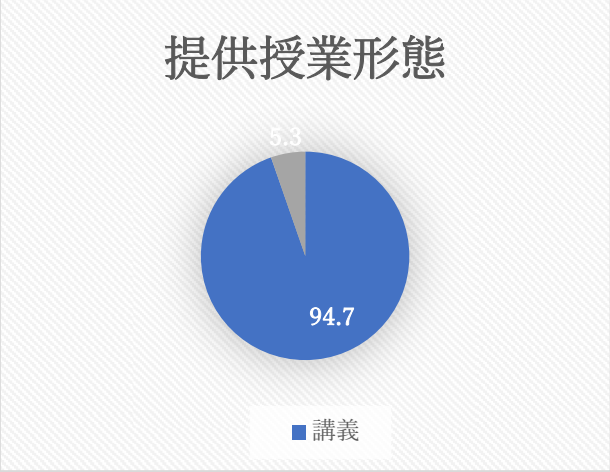
ることとした運用を行った。また、従来は授業参観教員から提出された参観報告書を取りまとめ後の参観授業提供教員への受け渡しについて、メールと学内ファイルアップマネージャーにより行っていたところを、部局教員対象の manaba「個別指導コレクション」によるやり取りに変更した。それにより、取りこぼしの確認、契約中については報告書ファイル等の事後確認が年度を超えて容易となった。また、本年度は、後期における参観ニーズにも配慮し、後期授業期間中においてはベストティー選出用の授業参観について、提供者の負担になら無い範囲でＦＤ活動未実施者の参加を促し、希望がある場合には参観を認めている。昨年度は後期授業期間中において、過年度のベストティーチャーによるオンデマンド授業の提供を別にいただいたが、負担が特定の教員に集中し、同じ授業の提供となる傾向が見込まれたため、本年度は実施を行わないこととしている。

１－２．実施状況

2025 年 6 月 16（月）から 7 月 4（金）を参観期間とし、授業参観報告書の提出を 7 月 18（金）とした。参観報告数は管理者を含め 30 件。参加者は 29 名であり参加率は 40.8%を達成した。実施状況と各報告書の自由記載の内容については、9 月 2 日より掲載された。提供参観授業１９科目について、授業形態（講義・演習）、授業方式（対面・オンデマンド・その他）の別は、以下の通りである。授業形態は演習が１，講義が１８，提供授業の授業方式は対面１６（うち２つは復習用録画教材も参観用提供）、オンデマンド１，その他はリアルタイム遠隔講義およびオンデマンド配信であった。

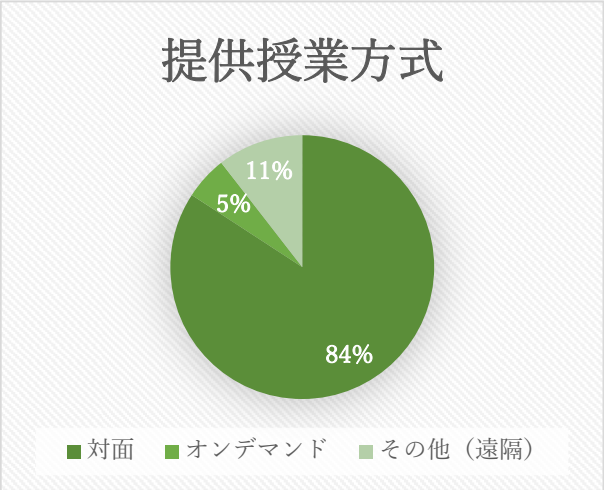
・提供授業の授業形態【図１】

講義　　94.7%(18)
演習　　5.3%(1)



・提供授業の授業形式【図２】

対面　　84.2%(16)
オンデマンド　5.3%(1)
その他　　10.5(2)（計 19）



１－３．結果と分析

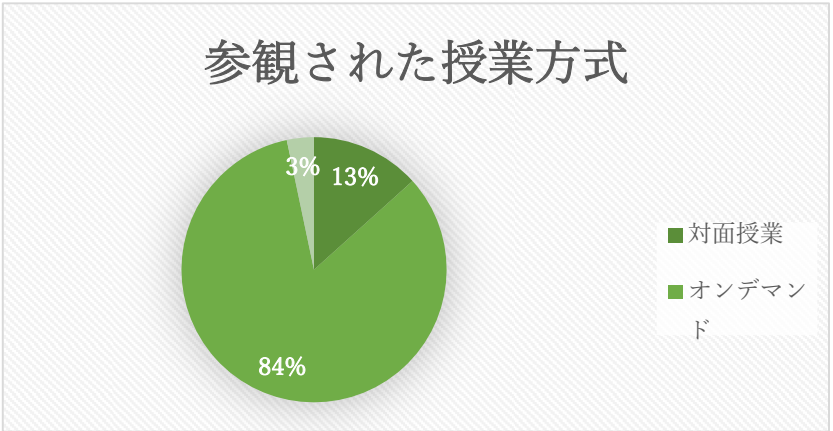
１）参観された授業方式および授業形態

上記【図２】において提供授業においては対面形式が圧倒的であったのに対して、以下のように対面参観は１３．３％しかない。（なお、オンデマンド参観との回答の一部については一部にリアルタイムのオンライン参観を含む可能性があるものを含む。）

また、グラフは省略するが、授業形態については演習の提供が１件であったが延べ３０件中２件が演習の参観であった。２件の演習が参観提供されていたが、参観者はすべて講義科目であった。

・参観された授業方式【図３】

対面授業　　13.3%(4)
オンデマンド　83.3(25)
その他　　3.3%(1)　（計 30）



2)コース別傾向

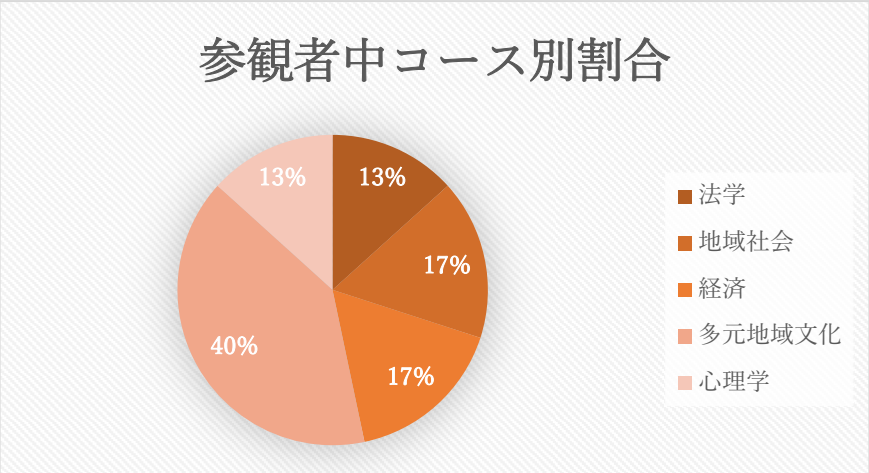
参観者延べ３０名中のコース傾向は、以下【図４】のように多元地域文化コースが４０％と多いが、【図５】のように、コースの人数あたりの参加率は地域社会コースおよび心理学コースが５割台、多元地域文化コースも４８％と積極的な参観の様子が見受けられる。

次に、【図６】のように、提供教員の所属コース別の参観人数では、地域社会コースに人気が集

まり、次いで多元地域文化コースが多数となるが、うちほとんどが「人文社会総合論」の参観であり、遠隔およびオンデマンド参観が選択された。同授業以外の地域社会コースの１名が対面である。続く法学コースも復習用の動画教材の用意された授業であり、対面参観者は７名中１名と、ここでもオンデマンド志向が見受けられる。

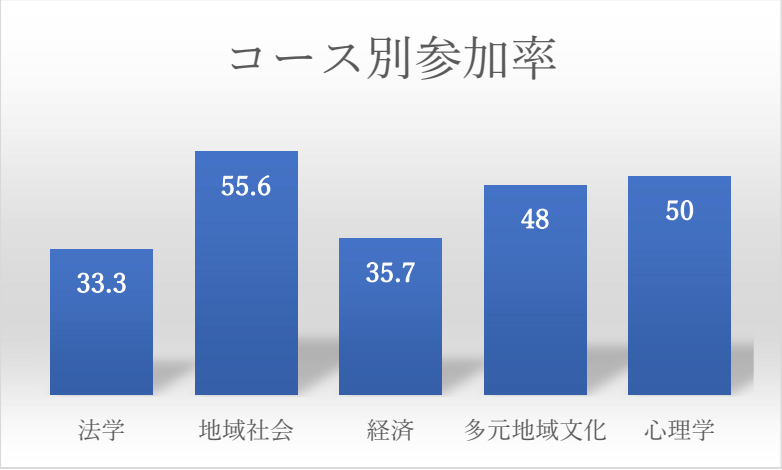
・参観者中コース別人数（延べ）【図４】

法学	13.3%（4）	
地域社会	16.7%（5）	
経済	16.7%（5）	
多元地域文化	40.0%（12）	
心理学	13.3%（4）	（計30）



・コース別参加率【図５】

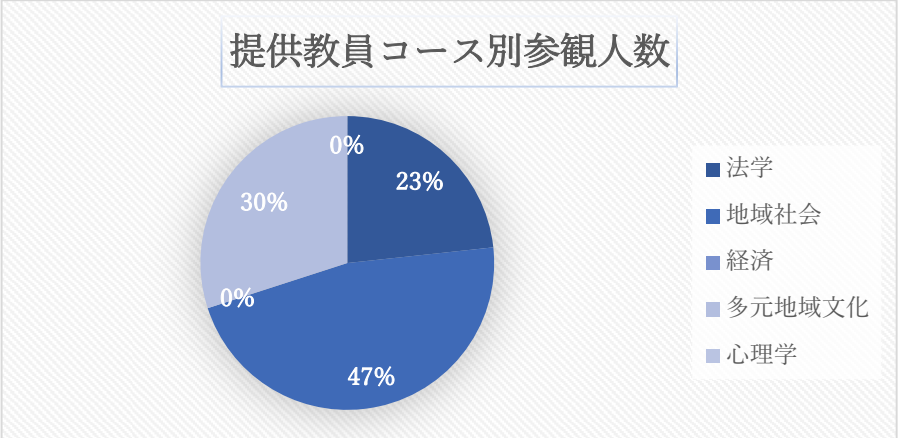
法学	33.3%(4)	
地域社会	55.6%(5)	
経済	35.7%(5)	
多元地域文化	48%(12)	
心理学	51%(4)	（計30）



・提供教員の所属コース別参観人数【図６】

※　どのコースの授業が参観されたかを授業担当者の所属に応じてコース分けしたもの。

法学	23.3%(7)	
地域社会	46.7%(14)	
経済	0%(0)	
多元地域文化	30%(9)	
心理学	0%(0)	（計30）



３）授業参観報告書における自由記載

授業参観報告書における自由記載項目としては、１.「学生が能動的に受講できそうか」、「双方向な議論が活発か」などの観点から、教育上の工夫がなされている点などについてあげてください。」、２「この授業を参観して、自分の授業のために役立ちそうな気付きや参考になったことを記載して下さい。」、３「この授業を参観して、担当教員に、メッセージや助言などをお願いします。」、４「授業参観の実施に関する、上記以外の自由な感想を記載してください。」の４つを設け、各項目に応じた回答の要約について部局内教員での共有がなされた。それのみで１３頁となるためここでは省略するが、復習問題を用意した工夫、復習動画の頻度等の手厚さ、説明の丁寧さとわかりやすさに具体例におけるちょっとしたユーモア、資料のわかりやすさ、双方性の確保における工夫について評価し参考となった旨の感想が多く見られた。オンデマンド参観授業を増やす希望も見受けられた。

１－４．成果と今後の課題

オンデマンド授業の要請の高いことが明白となったが、録画副教材の用意には手間がかかり授業提供者によるため、今後の提供についても引き続いて「人文社会総合論」担当者の協力が不可欠な状況となっている。他方で、対面授業の参加者もいる状況があるが提供授業の数について引き続き検討が必要である。

第２章　エクセレント・レクチャラーおよびベストティーチャーの選出

２－１．概要及び改善

~~法文学部では、~~法文学部・人文社会科学研究科では、「鹿児島大学法文学部及び人文社会科学研究科エクセレント・レクチャラー選考・表彰に関する申合せ」（平成 30 年 7 月 18 日法文学部教授会決定）第４条に基づき、各学科の候補者からそれぞれ３名までを法文学部等におけるエクセレント・レクチャラーとして選考し、教授会において表彰を実施している。例年、学生の授業アンケートとは別に、エクセレント・レクチャラー用のアンケートを全学部生を対象に実

施し、具体的記載を含めて学科長に提供、各学科長はアンケートおよび授業資料等を元に３名程度の候補者を選考し、候補者について同様の資料と学科長推薦書を持って学部長が実質的に審議、選考を行い決定する。なお、申し合わせ第４条により、副賞として１名につき５万円が研究費充当されることによりＦＤ活動の活性化への積極的参加を促している。

本年度は昨年度に引き続いて後期でのアンケート実施を固定化し、アンケート実施前と選抜後の学生への説明・報告の充実をはかった。また、課題として、一部のコースが間に合わなかったため、よりデータに依拠した選抜を行うよう要請がなされた。改善点としては、本年度において昨年度から準備した学部申し合わせの改正を行い、昨年度に修正した学生調査の文言の再修正と、より多くの授業における学生投票の呼びかけを依頼した。

また、ベストティーチャーの推薦については、上記申し合わせ第５条によりエクセレント・レクチャラーから選出することとなっているため、エクセレント・レクチャラー決定後に、学科長と学部長、ＦＤ委員を中心とした教員による授業参観を上位者について行い、参観報告書の資料を元に学部長より委任を受けたＦＤ委員会審議においてベストティーチャー推薦候補者が決定された。本年度における改善点としては、授業参観について学部長と学科長以外について、授業経験の長いベテランの教授を中心とした参観依頼を行い、また対象領域の隣接分野を中心とした教員についても参観依頼を行うことにより、授業水準についての確実な評価が行われることを狙った。

２－２．実施状況

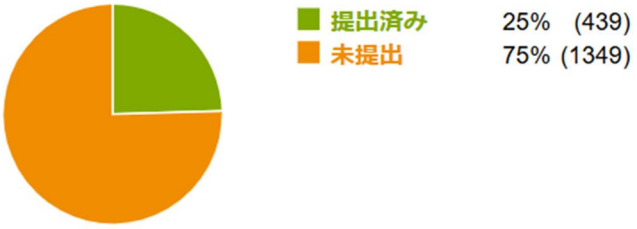
学生アンケート用の manaba コースにより 10 月 30 日から 11 月 13 日にかけて、法文学部生 1,788 名に「授業の充実・改善の取組の中で、カリキュラムの目的や授業の趣旨の実現に真摯に取り組み、成果を上げている教員」に関するアンケートを実施して、439 名(昨年度 399 名）の提出を得た。法文学部ＦＤ委員のうちデータ担当者集計の上で 11 月下旬にデータ及び、並行して学生より提出された授業資料等を希望に応じて提供し、各学科３名の推薦が行われ、２月の教授会において表彰が行われ、部局ホームページに掲載された。

ベストティーチャーについてはエクセレント・レクチャラー候補者より上位２名についての授業参観を 12 月に調整の上１月に行い、「EL 授業参観報告書」の提出を得て、学部長による推薦資料へのデータに追加を行った。

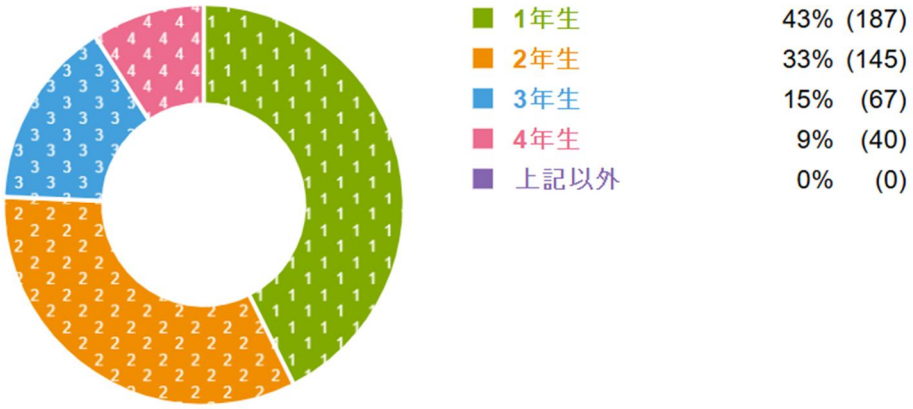
２－３．分析　学生のアンケート提出の状況は以下の通りである。

・学生アンケート回収率【図７】

439 名提出／1788 名



・学生アンケート提出者（学年別）【図８】
全 439 名



・資料提供用アンケート　資料提供協力者は 13 名。

・学生の自由記載部分
学生アンケートの記載では、①学生目線に立った授業のわかりやすさ、②専門的知見に立った豊富な例について多くの指摘があり、③スライド・資料のわかりやすさ、④講義の進行上の工夫も伴った、細やかな質問対応⑤丁寧さや倫理観、⑥聞き取りやすく簡潔な説明、⑦復習の便・学習成果（理解の実感）、うち特に興味・関心の深化という指摘が見られた。

２－４．成果と今後の課題
高学年のアンケート協力者が少ないのが課題であり、引き続き上昇させる方策について検討を行う。また、カリキュラム構成の違いにより、教員１人あたりの授業履修者数の差、少人数が固定化する分野などについて、今後とも工夫が必要である。
しかしながら、学生投票上位の教員については、授業改善の観点で授業方法について丁寧さや準備の細やかさ、学生対応等において顕著な教員ということも事実であり、選出に関係しない教員授業参観においても高い評価を得る傾向がある。選出用の参観によっても参観教員の授業改善に役立つ機会となることは大きな成果と言える。

第３章　学生への「授業アンケート」および「授業アンケートへの所感と対応」
３－１．概要
前期と後期について学生に対して全授業について実施を行い、結果を授業担当教員に manaba 上で公開し、それを受けて授業担当者は「所感と対応」の提出を行う。
本年度は、改善点として、FD 活動の成果に関連した項目と、前年度に指摘のあった課題である、熱心な学生ではなくドロップアウトした学生についての項目を追加した。
１つめは「法文学部では、教員のＦＤ活動を通して授業の改善・カリキュラム等の検討を行っています。この授業を受けて改善や工夫を感じましたか。」として、「はい」、「どちらかといえば「はい」」、「いいえ」、「わからない」までの４段階での選択肢を用意し必須回答項目とした。次に、２つめについては、「出席が２／３未満の人に関する質問です。授業の進行や重点項目など授業担当者の方で改善・工夫できる点に思い当たることがあればお知らせください（出

席率が高い人による情報提供も可能です。）」と問い、任意記載の自由記述とした。

また、教員提出の「授業アンケートへの所感と対応」についても、上記学生の項目１つめに対応して~~に対応して~~Ｑ１に~~い~~おいて学生におけるＦＤ効果の反応、Ｑ３について欠席気味の履修者対応とＱ４それに対する評価として現実性（現実性がない～取り入れる方向性までの選択肢）についての回答項目を設けた。また、一応の締切を設定したが、教員個別の多忙状況に応じて締切につき相談可能な旨を周知した。また、前期間との比較ができるように、学生のアンケートの前回分を参照できるように用意した。

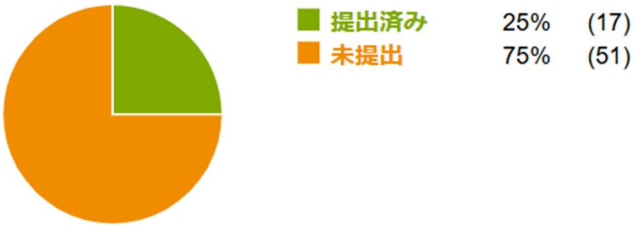
３－２．実施状況

2025 年度は前期授業については７／１８～８／１５、後期授業については１／２０～２／１０に授業アンケートを行った。教員の提出する「授業アンケートへの所感と対応」については、前期は９／２２～１０／３１、後期は２／１１～３／２１に行われた。

なお、以下のグラフでは基幹教員中作業教員２名を除くが誤登録１名、中途退職者１名により、母数については相違のない数字となっている。年間で延べ 40 名、平均で半期 20 名が~~が~~授業アンケートを分析し改善に役立てている。

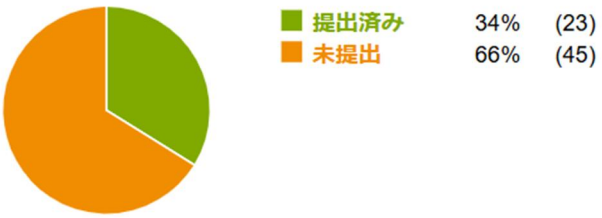
・所感と対応（前期）提出者【図９】

１７名／６８名中



・所感と対応（後期）提出者【図１０】

２３名／６８名



３－３．分析

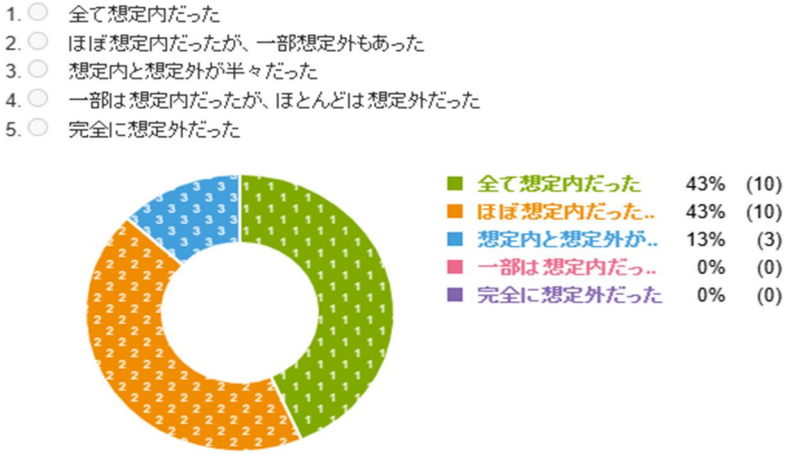
（１）全体としての印象（前期）

【図１１】



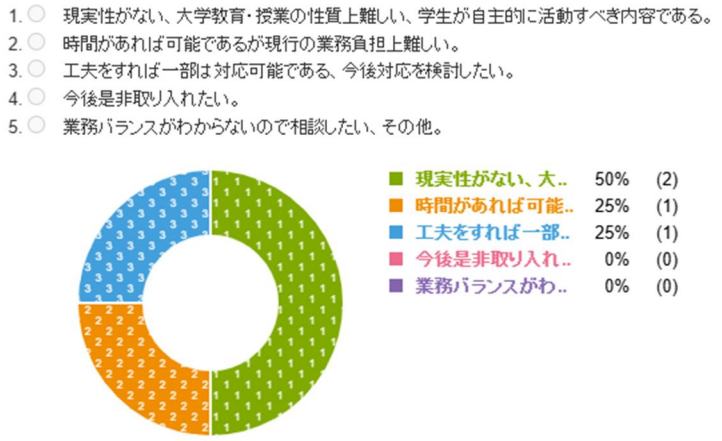
・全体としての印象（後期）

【図１２】



全体としての印象については、想定内との感想が多い。想定内と想定外があるとする回答者は、前期で 1 名、後期で 3 名、昨年度は前期が 5 名、後期が 1 名であり、想定外の印象が昨年の２／３となっている。

（２）欠席気味の履修者対応についての学生意見とそれについての現実性評価
（前期）【図１３】

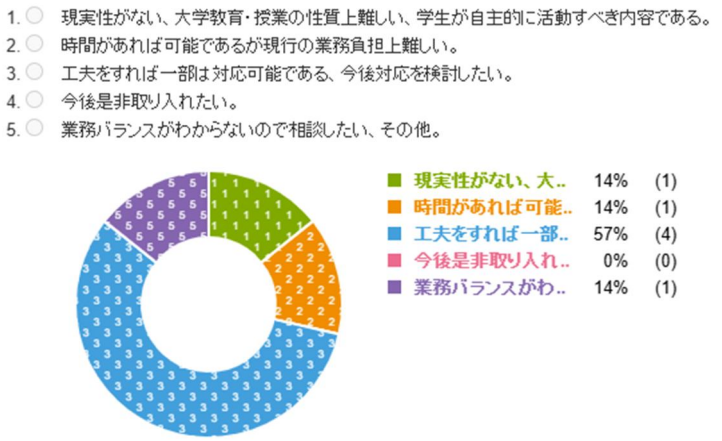


講義：　オンラインを併用していただけたら、幸甚です。 講義：　社会人学生なので昼間の受講は思う以上に難しいので、受講させていただけることを大変感謝しています。時間管理を工夫はしながらですが、業務との兼ね合いもあり、十分に受講できなかったことを残念に思っていますし、申し訳なく思っております。

（前期補足）

- 何回か大学間移籍を経験した身としては、おそらくこの問題については「対応の必要性の喫緊度が大学ごとに非常に大きい」のではないか、と考えています。国立大学である鹿児島大学（の法文学部）において、この問題は、学生の自主性に任せるべき事柄として取り扱うべきであり、本学の学生はその程度の自主性と自己責任を委ねて良い学生であると（現時点では）考えています。勿論、教員の業務負担増という観点も無視できないほど重大ですが、それ自体は、さしあたって副次的な問題でしょう。

・欠席気味の履修者対応についての学生意見とそれについての現実性評価
（後期）【図１４】



講義中に毎回出席をとる。(音声出席にするとより不正はできなくなると思います。) 課題内容を講義中に毎回出題する。

(後期補足)

- 問 11 に回答はなかったが、これまでの経験によると幾分かは工夫ができると考える

新設項目の欠席気味の履修者対応については、前期は受講の便についてであるが、後期については怠学と不正者対応対策の意見があったとの回答があった。後期については対応を検討したいとの積極的回答が目立つが、具体的な内容についての情報を得られなかった。

(3)FD活動の効果としての授業改善

:授業において改善や工夫を感じたかについて「はい」または「どちらかといえば「はい」」の人数。

・前期

(肯定的評価数の状況)

- 58名講義において29名

- 11名　講義において2名(回答2件)、 134名講義において4名(回答16件)。
- 3/67
- 62 名講義において 6 名
- 210名講義において 25
- 9件
- 161 名講義において回答者 28 名中 4 名、16 名演習において回答 5 名中 1 名。
- 86名講義において7名，164名講義において10名，13名演習において2名，18名演習において2名。
- 16 名演習において 3 名、10 名演習において 2 名、22 名演習において 2 名、149 名講義において 8 名。ただし、アンケートの回答率はきわめて低い。

(肯定的評価の理由)

- (講義)教科書以外に資料の配布があり、講義が充実していた。(講義)前時のミニッツペーパーへの回答が丁寧で良かった。(講義)毎回の雑談が楽しみだった。授業に関係がないようでいて、実は関係があるところに教授の工夫があった。(演習)グループディスカッションの時間があり、他の人の意見が聞けたところが良かった。(演習)ノート提出があり、予習と復習に力が入ったので身になる授業だった。

- 講義:私の業務にあたり、考え方の視点に役立ち、業務に何らかの形で反映できる内容でした。私自身にとっては「改善」「工夫」につながるところがありました。
- (講義) ・生徒の意見を積極的に取り入れようとしてくださった。 ・想像しやすい具体例を提示して、講義してくださったこと ・よかったところと同様。(※よかったところとして「レジュメや説明が丁寧でわかりやすかった点。また、復習問題が毎回設けられていたため、授業内容の総括や振り返りがしやすかった点。」と記載あり)
- 知識の学修と実践例の学修で構成されており、学生の理解を促すように講義の流れが工夫されていた。 ①グループワークの結果の共有②レポートの共有③LiveQ でのコメント社会教育という難しいテーマを皆で共有でき、先生のコメントが得られたのは何よりです。

- （講義）レジュメに加え口頭でも有益な情報を提供していたから。（講義）前年度と試験形式を変更するなど、改善を図っているように感じたから。
- （演習）ディスカッションが活発に行われるようになっていたため。

・後期

（肯定的評価数の状況）

- 講義35名提出分のうち16
- 106名講義中12名です。他は少数のため意味があまりありません。
- 118名講義において、73名。
- 20 名講義において 3 名
- 105 名講義において 5 名
- 60 名講義において 6 名、71 名演習において 8 名、16 名演習において 1 名。
- ・ 4名講義において0名（回答者0）・10名講義において0名（回答者0）・42名講義において4名（回答者5）
- 87 名講義において 8 名
- 139 名講義にて 5 名、9 名演習にて 2 名
- 208 名講義において 22 名回答中 14 名。
- 232 名講義において 21

（肯定的評価の理由）

- グループを作成する際に、同じ人によるグループ作成を避けるために、色々と工夫をしていた。それは、常に新しい人との触れ合いをさせることで、色々な人の考え方に触れることができた。（講義） グループワークが多かったことや、特別講師を招いてお話を聞くことができたところ。（講義）
- 授業の質がいつも良いと思います。 昨年までの授業形態や課題形式とは違い、学生の反応等を見て工夫を加えているとの教員からの説明があったから。
- わかりやすかった
- （講義）グループワークの時間が設けられていたところが非常に良かった。同じ学部の学生と話し合える時間は貴重なものでした。
- 要な点に絞って分かりやすく説明がなされるところ。
- （講義）授業の目標と各回のつながりが明確で、論理的に一貫性のある構成になるよう配慮されていました。
- （講義）生徒全員に対してリアクションペーパーのコメントを返信してくださるのはさることながら、授業中も司法試験対策のポイントを教えてくださるだけでなく、わかりやすい喩えを用いて説明してくださるため、内容理解の助けになっているから。社会動向を多様な視点で講じてくださるため、毎授業新たな観点に触れることができるから。個別指導にて質問させていただいた際も、お忙しいにもかかわらず温かい対応を賜ったから。； 淡々と授業を進めるのではなく、関連する話をすることで人を惹きつける授業だと思ったため。
- 動画資料をたまに使ったりするなど、授業に工夫をしていたため。
- アンケート結果のフィードバックが毎回行われており、授業内容の理解を深めることができたため。 質問への丁寧な回答を講義で行っていた。 生徒からの要望にもしっかりと耳を傾けてくれた。

前期と後期ともに、改善評価の多い授業が見受けられるのが、少人数の演習ではなく講義

であるところは特筆すべき点と言える。また、数名など改善評価数の少ない授業についても、それまでとの違いを体感し工夫等を評価して回答してくれる熱心な学生の存在が推察され、本学部における教員のＦＤ活動の効果の一部が顕れていると言える。

・自由記載（前期・後期） ※[]は一部変更

以下、①授業での気づきや感想」、②授業の改善等、取り組みや今後の抱負の順に示す。

①授業での気づきや感想

- ミニッツペーパーは双方向授業につながる効果的なツールだと実感した。また、雑談も授業の導入として機能していたと思う。

- 一部の回を除き、基本的には板書を促す受講スタイルを採用している。今年度は、このスタイルに対して肯定的なコメントが例年に比べると多く届いた。（なお学部アンケートとは別に、開講中はmanaba 上で、受講者とやり取りする機会を設けている。） 咀嚼して記録するため、学期末課題に取り組む際、記憶に残っていることを実感した等。 多くの学部授業で資料を配付しているそうで、板書スタイルが珍しく映る様子。
- やはり毎年の資料を使いまわすのではなく、時代に即した内容や学生の興味ある内容を加えると学習理解も深まるのだなと感じた。
- レジュメの分かりやすさなどの、授業資料に対する評価が高かった点は、教材作成についての自信につながった。 一方で、講義自体の分かりやすさや面白さについての評価は、相対的に少なかったので、学生が聞きやすく興味を持てるような授業運営を心がけようと考えた。
- 毎年と同じです。
- 指摘をいただいた事項は適宜検討していきたいと思います。
- 2 年次から 4 年次まで受講できる科目での難易度設定の難しさをあらためて感じた。
- 例年通りの回答であった。
- より最新の研究成果の紹介。
- 私語をする学生が見られ、注意したが、私語をさせない授業運営が多くの教員の間でできているのか、気になった。
- 工夫していることを、学生には工夫していると認識されていないことが多々あることに気が付きました。
- 授業内でのレスポンスは良く、リアクションペーパーなどにも意欲的に取り組む学生が多く、教員としても張り合いを感じながら講義・演習指導に取り組めました。この張り合いが、リアクションペーパーその他にきめ細やかに対応しよう、授業をより面白いものにしようという教員の側のやる気に繋がり、それが結果的に学生の側の満足度向上に繋がる（自由記述欄での学生の喜びに満ちた声が、それを雄弁に語っております）、という好循環に繋がっています。 ただし、学生の客観的な能力はさほど高くなく、「主観的には、教育に対して充実を感じている；客観的には到達度は低い」という結果が、期末試験では示されています。ですので、教員としては、授業期間中は遣り甲斐に満ち満ちて、最後の最後に裏切られる訳です。「学生満足度」という主観的な指標に、ともすれば傾きがちな昨今の大学 FD 活動の向き合うべき深刻な課題であると感じます（入試の在り方とも関わってくる遠大なテーマだとも思いますが）。 尤も、結果的に「不可」「可」の学生が大量に発生する訳ですが、学生からの異議申し立てなどはなく、そのような厳しい講義担当者である教員＝私の演習を希望する学生が相当多いという点は、「やる気のある学生には支持される」という大学教育のあるべき姿を示している、と解釈できなくもない訳で、取り敢えずは良い線を行っているのかな、と感じています。

- グループディスカッションは、学生の意向を確認しながら実施しているが、人数の多い講義では、要望が正反対になる場合はがあり、調整が難しいと感じる（多数決になりがち）。

- アンケート依頼を忘れたため大人数授業で回収率が低かったので、比較ができません。
- 練習問題の数を増やしたい。
- 講義内でのフィードバックやミニレポートにおける疑問や感想に対し、コメントを返すなど十分にできたと思う。
- 一部の学生から、授業のペースを上げて欲しいとの要望があった。学生間の理解度に差がある状況のなかで、スピードを上げるのは難しいが、理解度の高い学生の不満が出ないような工夫が必要であると感じた。
- 回答者からのコメントでは、ほとんどが授業目的を達成したと判断できるものであって、想定通りと言えるものであった。
- 授業の受講について、学生は公平性を強く意識しているように思われる。特に、出欠確認や授業内での質問についてのコメントから感じられた。その中には、教員側の対応というよりも、授業を受講する学生自身の心構えの改善が必要なものが含まれる。具体的には、授業開始前に manaba の出欠入力ができるようにすると、出欠だけ入力して、授業を聞かずに教室を出る学生に対する不満などである。授業の進行の都合上、授業開始前から出欠確認をする必要がある場合もあるので、教員側の対応だけでなく、学生自身の倫理観を高める機会も必要であると考える。
- これまでの授業を踏まえ、科目ごとに問題点の改善に取り組んでいきたいと思います。
- アンケート回答者はほぼいなかったのですが、授業期間中のやり取りを踏まえて日々、調整を試みました。今期はすべて演習形式であり、例年通り、学生同士の関りもスキルアップにつながった印象です。
- アンケートの回答率は低いが、授業に対して何か切実な（問題）意識を持っている学生であれば是が非でもアンケートで何かを訴えようとするはずであるから、アンケートの回答率が低いということは、授業が比較的安全運転で、それ相応の学生満足度を以て運行されているということを傍証しているかもしれない。もちろん、アンケート回答率低迷への解釈はいろいろありうるのだろうが。
- レジュメの情報量や発話量が多く、学生が手を動かしたり、考える時間がやや少なかったと感じている。
- 教科書をさらにうまく活用できるよう工夫を凝らす必要があると感じた。
- 中間レポートの解説を丁寧にして欲しいとの要望があった。
- 大人数授業では生成 AI を使用したコメントが大幅に増え、manaba から PDF で配布している講義資料を読み込ませてそのまま出力したような回答だけでなく、プロンプトをそのまま提出しているような迂闊なコメントもあった。
- 前期科目は 1 年生中心であったのに対して、後期は 2 年生以上が対象であった。そのためか、提出物や受講態度において、学生の側の「手の抜き方」や「サボり方」を体感することがあった。

②授業の改善等、取り組みや今後の抱負

- ミニッツペーパーでの双方向授業を続けたい。また、講義とリンクする雑談ネタを仕込んで学生の興味・関心を引きたい。

- manaba を利用した出席確認において、参考になる指摘があり、今後の授業において留意したい。また、講義において好評だった点は今後も継続していきたい。
- 座学の一部回でグループワークを採用しているが、受講者間交流をポジティブに捉える学生がコロナ禍以降、年々、増えている印象。今後も継続予定である。 ただしグループワークが苦手な学生

が存在することも想定し、登録変更までに（初回オリエンテーションなど）その旨、情報提供することを心掛けている。
- オンライン対応は検討したいが、機器なども必要になるため、機会を見て対応できるようにしたい。
- 学生との対話の時間を増やし、質問しやすい雰囲気づくりにも努めたいと思います。
- 毎回の小テストについて、制限時間を当日の 24 時と設定していたが、これが早すぎるとの苦情が何件かあった。別授業ではあるが、今期以降は、翌日の 13 時までと変更することにした。 他方で、授業資料や復習課題の作り方については好評であったので、現行のシステムを継続したい。
- これも毎年と同じですので、何を書けばいいかどうか分かりません。学生からいい評価を頂いてるので、続けて同じような授業をすれば良いということしかないです。
- もっと学生たちが納得しやすいようなコミュニケーション方法を見つけ、生む出さなければいけません。
- 指摘をいただいた事項は適宜検討していきたいと思います。
- 課題提出のハードルは下げつつ、授業内容の難易度はキープできるように工夫したい。とくに manaba はもっと活用できればと思う。
- 回答には特に学生からの指摘はなかったが、口頭での説明をより分かりやすくしてみたい。
- Q6を踏まえ、より最新の研究成果紹介。
- マナーの悪い学生が少数だが見られ、自覚がなさそうだったため、そういう学生にははっきりと注意するなどしたい。
- 工夫していることについては、きちんと学生に説明してやるべきなのか、それとも気が付かない工夫は工夫ではないのか、これから考えていきたい。
- 「学生のやる気を引き出す」という美名の下で、教育内容の安易な単純化と学問的水準の低下によって「そもそもやる気のある学生の満足度を下げる」という方向に進まないよう、矜持を以て教学活動に邁進して参りたいと考えております。

- 講義資料等の公開のタイミングについて検討したい。

- グループワークが多いことが必ずしも授業のよさではないため、評価の受け止めが悩ましいです。多少の困惑もあります。
- もっとわかりすい授業にしたい。
- アンケートに答えていない学生が多く、全体像が把握できないところもあったので、今後は、アンケートに対する協力要請をより積極的に行っていきたいと思う。
- 他の先生の授業をよく学ぶことかな。
- 急速に AI が普及し、学生が AI を使いこなすスピードもこの半年で大きく高まっていると感じています。そのため、期末試験の方式やレポート提出のあり方について試行錯誤しているところです。一方で思考過程が十分に伴わない利用も見られるため、「なぜ大学で学ぶのか」「どのような力を身につけるのか」といった学びの目的を、授業の前提として繰り返し伝える必要性を感じています。
- いずれの科目のどの項目も、「十分である」、「ほぼ十分である」との評価を得たので、当方で予定、計画したことは、学生に一応伝えられたものと考えている。しかし、学生に対し、より深い理解と、かつ、より高い専門的思考力を涵養するためには、一層の工夫が必要であると自覚している。学生の知的関心を高める内容と、実践的トレーニングを組み合わせた授業内容の構築に注力したいと考えている。
- そもそもアンケートの回答が約 100 人の履修者に対して 10 人ほどしか得られなかった。授業内で告知をすべきだったと反省はしているものの、アンケートの存在自体は学生にも周知されているはずなので、告知で効果が得られるのか疑問もある。授業内であんけーを実施するのはさすがに厳しいので、何とか工夫したい。

- 限られた時間内で、何を重点的に伝えるか、授業項目の精選に努めたい。
- 今回は、教育学習環境の激変の中にあり、その中での一定の成果を得たと思っているが、新たな取り組みをせざるを得ないというのが実感である。
- 大人数授業で学生からの質問をとると、挙手しにくいため、質問があまり出ない状況がある。授業中にリアルタイムで学生の質問やコメントを知る方法について、具体的な方法があれば情報を共有してほしい。
- Q6 同様、これまでの授業を踏まえ、科目ごとに問題点の改善に取り組んでいきたいと思います。
- 講義に対する学生の疑問・質問を manaba を通じて募り、次回で紹介・回答していくやり方は、受講生の授業理解に有効であるようなので、今後も継続して行ってゆきたいと考えている。講義内容の受講生による後日における復習のため、講義概要を学生が共有できるような資料提供の方法を工夫・改善していく必要があると感じている。
- Q3、長期欠席者対応についてです。今期に限らず、毎年、心身の不調を抱える学生がいる印象です。教室に足を運ぶことが難しそうな学生には、個別指導欄経由で定期的にメッセージを送り、修学支援室など学内の相談窓口の存在を紹介しています。対面で様子をうかがうことはできない場合も、メッセージ上である程度、生活の様子や調子の波を把握できることはあります。実際、学生が希望したタイミングで、支援室と連携しながらサポートすることで、単位取得や卒業につながるケースも複数件、ありました。
- 分かりやすい講義をすることに留意したい。
- 授業進度を中～やや高程度を意識して実施していますが，レベルが高い学生には「やや丁寧すぎて進度が遅く感じ」ているようで，下位の学生には「進み方が早い」と認識されているようです。情報・データ分析分野なので，マシン操作の得意不得意にも左右されるのだと思います。学生レベルを考慮した授業をどのように構成するかが今後の課題です。
- 法曹志望者など、今後のキャリアに法律専門教育から得た学びを活かしていこうという学生の切実な学習意欲がアンケートからは伺える。したがって、今回のアンケートの結果を踏まえた、今後の教学への取り組みへの基本的方針と抱負は次のようなものとなる。すなわち、少なからぬ学生が「できれば手を抜いて単位だけ欲しい」と考えているとしても、そこに安易に迎合せず、教育の質量を維持向上させていくことが、地方国立大学における法学教育の使命であるという意識を強く持ち、現実に実践していくこと！これである。
- [前項]で書いた内容の調整をし、学生が手を動かしたり考えるための余白を作りたい。
- そもそも授業評価アンケートの回答数が少なかったので、回答率が上がるよう指導したい。
- 講義中でなくともコースニュースを使って公開することを考えたい。
- 今まで学生の便宜のために manaba で講義資料を配布してきたが、安易な生成 AI の使用を防ぐために資料の配布形態を考え直したい。
- アンケートの集計期間を把握しておらず、回答数が非常に少なかったので、次年度からはアナウンスするよう気をつけます。
- Q6 の問題は、学生が大学生活に慣れてきた、ということで必ずしも悪いことばかりとはいえないが、学生の側の熱意を引き出せるようにしたいとは考えた。

３－４．成果と今後の課題

上記のように、授業アンケートを教育内容・方法の改善に直接的に役立てている状況が見受けられる。プラスの評価により前向きとなる様子が見られる一方で、授業改善の必要性についての疑問の声が見受けられ、受講生への失望や不満なども見受けられるのは、教員１人１人の業務状況の推測につながる点からも有意義である。

今後の課題としては、授業準備の労力や授業負担の差、各種業務の軽重、目標設定の違いが各自違っている中で、より相互理解が求められている状況にある。各種ＦＤ活動においても相互の意見交換や状況等の説明に可能な範囲で留意することが望ましい。

第４章　教員対象 FD アンケート

４－１．概要及び改善

昨年に引き続き、通年で記入を可能とした上で、公開時、年末、年明けと２月への呼びかけにより提出を促し、そこでの情報により各教員のＦＤ活動率等の把握に役立てた。

本年度の改善点としては、ＦＤ活動による授業改善の効果についての項目を設け、「大いに役立った」「どちらかと言えば役だった」「あまり役に立っていない」「わからない」の選択肢とした。また、昨年度大幅に改善した項目について、よりわかりやすい記載への修正と教授会等での呼びかけを行った。さらに、昨年度の提出内容のうち、長年同じ記載で意見提出されているとの苦情があったため、授業アンケート関係において同様のテーマについての対応を行った。

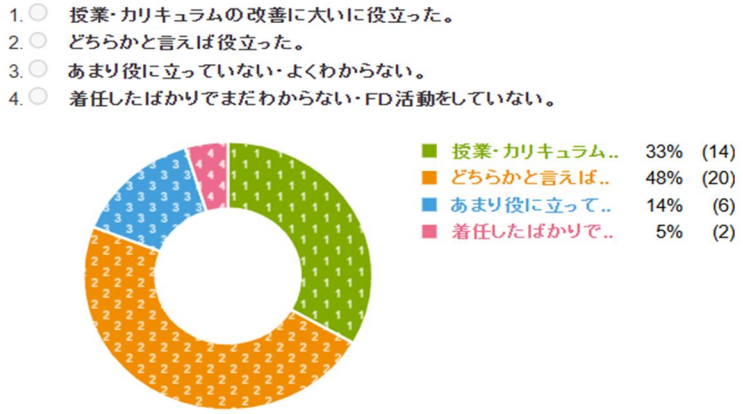
４－２．実施状況

2025 年 6 月 10 日より 2026 年 3 月 21 日にかけて行い、現員 68 名中、管理担当教員２名を除く６８名中４２名６１.８％（前年度は７１％）の提出を得た。項目としては、Ｑ１．複数選択の上でのＦＤ活動の種類選択、Ｑ２．ＦＤ活動による授業改善の効果、Ｑ３．授業参観を受けた教員による授業改善報告書記載欄、Ｑ４．法文学部ＦＤ活動についての意見・要望、Ｑ５．Ｑ２以外のＦＤ活動による授業改善の記載及びＱ６．補足説明欄、末尾に管理者が利用を予定しないメモ欄を設け、随時記入のできる用意識のアンケートとした。

４－３．分析

以下、①ＦＤ活動による授業改善の効果、②授業参観を受けた教員による授業改善報告書記載欄、③法文学部ＦＤ活動についての意見・要望④その他補足等の順に示す。

①FD活動による授業改善の効果【図15】



役立つとの感想が８１％を占め、ＦＤ活動の効果が示されている。

②授業参観を受けた教員による授業改善報告書記載欄

授業中にはわかりにくい議論の盛り上がりの指摘、参観教員に評価された点に自信を持って進める様子が窺えた。

③法文学部FD活動についての意見・要望

前任者より進められてきたオンデマンド授業参観や負担軽減措置への評価が複数見られ非常に心強かった。他方で、一部に予算状況や負担状況への認識が少数派の方の意見も提出されていた。今後もより効率的な運用と、余裕のある方への実働関与についてご協力を進めることが必要である。

④その他補足

全学行事を中心に、詳細な感想が示され有意義であるとの感想が多く提出された。本学ＦＤ体制の効果を示す一端と思われる。課題としては、「授業改善の提案などのフォーマット」についての提案が提出された。

４－４．成果と今後の課題

上記のように本ＦＤ報告書を通して、ＦＤ活動の様子及び教育内容・方法の改善についての把握ができている。課題としては、各記入への個別対応を無理をせずにバランス良く進めることが求められる。

第５章　ＦＤ活動率

昨年度と同様に、授業参観報告書、ベストティーチャー選出用の授業参観における参観報告書、授業アンケート（前期・後期）への所感と対応の提出状況に、前章ＦＤアンケートの問１におけるＦＤ活動歴を参照してなおＦＤ活動のない者をリストアップして活動率の向上を図った。改善としては、１月の段階で各コースごとに７５％をノルマとした未実施者について、１月の EL 授業参観、後期授業アンケートの所感と対応の提出に絞り具体的な促しを行った。特筆すべきこととしては、EL 授業参観の対象者に１月中に事前連絡不要のほぼ毎回実施の形で３種類の授業をご提供をいただいたことがあり、昨年よりも多くの参観者を得ることができた。また、活動率の低いコースでは１月中に未実施者の実施予定を個別に確認し最終的には、基幹教員 68 名中 57 名のＦＤ活動が確認され 83.8%を達成した。

詳細は、次の**【図１６】**の通りである。（※　数字は延べ人数）

・ＦＤ活動率【図１６】

合計参加率		83.8	%	(基幹教員等	68	名中	57	名 参加)
企画別参加率	授業参観	39.7	%	(基幹教員等	68	名中	27	名 参加)
	授業アンケート報告書(所感と対応)(前期)	25.0	%	(基幹教員等	68	名中	17	名 参加)
	授業アンケート報告書(所感と対応)(後期)	33.8	%	(基幹教員等	68	名中	23	名 参加)
	エクセレントレクチャラー授業参観	14.7	%	(基幹教員等	68	名中	10	名 参加)
	その他研修会・講演会等	16.2	%	(基幹教員等	68	名中	11	名 参加)

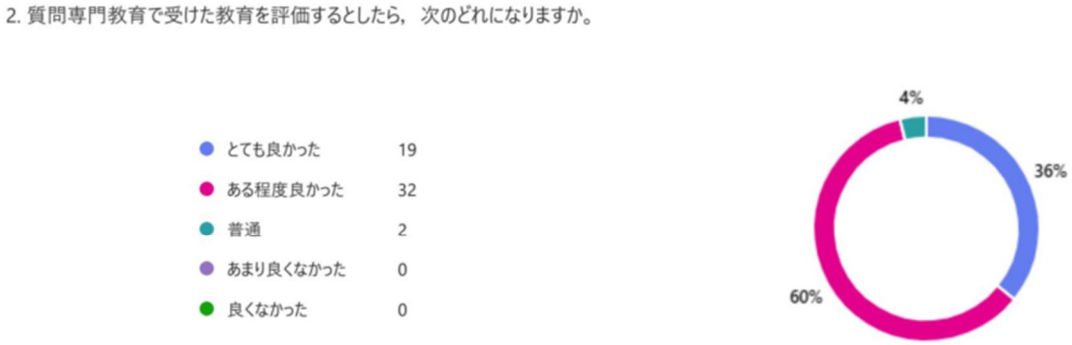
第６章　卒業生アンケートの分析

２０２５年７～９月に行われたＲ３年度卒業生アンケート対象であるＲ３年９月とＲ４年３月の卒業生のうち法文学部生は４２４名である。うち、法文学部独自項目には５３名の回答があった。高学年でコロナ禍を体験した入学年次であり、オンライン授業対応等での工夫と並行して、各種ツールを生かした小テストやレポート添削等の充実が図られた時期となる。

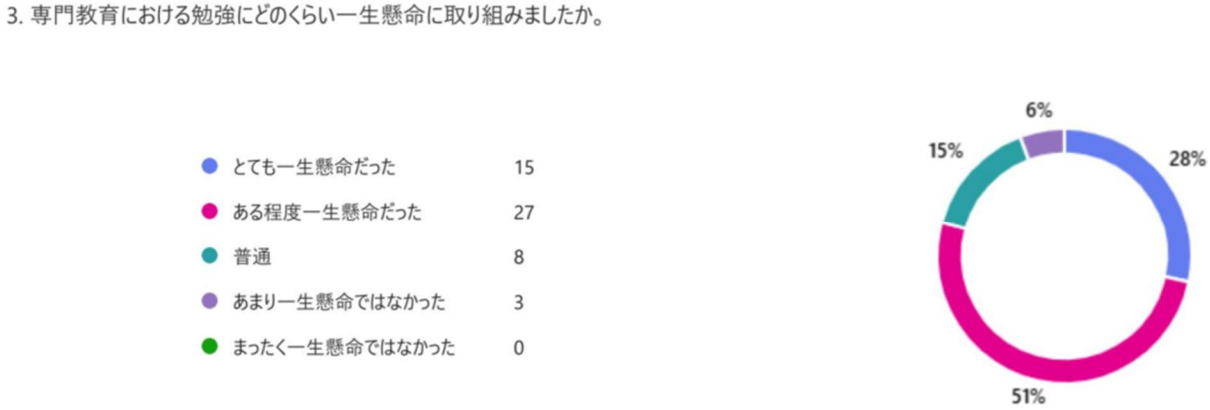
学習成果については５段階の選択肢を用意したが、皆様より「普通」以上の評価を得ることができた（後掲【図１７】）。最も多いのは「ある程度良かった」３２名、次が「良かった」

１９名、「普通」が２名である（【図１７】）。自己の取り組み（【図１８】）についても２番目の「ある程度一生懸命だった」が最多であることから、評価について慎重な傾向が窺える。このように、本学部の提供する教育による学習成果は良い評価を得ており、今後とも従来の授業方針をより充実させＦＤ活動の成果も踏まえた授業改善と学士力の担保が求められる。

・専門教育の評価【図17】

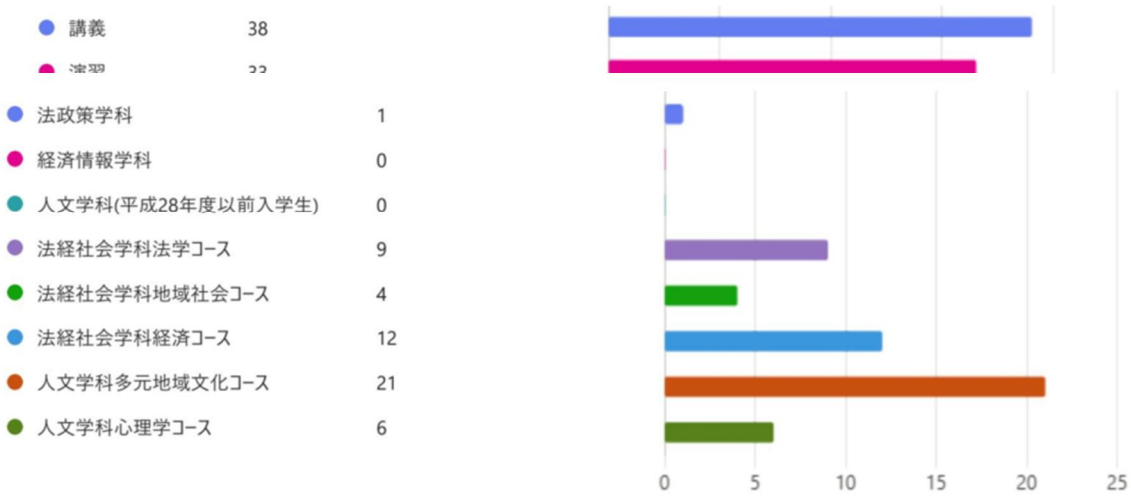


・参考）取り組み態度【図18】



・有意義だった専門教育【図19】

専門教育のなかで有意義だったと思うものを選択してください。（複数選択可）



・回答

以上

文責　令和７年度法文学部ＦＤ委員会委員長　植本幸子

教育学部・
教育学研究科

はじめに

本年度の教育学部教育改善委員会と教育学研究科（教職大学院）の活動についてここではその概略を記す。詳しくは各報告をご覧いただきたい。なお、特筆すべき取組や改善事例については本報告書の本文に下線を施した。

（1） 教育学部

授業アンケートでは、アンケート回答率の向上が課題である。授業中に回答時間を設ける等、回答率向上の工夫を担当教員に呼びかけ、その効果を確認することができた。もう一つの課題として、各授業独自の質問項目を設けることについて引き続き検討していきたい。

授業公開・参観については、昨年度に続き参加率が低い点が課題として残っている。期間延長による効果が見られなかったことから別の対策にも取り組みたい。

学生 FD 委員会は、昨年度に続いて学生交流イベントを開催した。今後、イベントの回数を増やすこと、スポーツ以外の交流も行うことが計画されているようである。

学生 FD シンポジウムでは、生成 AI の活用に関するアンケート結果の報告と教職員との意見交換が行われた。このシンポジウムを踏まえて、さらに規模を拡大した学生アンケートが実施され、その結果と考察が教育改善セミナーにおいて報告された。教育学部独自の対応について教職員との意見交換が行われ、学生と教職員が共同で検討するきっかけを作ることができた。

FD 講演会では、ベストティーチャー賞受賞の梅林郁子先生にご講演いただいた。また、前学部長・現教育担当理事の有倉巳幸先生と現学部長の溝口和宏先生による、教育学部改善に向けた座談会も行われた。

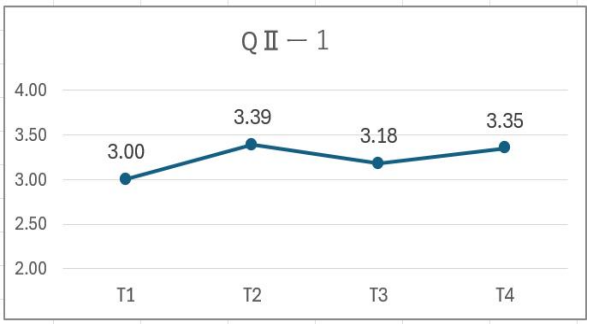
教育改善セミナーでは、上に挙げた教育改善委員会の取り組みの報告、今年度の成果と課題、次年度への期待などについて参加者と意見交換を行った。

（2）教育学研究科

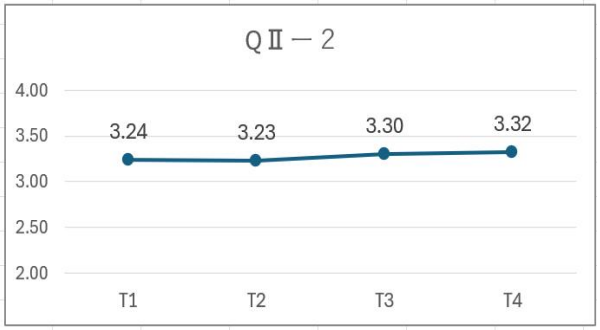
○　R7 年度　教育学研究科の活動状況

教育研究環境の整備及び学生支援を教職員協働で行うために、学生への教育研究上の状況、学生生活全般にかかわる状況等を把握した上で、教員間で共有を図り、可能なものから改善を行った。学生への教育研究及び学生生活等に係る状況把握とその対処については，以下のとおりである。まず，年 4 回各ターム終了後に無記名の自己記入方式で実施している「**FD アンケート**」である。

R7年度　FDアンケートの例　（各タームの回答結果を年間の推移で示している）



○　授業内容は自分のニーズに沿っていましたか



○　教員の指導体制は適切でしたか。（必修科目）

このアンケートは、授業とシラバスとの適合性、現在の教育課題への対応、各学生のニーズ、授業と実習のバランス、指導体制、学習環境・施設等についての調査項目から構成され、4 段階評定からなる選択式の回答と自由記述式の回答を求めたものである。

その他、学生と対面で交流し支援を行う機会として、学生個別に懇談する**「教育相談 Day」**を年２回(６月、12 月）、学生からの任意の相談に対応する**「オフィスアワー」**を実施した。アンケートの回答結果や対面で収集した相談内容は、学生生活委員会の担当者が集計分析し、**「FD 会議」**において教員間で共有された。例えば、学生の研究室使用、施設及び設備の利便性、学部卒学生と現職教員学生の協働での学び、演習（討議）形式の授業、実習科目についての運営上の課題、各授業で課される課題の時期等について、学生の満足度の高い点や十分ではない点を取り上げ協議を行った。授業改善については、それぞれの教員が自らの実践を振り返り、その成果や課題を記述する**「授業リフレクション」**を作成し、次年度以降の指導に生かしている。学生生活全般及び探究(研究)活動について、改善を要する事項や課題が見出された場合には、各委員会あるいは授業・実習担当者が改善案や対応策を検討し、「FD 会議」において報告している。学生が教職大学院での学びの充実を考える機会として、教員及び１・２年生が一堂に会し話し合う**「FD 座談会」(8 月）**、修了生を交えての**「交流会」(3 月)**、及び１年生においては各週の**「連絡タイム」**等において要望に対するフィードバックや探究活動等の支援を行っている。さらに、学生の要望等をヒントに教職大学院の教育活動をより魅力的にする方策等について、教員だけでなく事務職員も参加する**「SD 会議」(３月)**を実施し広い視点から話し合いを行った。　研究科の FD 活動においては、キャリア支援にも力を入れている。入学当初から、教員採用試験の受験状況及び今後の志望先について聞き取りを行い、教職支援室等と連携して必要な情報提供を行いながら採用試験に向けての準備を進めさせている。特に「教育相談 Day」については、学生個別に複数の教員が面談をする絶好の機会であるので、志望する校種･教科と志望理由等を聞き取り意欲を持ってキャリア実現がなされるよう助言を行った。

（報告：小林俊一郎）

以上、教育学部及び教育学研究科の FD 活動の概要を記した。「教育の内部質保証に関する実施要項」との関連としては、自己点検・評価のために、昨年度に引き続き「学生 FD 委員会シンポジウム」と「教育改善セミナー」を軸として学生と教職員との意見交換の場を設けたことに手ごたえを感じている。それらの内容については本報告書の関連箇所に記載している。

（委員長：上谷順三郎）

目　次

１章 授業アンケート回答の分析
１ アンケート実施方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
２ 実施状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
３ 結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
４ 分析（相関分析の結果とその解釈） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
５ 今後の授業アンケート活用に向けた展望 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
６ まとめとしての提言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

２章 教育学部授業公開 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

３章　教育学部学生 FD 委員会の活動
１ 学生 FD 委員会の活動概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
２ 活動と振り返り ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
３ 今年度の総括（成果と課題） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

４章 令和７年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会 FD 講演会　・・・・・・・・・・14

５章 令和７年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会教育改善セミナー ・・・・・・・17

６章 令和７年度基幹教員等 FD 参加率　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

１章　授業アンケート回答の分析

１．アンケート実施方法

令和７年度前後期の授業アンケートを以下の要領で実施した。

- 実施時期：前期 令和７年７月１５日（火） ～ ８月７日（木）
  後期 令和８年１月１３日（火） ～ ２月１６日（月）
- 実施科目：事前調査で各教員が開講する授業科目から１つ以上を選択。回答がなかった場合は，委員会で１科目を指定した。
- 実施手段：manabaによるオンライン回答
- 質問項目：Q1 ～ Q11の１１項目。Q1およびQ11以外は４件法（１．そう思う，２．だいたいそう思う，３．あまりそう思わない，４．そう思わない）による回答。

Q1 【学習時間】この授業に関して，あなたは毎週平均してどのくらい学習をしましたか。予習，復習課題，掲示板を読むなど，すべてを合わせた時間で回答してください。
Q2 【主体性】あなたはこの授業に主体的に取り組むことができましたか。
Q3 【理解度】あなたはこの授業の内容を十分に理解することができましたか。
Q4 【シラバス内容】この授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか。
Q5 【シラバス目標】シラバスに記載されている学習目標を達成できましたか。
Q6 【説明】教員の説明は分かりやすかったですか。
Q7 【興味関心】この授業は，あなたの興味・関心を高めるものでしたか。
Q8 【資料】資料（板書，スライド，講義動画，配布資料等）は授業の理解を助けるものでしたか。
Q9 【質問】この授業は質問がしやすい雰囲気でしたか（メールやmanaba上での質問等を含む）。
Q10 【満足度】この授業は全般的にみて満足するものでしたか。
Q11 【自由記述】この授業の良かった点や感想等を自由に書いて下さい。

２．実施状況

最近３ヶ年の授業アンケートおよび教員によるフィードバックの実施状況を表１に示す。令和３年度以降の履修登録者数と回答数の推移は図１の通りである。実施期間については昨年度より長く設定したものの，回答率向上にはつながらず，コロナ対応が明けて以降は40%台前半で低迷する傾向が続いていた。今年度後期はさらに33%まで低下しており（図２），回答率の改善が喫緊の課題である。集計データの詳細を確認したところ，授業時間中にアンケート回答の時間を確保した科目では回答率が高くなる傾向が見られた。一方で，ほとんど回答者がいない授業もあり，受講生の回答日時が大きく分散しているケースも多い。これまで指摘されてきたように，回答率を高めるためには、manaba 上での依頼に加えて担当教員からの直接的な周知を行い，授業中に回答時間を設けることが有効であると考えられる。フィードバックの実施率については，今年度前期は令和６年度までの実績を上回ったものの，後期は低い結果となった。全体として，回答率・実施率ともに前期より後期で低迷する傾向が見られ，学期による取り組みの差が課題として浮かび上がっている。

表１　授業アンケートとフィードバックの実施状況

	R7後期	R7前期	R6後期	R6前期	R5後期	R5前期
実施科目数	66	73	68	74	72	75
履修登録者数	2862	3238	2820	3029	3301	3015
回答者数	958	1376	1249	1364	1408	1334
回答率	33%	42%	44%	45%	43%	44%
フィードバック数	26	37	27	33	28	32
実施率	39%	51%	40%	45%	39%	43%

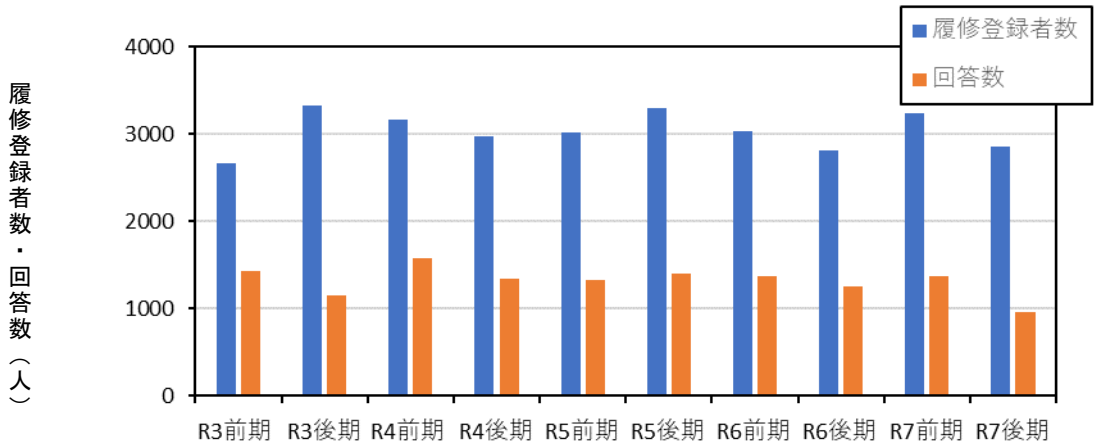


図１　履修登録者数と回答数の推移

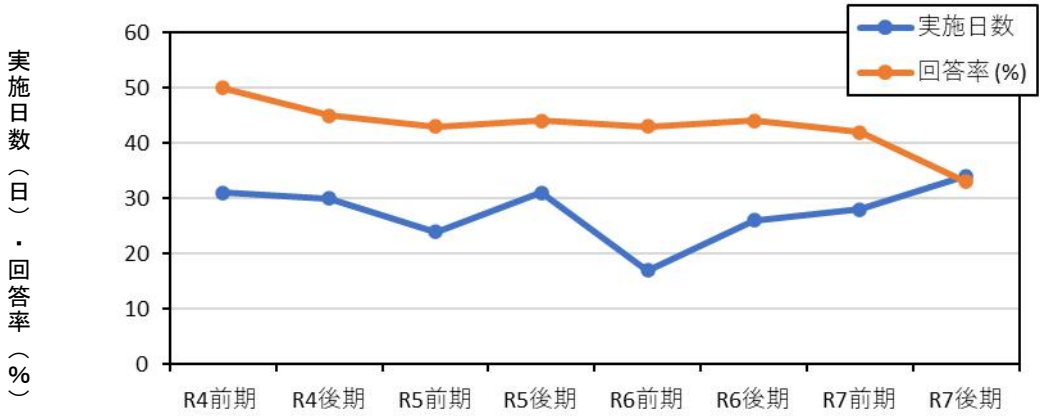


図２　授業アンケート実施日数と回答率の推移

３．結果

今年度と昨年度の平均スコアは表２の通り。

表２　授業アンケートの平均スコア

	R7後期	R7前期	R6後期	R6前期	R5後期	R5前期
Q1(学習時間)	4.8	5.0	5.2	5.0	5.0	4.9
Q2(主体性)	1.5	1.5	1.6	1.5	1.5	1.5
Q3(理解度)	1.6	1.7	1.7	1.7	1.7	1.6
Q4(シラバス内容)	1.3	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
Q5(シラバス目標)	1.6	1.6	1.7	1.7	1.6	1.6
Q6(説明)	1.4	1.5	1.5	1.4	1.4	1.4
Q7(興味関心)	1.5	1.5	1.5	1.5	1.4	1.4
Q8(資料)	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
Q9(質問)	1.5	1.5	1.5	1.6	1.5	1.6
Q10(満足度)	1.4	1.4	1.5	1.4	1.4	1.4

授業アンケートの Q1(学習時間)については，授業時間外での学習時間を１．５時間以上，２．４から５時間程度，３．３から４時間程度，４．２から３時間程度，５．１時間から２時間程度，６．１時間以下，により回答してもらった。昨年度後期の平均スコアは 5.2（約78分）であったのに対し，今年度後期は 4.8（約102分）となり，数値上は学習時間が増加したように見える（図３）。ただし，今年度後期のアンケート回答率は 33%と，昨年度より 11ポイント低下している。回答者の母数が大きく異なる状況では，単純にスコアのみを比較して学習時間が増加したと判断することは適切ではないと考えられる。

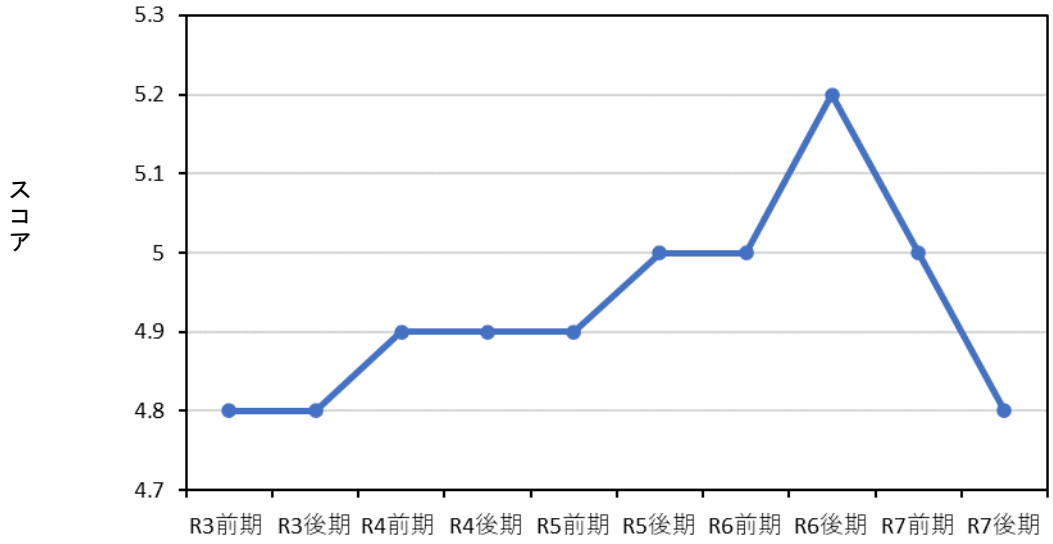


図３　Q1【学習時間】の平均スコアの推移

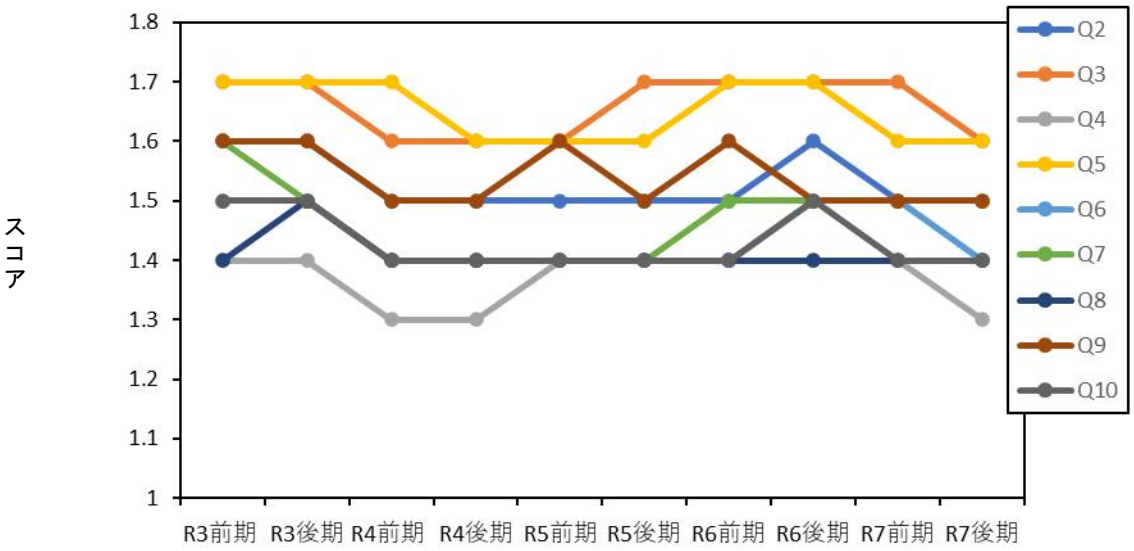


図４　Q2～Q10の平均スコアの推移

Q2～Q10 の各項目については，いずれも顕著な変化とまでは言えないものの，全体としてスコアがやや改善しているように見える（図４）。授業内容の理解度，教員の説明の明確さ，シラバスの内容に沿っているかなど，複数の項目で前年より良い値が示されており，授業改善の取り組みが一定の成果を上げている可能性が示唆される。ただし，学習時間（Q1）の分析と同様に，今年度後期のアンケート回答率は昨年度より大幅に低下している。回答者の属性や学習意欲の偏りが結果に影響している可能性が否定できず，スコアの単純比較のみで授業改善の効果を判断することは難しいと考えられる。このため，Q2～Q10 のスコア改善をそのまま授業改善の成果として結論づけるのではなく，回答率の低迷が分析に与える影響を踏まえた慎重な解釈が必要である。

４．分析（相関分析の結果とその解釈）

質問項目間の相関と可視化

相関係数の目安（0.7～1.0：強い正の相関，0.4～0.7：中程度の相関，0.2～0.4：弱い正の相関，−0.2～0.2：ほとんど相関がない）に基づき，各項目間の相関を細かく色分けして可視化した（表３）。表の右上に相関係数，左下には対応する（行と列を置き換えた）成分の分布図（学習時間の欄は横軸が時間でその他の欄は全て縦横ともスコアの相関）を示した。学習時間については，換算式Y = 6.5−X,（X：スコア，Y：時間）よりスコアを時間に換算した。前期・後期を通して共通して見られた特徴として，Q1【学習時間】とQ2【主体性】の間にはほとんど相関がない一方， Q6【説明（教員の説明の分かりやすさ）】とQ10【満足度】の相関が最も強いことが挙げられる。より詳細に見ると，Q2【主体性】と Q3【理解度】の間に強い正の相関（主体的に授業に取り組む学生ほど理解度が高い傾向にある。）とQ6【説明】・Q8【資料】と Q7【興味関心】・Q10【満足度】の間に特に強い正の相関（教員の説明や資料の質が，学生の興味関心や授業満足度に直結している。）が確認された。相関係数は因果関係を示すものではないが，これらの結果から，教員の授業設計や説明の工夫が学生の学びの評価に強く影響していることが読み取れる。また，学生自身の主体的な取り組みも理解度に関係している点は，学習者側の姿勢の重要

性を示唆している。一方で，Q1【学習時間】と Q2【主体性】の相関はほとんどなく，主体的に取り組んだと自己評価した学生が必ずしも長時間学習しているわけではない。Q1 と Q3～Q10 の項目との相関も概して弱く，むしろ弱い負の相関を示す項目が複数見られた（6.5からスコアの数値を差し引いて時間に換算したうえで相関を求めたため，学習時間欄の相関係数の数値は正負が逆転していることに注意）。この結果は，学生自身の授業への取り組みである授業時間外学習の量が授業評価に結び付いていない現状を示している。

表３　質問項目のスコアの相関（数字は相関係数，学習時間はスコアを時間に換算）

前期

	学習時間	主体性	理解度	シラバス内容	シラバス目標	説明	興味関心	資料	質問	満足度
学習時間		−0.08	0.25	0.24	0.31	0.30	0.27	0.42	0.20	0.38
主体性			0.74	0.50	0.57	0.65	0.62	0.40	0.47	0.60
理解度				0.56	0.81	0.74	0.72	0.52	0.47	0.75
シラバス内容					0.69	0.75	0.69	0.81	0.57	0.72
シラバス目標						0.71	0.70	0.68	0.49	0.78
説明							0.84	0.78	0.70	0.89
興味関心								0.73	0.59	0.79
資料									0.59	0.81
質問										0.69
満足度										

後期

	学習時間	主体性	理解度	シラバス内容	シラバス目標	説明	興味関心	資料	質問	満足度
学習時間		−0.12	−0.03	−0.11	0.15	0.10	0.26	0.07	0.24	0.22
主体性			0.74	0.54	0.58	0.68	0.57	0.53	0.52	0.65
理解度				0.54	0.78	0.67	0.64	0.60	0.44	0.70
シラバス内容					0.63	0.68	0.48	0.66	0.54	0.65
シラバス目標						0.70	0.59	0.65	0.57	0.74
説明							0.75	0.84	0.74	0.89
興味関心								0.66	0.60	0.77
資料									0.61	0.81
質問										0.78
満足度										

質問項目の分類と総合的な示唆

質問項目Q1～Q10 を次の３つの観点に分類し，相関の傾向を整理すると，教育改善に向けた示唆がより明確になる。

・学生自身の授業への取り組みに対する評価（Q1【学習時間】，Q2【主体性】）
・教員の取り組みに対する評価（Q4【シラバス内容】，Q6【説明】，Q8【資料】，Q9【質問】）
・受講後の学生自身の学びに対する評価（Q3【理解度】，Q5【シラバス目標】，Q7【興味関心】，Q10【満足度】）

この分類に基づくと，質問項目間に見られる相関から示唆される事項は次の３点にまとめられる。

（１）教員の授業準備や対応は，学生の学びの評価に強く結びつく

説明の明確さや資料の質など，教員側の工夫が学生の理解度・興味関心・満足度に大きく影響しており，授業改善に直結する。

（２）学生の主体性は理解度向上に寄与するが，教員の働きかけの影響がより大きい

主体的に取り組む学生ほど理解度が高いが，それ以上に教員の説明や授業設計が理解度や満足度を左右している。

（３）学生が受け身の学習から脱却し，主体的に学ぶ姿勢を身につけることが重要

高等学校までの受動的な学習スタイルから転換し，主体的に学ぶ姿勢を育むことで，大学の授業がより充実した学びの場となることが期待される。

５．今後の授業アンケート活用に向けた展望

ここ数年のデータから見られた傾向については，回答率の低迷や質問項目間の相関構造など，複数の課題と示唆が浮かび上がっている。

今後の取り組みとしては，次のような観点が重要になる。

・回答率向上に向けた工夫

授業時間内に回答時間を確保する科目で回答率が高い傾向があるため，授業内での回答機会の設定は効果的な方法として継続的に検討する価値がある。manaba 上での依頼だけでなく，担当教員からの直接的な周知が回答行動を促すものと期待される。

・質問項目の改善

教員の取り組みと学生の学びの評価が強く結びついていることから，授業改善に直結する項目について丹念に詳細を詰めることも検討課題となる。

・継続的な分析の必要性

相関分析で見られた傾向は、年度や学期によって変動する可能性があるため，継続的なデータ蓄積と分析が不可欠である。回答率の変動がスコアに与える影響を踏まえ，統計的に安定した判断ができる仕組みを整えることが望ましい。

６．まとめとしての提言

以上の内容を踏まえると，授業アンケートが教育改善に資する仕組みとして機能し続けるためには，回答率向上の取り組み，質問項目の見直し，データ分析の継続という三つの柱をバランスよく進めることが重要である。今後も，近年見られた傾向の背景要因が丁寧に分析され，アンケートの改善と教育改善の循環がより確かなものとなることを期待したい。

２章　教育学部授業公開

今年度実施した学部授業公開について概要を以下に報告する。

昨年度の参観者が非常に少なかったことから、実施方法は実施期間の拡大と実施手順の簡易化を行った。具体的な実施方法は以下の通りである。

【実施方法】

参観方法

公開の範囲は、教育学部専任・特任教員が担当する教育学部開講の全ての授業科目とし、参観者は事前に授業担当者に連絡して参観の可否や当日の予定について確認を取る事とした。その後、授業参観報告書を作成して教育改善委員会に提出してもらった。

授業公開期間と参観数

前期：2025年7月1日（火）～　2025年7月31日（木）

参観授業数：５　参観者数：4人

後期：2025年12月22日（月）～2026年1月30日（金）

参観授業数：３　参観者数：３人　（※2月12日時点での状況）

今年度前期及び後期の授業参観報告書を提出した教員は、前年度同様とても少なかった。授業参観は興味のある授業を参観することで、自身の授業改善に資する機会を得る意義のある事業と考えられるが、参観者数がこのように低迷している状況では、存続について検討する必要があると思われる。

今年度提出された授業参観報告書に記載されている内容から一部を以下に紹介する。

＜授業方法＞

・「音楽史B」では、音楽史について多くの補足説明が行われるとともに、図や絵、音源、ビデオ（オペラ、映画）等多くの資料が用いられていた。また、授業の最後に復習問題が行われていた。

・「社会系教科教育概論II」では、１回目の模擬授業は８組のグループが２つの教室に分かれて行われた。その後ディスカッションを行い、全体での振り返りを行った後、それらを踏まえた２回目の模擬授業への展開が行われていた。模擬授業については、ホワイトボードで板書を行い、それを記録することやタブレットで説明したり、少人数グループが同時に行うことが可能となる工夫がありました。

・「水泳Ｉ」では、プールに学生を連れて行く前に座学にて学習の時間をとっていた。そしてプールへの移動後は、十分に準備運動の時間をとり、身体を水に慣れさせていた。また泳力ごとにグループ分けがされており、泳力が劣っている学生に対しては、泳力のある学生がサポートすることで、授業がスムースに実施されていた。

・「無機化学」では、学生は授業回での説明やオンデマンド形式のWEB資料をみて、与えられた課題に取り組み、作成した解答案を全員で共有したところで説明する形式の授業が行われた。各課題には主回答者と副担当が決められており、主回答者の発表（説明）後に、副担当からの補足説明等があり、最後に教員から発表内容について追加の説明が行われていた。

・「数学概論」では、冒頭で本時の授業構成が伝えられ、授業の流れを理解しながら取り組める環境が整えられていた。また、授業の流れの中で受講生が今何に取り組むべきか理解で

きるように工夫されており、導入から本題へと無理なく導くことによって学習効果を上げているように感じた。

＜授業内容＞
・「合唱A」の前期最後の授業は101号教室でのミニコンサートの形式で行われており、附属中学校の生徒達で満員の中、授業の受講生で構成される合唱団が成果を発表した。
・「音楽史B」では、音楽史の内容と共に、教採等の過去問による復習などを行い、興味関心を持続させ、意欲付けを行う工夫が行われていた。
・「数学概論」では、参観日は「連分数と近似」に関する内容の講義で、有理数を扱った前週の内容を踏まえて今週は無理数を扱うとのことであった。無理数の求め方に関しては、まず1/7のように循環小数になる場合と√2のように循環しない無限小数となる場合が例として挙げられ、後者に関して近似する数値の大小関係から力技で求める解法が提示され、続いて連分数を用いて機械的に求める解法の解説がなされた。連分数を用いる解法として、無理数について分子を分母で除した整数部分（商）と小数部分（余り）に分けて、小数部分を分数表記した逆数を分母にすることで順次位を下げて商と余りを求めていく方法の解説がなされ、近似値を求める方法として、途中で余りの部分を0ゼロにする例が示された。その後、√3で同様に連分数を用いた近似方法に関する課題が出され、解答用紙が配付された。

＜板書・資料の提示方法＞
・「音楽史B」では、パワーポイントに連動したメモ用の資料が用意されていた。また、生のピアノ演奏により説明が行われていた。
・「無機化学」では、テキスト形式の資料の他に、説明動画を含むオンデマンド形式のWEB資料が準備されていた。
・「数学概論」では、前方スクリーンに資料のスライドを映して、強調したり追加する箇所をタッチペンで書き込みながら適度なスピードで授業が進められていた。

＜発問・学生とのコミュニケーションの取り方＞
・「植物生態学」では、PPの資料は簡潔にまとめられており、教員は常に受講生の方を見て説明されていた。そのため、目が合うことがしばしばあり、その流れで質問等の意見を求められていた。
・「無機化学」では、参観した回の発表資料は良くできており、内容の難易度は高いと思ったがよく理解しているようであった。質問を受け付ける時間も十分に確保されていた。

＜感想＞
・「音楽史B」について、多くの資料を用いたり、先生の実演奏による説明は、クラシックファンとして大変満足であったとともに、小中学校の先生にも通じ、興味や経験の差が大きい子供たちに音楽に親しんでもらったり興味をもってもらうためにとても大事なことだと思った。もちろん膨大な知識、語学力、演奏技術等が必要なので、まねしようと思っても簡単にできることではないのですが、大学の授業で体験して、いいなと思ってもらうことで、学

生たちもそういった授業を目指し、勉強することになるだろうと思います。
・「社会系教科教育概論II」の模擬授業については、このような規模（3〜4人）の模擬授業を国語科（私）は行ったことがなかったので、そのやり方にいろいろと刺激をいただきました。模擬授業で使用されたホワイトボードの値段やその保管場所について、またオンラインレポートやコースニュース等の利用の工夫についても今度伺いたい。教員は授業を見て回り、受講生による学習経験の差を踏まえたアドバイスや意見を述べていました。社会科の「社会系教科教育概論」にはI〜IVがあり、それらの連携も図っているようで、そういった点でも国語科指導法の参考にしたいと思います。
・「水泳Ⅰ」では、学生が互いに刺激しながら授業がなされており、とても参考になった。また熱中症対策として冷やしたOS1が準備されており、夏場の実技指導には欠かせないものとして認識した。
・「合唱A」では、附属中学校の生徒を前にして歌うことによって、将来、学校において音楽教育の中心的役割を期待される人材として、単に理論的な技術面だけでなく、児童・生徒を指導する心構えも学ぶような教育的配慮もなされていると感じた。そもそも音楽を専門とする学生は音感が優れていると個人的に想像するが、声の強弱の付け方や止め方などが口先だけでなく体全体で表現されているように感じた。大きな波のうねりのような圧力が聴き手に伝わってきた。シラバスを見て、発声練習の前に柔軟体操と記載されていたので納得した。専門的な内容の学習が無理なく自然と誘導されるような授業構成がとても参考になった。
・「運動学概論」では、教員が教科書の特定ページを指定して学生に発表させた後、質疑応答がしっかり行われていた。学生は真摯に取り組んでいる様子が伺われ、学生に考えさせる授業形態がとても参考になった。
・「無機化学」参観して、自分の授業では説明が主であり、内容の確認について少々の質問をして学生を当てることはあっても、ここまで問題演習に時間を割くことはなかったので、検討してみたいと思った。課題の解答担当学生の解答状況と最終的な成績との相関について、後日授業担当者に状況を聞いてみたい。
・「数学概論」はオムニバス形式の授業として実施されているが、参観した授業については、小学校の算数教育に関する大学の授業が学問体系の下に楽しく教授されている様子を垣間見ることができ、自身の数学学習意欲も掻き立てられ大いに刺激となった。
・「植物生態学」を参観して、自身の授業では図等を説明する際はPPや黒板を見る時間が長くなりがちなので、学生の様子を見ながら等コミュニケーションの取り方についてはより注意を払いたいと感じた。

今回提出された授業参観報告書から見てとれる授業方法は、一部ではあるが様々な形式で実施されており、教育学部の授業がいかに多様な形態で行われているかを示すものである。個々の教員が独自に授業改善を行い、授業内容に対して最適な方法を検討した結果ではないかと思われる。教員の個性や分野の違いによっても異なる雰囲気や印象を与えており、参観を通して得られる新たな発見や体験が、更なる授業改善を促すことが期待される。

３章　教育学部学生ＦＤ 委員会の活動

１．学生ＦＤ委員会の活動概要

学生ＦＤ委員会は、授業や教育の改善を目的としてＦＤ活動を担う学生主体の組織であり、26名の学生委員から構成されている。学生ＦＤ委員会の具体的な活動としては、ＦＤシンポジウムの企画・実施、学生交流イベントの運営、履修支援等のピアサポート活動などを行っている。

２．活動と振り返り

（１）学生交流イベント

学生交流イベントは、学年や学科を超えた学部内での交流の場を設けることによって、学生間で近況や悩み等を共有し、つながりを深め、よりよい学生生活を送ることができるようにすることを目的としている。今年度も例年通り「教育学部ソフトバレーボール大会」を企画・実施した。大会では、同学年や学科内だけではなく、他学年や他学科を応援する姿も見られ、学生交流のための有意義なイベントとなった。11月23日（日）に開催しました。





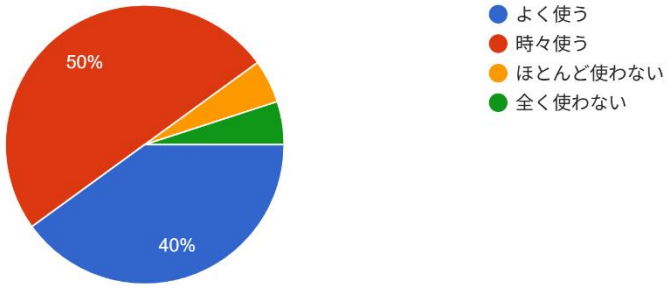
（２）ＦＤシンポジウム

2026年1月27日(火)16時10分より教育学部第二講義棟講義室Ｃにて、学生ＦＤ委員会シンポジウム班主催のＦＤシンポジウムを開催した。「ＡＩ時代の大学生に求められる力」というテーマで、教育現場におけるＡＩの使用方法について議論を進めた。シンポジウムを開催するにあたり、学生が大学生活でどのようなＡＩとの付き合い方をしているのかを把握するため、事前に教育学部の在学生を対象としてアンケート調査を実施した。ＦＤシンポジウム当日は、アンケート結果の報告と、その得られた結果をもとに学生と教職員でグループディスカッションを行った。

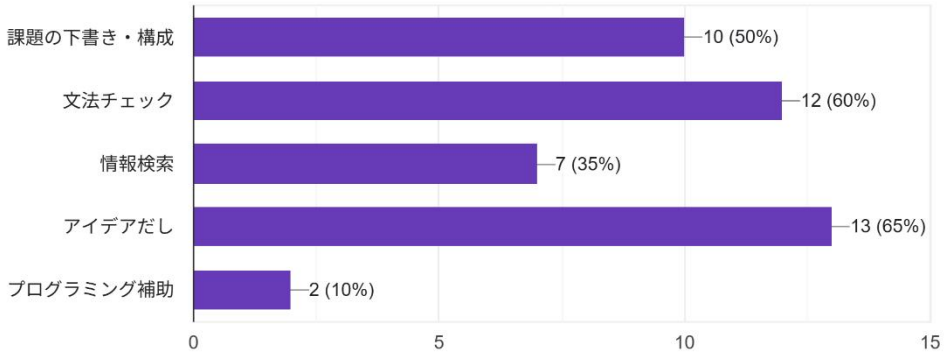
当日は学生10名、教職員12名の計22名の参加があり、活発な意見交換を行った。

【アンケート結果】

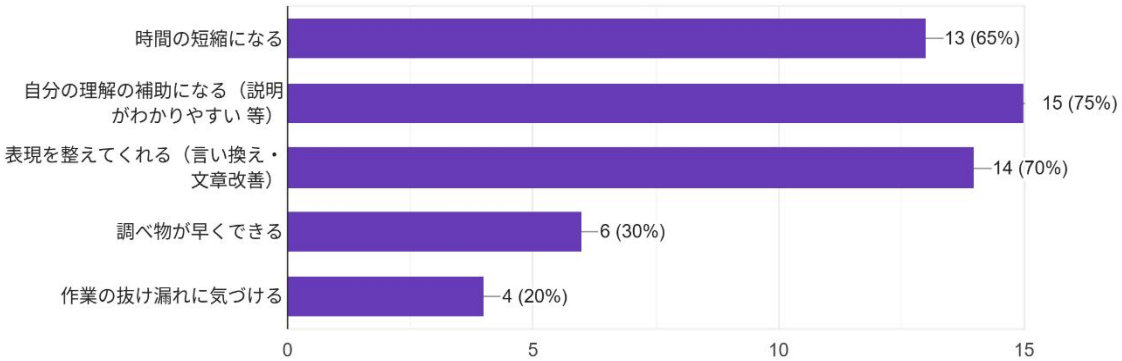
授業や課題、レポートの作成などで生成AIを使用したことがあるか
20 件の回答



どんな目的でAIを使うことが多いか（複数回答可）
20 件の回答

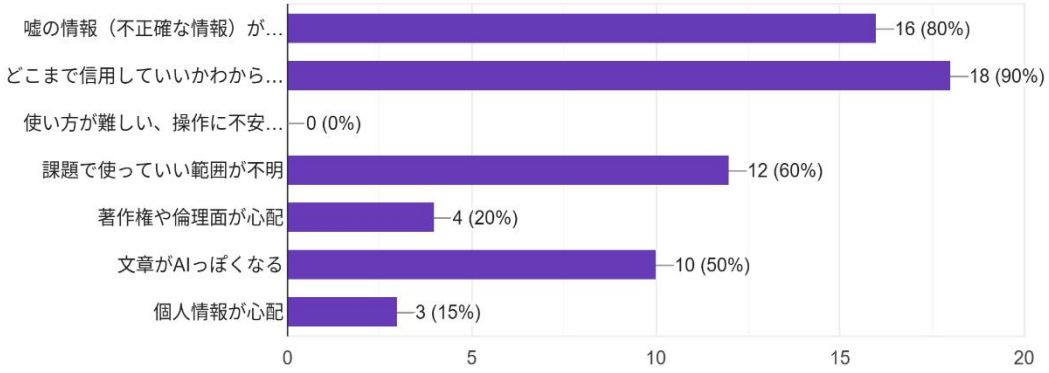


AIを使って便利だと感じたことは何か（複数回答可）
20 件の回答



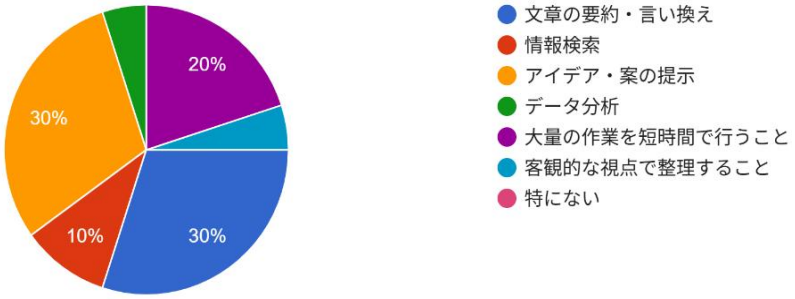
AIを使って困ったこと・不安に感じたこと（複数回答可）

20 件の回答



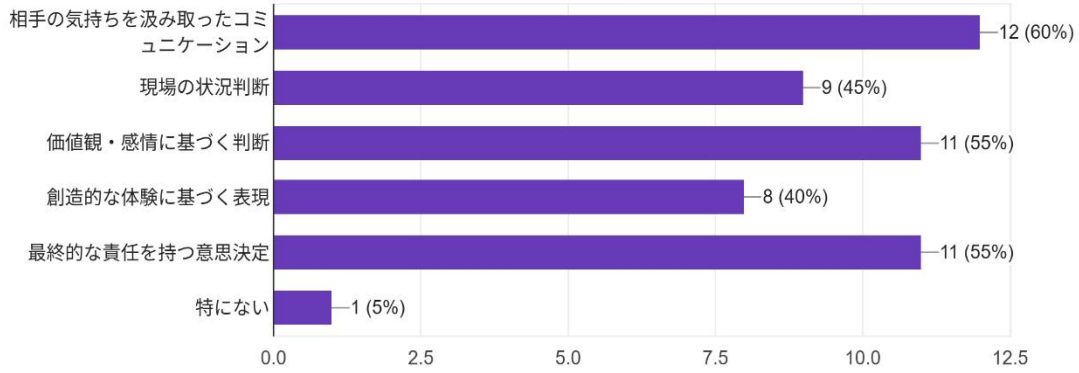
AIが１番得意だと思うこと

20 件の回答



人にしかできないと思うこと（複数回答可）

20 件の回答



【当日のディスカッションで出された意見のまとめ】
今回の話し合いでは、教科ごとに合ったＡＩの使い方を考えることの大切さが共有された。ＡＩは計算や用語整理、要点のまとめなど、答えを出すことが得意であるため、任せられることは任せることで学習の効率を高められる。一方で、作文や発表など自分の考えを深める活動は人が担うべきだという意見で一致した。また、大学だからこそさまざまな研究や実験を行い、ＡＩのよりよい活用方法を探っていくべきだという結論に至った。

また2月17日の教育改善セミナーでは、委員長と交流イベント班リーダーの２名が、今年度の学生ＦＤ委員会の活動について報告をした。

（３）ピアサポート
新入生対象の履修支援冊子『履修登録のすすめ』を、次年度の教育課程に合わせて改訂した。各学科から意見を聴取して、教育課程には記されていない先輩学生が新入生へアドバイスする“履修のコツ”も示して構成した。また、各学科の学生ＦＤ委員が実習や履修に関する質問を受け付けられるような体制を継続した。

３．今年度の総括（成果と課題）
今年度も前年度の活動を引き継ぎ、11月に学生交流イベント・ソフトバレーボール大会、1月に学生ＦＤシンポジウムを開催、 3月にピアサポート活動として、 新入生対象の履修支援冊子『履修登録のすすめ』を改訂して発行した。ソフトバレーボール大会では、学年や学科を超えた学生間の交流があった。また学生ＦＤシンポジウムでは、教育現場におけるＡＩの使用方法について、教職員を交えてディスカッションする貴重な時間を持つことができた。 さらにピアサポート活動では、『履修登録のすすめ』を作成することによって、教育課程には記されていない各学科の授業の「ちょっとした取り方のコツ」を先輩から示すことができた。来季は活動内容をもう一度見直すとともに、さらなる認知獲得に努めていきたい。

４章　令和７年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会FD講演会

本年度は通例とは異なる二部構成として企画され，第一部で講演会を，後半部で座談会を実施した。講演会では，令和6年度鹿児島大学ベストティーチャー賞を受賞された梅林郁子先生に講演をいただいた。第二部の座談会では，「教育学部の改革と教育改善をめぐって」というタイトルで前教育学部長の有倉巳幸先生と現学部長の溝口和宏先生に登壇いただき，お話を伺った。

講演会テーマ： 音楽の座学を考える
講演者：　　鹿児島大学法文教育学域教育学系 准教授 梅林郁子
座談会テーマ： 教育学部の改革と教育改善をめぐって
登壇者：　　鹿児島大学理事・副学長 有倉巳幸，鹿児島大学教育学部長 溝口和宏
開催日時：　2025 年 9月10日（火）14 時 30 分 ～ 15 時 50 分
会場：　　教育学部第 1 講義棟 101 教室
出席者：　　29名

第一部では，梅林先生がどのような構想のもとで講義形式の授業を計画し，実践しているのかが，主に「民族音楽学概論」を題材として説明された。教育学部では学生に対して複数の教員免許状を取得することを奨励している。そのため学生は一つの専門を深めるというより，各学科が開設する専門科目から総合的に学んでいくことが求められる。音楽科の学生においても選択科目を網羅的に履修する学生が少なくなっている現状のもと，「複数の教員免許状を取りたい」という学生のニーズと教員が考える「音楽を学ぶ大学生として学んでほしいこと」とにどのように折り合いを付けていくかという梅林先生の思いが語られた。

具体的には，導入・展開・まとめを重視していること，映像や実物，実演を用いて学生の理解を促していることが説明された。まず導入では前時の復習からはじめて，本時のウォーミングアップを図っていること，例えば前時のスライドを呈示し，括弧の中に何が入るかを全員で想起し文章を完成させていることが紹介された。次に展開では，民族音楽を漫然と紹介する授業にならないように目標を定めていることが語られた。例えばヨーロッパ音楽の回では，ハーディ・ガーディを紹介する際，模型を示して楽器の構造を理解させるだけでなく，この楽器が身分の低い，貧しい人というイメージと結びついていること（楽器の社会的機能），演奏で使われているドローン（持続音）はヨーロッパだけでなく，アジアや他の地域でもよく使われる重要な概念であること，民族音楽と芸術音楽の関連としてシューベルトの『冬の旅』を取り上げてハーディ・ガーディが貧しさや哀れさの象徴となっていることなどを理解させることを目標としていることが述べられた。さらにまとめでは，本時の復習と教員採用試験の対策を行っており，具体的には，鹿児島県の教員採用試験に即して問題を出して学生に答えさせる形式であること，その際，教員採用試験で出題される知識レベルの一歩先をいく内容の定着を図っていることが説明された。最後に，授業アンケートにおける学生の回答が示され，教員採用試験に有益だっただけでなく，教壇に立って授業をつくっていく際に役だったことなどが紹介された。

「複数の教員免許状の取得」と「専門の深化・充実」は，両立が難しい二律背反的な問題といえようが，限られた授業科目のなかでどのように質の高い専門教育を行っていくかは，教育学部の教員一人一人が解決していかなければならない問題といえる。このような状況の下，梅林先生





がどのような考え・意図をもって授業実践をされておられるのかを拝聴した。梅林先生は授業での学生の反応やアンケートの結果を重視しておられ，好評なところはそのままに，課題については改善するという点が印象に残った。よりよい授業を学生に提供したいという先生の真摯な姿勢が学生から高く評価されていることがよくわかるご講演であった。

第二部では，まず有倉先生からベストティーチャー賞の選考過程についての説明がされた。最優秀賞の選定には各部局からあがってくる選考調書が重要であること，例えば最優秀賞を受賞した部局では推している授業を執行部が実際に参観をして説明資料をつくっていることや，他の授業と比べどこが優れているのかを比較対象資料として掲載していることなどが語られた。今後は教育学部の選考調書を作成する際，授業をとおして学生はどのような力を身に付け，伸ばすことができたのかといった教育成果を可視化して客観的な資料として示すことで，わかりやすく，説得力のある選考調書をつくることが重要になってくると考えられよう。

続いて，有倉先生が教育学部長に就任した2020年度当時の教育学部の現状と課題が述べられ，それに対して学部としてどのような対応をしてきたのかが語られた。2020年度はコロナ禍によりスタート時点から授業開始が遅れたことや，オンライン授業が全面的に強いられるなど未曾有の年であったことに加えて，すべての入試区分で面接を課した後，最初の入学生を迎えた年でもあった。当時の状況として，少子化に伴う受験倍率・合格最低点の低下により，基礎学力の低い学生が入学してくることが危惧されており，質の高い学士課程教育をどのように実施していくかという危機感があった。

また永らく鹿児島大学教育学部の教員就職率は約40%に留まっており，国立教員養成大学・学部44校中42位，43位に低迷していた。2020年に教学IRチームを編成し，諸々の教学データの分析を依頼したところ，後期入試で入学してきた学生があまり教員になっていない点や，1年生後期から2年生にかけて教員志望度が大きく低下する点などが洗い出されたことが語られた。それらの傾向を受けて，学生支援を手厚く行っていくことや，附属の先生が学生にとって適切なロールモデルになるように附属の改革を行っていくこと，教職を志望する学生を確保するための入試改革などの取り組みが述べられた。一つめの学生支援では，在学中だけでなく卒業後も含めた支援を全学の教師教育開発センターや教員支援室を中心として実施していること，二つめの附属改革では附属の先生を見て学生が教師になるのを諦めることがないような，附属の先生が自らの能力を十全に発揮し，生き生きと働ける職場環境をつくることを目指していること，三つめの入試改

革では高校生向けに教職プログラムを実施し，そこでの活動成果を入試で評価するなど特色ある入試実施を見据えていることなどが説明された。

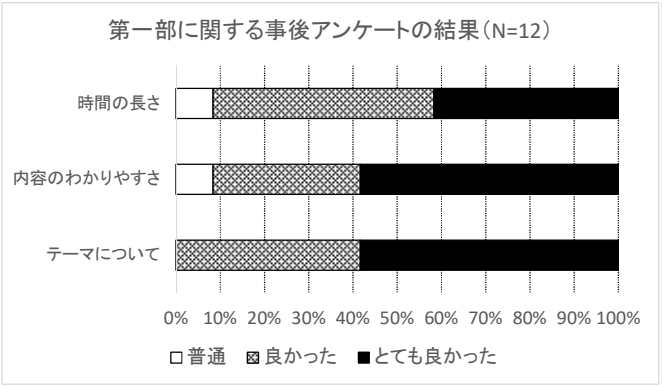
さらにカリキュラム改革の重要性が指摘され，複数の教員免許取得を義務づけることや離島・小規模校での体験実習の必修化が今後必要になってくるのではないかという展望が述べられた。附属学校や地域の教育委員会との連携強化，大学等連携推進法人の設立・教学上の大学間連携など，教育学部が直面している課題についても言及された。

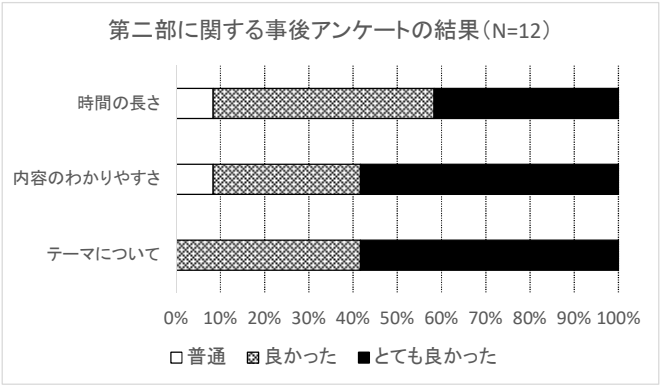
続いて溝口先生が登壇され，学部長としてまず手を付けるべき課題として「初等教育体制の充実」を意識していたことが語られた。全国的に教員採用試験での倍率低下が著しいのが小学校でどこも小学校教員の確保に苦労している点，各教科担当の先生は基本的に中等の教科に割り当てられており，一部小学校の教科を兼担していることで，初等教育に重点を置いた指導体制になりにくいといった教学体制の問題点が指摘された。また学生側にも，中学高校の免許を取得したいが，中等教育コースは定員が少ないのでとりあえず初等教育コースに入学し，在学中に中高の免許を取得して中学高校の教員になっている人が一定数存在する点を挙げ，結果的に小学校教員としてのアイデンティティを持ちづらくなっているという懸念が示された。

これらの課題を踏まえ，今後教育学部が取り組んでいくべくことの構想が説明され，初等教育にも焦点をあてた小中連携担当教員という枠組みをつくっていくことや，宮崎大学と大学等連携推進法人を設立し，互いに免許科目を融通し合う体制やカリキュラムを協議していくことで学生にとって魅力ある教育体制を整えていくこと，さらに文科省の補助金を得て入試区分として新たに地域教員希望枠を設け，そこで入学してきた学生に遠隔授業やAI，少人数学級指導といった離島・へき地の小規模校に焦点をあてたプログラムを提供していくことなどが述べられた。

有倉先生，溝口先生から2020年度以降における教育学部の現状と教育・組織改善の経緯を大変わかりやすくご説明いただいた。しかし一方で，内容的に話題が多岐にわたったために参加者間で問題意識を共有し，議論するにはやや時間不足であった感も否めない。さらに充実したFD講演会を実施していくためには，適切な時間配分についても検討する必要がある。

今回，FD講演会参加者に対して行った事後アンケートの結果は以下のとおりである。第一部・第二部ともに「時間の長さ」「内容のわかりやすさ」「テーマについて」の各項目で「とても良かった」「良かった」が9割を超えており，大多数が内容に関して肯定的に受け止めていたことが見て取れる。講演会の実施時期については，今年度は9月第2週に実施したところ，「今のままで良い」が約6割であった。約3割は「どちらともいえない」であり，「改善が必要」は約１割てあった。「改善が必要」という回答については「教職員の多くが参加できる日程」として教授会の前後が挙げられていた。講演会参加者を増やすために，講演会の時期や実施形態をさらに検討していく必要があろう。





５章 令和７年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会教育改善セミナー

詳しい内容は各担当者の報告をご覧いただきたい。なお、参加者が 17 名と少なかったので、開催時期や開催内容等、より多くの参加者が得られるよう工夫したい。

１．開催要領

日時：令和７年２月 19 日（水）13:00-14:30

会場：教育学部第１講義棟１階 101 教室

２．セミナー

（１） 開会の挨拶（溝口学部長）

（２）学生 FD 委員会シンポジウムについて（小江先生＋学生 FD 委員会委員

（３）授業アンケートについて（松井先生）

（４）授業公開について（錦織先生）

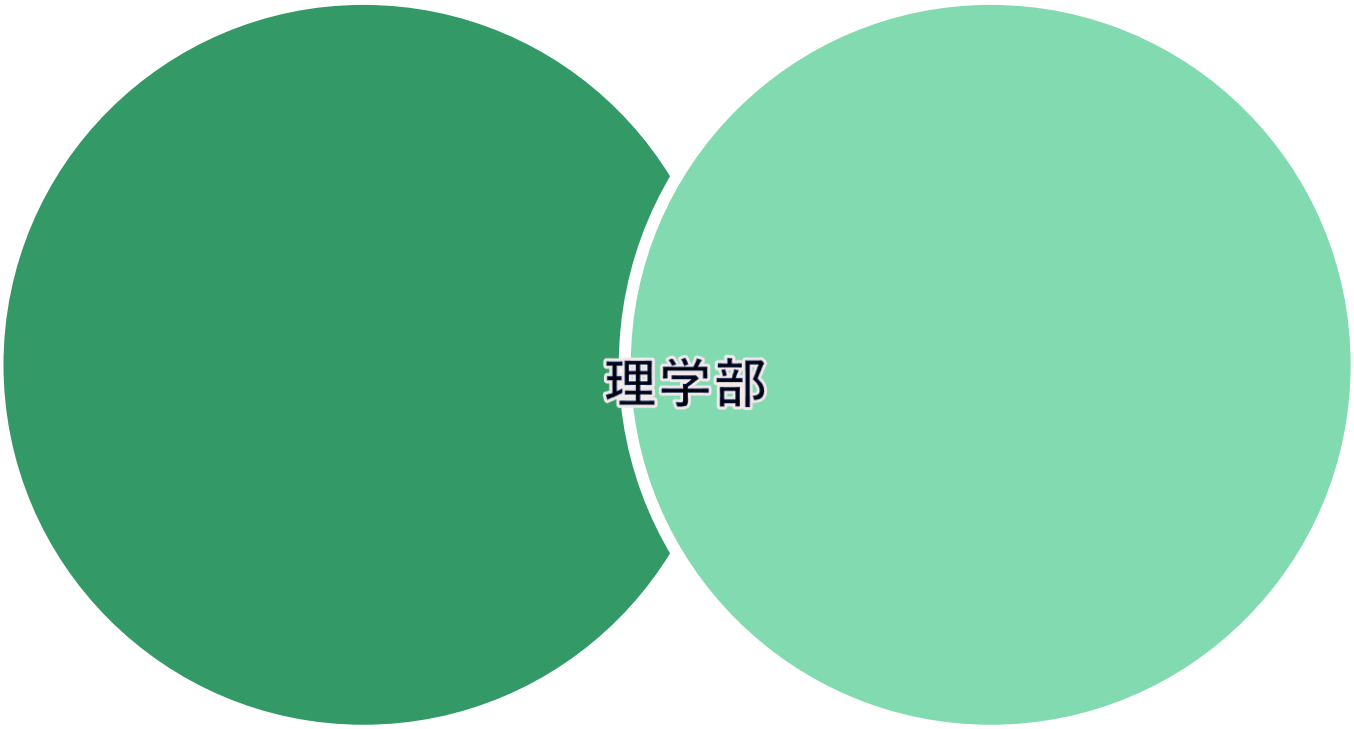
（５）教育学部 FD 講演会について（下木戸先生）

（６）閉会の挨拶（上谷教育改善委員会委員長）

６章 令和７年度基幹教員等 FD 参加率

部局名（ 教育学部、教育学研究科 ）

合計参加率		**100.0 %**	**（基幹教員等**	**75 名中**	**75 名 参加）**
企画別参加率	前期授業アンケート	97.3 %	（基幹教員等	75 名中	73 名 参加）
	後期授業アンケート	88.0 %	（基幹教員等	75 名中	66 名 参加）
	前後期授業参観	5.3 %	（基幹教員等	75 名中	4 名 参加）
	教育学部 FD 講演会	30.7 %	（基幹教員等	75 名中	23 名 参加）
	学生 FD 委員会シンポジウム	10.7 %	（基幹教員等	75 名中	8 名 参加）
	教育改善セミナー	17.3 %	（基幹教員等	75 名中	13 名 参加）
	FD 座談会	100.0 %	（基幹教員等	12 名中	12 名 参加）
	修了生交流会	100.0 %	（基幹教員等	12 名中	12 名 参加）
	授業リフレクション報告	100.0 %	（基幹教員等	12 名中	12 名 参加）
	SD 会議	66.7 %	（基幹教員等	12 名中	8 名 参加）


理学部

令和7年度理学部FD活動報告書

はじめに

令和7年度に理学部において実施したFD活動の概要について報告する．

令和7年度には4回の理学部FD委員会を開催した．令和7年5月20日開催の第1回（オンライン会議）では，令和6年度後期科目・通年科目に係る成績分布の確認及び理学部FD講演会の開催方法を議論した．同年8月8日～10月2日開催の第2回（メール会議）では，基礎教育科目・基礎専門科目担当者懇談会の開催の可否について議論した．同年10月6日～31日開催の第3回（メール会議）では，令和7年度前期科目の成績分布について確認した．令和8年3月10日開催の第4回では，ベストティーチャー賞受賞候補者について，令和8年度理学部FD活動計画について議論し，令和7年度FD関係の予算執行について報告があった．

令和7年度には，授業評価アンケート，理学部FD講演会，授業公開・授業参観，ベストティーチャー賞の表彰と参観の4企画を実施した．ここでは，1．学生による授業評価アンケート，2．FD講演会，3．FD活動への参加状況，4．その他のFD委員会関係の取組について報告する．これらの活動の実施にあたっては，理学部のほぼすべての教職員にご協力いただき，各プログラムのFD委員および理学系学生係には，企画，実施，本報告書作成にいたるまで，多大なご助言とご助力をいただいた．心より感謝申し上げる．

令和7年度鹿児島大学理学部ファカルティ・ ディベロップメント委員会
委員長　新留　康郎（全学FD委員会委員）

令和7年度鹿児島大学理学部FD委員会

委員長	新留　康郎	（全学FD委員会委員）
委　員	近藤　剛史	（数理情報科学プログラム）
委　員	重田　出	（物理・宇宙プログラム）
委　員	加藤　太一郎	（化学プログラム）
委　員	渡部　俊太郎	（生物学プログラム）
委　員	小林　励司	（地球科学プログラム）
事務担当	桑畑　由美	（理学系事務課学生係長）

1. 学生による授業評価アンケート

(1) 授業評価アンケート

理学部における授業評価アンケートの目的は，学生による授業評価を通じて授業担当の各教員が自らの授業の改善の手がかりを得ることと，その活動を通して履修プログラムのカリキュラムなど種々の教育システムの改善につなげることである．スマートフォンを通したネットワーク環境に強い影響を受けている今の学生に対しては，教員の経験に基づいて教育内容の改善や教育技量の向上を試みても十分なレベルに達しないことが多い．学生の具体的なコメントに講義担当教員が耳を傾け，個々の授業や履修プログラムのカリキュラムの改善を重ねる努力が必要である．

令和7年度も教育支援サービスmanabaを利用した授業アンケートを実施した．アンケート項目は14あり，設問1～3は授業のわかりやすさ，4～6は授業運営，7～10は授業成果，11～13は授業の難易度と進度についてで，14は自由記入欄である．具体的には次のような内容となっている．

設問 1　先生の説明は、あなたにとってわかりやすかったですか。　選択肢　1. わかりやすかった　2. わりとわかりやすかった　3. ややわかりにくかった　4. わかりにくかった

設問 2　先生の声は聞き取りやすかったですか。　選択肢　1. 聞き取りやすかった　2. わりと聞き取りやすかった　3. あまり聞き取りやすくなかった　4. 聞き取りやすくなかった

設問 3　総合的に見て、この授業はわかりやすかったですか。選択肢　1. わかりやすかった　2. わりとわかりやすかった　3. ややわかりにくかった　4. わかりにくかった

設問 4　シラバス(講義要項)に即した内容の授業が行われていたと思いますか。　選択肢　1. そう思う　2. わりとそう思う　3. あまりそう思わない　4. そう思わない

設問 5　授業の開始時間、終了時間は守られていたと思いますか。選択肢　1. そう思う　2. わりとそう思う　3. あまりそう思わない　4. そう思わない

設問 6　総合的に見て、この授業の運営はどうでしたか。　選択肢　1. よかった　2. わりとよかった　3. あまりよくなかった　4. よくなかった

設問 7　あなたは講義中に熱心に受講したと思いますか。　選択肢　1. そう思う　2. わりとそう思う　3. あまりそう思わない　4. そう思わない

設問 8　受講の結果、新しい知識を得ることができましたか。　選択肢　1. できた　2. わりとできた　3. あまりできなかった　4. できなかった

設問 9　受講の結果、新しいものの見方や考え方を得ることができましたか。　選択肢　1. できた　2. わりとできた　3. あまりできなかった　4. できなかった
設問 10　この授業へのあなた自身の取り組み、この授業から得られたことなど総合的に見て、あなた自身の自己評価はどうですか。　選択肢　1. よかった　2. わりとよかった　3. あまりよくなかった　4. よくなかった
設問 11　授業の難易度はあなたにとって適切でしたか。　選択肢　1. 適切であった　2. わりと適切であった　3. あまり適切ではなかった　4. 適切ではなかった
設問 12　授業の進み方のペースは、あなたにとって適切でしたか。　選択肢　1. 適切であった　2. わりと適切であった　3. あまり適切ではなかった　4. 適切ではなかった
設問 13　総合的に見て、授業の難易度と進度は適切でしたか。　選択肢　1. 適切であった　2. わりと適切であった　3. あまり適切ではなかった　4. 適切ではなかった
設問 14　その他、この授業について思うことがあれば、自由に書いてください。

理学部では平成13年度より授業評価アンケートを実施してきた．令和7年度においても従来通り，教職専門科目と非常勤講師の担当科目を含むほぼすべての科目を対象とし，前期末と後期末に2週間程度の期間を設けてアンケート調査を実施した．なお，各期の半ばにおいても担当教員による任意のアンケートの実施も可能であり，授業に対する質問やリクエストなどの自由記載欄を設けた小テストやミニッツペーパーによる意見聴取を実施している科目もある．各教員はmanaba上に保存されている複数年の担当科目のアンケート結果を参照しつつ自己分析を行い，半期に一度，授業改善書を提出する．理学部では授業改善以外の目的にアンケートを転用することはしないこととしている。ただし，ベストティーチャー賞受賞候補者選出のための参考資料として利用しているプログラムはある．

令和 3 年度から令和 7 年度までの期末授業アンケート回答状況を表 1 に示した。令和 7 年度の前期アンケート回答率は 23.0%，後期回答率は 16.0%で，通年平均では 19.6%の回答率となった．回答率は令和 3 年度から令和 6 年度までは緩やかに減少傾向であったが，令和 7 年度には大幅減となった．講義個別にアンケートが設定されている上に，全学的な多様な調査がなされるなかでアンケート疲れもありうるため，アンケート内容の妥当性を含めて検討していきたい．

表１　期末授業アンケート回答状況（令和３年度～令和７年度）

令和７年度	前期	後期	通年
科目数（科目）	108	101	209
延べ受講人数（人）	5683	5328	11011
延べ回答総数（人）	1305	852	2157
回答率（%）	23.0	16.0	19.6
令和６年度	前期	後期	通年
科目数（科目）	113	115	228
延べ受講人数（人）	5605	5365	10970
延べ回答総数（人）	1633	1126	2759
回答率（%）	29.1	21.0	25.2
令和５年度	前期	後期	通年
科目数（科目）	115	119	234
延べ受講人数（人）	5623	5361	10984
延べ回答総数（人）	1427	1098	2525
回答率（%）	25.4	20.5	23.0
令和４年度	前期	後期	通年
科目数（科目）	114	107	221
延べ受講人数（人）	5095	5123	10218
延べ回答総数（人）	1820	1197	3017
回答率（%）	35.7	23.4	29.5
令和３年度	前期	後期	通年
科目数（科目）	100	110	210
延べ受講人数（人）	4935	4875	9810
延べ回答総数（人）	1808	1590	3398
回答率（%）	36.6	32.6	34.6

令和 6 年度と令和 7 年度の授業評価アンケートのうち，まとめの項目の回答状況を表 2 に示した．表中の設問番号 1.3，1.6，1.10，1.13 は，上記の設問 3，設問 6，設問 10，設問 13 にそれぞれ対応している．4 段階の選択肢のうち「1」が最も高い評価，「4」が最も低い評価である．令和 7 年度も，これらの 4 つの設問に対して回答「1」と「2」を合わせて 80%以上であり，回答「4」を選んだ学生は令和 6 年度より減少した．回答者の大多数は，理学部の授業に概ね満足していると判断できる．

表 2　設問 3，6，10，13 の回答状況（令和 6 年度～7 年度）

令和 7 年度		前期（回答数：1305 人）				後期（回答数：852 人）			
設問		1	2	3	4	1	2	3	4
1.3	回答数（人）	708	444	115	38	486	299	51	16
	回答割合（%）	54.3	34.0	8.8	2.9	57.0	35.1	6.0	1.9
1.6	回答数（人）	888	345	50	22	609	219	21	3
	回答割合（%）	68.0	26.4	3.8	1.7	71.5	25.7	2.5	0.4
1.10	回答数（人）	756	466	63	20	478	330	37	7
	回答割合（%）	57.9	35.7	4.8	1.5	56.1	38.7	4.3	0.8
1.13	回答数（人）	747	438	89	31	515	281	43	13
	回答割合（%）	57.2	33.6	6.8	2.4	60.4	33.0	5.0	1.5

令和 6 年度		前期（回答数：1633 人）				後期（回答数：1126 人）			
設問		1	2	3	4	1	2	3	4
1.3	回答数（人）	821	562	189	61	646	373	83	24
	回答割合（%）	50.3	34.4	11.6	3.7	57.4	33.1	7.4	2.1
1.6	回答数（人）	1054	483	62	34	783	288	41	15
	回答割合（%）	64.5	29.6	3.8	2.1	69.5	25.6	3.6	1.3
1.10	回答数（人）	869	611	129	24	633	421	55	17
	回答割合（%）	53.2	37.4	7.9	1.5	56.2	37.4	4.9	1.5
1.13	回答数（人）	822	612	145	54	653	405	51	17
	回答割合（%）	50.3	37.5	8.9	3.3	58.0	36.0	4.5	1.5

表 2 のうち，授業のわかりやすさに関する設問 3 について，否定的な回答である「3」と「4」を合わせた率は，令和 6 年度には前期 15.3%，後期 9.5%，令和 7 年度には前期 11.7%，後期 7.9%と推移した．授業のわかりやすさは改善傾向にある．

授業運営に関する設問 6，学生の自己評価に関する設問番号 10，に対して肯定的な回答である「1」と「2」を合わせた率は，高水準を維持している．

授業の難易度や進度に関する設問 13 について否定的な回答である「3」と「4」を合わせた率は，令和 6 年度には前期 12.2%，後期 6.0%，そして，令和 7 年度には前期 9.2%，後期 6.5%で，否定的回答率が低下した．

(2) 教員による授業アンケート自己分析

表 3 に過去 3 年間の提出状況を示した．

表 3　「授業アンケートの自己分析と今後の対応」提出状況（令和 5 年度～7 年度）

	令和 5 年度			令和 6 年度			令和 7 年度		
	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計
提出科目数	41	37	78	39	39	78	43	53	96
提出教員数（延べ数）	26	21	47	29	24	53	30	31	61

令和 2 年度以降，授業アンケートの回答結果を担当教員自身が manaba 上の集計結果を確認し，自己分析と今後の対応を検討して指定された様式で学生係へ提出することとしている．表 3 に令和 5 年度から 7 年度までの提出状況を示した．提出教員数は令和 5 年度は 47 名，令和 6 年度は 53 名，令和 7 年度は 61 名の延べ人数が参加した．提出科目数については，令和 5 年度には 78 科目， 6 年度には 78 科目，そして，7 年度にも 96 科目と増加した．令和 7 年度以降は Forms で回答する方式に変更したことが回答数の増加につながったと考えられる。

授業アンケートは授業科目に対して学生が感じたことを担当教員が知る手段として一般的であるが，定量的なモニタリングとしての精度を保つには一定程度の高い回収率が不可欠である．そのため，担当教員が授業時間中に回答時間を設けるなど，回収率を上げる努力を行うことによって，受講者全体の傾向が把握できる可能性が高まる．しかし，学生側から見れば，多いときは十数科目のアンケートに回答することはそれなりに労力がかかるし，期末アンケートの場合は受講者自身にフィードバックが望めないため回答しようというモチベーションが上がりにくい．一般に自由記入欄への入力は少ない

が，具体的な肯定的意見が入力されていると，次年度の授業の設計や方法を検討する際に非常に参考になる．否定的な意見が入力されていることもあるが，そのような意見を書かざるをえなかった背景を検討することで授業の改善に役立つこともある．授業アンケートの自己分析については教員一人一人が担当科目の教育効果を省みる機会なので，高い参加率を維持したいが，既存システムを使って直接入力可能とする方が作業効率は良いと思われる．

2. FD 講演会

（1）理工学研究科・工学部合同 FD 講演会

令和7年11月19日13時00分～14時00分に，理工学研究科・理学部・工学部合同 FD講演会を理工系総合研究棟プレゼンテーションルームで開催し，オンライン同時配信した．サイバー大学 教授、鹿児島大学理工学研究科 特任教授の勝 眞一郎氏を迎え，「大学の地域貢献とDX」と題してご講演いただいた．

（2）理工学研究科・理学部合同 FD 講演会

理学部FD講演会は，令和7年12月17日からオンデマンド動画公開方式によって開催した．動画では株式会社キャリアスカイ代表取締役の水谷典子氏に「学生との信頼関係を築く対話力」と題してご講演いただいた．まず，大学内でのコミュニケーションの特徴について説明があった．さらに，大学でありがちなUnconscious Bias（無意識の偏見）の例示があり，これを完全に避けることは不可能であることが解説された．より良いコミュニケーションを維持するための一つの方針としてAssertive Communicationという考え方が提示された．これは，率直で対等なコミュニケーションによって，相手の意思を尊重しながらも自分の意思はしっかり伝えることを特徴としたコミュニケーションスキルである．学生と教員の立場は非対称になりがちであるが，この非対称さがミスコミュニケーションにならないように心がけることが大切であることが指摘された．

国家資格キャリアコンサルタントの有資格者である講演者の話題には，参考になる内容が多くあり，今後の授業や学生とのコミュニケーションに生かしていけると考える．

3. FD活動への参加状況

昨年度と今年度の専任教員のFD活動参加率を表4に示した.

表 4　理学部専任教員の FD 参加率（令和 6 年度～7 年度）

令和 7 年度		
合計参加率		85.5 % （専任教員 55 名中 47 名 参加）
企画別参加率	理学部 FD 講演会	27.3 % （専任教員 55 名中 15 名 参加）
	理工合同 FD 講演会	65.5 % （専任教員 55 名中 36 名 参加）
	授業計画改善	69.1 % （専任教員 55 名中 38 名 参加）
	授業公開・授業参観	10.9 % （専任教員 55 名中 6 名 参加）
	全学 FD 講演会等	1.8 % （専任教員 55 名中 1 名 参加）
令和 6 年度		
合計参加率		94.5 % （専任教員 55 名中 52 名 参加）
企画別参加率	理学部 FD 講演会	78.2 % （専任教員 55 名中 43 名 参加）
	理工合同 FD 講演会	72.7 % （専任教員 55 名中 40 名 参加）
	授業計画改善	65.5 % （専任教員 55 名中 36 名 参加）
	授業公開・授業参観	3.6 % （専任教員 55 名中 2 名 参加）
	全学 FD 講演会等	3.6 % （専任教員 55 名中 2 名 参加）
	基礎教育科目、基礎専門科目担当者懇談会	34.5 % （専任教員 55 名中 19 名 参加）

合計参加率は，令和6年度には94.5%であったが令和7年度には85.5%となった．本年度に大きく下がったことには，理学部FD講演会の参加率を27.3 %とした影響が大きい．本年度の理学部FD講演会はYouTubeにオンデマンド動画を用意し，視聴後にFormsでアンケートに答える形式にした．アンケートへの回答は任意としたため，回答数が15件と少なくなってしまった．ただし，動画の視聴数は157件であり，理工学研究科の専任教員156名ほぼ全員が視聴したと考えられる．併せて，理工学研究科教授会の前に行ったFD講演会（工学部主催・理工学研究科／理学部共催）当日に出張が重なった教員が数名いたためである．

今回の理学部FD講演会では本年度の理学部と工学部の区別がつく方法で視聴数情報を集められなかったため，理学部の理学部FD講演会参加率はアンケート回答数を元に27.3 %を報告した．しかし，再生数から実質的には昨年度と同等の参加率があったと

考えている．来年度はオンデマンド動画の開示方法とアンケートの回収方法について検討し，FD活動としての実効性と情報収集の改善をはかる．

授業計画改善書の提出については，令和5年度は58.9%，令和6年度には65.5%，そして令和７年度には69.1 %となった．授業公開・授業参観と全学企画による講演会等の参加率は低調である．

「理学部基礎教育科目・基礎専門科目の担当者懇談会」は今年度から開催せず，当該科目の改善は教務委員会等で検討することとした．当該講義はプログラム横断的な入門講義であり，他プログラム学生も理解できるような講義をどう構築するかを議論する場として懇談会が設定された．しかし，各プログラムの都合を踏まえて他プログラム学生を教えることの困難さだけが表明されることが多く，建設的な議論にならない傾向があった．一部の教員は情報交換の場としての継続を希望したが，科目の位置付けも含めて議論するのであれば教務委員会等でなければ決定できないということで，FD委員の多数決をもって当該懇談会は休会とした．

全学のFD委員会において，FD活動への参加率が75%を超えるように指示がなされてきた．表4に示すように企画によって参加率にばらつきはあるが，平均するとこの数値目標は達成できている．負担感が少なく効果的なFD活動のあり方を模索していくべきであると考える．

4. その他の FD 委員会関係の取り組み

(1)成績評価分布の確認と授業改善計画書

理学部では，内部質保証システムを構成する一つの要素として，自己点検評価や授業改善に活用するため，成績評価の分布に関する情報を組織的に確認している．年に2回，全教員へ直前の期に関しての成績評価分布表を配布し，各プログラムにおいて確認する．各プログラムのFD委員は学生係へ確認結果を報告し，理学部FD委員会において確認した後，理学部代議員会において報告することとしている．また，令和3年度と令和4年度には授業改善計画書の様式を見直し，教員の授業改善に対する取組がより具体的に見えるようになったとされていたので，令和6年度に引き続き令和7年度も同形式の様式を使用することとした．

(2)授業公開・授業参観の実施

令和4年度に，授業公開・授業参観にオンデマンド形式を新たに取り入れ，理学部ベストティーチャー賞の受賞歴のある教員などから授業の動画ファイルを提供してもら

い，理学部広報委員会の協力を得てYouTubeで学部内限定の公開体制を整えた．授業参観実施報告書の様式も改め，参観した教員から授業を公開した教員へのコメントが届けられるようにした．参加者数は令和5年度には5名，令和6年度2名，令和7年度には6名の参加者があった．日時の制約なく参観が可能であることから，YouTubeによる公開と授業参観実施報告書については今後も継続していくこととした．

(3) ベストティーチャー賞の選考と推薦

令和6年度には物理・宇宙プログラムの２名からなる教員チームを推薦した．当該講義は全学の優秀賞に選ばれた。令和7年度には化学プログラムの1名を理学部ベストティーチャー賞として選考し、鹿児島大学ベストティーチャー賞受賞候補者として推薦した．

(4) 各種アンケート調査

年度末に理学部卒業予定者に対するアンケート調査を実施した．卒業式の日に理学部で行われる学位授与式においてFD委員よりアンケートへの回答を呼びかけ，回収率の上昇に努めた．

5. 特筆すべき取組や改善事例等

令和7年度の理学部FD講演会はYouTubeにオンデマンド動画を用意し，視聴後にFormsでアンケートに答える形式にした．本年度の視聴確認とアンケートの回答方法に問題があり，理学部と工学部の区別がつく方法で視聴数情報を集められなかった．しかしながら，再生数から実質的には昨年度と同等の参加率があったと考えている．アンケートに回答した教員からは真摯なコメントが得られており，FD活動としての実質は向上したと考えている．来年度はオンデマンド動画の開示方法とアンケートの回収方法について検討し，FD活動としての実効性と情報収集の改善をはかる．

工学部が企画したFD講演会は，従来通り，理工学研究科教授会の開催前の1時間を使って対面と遠隔の両形式によって実施するものであった．FD活動としての実効性を2種類の開催方法で検討し，令和8年度の実施方法の参考にしたい．

おわりに

令和 7 年度もほぼ予定通りの FD 活動を実施することができた．理学部 FD 委員会としては，今後も学生と教職員の双方に対しての有益な情報の収集と提供に務め，教育改善を進めていきたいと考えている．

医学部 医学科

令和７年度医学部医学科 FD 活動報告

１．はじめに

医学部医学科では、医学教育の質向上と研究環境の改善を目的として活動している。大学院と学部のどちらも担当する教員が多いため、医歯学総合研究科 FD 委員会と連携して活動を行った。

今年度、医学部医学科では、１）『学生による授業評価アンケートの実施と、アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集』、２）『卒業生アンケートの実施』、３）『学内講師による医学教育講演会および研修会』、４）『学内講師および学外講師により医学教育セミナー』を実施した。上記４つの活動計画に基づき、「基幹教員のうち 75%以上の FD 活動参加」の達成を目標に定め、令和７年度の FD 活動を行ったので報告する。

２．『学生による授業評価アンケートの実施と、アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集』

２－１．学生による授業評価アンケート

本学科では全授業科目（実習を含む）を対象とした学生による授業評価アンケートを平成 23 年度から実施しており、令和７年度も同様に実施した。まず１年生から４年生までの専門教育科目 51 科目（１科目の中で複数回アンケートを行っている科目あり、選択科目・臨床実習を除く）については、授業最終回に回答時間を設けてもらい、アンケートを実施した。

授業評価アンケートの実施方法について、令和 4 年度の FD 委員会医学科部会において検討し、集計の効率化を図る観点から、manaba 上での実施による web アンケートとすることとなっており、今年度が web アンケート 4 年目となっている。

１年生から４年生までのアンケートは、学生の学習の実態とカリキュラム、教員の指導方法について具体的な改善点を明らかにするために実施し、学生自身の学習に対する自己評価（４項目)、科目について（８項目)、講師の指導について（５項目)、全体評価（１項目）の各項目について５段階の評定尺度で回答し、さらに自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。

なお、結果は医学教務係が速やかに集計した後、結果及び自由記述内容を科目責任者とコースコーディネーターを通じ各教員に報告した。

次に４年次の１月から開始する臨床実習では、実習開始前のオリエンテーション時にアンケートの目的や内容、実施方法を説明した後、それぞれの臨床実習ユニット（診療科を

グループに分けたもの）での実習について、実習終了時に授業評価アンケートを実施した。また、6年生の選択実習では、6年次OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）終了時にアンケートを実施した。

5年生から6年生までのアンケートは自身の学習に対する評価（6項目）、実習計画・実施について（5項目）、指導について（1項目）、全体評価（1項目）の各項目について3～11段階での評定尺度における回答を集計し、自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。

2－2．アンケート結果

全てのアンケート結果は医学部FD委員会医学科部会、臨床実習検討WG、医学部教務委員会医学科部会、医学科会議にそれぞれ報告した。以下にアンケート結果の概要を記載する。

1年生から4年生までの専門教育科目全51科目から計1,834件（平均35.9件／科目）、臨床実習では115件（平均14.3件／臨床実習8ユニット）、6年生の選択実習では67件の回答が得られた。昨年度と比較して、選択実習の回答率は大きく減少しており、アンケートの回収時期について検討する必要がある。1～4年生のアンケートに関しては、昨年度と比較し、33科目の回答率を上げることができた。一方で18科目は回答率が昨年度よりも減少いる。今年度の課題として、授業最終回で時間を作るよう、担当教員へ依頼するよう試みた。半数以上の科目で改善が見られたことから、令和8年度以降も依頼を徹底していくこととする。

アンケートの自身の学習に対する評価という項目について、1年生から4年生までの専門教育科目（【別表1】参照）においては、令和6年度の評価平均が 4.01 ～ 4.20 であったのに対し、令和7年度は 3.97 ～ 4.22 と、最低値から最高値の幅が大きくなっており、学生個人で差の広がり見られた。5年生の臨床実習（【別表2】参照）では令和6年度の評価平均が 4.33 ～ 4.51 であったのに対し、令和7年度は 4.55 ～ 4.63 と最低値、最高値ともに上昇し、改善傾向にあることがわかる。6年生の選択実習（【別表3】参照）では令和6年度の評価平均が 4.38 ～ 4.80 であったのに対し、令和7年度は 3.97 ～ 4.49 と減少している。上記のとおり、今年度6年生のアンケート回収が67件と、在籍の約半数であることから、一概に悪化傾向にあると言い切ることはできないが、選択実習への意欲向上やグループ間の協力を促すよう、教員に働きかけを求めることとする。

また、1年生のうちは、まだ高校までの「受動的学習」から大学における「能動的学習」への意識の変革が進まず、自主的な学習が十分に行われているとは言えない状況ではあるが、学年が進むにつれて自主的な学習に対する意識の向上が見受けられる。一方、昨年度の結果と比較すると、全ての学年において、減少傾向にあることから、学生の自己学習につい

ても教員がバックアップしていく必要があると言える。

なお、臨床実習では、学生を診療の課題解決の場に参加させる「診療参加型実習」の実践が求められている中、学生の回答における診療参加型の割合は、臨床実習では 43.0%、選択実習では 40.8%となっている。近年、40%～45%での増減が続いており、各診療科で実習のスケジュールが固定してきていることが考えられる。診療参加型実習は JACME からの評価ポイントでもあるため、FD 講演会でも取り扱い、全診療科で実践できるようにする必要がある。特に、選択実習では見学・講義の割合が 47.8%と高くなっているため、改善する必要があると言える。

【別表1】授業評価アンケート集計結果（1年生～4年生）

自身の学習に対する評価	1 全く行わなかった	2	3 どちらともいえない	4	5 非常に行った	該当なし	評価平均	SD
積極的に学習した（質問・予習・復習）	0.9%	2.8%	9.0%	51.6%	35.7%		4.18	0.72
教科書や参考文献で広く、深く学習した	1.3%	5.1%	17.0%	48.1%	28.5%		3.97	0.81
原理の理解や臨床への応用を考えながら学習した	0.8%	1.2%	8.8%	51.6%	35.9%		4.22	0.69
グループ学習ではグループのために貢献した	1.2%	0.5%	4.9%	31.0%	33.1%	29.2	4.21	0.70
科目について	1 全くそう思わない	2	3 どちらともいえない	4	5 非常にそう思う		評価平均	SD
シラバスには必要な情報がわかりやすく記載されていた	2.1%	2.5%	16.2%	53.5%	25.7%		3.98	0.75
学習内容は有用である	0.7%	0.9%	4.7%	46.0%	47.8%		4.39	0.63
効果的な学習方法が用いられた	1.1%	2.2%	9.6%	48.3%	38.7%		4.21	0.72
他の授業との関連や発展がよく理解できた	0.8%	1.3%	8.5%	49.2%	40.1%		4.27	0.68
科目の教育目標に沿った評価（範囲、内容、レベル）だった	1.0%	1.9%	8.2%	52.9%	36.0%		4.21	0.68
学習した領域への興味、関心が高まった	1.3%	1.5%	8.4%	49.4%	39.4%		4.24	0.72
	1 難しい	2	3 適切	4	5 易しい		評価平均	SD
難易度は	6.5%	21.5%	65.9%	4.4%	1.8%		2.74	0.61
	1 長い	2	3 適切	4	5 短い		評価平均	SD
時間数は	2.6%	7.1%	79.2%	9.1%	2.0%		3.01	0.52
講師の指導について	1 全くそう思わない	2	3 どちらともいえない	4	5 非常にそう思う	該当なし	評価平均	SD
講義・実習等はよく準備されていた	1.2%	2.2%	8.7%	46.6%	41.3%		4.25	0.73
理解を促すための工夫がされていた	1.2%	2.4%	8.3%	45.2%	42.9%		4.26	0.72
質問を促し、積極的に質問に応じてくれた	1.3%	1.5%	11.4%	44.5%	41.3%		4.23	0.72
学習領域の講師として適切であった	1.3%	1.5%	6.7%	42.2%	48.4%		4.35	0.69
授業を担当した複数の講師は連携して効率的に指導した	1.1%	2.1%	8.6%	39.2%	39.8%	9.3	4.26	0.74
全体評価	1 全くそう思わない	2	3 どちらともいえない	4	5 非常にそう思う		評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	1.9%	2.5%	8.0%	47.5%	40.0%		4.21	0.77

【別表2】臨床実習アンケート集計結果（5年生）

自身の学習に対する評価	1 全く行わなかった	2	3 どちらともいえない	4	5 非常に行った		評価平均	SD
積極的に実習した	0.0%	0.9%	0.9%	38.3%	60.0%		4.57	0.56
実習に関連する項目を自主学習した	0.0%	0.0%	2.6%	40.0%	57.4%		4.55	0.55
診療のルールに従って行動した	0.0%	0.0%	0.9%	35.7%	63.5%		4.63	0.50
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.0%	0.0%	0.0%	36.5%	63.5%		4.63	0.48
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.0%	0.0%	0.9%	41.7%	57.4%		4.57	0.51
実習計画・実施について							平均	SD
主な実習方法は								
診療参加型							43.0%	1.75
模擬診療型							25.3%	1.23
見学・講義							34.7%	1.56
指導について	1 全くそう思わない	2	3 どちらともいえない	4	5 非常にそう思う		評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.0%	0.0%	0.0%	38.3%	61.7%		4.62	0.49
全体評価	1 全くそう思わない	2	3 どちらともいえない	4	5 非常にそう思う		評価平均	SD
この実習を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.0%	0.0%	0.0%	39.1%	60.9%		4.61	0.49

【別表3】選択実習アンケート集計結果（6年生）

自身の学習に対する評価	1 全く行わなかった	2	3 どちらともいえない	4	5 非常に行った		評価平均	SD
積極的に実習した	0.0%	1.5%	3.0%	58.2%	37.3%		4.31	0.60
実習に関連する項目を自主学習した	0.0%	0.0%	0.0%	50.7%	49.3%		4.49	0.50
診療のルールに従って行動した	0.0%	0.0%	0.0%	50.7%	49.3%		4.49	0.50
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	1.5%	0.0%	9.0%	46.3%	43.3%		4.30	0.75
グループメンバーを助け、協働して学習した	3.0%	1.5%	19.4%	47.8%	28.4%		3.97	0.90
実習計画・実施について							平均	SD
主な実習方法は								
診療参加型							40.8%	2.75
模擬診療型							13.5%	2.15
見学・講義							47.8%	2.50
指導について	1 全くそう思わない	2	3 どちらともいえない	4	5 非常にそう思う		評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.0%	1.5%	1.5%	40.3%	56.7%		4.52	0.61
全体評価	1 全くそう思わない	2	3 どちらともいえない	4	5 非常にそう思う		評価平均	SD
この実習を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.0%	0.0%	1.5%	38.8%	59.7%		4.58	0.52

２－３．アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集

以前から授業（実習）評価アンケートの結果を各担当教員にフィードバックしていたが、平成 28 年度からそのアンケート結果等に対する各担当教員からの意見収集を開始している。

実施方法については、授業（実習）評価アンケート結果とともに意見収集のための様式をメールで送付し、各科目の責任者及びコースコーディネーターが担当教員の意見をとりまとめた上で、様式に記入し、学務課医学教務係に提出するという形で行った。

様式については、授業評価アンケート集計結果にみられる学生の要望・傾向等の分析及び評価について、学生の要望・傾向等に対する授業科目への反映について、その他（授業評価アンケートに対するご意見など）という３項目を用意し、それぞれに対する意見を記入してもらった。

意見収集の結果として、27 科目延べ 49 名の教員から回答が得られた。フィードバックに回答があったものについては、学生の意見等を今後の授業に反映させる必要があるという意見が大多数であり、PDCA サイクルの活性化という当初の目的が十分に達成されたと考えられる。教員からの意見を踏まえ、必要とされる教育的素養について議論を行い、それらを改善できるような FD 研修会の開催を今後も継続して検討していく予定である。

３．卒業生アンケートの実施

医学科では教育内容やカリキュラム等の現状分析並びに改善を目的として、平成 28 年度から卒後３年目と１０年目の卒業生に対してアンケート調査を実施している。実施方法は、卒業時点で学務 web システムに登録されていたメールアドレスに回答をお願いする通知を送信して依頼した。

また、回答率を上げるための取り組みとして、各世代の連絡が取れる方に連絡し、その方に学年全体へ周知依頼する。さらに大学病院の診療科長へ卒業生の名簿を送付し、診療科で把握している卒業生がいる場合はアンケートへの回答を依頼するなど行った。

今回、卒後３年目と１０年目の卒業生 207 名にメールを送信し、39 件が送信不可となったため送信できたのは 168 名分。そのうち 58 名から回答を得られた。その結果、昨年同様に初期臨床研修開始時に医学英語に関する能力が不足していたとの回答が得られた。また、卒業生アンケートについては今後も継続して実施していく予定である。

<table>
<tr><th>実施日程</th><th>送付数</th><th colspan="2">回答数</th><th>回答率</th></tr>
<tr><td rowspan="3">令和７年１２月</td><td rowspan="3">168名</td><td>合計</td><td>内訳</td><td rowspan="3">28.1%</td></tr>
<tr><td rowspan="2">５８名</td><td>３年目　３２件</td></tr>
<tr><td>１０年目　２６件</td></tr>
</table>

（以下ＷＥＢアンケートＵＲＬ）

https://forms.gle/RbFow8eVMWgYMo4W9

４．学内講師による医学教育講演会および研修会

４－１『医学科新任教員 FD 研修会』

日　時：令和 7 年 10 月 16 日（木）15：00～16：45

主　催：医学部 FD 委員会医学科部会

会　場：桜ヶ丘共通教育棟 4 階　402 講義室

Zoom によるオンデマンド配信

講　師：大脇　哲洋　（医学部長）

中村　雅之　（鹿児島大学医学部教務委員会医学科部長）

岡本　康裕　（FD 委員会医学科部会長）

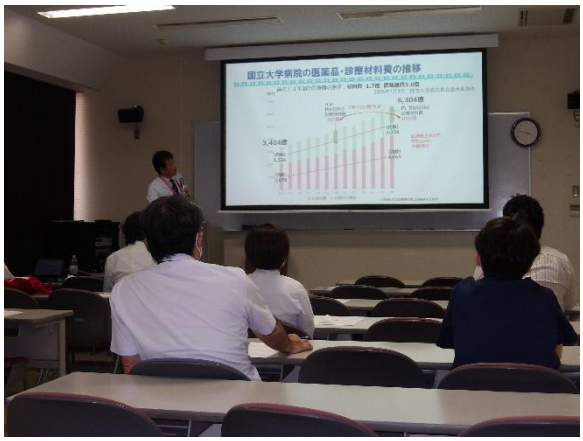
横尾　英孝　（医歯学教育開発センター長）

対象者：医学部医学科の教員

参加者：13 名

目　標：鹿児島大学医学部医学科の教育目標、教育理念、カリキュラムを理解し、本学の教員として求められる教育への関わり、責務を認識する。

総　評：令和 6 年度 11 月以降・令和 7 年度に医学科教員として採用された教員を対象に教育理念やカリキュラム、鹿児島大学の医学教育の特色と課題について講話をおこなった。また、当日参加できなかった方には、録画動画をオンラインで配信した。





4 － 2『入学試験面接評価者講習会』

日　時：令和 7 年 12 月 15 日（水）15：30～17：00

主　催：医学部 FD 委員会医学科部会、医学部入試委員会医学科部会

会　場：基礎講義実習棟　第二個人単位実習室

講　師：大脇　哲洋　（医学部長）

横尾　英孝　（入試委員会医学科部会長）

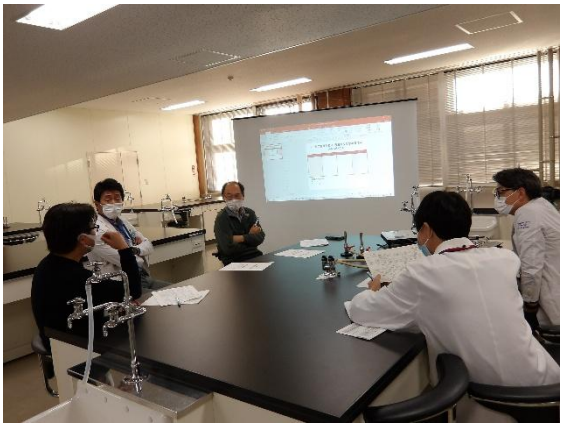
対象者：医学科入学試験面接担当予定教員（講師以上。親族に受験生がいる場合を除く）

参加者：35 名

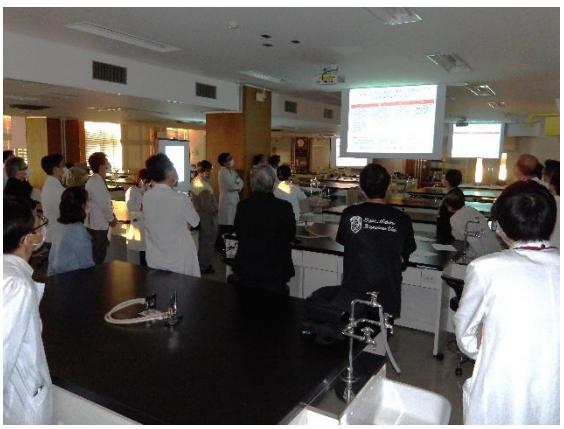
目　標：本学科のアドミッションポリシーに基づく評価基準に従った公平で信頼性の高い面接評価を行いながら、受験生の能力を引き出す方法について、講義やグループワークで習得する。

総　評：面接評価者にとって面接の進め方や評価基準の標準化がより重要となる一方で、面接質問事項は多様化が求められている。今回の講習会は、医師としての適正のある受験生の資質・能力を明らかにするためにはどのように質問の工夫を行えばよいか等の、ルーブリックを検討するディスカッション形式の講習会を行った。次年度以降も講習会を継続して実施していくことが望ましい。









4－3『ベストティーチャー賞受賞者による講演会』

日　時：令和 8 年 1 月 22 日（木）16：00～17：00

主　催：医学部 FD 委員会医学科部会、医歯学総合研究科 FD 委員会

会　場：Zoom によるオンライン講演・オンデマンド配信

講　師：毛利 翔悟

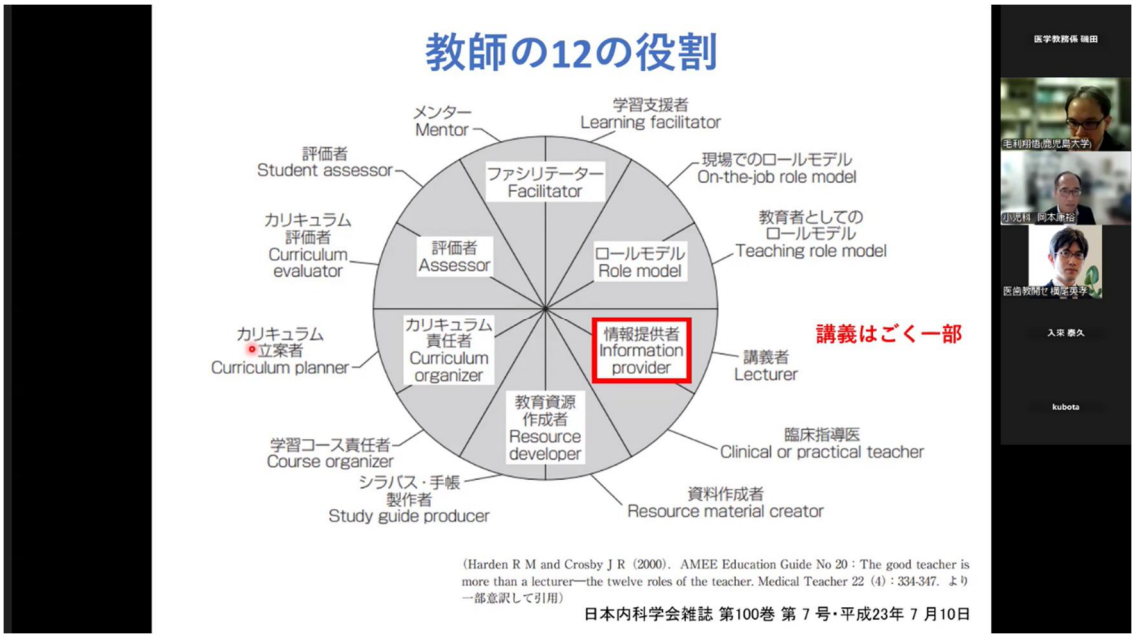
（医歯学教育開発センター 令和 6 年度医学科ベストティーチャー最優秀賞）

対象者：鹿児島大学の医学教育及び歯学教育に関わる全教員

参加者：48 名（医学科基幹教員 27 名）

目　標：授業・実習における具体的な工夫内容や進め方について、知識を習得し、教育内容・方法の改善に資する。

総　評：令和 6 年度医学部医学科ベストティーチャー賞受賞者である毛利先生に、授業・実習等で実践している工夫等これまでの取り組みをご紹介いただいた。学生から評価を受ける教員の、授業構成を学ぶことができ、大変有意義であった。学生から求められる授業を行うためにも、本講演会は継続して実施していきたい。また、保健学科や歯学部との共催をすることで更に授業改善案に幅を持たせることができるため、来年度以降検討する。



4－4『令和7年度第1回医学部医学科FD講演会』

日　時：令和8年2月12日（木）16：00～17：30

主　催：医学部FD委員会医学科部会、医歯学総合研究科FD委員会

会　場：Zoomによるオンライン講演・オンデマンド配信

【第1部】

講　師：前田 雅人（学長補佐 学生生活担当）

演　題：ハラスメント対策・予防

【第2部】

講　師：横尾 英孝（医歯学教育開発センター長）

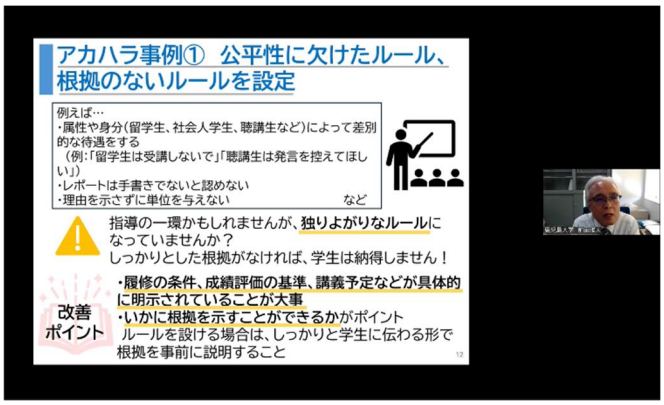
演　題：シラバスの意義と作成のポイント

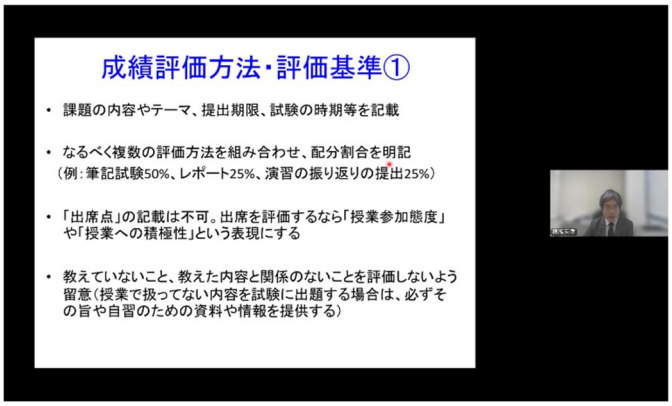
対象者：鹿児島大学の医学教育及び歯学教育に関わる全教員

参加者：45名（医学科基幹教員33名）

目　標：本講演会第1部ではパワーハラスメント・アカデミックハラスメントにならない指導と境界線を理解し、ハラスメントが生じない対策と予防方法を修得する。第2部ではシラバス作成の意義と作成のポイントを学び、学生と教員間で共通理解できるシラバスを作成できるようにする。

総　評：本講演会第1部では学長補佐学生生活担当の前田雅人先生にご講演いただいた。ハラスメントが生じる原因や相手との関係性の構築、距離感の重要性を学ぶことができた。第2部では第1部の講演を踏まえ、講義や実習、評価方法などの指標となるシラバスの作成のポイントを、医歯学教育開発センター長の横尾英孝先生にご講演いただいた。基礎的な内容を改めて教員間で確認し合い、記載事項とポイントを修得することができた。





4 －5『令和 7 年度第 2 回医学部医学科 FD 講演会』

日　時：令和 8 年 2 月 19 日（木）16：00～17：00

主　催：医学部 FD 委員会医学科部会

会　場：桜ヶ丘基礎講義実習棟　1 階　第 1 講義室

Zoom によるオンデマンド配信

講　師：中村　雅之（精神機能病学分野教授　教務委員会医学科部会長）

対象者：鹿児島大学の医学教育関わる全教員

参加者：60 名（医学科基幹教員 38 名）

目　標：精神的な不調を抱える学生への理解を深め、教員間で意見を交わし、学生の精神的不調への対策を修得する。

総　評：精神機能病学分野教授で教務委員会医学科部会長の中村雅之先生にご講演いただき、多様な学生への理解を深めることができた。医学科では助言指導教員の制度を設けてはいるものの自己の不調に気づくことができない学生も多くいるため、科目担当者と助言指導教員、学務課職員との連携を取ることも確認ができた。



4 －6『チューター養成講習会』

日　時：令和 8 年 3 月 26 日（木）17：00～18：00

主　催：医学部 FD 委員会医学科部会・医歯学教育開発センター

会　場：Zoom によるオンライン講演・オンデマンド配信

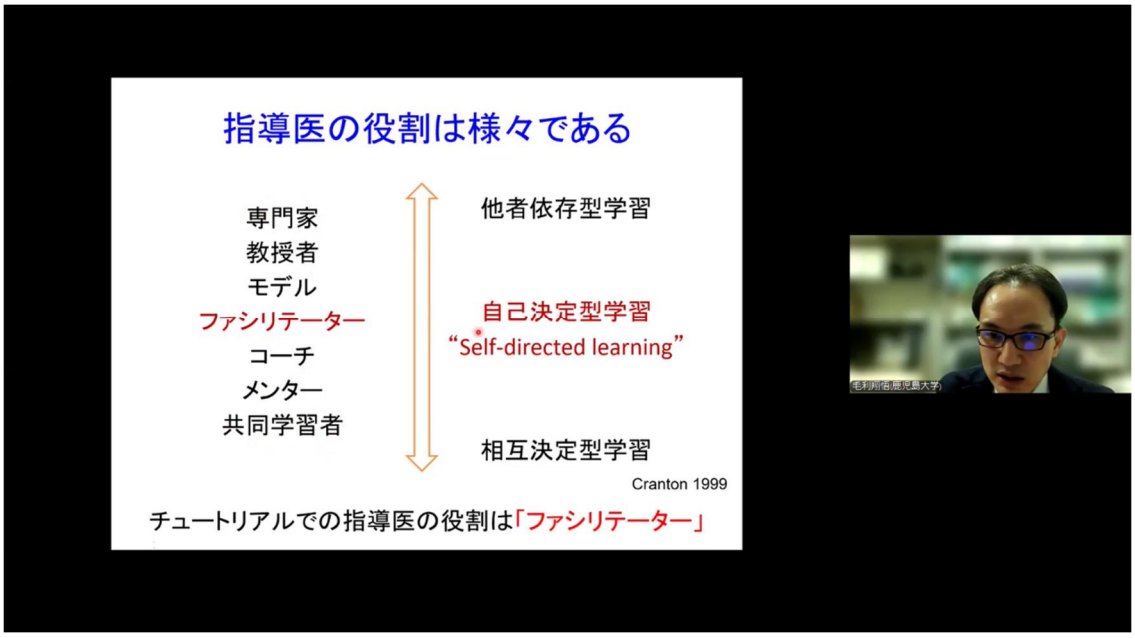
講　師：横尾 英孝（医歯学教育開発センター）
　　毛利 翔悟（医歯学教育開発センター）

対象者：鹿児島大学医学部医学科の全教員

参加者：15 名

目　標：本講習会ではチューターとなる教員が効果的な学習とは何かという学習の基本とチュートリアルの進め方を理解し、学生の学習支援と評価方法を修得する。

総　評：学生の学習支援と評価方法を修得し、効果的な学習をするための重要なポイントを理解することができ、効果的な講習会だった。また、当日参加できなかった方には、録画動画をオンラインで配信した。



5　学外講師および学内講師による医学教育セミナー

『第 92 回医学教育セミナーとワークショップ in 鹿児島大学』

日　時：令和 7 年 11 月 27 日（木）13：00～18：30

令和 7 年 11 月 28 日（金）　9：00～16：00

主　催：岐阜大学医学教育開発研究センター、

鹿児島大学医学部 FD 委員会医学科部会、鹿児島大学歯学部 FD 委員会

会　場：鹿児島大学桜ヶ丘キャンパス（鶴陵会館・共通教育棟）

ZOOM によるオンライン講演

講　師：横尾　英孝（鹿児島大学医歯学教育開発センター 教授）

網谷　真理恵（鹿児島大学地域医療学分野 准教授）

大戸　敬之（鹿児島大学病院　歯科総合診療部 講師）

毛利　翔悟（鹿児島大学医歯学教育開発センター 助教）

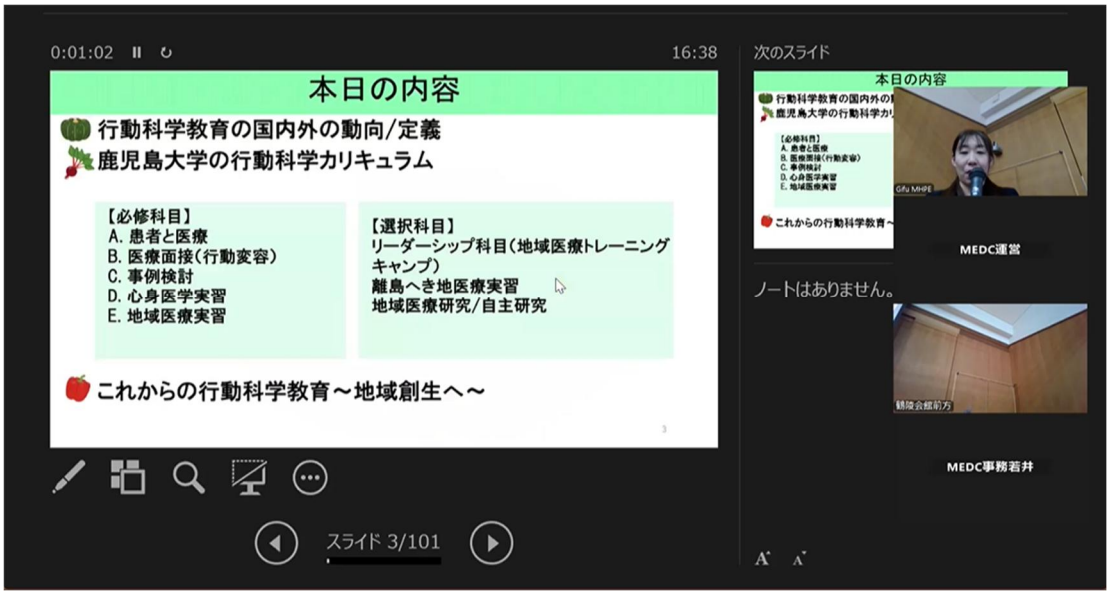
他

対象者：医学教育に関わる全国の教員及び歯学教育に関わる全国の教員

参加者：149 名（鹿児島大学教員 17 名/医学科基幹教員 7 名）

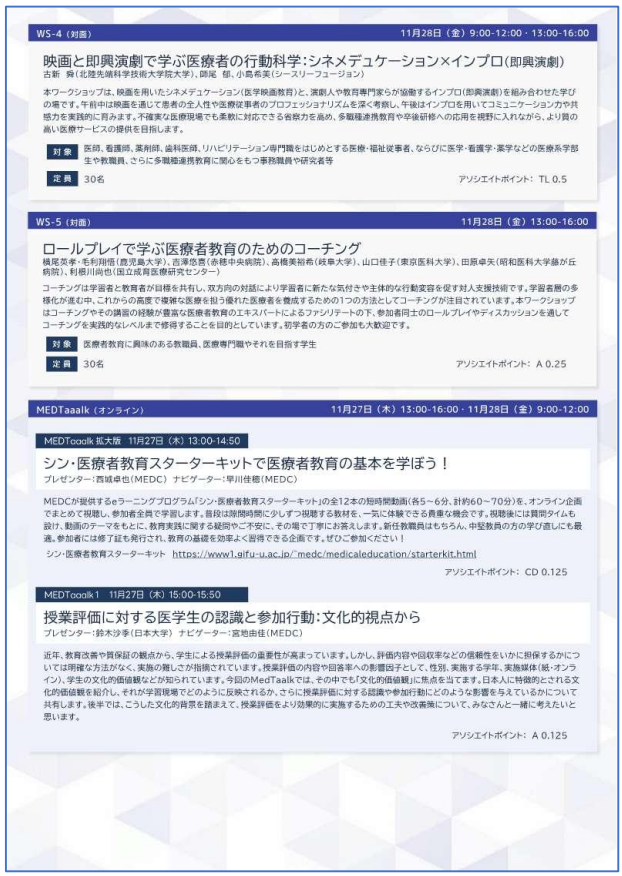
目　標：医療者教育を開発・研究・普及させることを課題に、医学教育の共同利用拠点として認可されている岐阜大学医学教育開発研究センターと共催で、他大学、他分野の取り組みを意見交換し、自身の教育活動へ反映させる。

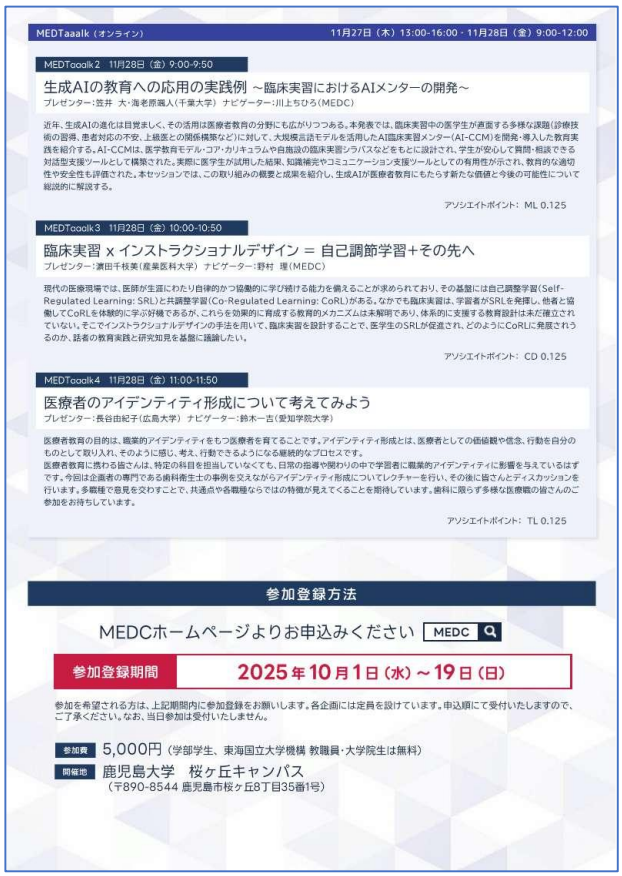
総　評：各セミナー、ワークショップで他大学、他分野の取り組みを意見交換し、今後の教育活動の課題を見つけることができた。今回共催となった岐阜大学医学教育開発研究センターは年に数回、医学教育セミナーを催しているため、FD 委員を派遣し、今後も医学教育についての情報共有の場として利用していく。




第92回
事前参加登録制
【開催地】
鹿児島大学
桜ヶ丘キャンパス
【参加登録】
10.01(水)
10.19(日)
2025秋
医学教育セミナー & ワークショップ
11.27(THU)
▽
11.28(FRI)
Seminar（ハイブリット）
11/27(木)
16:30▶18:00
行動科学×臨床実践：6年間で育む行動科学的視点と実践力
網谷真理恵（鹿児島大学）
CD
Workshop（対面）
11.27(木)
13:00▶16:00
11.28(金)
09:00▶12:00
13:00▶16:00
WS-1
授業や実習を“PIF”の観点から考えてみよう
大戸聖之（鹿児島大学病院）、岡崎史子（新潟大学）、三好智子（京都大学）、芳野 純（帝京平成大学）、船越 拓（東京ベイ・浦安市川医療センター）、吉田 暁（新潟市民病院）
TL
WS-2
医療者教育に活かすAppreciative InquiryとOpen Space Technology
～主体性と対話で「あり方」を育む～
北原佑介（たのはたラボ）、照屋周造・尾原晴雄（沖縄県立中部病院）
ML
WS-3
ユニットの会 ～地域連携と全国協働を考える集い（九州地区開催）
小松弘幸（宮崎大学）、西城卓也・宮地由佳（MEDC）
ML
WS-4
映画と即興演劇で学ぶ医療者の行動科学：シネメデュケーション×インプロ（即興演劇）
古新 舜（北陸先端科学技術大学院大学）、師尾 愼、小島希美（シースリーフュージョン）
TL
WS-5
ロールプレイで学ぶ医療者教育のためのコーチング
橋尾英孝・毛利翔悟（鹿児島大学）、吉澤悠喜（赤穂中央病院）、島橋美裕希（岐阜大学）、山口佳子（東京医科大学）
田原卓矢（昭和医科大学藤が丘病院）、利根川尚也（国立成育医療研究センター）
A
MEDTaaalk（オンライン）
11.27(木)
13:00▶16:00
11.28(金)
09:00▶12:00
MEDTaaalk 拡大版 11/27(木)13:00-14:50
シン・医療者教育スターターキットで医療者教育の基本を学ぼう！
プレゼンター：西城卓也（MEDC） ナビゲーター：早川佳穂（MEDC）
CD
MEDTaaalk1 11/27(木)15:00-15:50
授業評価に対する医学生の認識と参加行動：文化的視点から
プレゼンター：鈴木沙季（日本大学） ナビゲーター：宮地由佳（MEDC）
A
MEDTaaalk2 11/28(金)9:00-9:50
生成AIの教育への応用の実践例 ～臨床実習におけるAIメンターの開発～
プレゼンター：笠井 大・海老原識人（千葉大学） ナビゲーター：川上ちひろ（MEDC）
ML
MEDTaaalk3 11/28(金)10:00-10:50
臨床実習 x インストラクショナルデザイン = 自己調節学習+その先へ
プレゼンター：濵田千枝美（産業医科大学） ナビゲーター：野村 理（MEDC）
CD
MEDTaaalk4 11/28(金)11:00-11:50
医療者のアイデンティティ形成について考えてみよう
プレゼンター：長谷由紀子（広島大学） ナビゲーター：鈴木一吉（愛知学院大学）
TL
次回 【開催日】2026.06.05 ▶ 06.07 【開催地】東京
*記号（TL等）はアソシエイト認定のための学習領域を表しています。詳細はMEDCのホームページをご覧ください。
MEDC
MEDICAL EDUCATION DEVELOPMENT CENTER, GIFU UNIVERSITY
医学教育共同利用拠点
岐阜大学医学教育開発研究センター
MEDC
medc@t.gifu-u.ac.jp
Facebook
X
Instagram


Seminar（ハイブリット） 11月27日（木）16:30-18:00
行動科学×臨床実践：6年間で育む行動科学的視点と実践力
網谷真理恵（鹿児島大学）
日本医学教育評価機構（JACME）による認証評価基準の導入により、行動科学・社会科学カリキュラムの実施が必須となっている。行動医学は「健康と疾病に関する心理社会科学的、行動科学的および医学生物学的知見と技術を集積統合し、予防、診断、治療およびリハビリテーションに応用する学際的学術」と定義される。一方で、カリキュラムの内容の標準化、指導者など大学間の差があり、多くの課題がある。鹿児島大学では、6年間を通した段階的な理論と実践の統合により、行動科学的視点を持つ全人的医療実践者の育成を目指している。行動科学の理論学習に加え、行動変容のためのロールプレイ実習や、患者のBio-Psycho-Social modelに基づく臨床応用、地域住民との異業体験実習などのフィールドワークなど心理学、心身医学、地域医療学を融合した教育を実践している。本講演では鹿児島大学の行動科学教育の取り組みについて紹介する。
対象 行動科学に関心のある医学教育関係者
アソシエイトポイント：CD 0.125
WS-1（対面） 11月27日（木）13:00-16:00
授業や実習を“PIF”の観点から考えてみよう
大戸聖之（鹿児島大学病院）、岡崎史子（新潟大学）、三好智子（京都大学）、芳野 純（帝京平成大学）、船越 拓（東京ベイ・浦安市川医療センター）
吉田 暁（新潟市民病院）
プロフェッショナル・アイデンティティ（PI）とは、専門職としての価値観や信念、態度を備えた自己認識のことを指し、その形成過程をプロフェッショナル・アイデンティティ・フォーメーション（PIF）といいます。つまりは、「医療者らしくなっていく」ということです。学生や研修生がより医療者らしくなっていくということは、近年の医学教育の最終的な目標の一つとされています。PIFを促進することで、多様な価値観の理解や、主体的な学習、医療専門職として適応力が向上するなどの利点があります。しかし、このPIFの観点から授業や実習を設計された経験の無い方がほとんどだと思います。
そこで本ワークショップでは、ご自身が関わる授業や実習を、PIFの観点から振り返ります。PIFの概念や影響因子を学び、グループでの議論を通じてPIFを考慮したカリキュラム設計を検討し、最終的にはご自身の医療者教育者としてのPIFにもつなげていきましょう。
対象 医療者教育に興味がある人、医療者教育に携わるすべての方、PIFに興味を持たれた方
定員 30名
アソシエイトポイント：TL 0.25
WS-2（対面） 11月27日（木）13:00-16:00・11月28日（金）9:00-12:00
医療者教育に活かすAppreciative InquiryとOpen Space Technology
～主体性と対話で「あり方」を育む～
北原佑介（たのはたラボ）、照屋周造・尾原晴雄（沖縄県立中部病院）
態度・プロフェッショナリズム・リーダーシップなど、「あり方」の教育は、知識の伝達や指示的な指導では、なかなか本質的な変化を生みにくいテーマです。そこでは学習者自身の気づきや主体的な変化が必要とされます。このワークショップでは、強みや理想像を引き出すAppreciative Inquiryと、自分たちで問いを立てて探究するOpen Space Technologyという2つの課題解決手法を用いて、参加者のみなさん自身の教育課題や理想を題材に手法を体験していただきます。ご自身の現場でどう活かせるかを考えながら学び合える時間を目指します。日々教育に向き合うみなさんにとって、対話がどんな気づきや行動のきっかけをもたらすのか、その可能性にぜひ触れてみてください。
医師、看護師、保健師、助産師、理学療法士、作業療法士、薬剤師、臨床検査技師などの医療職のほか、大学や研修施設で教える立場にある方、教育を支援する立場の方も歓迎します。以下のような方に特におすすめです。「態度」「リーダーシップ」「あり方」といったテーマをどう教えるかに悩んでいる方、学習者の主体性を引き出す教育に関心がある方、対話的・探究的な学びの場づくりに興味がある方、Appreciative InquiryやOpen Space Technologyといった手法を、実践を通して学びたい方、自身の教育課題や理想を、他者と共に見つめ直し整理したいと感じている方。
対象 医療者教育や医療系学生の教育に携わっている方、またはこれから携わる予定のある方
定員 30名
アソシエイトポイント：ML 0.5
WS-3（対面） 11月28日（金）9:00-12:00
ユニットの会 ～地域連携と全国協働を考える集い（九州地区開催）
小松弘幸（宮崎大学）、西城卓也・宮地由佳（MEDC）
本ワークショップは、第57回日本医学教育学会大会in AKITA期間中に開催した「ユニットの会・ナイトセッション」で寄せられた「他大学ユニットとの協働・共創」への高い関心を受けて企画されました。九州地区を中心に、医学教育ネットワークの形成と実践的な連携の促進を目的とし、各大学の課題や教育実践のノウハウを共有します。共同研究、教材の共有、教員交流やFD合同開催など、具体的な協働の可能性を探ります。ラウンドテーブル形式での対話を通して、次年度以降の継続的な取り組みにつながる関係づくりを目指します。今回は九州発の新たな試みですが、全国の医学教育関係者の参加も大歓迎します。大学や地域を越えた「つながり」が、ユニット同士の互助的な関係構築の一歩となることを願っています。
対象 医学教育／医療者教育の専従部署で働くスタッフの方、近隣大学との連携に関心のある方
定員 30名
アソシエイトポイント：ML 0.25


WS-4（対面） 11月28日（金）9:00-12:00・13:00-16:00
映画と即興演劇で学ぶ医療者の行動科学：シネメデュケーション×インプロ（即興演劇）
古新 舜（北陸先端科学技術大学院大学）、師尾 愼、小島希美（シースリーフュージョン）
本ワークショップは、映画を用いたシネメデュケーション（医学映画教育）と、演劇人や教育専門家らが協働するインプロ（即興演劇）を組み合わせた学びの場です。午前中は映画を通じて患者の全人性や医療従事者のプロフェッショナリズムを深く考察し、午後はインプロを用いてコミュニケーション力や共感力を実践的に育みます。不確実な医療現場でも柔軟に対応できる省察力を高め、多職種連携教育や卒後研修への応用を視野に入れながら、より質の高い医療サービスの提供を目指します。
対象 医師、看護師、薬剤師、歯科医師、リハビリテーション専門職をはじめとする医療・福祉従事者、ならびに医学・看護学・薬学などの医療系学部生や教職員、さらに多職種連携教育に関心をもつ事務職員や研究者等
定員 30名
アソシエイトポイント：TL 0.5
WS-5（対面） 11月28日（金）13:00-16:00
ロールプレイで学ぶ医療者教育のためのコーチング
橋尾英孝・毛利翔悟（鹿児島大学）、吉澤悠喜（赤穂中央病院）、高橋美裕希（岐阜大学）、山口佳子（東京医科大学）、田原卓矢（昭和医科大学藤が丘病院）、利根川尚也（国立成育医療研究センター）
コーチングは学習者と教育者が目標を共有し、双方向の対話により学習者に新たな気付きや主体的な行動変容を促す対人支援技術です。学習者層の多様化が進む中、これからの高度で複雑な医療を担う優れた医療者を養成するための1つの方法としてコーチングが注目されています。本ワークショップはコーチングやその講習の経験が豊富な医療者教育のエキスパートによるファシリテートの下、参加者同士のロールプレイやディスカッションを通してコーチングを実践的なレベルまで修得することを目的としています。初学者の方のご参加も大歓迎です。
対象 医療者教育に興味のある教職員、医療専門職やそれを目指す学生
定員 30名
アソシエイトポイント：A 0.25
MEDTaaalk（オンライン） 11月27日（木）13:00-16:00・11月28日（金）9:00-12:00
MEDTaaalk 拡大版 11月27日（木）13:00-14:50
シン・医療者教育スターターキットで医療者教育の基本を学ぼう！
プレゼンター：西城卓也（MEDC） ナビゲーター：早川佳穂（MEDC）
MEDCが提供するeラーニングプログラム「シン・医療者教育スターターキット」の全12本の短時間動画（各5～6分、計約60～70分）を、オンライン企画でまとめて視聴し、参加者全員で学習します。普段は隙間時間に少しずつ視聴する教材を、一気に体験できる貴重な機会です。視聴後には質問タイムも設け、動画のテーマをもとに、教育実践に関する疑問やご不安に、その場で丁寧にお答えします。新任教職員はもちろん、中堅教員の方の学び直しにも最適。参加者には修了証も発行され、教育の基礎を効率よく習得できる企画です。ぜひご参加ください！
シン・医療者教育スターターキット https://www1.gifu-u.ac.jp/~medc/medicaleducation/starterkit.html
アソシエイトポイント：CD 0.125
MEDTaaalk1 11月27日（木）15:00-15:50
授業評価に対する医学生の認識と参加行動：文化的視点から
プレゼンター：鈴木沙季（日本大学） ナビゲーター：宮地由佳（MEDC）
近年、教育改善や質保証の観点から、学生による授業評価の重要性が高まっています。しかし、評価内容や回収率などの信頼性をいかに担保するかについては明確な方法がなく、実施の難しさが指摘されています。授業評価の内容や回答率への影響因子として、性別、実施する学年、実施媒体（紙・オンライン）、学生の文化的価値観などが知られています。今回のMedTaaalkでは、その中でも「文化的価値観」に焦点を当てます。日本人に特徴的とされる文化的価値観を紹介し、それが学習現場でどのように反映されるか、さらに授業評価に対する認識や参加行動にどのような影響を与えているかについて共有します。後半では、こうした文化的背景を踏まえて、授業評価をより効果的に実施するための工夫や改善策について、みなさんと一緒に考えたいと思います。
アソシエイトポイント：A 0.125


MEDTaaalk（オンライン） 11月27日（木）13:00-16:00・11月28日（金）9:00-12:00
MEDTaaalk2 11月28日（金）9:00-9:50
生成AIの教育への応用の実践例 ～臨床実習におけるAIメンターの開発～
プレゼンター：笠井 大・海老原識人（千葉大学） ナビゲーター：川上ちひろ（MEDC）
近年、生成AIの進化は目覚ましく、その活用は医療者教育の分野にも広がりつつある。本発表では、臨床実習中の医学生が遭遇する多様な課題（診療技術の習得、患者対応の不安、上級医との関係構築など）に対して、大規模言語モデルを活用したAI臨床実習メンター（AI-CCM）を開発・導入した教育実践を紹介する。AI-CCMは、医学教育モデル・コア・カリキュラムや自施設の臨床実習シラバスなどをもとに設計され、学生が安心して質問・相談できる対話型支援ツールとして構築された。実際に医学生が試用した結果、知識補完やコミュニケーション支援ツールとしての有用性が示され、教育的な適切性や安全性も評価された。本セッションでは、この取り組みの概要と成果を紹介し、生成AIが医療者教育にもたらす新たな価値と今後の可能性について総説的に解説する。
アソシエイトポイント：ML 0.125
MEDTaaalk3 11月28日（金）10:00-10:50
臨床実習 x インストラクショナルデザイン = 自己調節学習+その先へ
プレゼンター：濵田千枝美（産業医科大学） ナビゲーター：野村 理（MEDC）
現代の医療現場では、医師が生涯にわたり自律的かつ協働的に学び続ける能力を備えることが求められており、その基盤には自己調整学習（Self-Regulated Learning: SRL）と共調整学習（Co-Regulated Learning: CoRL）がある。なかでも臨床実習は、学習者がSRLを発揮し、他者と協働してCoRLを体験的に学ぶ好機であるが、これらを効果的に育成する教育的メカニズムは未解明であり、体系的に支援する教育設計は未だ確立されていない。そこでインストラクショナルデザインの手法を用いて、臨床実習を設計することで、医学生のSRLが促進され、どのようにCoRLに発展されうるのか、話者の教育実践と研究知見を基盤に議論したい。
アソシエイトポイント：CD 0.125
MEDTaaalk4 11月28日（金）11:00-11:50
医療者のアイデンティティ形成について考えてみよう
プレゼンター：長谷由紀子（広島大学） ナビゲーター：鈴木一吉（愛知学院大学）
医療者教育の目的は、職業的アイデンティティをもつ医療者を育てることです。アイデンティティ形成とは、医療者としての価値観や信念、行動を自分のものとして取り入れ、そのように感じ、考え、行動できるようになる継続的なプロセスです。
医療者教育に携わる皆さんは、特定の科目を担当していなくても、日常の指導や関わりの中で学習者に職業的アイデンティティに影響を与えているはずです。今回は企画者の専門である歯科衛生士の事例を交えながらアイデンティティ形成についてレクチャーを行い、その後に皆さんとディスカッションを行います。多職種で意見を交わすことで、共通点や各職種ならではの特徴が見えてくることを期待しています。歯科に限らず多様な医療職の皆さんのご参加をお待ちしています。
アソシエイトポイント：TL 0.125
参加登録方法
MEDCホームページよりお申込みください MEDC
参加登録期間 2025年10月1日（水）～19日（日）
参加を希望される方は、上記期間内に参加登録をお願いします。各企画には定員を設けています。申込順にて受付いたしますので、ご了承ください。なお、当日参加は受付いたしません。
参加費 5,000円（学部学生、東海国立大学機構 教職員・大学院生は無料）
開催地 鹿児島大学 桜ヶ丘キャンパス
（〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8丁目35番1号）

６．特筆すべき事項と改善例

６－１『第 92 回医学教育セミナーとワークショップin鹿児島大学』

令和 7 年度、岐阜大学医学教育開発研究センターとの共催で『第 92 回医学教育セミナーとワークショップin鹿児島大学』を開催した。遠方からの参加も多く、鹿児島大学を会場に医学教育に関わる先生方と意見交換をすることができた。

６－２『教員アンケート』

FD 活動の成果を確認するため、3 月に教員対象のアンケートを実施した。「最近の FD に参加して実際に教育活動の改善に至った事例」の項目では、以下のような改善点が上げられた。

〈改善に至った事例〉

・ハラスメント予防・対策の FD に参加後、実際に相談を受けた際に参考になった。
・令和 7 年度のハラスメント予防、学生精神的不調対策の FD に参加し、問題行動のあった学生の面談では指導の前に事情や理由をより丁寧にヒアリングするようにした。
・授業評価アンケートフィードバックを確認し、次年度の講義/実習の改善について検討し、講義スライドのブラッシュアップを行った。
・ベストティーチャー賞受賞講演会に参加後、講義の時間配分を見直した結果、導入に偏り後半が不十分である課題が明らかとなった。これを踏まえ、講義の流れの明確化と理解度向上ある構成改善に努める。
・第 1 回講演会に参加後、シラバスに学生評価法をより明確に示した。

また、「今後取り上げて欲しい FD のテーマ」には下記の回答があったため、令和 8 年度の活動計画へ反映していくものとする。

〈今後取り上げて欲しい FD のテーマ〉

・AI についての FD セミナー
・双方向授業の実践的な方法について
・臨床実習の効果的な指導法、形成的評価の方法
・学生の満足度を上げる１００人超の受講生のいる講義の方法
・効果的とされる、そして模倣が可能な（カリスマ性など不要な）模擬授業
・座学・講義主体の授業科目におけるアクティブラーニングの効果的な活用法

７．おわりに

令和７年度は前述の４つの活動計画に基づいて本学科の FD 活動を行ったが、最終的な基幹教員の参加率は 80.8%（医学科基幹教員 146 人中 118 人参加）であった。令和６年度は 75.4%であったため、比較すると 5.4%のプラスとなり、目標に定めていた「基幹教員のうち 75%以上の FD 活動参加」は達成された。

令和７年度は学内講師を多く依頼し、ご講演いただいた。学長補佐 学生生活ご担当の前田雅人先生、医学部長の大脇哲洋先生、医学部教務委員会医学科部会長の中村雅之先生、医歯学教育開発センターの横尾英孝先生、毛利翔悟先生にはお忙しい中ご講演いただき、FD 活動が活性化した。

以上、令和７年度医学部医学科 FD 活動報告を終了する。

医学部 保健学科・保健学研究科

2025(R7)年度　医学部保健学科・保健学研究科 FD 活動報告

医学部保健学科 FD 活動

はじめに

2025(R7)年度医学部FD委員会保健学科部会の活動として以下を報告する.

【報告内容】

1．学生による授業評価アンケートと学生アンケート結果に対する教員のフィードバックアンケート

２．ＦＤ講演会・研修会の実施

1）学外講師による保健学教育講演会（看護学専攻）

2）学外講師による保健学教育講演会（理学療法学専攻）

3）学外講師による保健学教育講演会（作業療法学専攻）

3. FD活動への教員参加状況

4. 教育の内部質保証に関する自己点検・評価(モニタリング)

1. 学生による授業評価アンケートと学生アンケート結果に対する教員のフィードバックアンケート

1)方法

全ての授業科目を対象に学生による授業評価を実施した. 学生による授業評価は各授業の最終講義後に学生に周知し, manaba で回答を得た. アンケート結果は, 学務課で取りまとめ, 回答学生が教員には特定されないことを十分に周知したうえで実施した. 授業評価のアンケート項目は以下の通りである(表 1).

2)授業評価アンケートの回収状況

＜令和6年度＞

・前期授業:授業評価アンケート回収率:51%(全科目平均)

・後期授業:授業評価アンケート回収率:48%(全科目平均)

・教員フィードバックアンケートの科目回収率:55%(前後期共通)

＜令和7年度＞

・前期授業:授業評価アンケート回収率:61%(全科目平均)

表 1. 令和７年度授業評価アンケート

質問内容	5	4	3	2	1
出席状況は良好だった.	とても そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
授業に意欲的に取り組む努力をした.	とても	やや	どちらとも	あまりそう	全くそう

	そう思う	そう思う	いえない	思わない	思わない
授業の予習あるいは復習をした.	とても そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
シラバスには必要な情報がわかりやすく明確に記載されていた.	とても そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
シラバスに沿ったふさわしい内容であった.	とても そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
講義または実習の内容はわかりやすく，よく理解できた.	とても そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
講義または実習の配布資料やスライドは見やすかった.	とても そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
講義または実習は一方的な知識の伝達だけでなく，双方向（アクティブ・ラーニングの導入など）に行われた.	とても そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
教員は質問を促し，積極的に質問等に応じてくれた.	とても そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
シラバスに記載されていた学習目標を達成できた.	とても そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない

3)学生による授業評価アンケートの結果

前期開講科目125科目からアンケートを回収し，アンケートの各質問項目について評価点(1～5)の平均値を求めた(表2)．なお，点数が高いほど評価が良いことを示す．

表 2. 令和7年度学生による授業評価の全科目の(平均点)

質　問　項　目	R6 前期 平均	R6 後期 平均	R7 前期 平均
出席状況は良好だった.	4.88	4.75	4.83
授業に意欲的に取り組む努力をした.	4.56	4.56	4.59
授業の予習あるいは復習をした.	4.08	4.08	4.07
シラバスには必要な情報がわかりやすく明確に記載されていた.	4.36	4.35	4.43
シラバスに沿ったふさわしい内容であった.	4.43	4.42	4.49
講義または実習の内容はわかりやすく，よく理解できた.	4.46	4.44	4.49
講義または実習の配布資料やスライドは見やすかった.	4.40	4.38	4.45
講義または実習は一方的な知識の伝達だけでなく，双方向（アクティブ・ラーニングの導入など）に行われた.	4.29	4.25	4.35
教員は質問を促し，積極的に質問等に応じてくれた.	4.32	4.25	4.39
シラバスに記載されていた学習目標を達成できた.	4.36	4.37	4.42

*各質問項目に対して1点～5点の5段階で評価

4)結果の解釈

①学生自身の自己評価とその解釈など

講義および実習を含む前期の開講科目においてアンケートを実施した. その結果, 昨年度に引き続き, すべての設問における平均点が「4」を上回っており, 保健学科における授業への学生の取り組みは概ね良好であり, 授業の質も十分に担保されていると評価できる.

また, 教育の質保証の観点から中期目標の一環としてカリキュラム・アセスメントも実施されており, この活動を通して, 各専攻ごとに学生の意見を反映した授業改善の取り組みが進められている点も特記すべき事項である.

2. FD 講演会・研修会の実施

1）看護学専攻学外講師による講演会

・演題：学習者の可能性があふれ出る今どきの教え方

・講師：愛媛大学医学部附属病院総合臨床研修センター
助教　　内藤　知佐子　先生

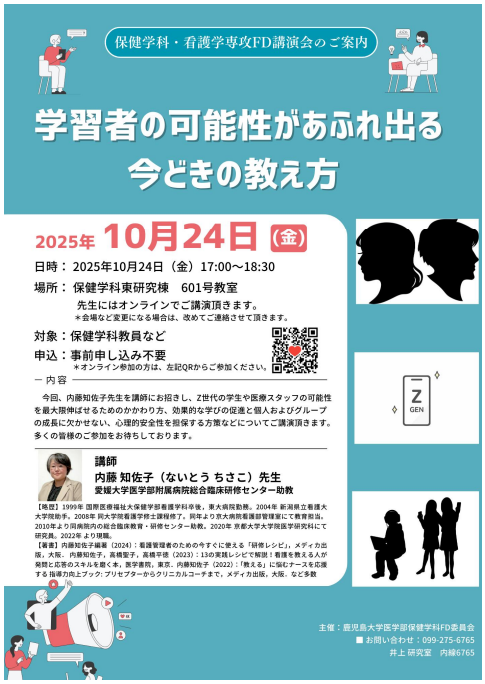
・日時：2025 年 10 月 24 日（金）　17：00～18:30

・会場：保健学科東研究棟 601 号教室（対面・オンライン実施）

・共催：鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻

・参加者：保健学科教員 25 名（対面 18 名，オンライン 7 名）
大学病院看護部　69 名（対面 28 名，オンライン 41 名）

看護学専攻では，臨地実習の多くを鹿児島大学病院で実施しており，卒業生の多くが同大学病院へ就職している．このような背景から，卒業後の継続的な人材育成を推進するためには，大学教員と大学病院のスタッフが，看護・医療の人材育成に関する共通の認識を持つことが重要である.



近年，幼少期から IT 技術の恩恵を受け，少子化社会の中で周囲からの承認を得ながら成長してきた世代は Z 世代と呼ばれており，現在の大学生や新人医療スタッフの多くがこれに該当する．この Z 世代への教授・指導においては，これまで培われてきた教育方法が必ずしも有効に機能せず，教育・指導の難しさを感じている現状がある．

そこで，Z 世代の学生および新人スタッフ医療スタッフの可能性を最大限に引き出すための効果的な学びの促進方法や，個人およびグループの成長に不可欠な心理的安全性を担保する方策について学ぶことを目的に，人材育成およびキャリア教育を専門とする愛媛大学医学部附属病院総合臨床研修センター助教の内藤千知佐子先生を招聘し，対面とオンラインを併用したハイブリット形式で研修会を開催した．

講演では，「教える」ことを始める前提として，指導者の役割や人材育成の基本的な考え方について説明がなされたのち，4 つの世代それぞれの特徴，Z 世代の強みの伸ばし方，心理的安全性の重要性，そして現代に求められる指導方法「今どきの教え方」について講話が行われた．講演中には，講師と会場との双方向的なやり取りがタイムリーにできるツールが使われ，Z 世代への教授・指導方法を実際に体験する機会も設けられており，非常に有意義な時間となった．

研修会実施後のアンケートでは，学生や医療スタッフの可能性を伸ばす関りにおいて「困ったことがある」と答えた回答者は 100%であった．研修テーマである「学生や医療スタッフの可能性を伸ばす関り」について，講演前に「よく理解している」と回答した者は 7.1%にとどまっていたが，講演後には「非常に理解することができた」と回答した者が 76.2%となり，「ある程度理解できた」を含めると理解度は 100%に達した．自由記述では，「世代別の特徴を捉えて接していくことの大切さを改めて感じた」「温かくも厳しさの 2 軸が大切で，タイムリーな応答，心理的安全性を担保することが大事」などの意見が寄せられ，本研修会は教育及び人材育成について多くの示唆を得る機会となった．

2）学外講師による保健学教育講演会または研修会 （理学療法学専攻）

- **演題名：ICT を活用した効果的な学習のあり方～デジタル教材を使用した臨床教育の実践～**
- **講師：杏林大学保健学部リハビリテーション学科**
  講師　　門馬　博　先生
- **日時：2025 年 11月 21 日（金）17:00～18:30**
- **開催形式・場所：桜ヶ丘共通教育棟 4 階 402 講義室および Web 形式（Zoom）のハイブリッド開催**
- **共催：鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻**
- **参加者：保健学科教員　13 名**

医療や教育分野における生成 AI を含む ICT の利用が拡大しつつある。理学療法学専攻では杏

林大学の門馬博先生を講師にお招きし，理学療法教育におけるICTの活用とリスクに関する講演会を開催した。

本講演では，現代の教育の動向ならびに，ICT を活用した理学療法教育の可能性や課題について説明いただいた。ICT 活用の具体例としては，e ラーニング，動作分析ソフトウェアを用いた学習，バーチャルシミュレーションツールを用いた患者対応や治療計画立案のトレーニングなどが紹介された。ICT の導入は，学生個人に最適な学習を支援するだけではなく，共同学習を促す点でも有効であることが示された。

また，効果的に ICT を教育に活用するためには，教育目標との整合性を十分に検討すること，学生の主体性を促せるような教育設計，教員のサポート体制の整備が重要であると強調された。

一方で，ICT はあくまで学びのツールの一つであり，アナログなコミュニケーションや実体験の重要性も指摘された。加えて，プライバシー保護，教員育成が課題として挙げられた。ICT を効果的に教育に取り入れるために検討すべき点が整理され，有意義な講演会となった。



3）学外講師による保健学教育講演会または研修会　（作業療法学専攻）

・演題名：多領域の経験が活きる作業療法 –県立病院での実践をとおして–

・講　師：鹿児島県立姶良病院 リハビリテーション部
作業療法士　　橘薗　佑真　先生

・日時：2026 年 2 月 12 日（木）13：30～15：00

・場所：インテリジェント講義室（対面実施）

・参加者：保健学科教員 6 名，学生 56 名

作業療法学専攻では，例年「作業療法の魅力を伝える講演会」として本専攻，あるいは保健学科の前身である医療技術短期大学部を卒業し，地域で活躍している作業療法士による作業療法の魅力を伝える講演会を実施している．

現在，作業療法士は医療，福祉，行政，教育，研究など様々な領域で幅広く活躍している．今回，医療観察病棟を含む精神障害分野の医療現場で働き，研究活動にも熱心に取り組んでいる講師に臨床場面での作業療法士のあり方や研究の視点，作業療法士としての 5 年後・10 年後・20 年後の知識・技術の習得について具体的に講演していただいた．学生にとって臨床実習など近々の目標だけでなく，将来作業療法士として働くイメージができたのではないかと考える．また，教員にとっても作業療法士として働くキャリア形成も念頭に入れた学内教育や臨床実習教育に際してもとても有意義な講演会であった．

講演終了後には，学生や教員から多くの質問が出され，講師より丁寧な説明が行われ，学生，教員双方ともに有意義な研修会となった．



3. FD 活動への教員参加状況

今年度の FD 講演会・研修会の参加状況を表に示した.

合計参加率		100.0 % (基幹教員等	43 名中	43 名 参加)
企画別参加率	10/24 講演会:学習者の可能性があふれ出る今どきの教え方(看護)	58.1 % (基幹教員等	43 名中	25 名 参加)
	11/21 講演会:現代の理学療法教育におけるICTの活用とリスク (理学)	39.5 % (基幹教員等	43 名中	17 名 参加)
	2/12 講演会:多領域の経験が活きる作業療法ー県立病院での実践をとおしてー(作業)	14.0 % (基幹教員等	43 名中	6 名 参加)

2025(R7)年度の医学部保健学科・保健学研究科における FD 活動への参加率は4年連続 100%となり, FD 講演会・研修会関心度の高さは特筆すべき点となっている.

終わりに

2025 (R7) 年度は, 教育に関しては, 前期・後期の授業をすべて対面で実施し, 医学教育の質の担保に努めた. また, 学内演習および学外 (臨地・臨床) 実習も感染対策に十分留意しながら実施した. その結果, 保健学科における学生の授業への取り組みは概ね良好であり, 授業の質も十分に担保されていると評価できる.

ＦＤ講演会については, 年間で 3 回実施した. 教員の参加率は昨年度に引き続き 100%であり, 教員の関心の高さと企画内容がニーズに即していたことがうかがえる.

次年度のＦＤ活動については, 本年度に実施できなかった企画内容を計画している. 今後も引き続きＦＤ活動を通じて, 学生教育の充実および教員の教育・研究能力の向上に努めていく所存である.

保健学研究科 FD 活動

はじめに

2025(R7)年度 FD 委員会保健学研究科部会の活動として修了学生における修学達成度などに関するアンケートを実施した.

1. 修了学生における修学達成度などに関するアンケート

＜令和7年度　保健学研究科　博士前期課程修了者へのアンケートの要領＞

対象:保健学研究科博士前期課程に在籍しており, 令和 7 年度3月に修了した者24名

実施期間:令和 8 年4月20日(月)～4月27日(月)

アンケート内容

●満足度を 5 点が最も満足度が高いとして, 1～5 点で評定してください.

① 大学院での講義内容や講義方法について
② 研究指導について
③ 事務手続きや書類に関して
＊①～③のそれぞれについて，選択理由や意見をご記入ください．

●達成度を 5 点が最も達成度が高いとして，1～5 点で評定してください．
④ 自身の達成度について
⑤ 努力度を 5 点が最も努力度が高いとして，1～5 点で評定してください．
⑥ 在学中に最も学びになったことについて，教えてください（自由記載）．
●博士前期課程を修了するにあたり，以下についての自己評価をお教えください．
⑦ 研究倫理を理解し、地域社会の特徴ならびに各専門分野の知識を説明できる．
⑧ 高度専門職業人としての役割を果たせるよう多職種と協働ができる．
⑨ 実践的課題を解決する研究を指導のもとで実施できる．
＊⑦～⑨について，「不可」もしくは「無」の場合，その理由をお教えください．

●博士前期課程を卒業（修了）するにあたり，カリキュラムに対しての評価をお教えください．
⑩ 豊かな人間性と広い視野を獲得できるように博士前期課程共通科目によって専門領域以外の様々な人々と共に学べるように編成されていた．
⑪ 専門領域における基礎的能力を補強し，専門的学習を促進するために領域共通科目が配置されていた．
⑫ 高度専門職業人としての優れた知識・技術を修得し，様々な地域における保健医療に関する課題を解決するための研究力，教育力を獲得できるように専門科目（特論・特別演習・特別研究）が配置されていた．
⑬ 他専門領域を理解し，協働できるようになるために，他領域の専門科目を修得できるように編成されていた．
＊⑩～⑬について，「編成（配置）されていたが活用できなかった」もしくは「編成（配置）されておらず活用できなかった」と回答の場合，その理由をお教えください．

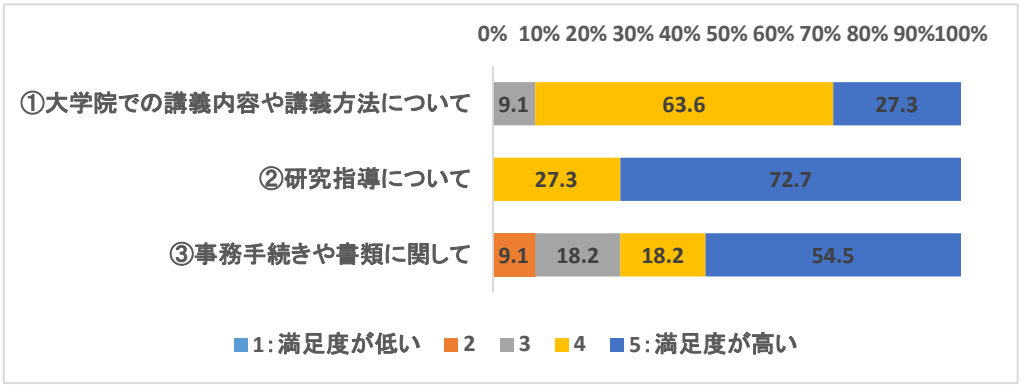
●本学の大学院への進学について
⑭ 本学の大学院への進学を周りの人に勧めたいと思いますか
⑮ 調査結果を報告することに同意していただけますか．

＜アンケート結果＞
回答数：修了者 24名のうち 11 名（45.8%）から回答を得た．
回答の内訳は以下のとおりであった．

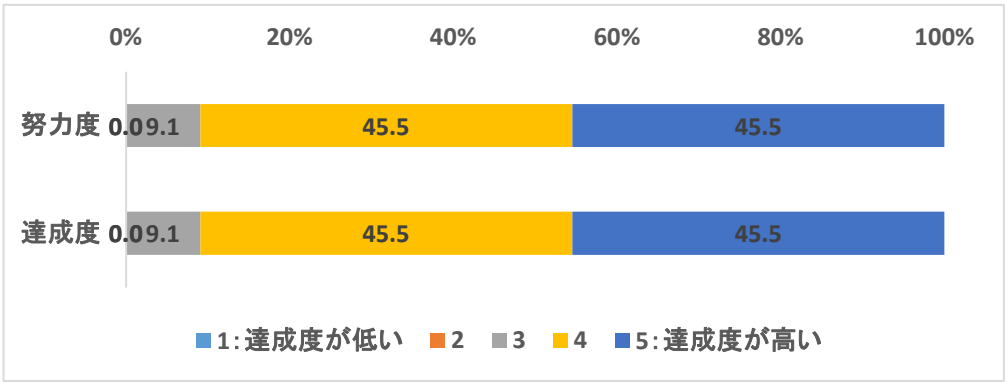
● 回答者内訳

領域	人数(名)
看護学	5
保健学	6

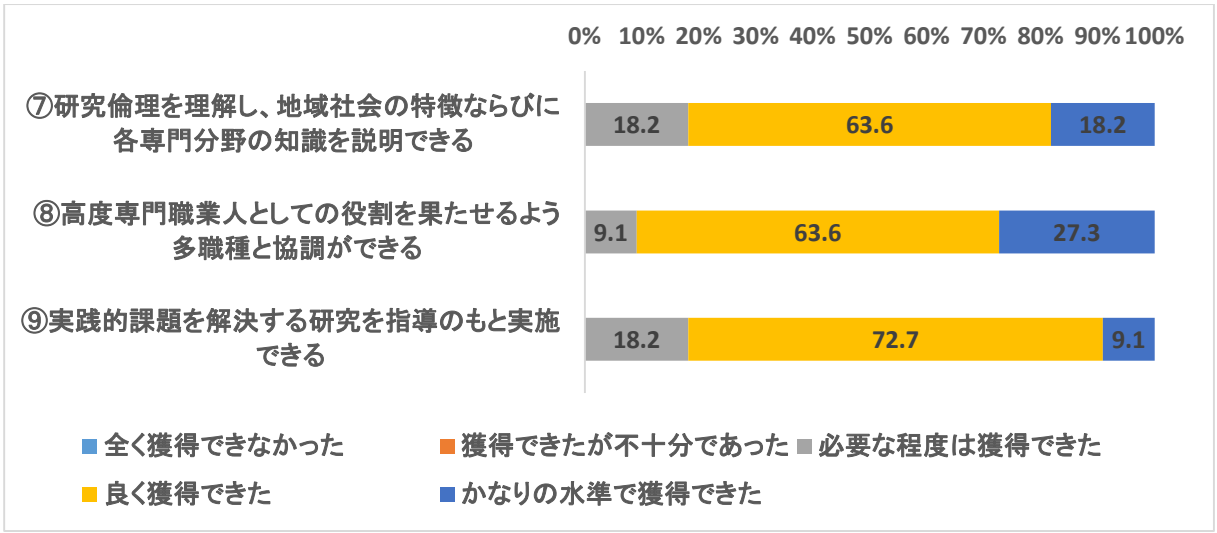
● 満足度を 5 点が最も満足度が高いとして，1～5 点で評定してください．



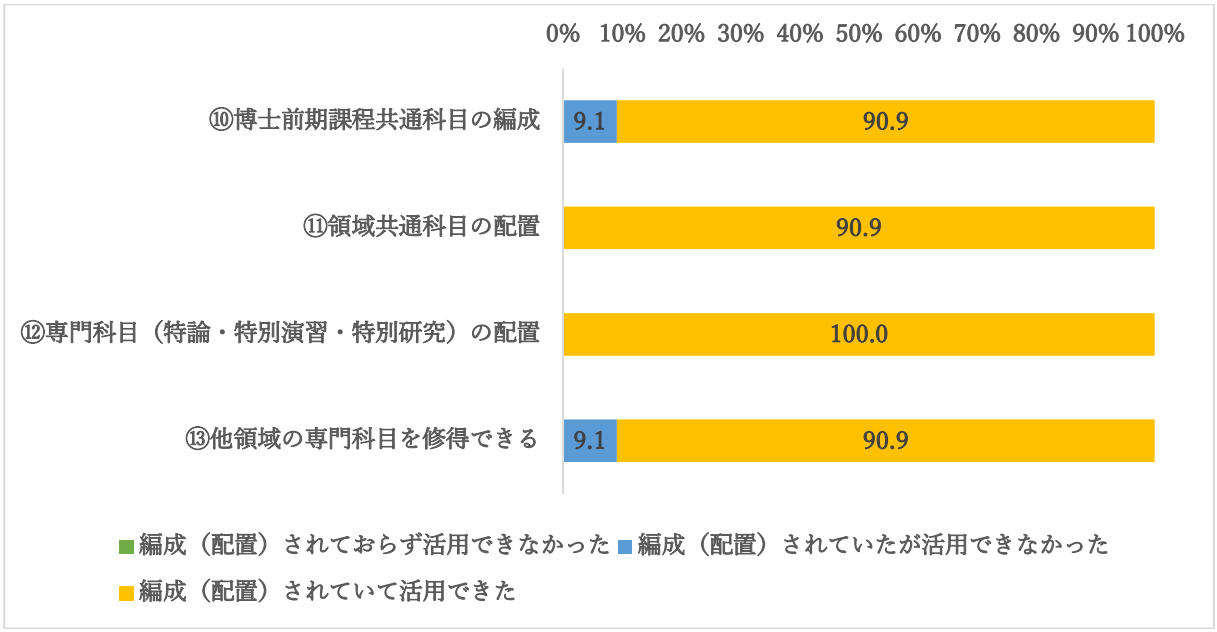
●達成度を 5 点が最も達成度が高いとして，1～5 点で評定してください．



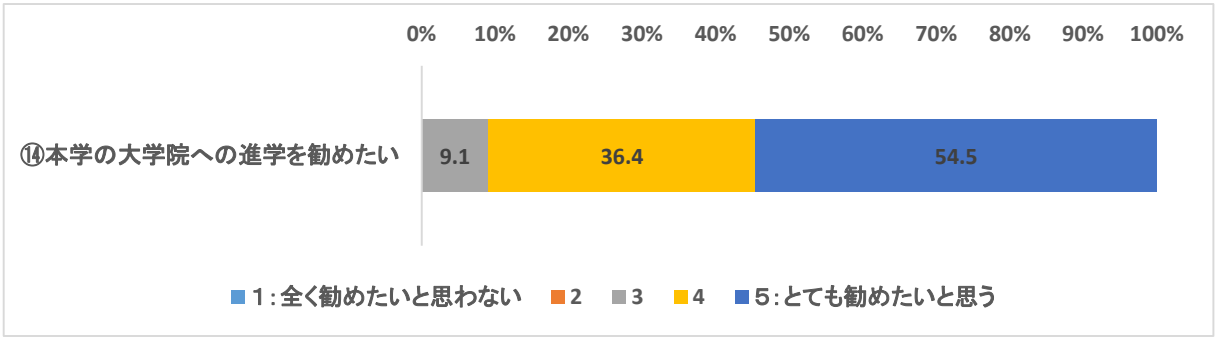
●博士前期課程を卒業(修了)するにあたり，以下についての自己評価をお教えください．



●博士前期課程を卒業（修了）するにあたり，カリキュラムに対しての評価をお教えください.



●本学の大学院への進学について



終わりに

上記の学生アンケート結果を踏まえ，特筆すべき点を以下に示す.

講義内容については 90.9%，研究指導については 100%の院生が「4」または「5」と回答しており，講義および研究指導の質に対する院生の満足度は極めて高い水準にあることが確認された. また、カリキュラム編成・配置に関する各項目においても「適切に編成・配置されている」との回答がいずれも90%以上を占めており、本研究化の教育課程全体に対する評価が高いことが示された。自由記述欄においては「研究実践に即した内容が多く、修論作成や職場での研究継続に役立った」「ゼミや調査帯同などを通じて、一部の研究マネジメントも含めた実践的な経験を積むことができた」など、教育内容の実践性および専門性の高さを評価する意見が複数寄せられており、量的評価結果を質的にも裏付ける内容となっている。.

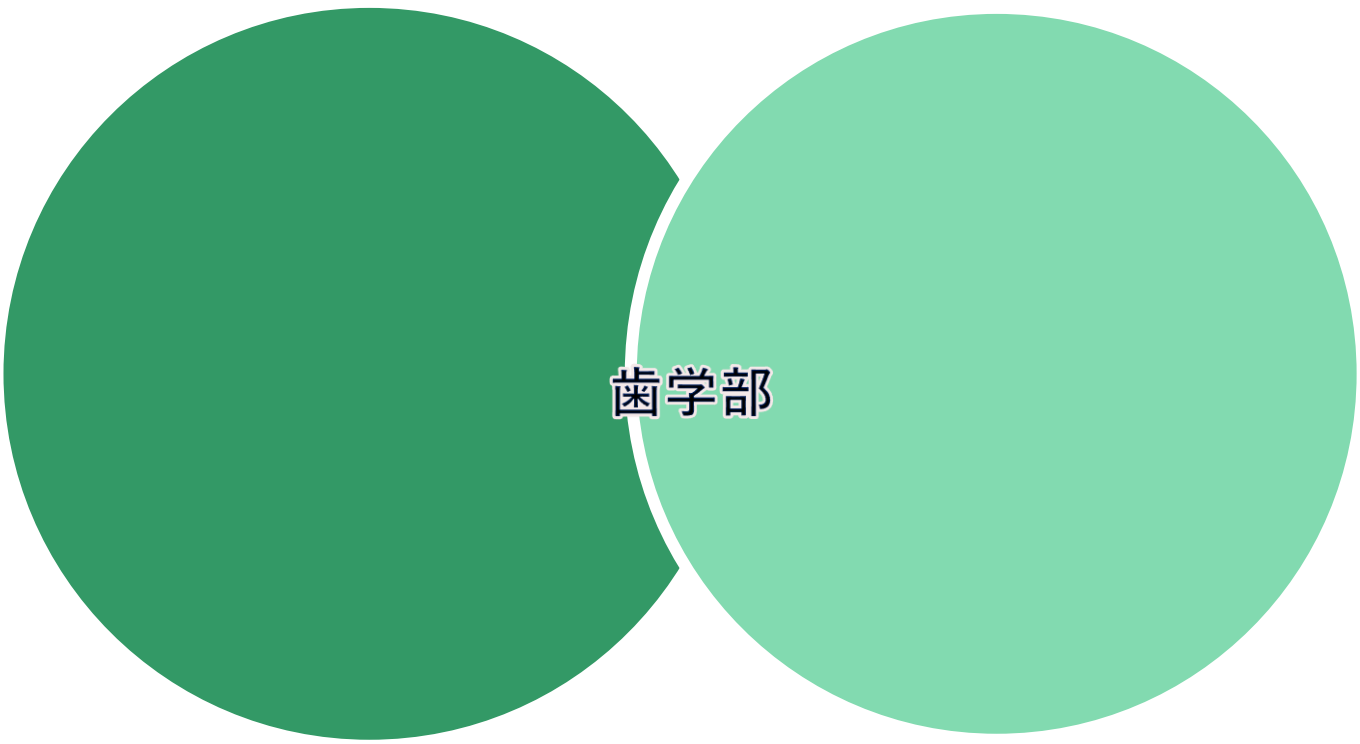
ディプロマポリシーの3項目、「保健学に関する優れた専門的知識と技術を獲得できた」「地域の保健・医療において，高度専門職業人として果たすべき役割を実践する能力を獲得できた」「研究を行うための基礎的な能力を獲得できた」については，対象者全員（11名）が「修士として必要なレベ

ルを獲得できた」「よく獲得できた」と自己評価しており，学修成果は適切に達成されていると判断できる.

さらに、「本学の大学院への進学を周囲の人に勧めたいと思うか」という設問に対しては、「4」が36.4%，「5(とても勧めたい)」が 54.5%を占めており、本研究科の教育の質が社会的信頼の獲得に寄与していることを示唆する結果である.

2026(令和8)年度からは、保健師課程の大学院化および保健学研究科横断プログラムが開始される。今後も学生の達成度向上を目指した教育体制の継続的な充実を図るとともに，ディプロマポリシーに基づく学修成果のアセスメントを体系的に実施し，改善が必要と認められた事項については、FD 活動を通じて迅速かつ適切に対応することで、内部質保証の一層の強化を図っていく.

(文責 2025(R7)年度 FD 委員会 保健学科・保健学研究科部会)


歯学部

歯学部 FD 活動報告

１．はじめに

本学のファカルティ・ディベロップメントに関する指針において、「FD とは、大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上を図るとともに、学生支援を行う自発的な取組を指す」と定義されている。これまで、歯学部ファカルティ・ディベロップメント委員会では、教育改善に直結する事項に加え、共用試験歯学系 CBT 作問、デジタル歯科・AI などの教育関連事項について、他の委員会等と連携協力しながら講演会等を企画・実施し、「教員の資質の向上、その他教育改善」を目指してきた。

令和 7 年度では、これまでの FD 活動を踏まえ、4 回の FD 講演会などを企画・実施した。本学では、年間の合計参加率（FD 活動に少なくとも一度は参加した専任教員数の割合）が 75%以上となるよう各部局に求めているが、歯学部の令和 7 年度の参加率は 96%（全教員 121 名中 116 名参加）であり、目標値を大きく上回った。FD 活動の効果を参加率のみでは評価できないが、本学の教育理念を実現するために、今後も有効かつ企画・実現可能な FD 活動の実施と教員の参加率の向上が重要であると考えられる。

令和 7 年度の主な歯学部 FD 活動は、次のとおりである。

(1) 第 1 回 FD 講演会：教育と研究の一体化を目指す FD 研修会の開催
(2) 第 2 回 FD 講演会：歯科医師国家試験の合格率を維持させるための FD 研修会の開催
(3) 第 3 回 FD 講演会 : ベストライター賞受賞者による学部学生の臨床実習指導に関する FD 講演会の開催
(4) 第 4 回：デジタル歯科・AI に関する FD 講演会の開催
(5) 学生による授業評価の実施
(6) 教員相互による授業参観・授業評価の実施
(7) 歯学部ベストティーチャー賞の選考

２．令和 7 年度歯学部「ファカルティ・ディベロップメント委員会」（以下、歯学部 FD 委員会）委員

委員長：玉木直文（予防歯科学分野　教授）
委　員：西谷佳浩（歯科保存学分野　教授）
　　中田匡宣（口腔微生物学分野　教授）
　　笹平智則（分子口腔病理学分野　教授）
　　田中達朗（顎顔面放射線学分野　教授）
　　山下薫　（歯科麻酔全身管理学分野　講師）
所掌事務：学務課歯学教務係

３．令和 7 年度歯学部 FD 委員会開催状況

（1）第 1 回歯学部 FD 委員会（令和 7 年 5 月 14 日（水）Web 開催）

議題：

1. 令和 7 年度授業評価アンケート内容について

2．授業参観の実施について

報告事項：

1．ＦＤ講演会の実施について

2．令和６年度学生授業評価アンケート結果報告

3．令和６年度授業参観アンケート結果報告

4．令和７年度 FD 活動計画・経費要求書について

5．ベストティーチャー賞（カテゴリー７）推薦結果報告

(2) 第 2 回歯学部 FD 委員会（令和 7 年 9 月 2 日（火）～8 日（月） メール会議）

議題：

1．FD 講演会の実施について

報告事項：

1．FD 講演会の実施について

2．令和６年度鹿児島大学ベストティーチャー賞の選考結果について

3．令和７年度第１～４回ファカルティ・ディベロップメント委員会について

(3) 第 3 回歯学部 FD 委員会（令和 7 年 11 月 9 日（水）Web 開催）

議題：

１．歯学部ベストティーチャー賞について

報告事項：

1．令和７年度ＦＤ講演会の参加状況と今後の開催予定について

2．令和７年度前期科目授業評価アンケートの結果について

3．令和７年度第５回ファカルティ・ディベロップメント委員会について

(4) 第 4 回歯学部 FD 委員会（令和 8 年 2 月 9 日（月）Web 開催）

議題：

1．歯学部ベストティーチャー賞の選定と鹿児島大学ベストティーチャー賞候補者の推薦について

2．歯学教育等に関する理解度調査について

報告事項：

1．令和７年度FD 活動計画について

2．FD 経費執行状況

3．令和７年度第６回ファカルティ・ディベロップメント委員会について

(6) 第 5 回歯学部 FD 委員会（令和 8 年 3 月 30 日（月）Web 開催）

議題：

1．令和７年度 FD 経費予算執行状況について

2. 令和７年度活動報告書について
3. 令和８年度活動計画書について

報告事項：

1. 和７年度 FD 講演会アンケート結果について
2. 令和７年度第８回ファカルティ・ディベロップメント委員会（2/26）について

４．令和 7 年度歯学部 FD 活動の概要

（1）第 1 回歯学部 FD 講演会

講　師：歯学部長 後藤哲哉 教授
演　題：教育と研究の一体化を目指す FD 研修会
日　時：令和 7年 5月 8日（木）16:30～17:30
場　所：第4講義室及び収録動画のオンデマンド配信
対象者：歯学部教員
参加者：93名（うち、オンデマンド配信視聴による参加者41名）
概　要：歯学部での教育と研究に関する問題点と改善すべき点についてご講演いただいた。後日、欠席者と希望者を対象として、収録動画のオンデマンド配信を実施した。また、参加者に対し、事後アンケートを実施した。
成　果：短期的な成果検証は困難である。今後の学生による授業評価等や研究業績の推移を基に検証する予定である。

(2) 第 2 回歯学部 FD 講演会

講　師：歯学部教務委員会　菊地聖史 教授、学修支援部会　田中達朗 教授
　　歯学部入試諮問委員会 副委員長　齋藤充 教授
演　題：歯科医師国家試験の合格率を維持させるための FD 研修会
日　時：令和 7年 6月 6日（金）16:30～17:30
場　所：第4講義室及び収録動画のオンデマンド配信
対象者：歯学部教員
参加者：79名（うち、オンデマンド配信視聴による参加者31名）
概　要：歯科医師国家試験の弱点領域を分析するとともに、令和5年版歯科医師国家試験出題基準等を確認し、改善策や対応策の検討内容についてご講演いただいた。後日、欠席者と希望者を対象として、収録動画のオンデマンド配信を実施した。また、参加者に対し、事後アンケートを実施した。
成　果：第119回歯科医師国家試験（令和 8年 1月実施）の鹿児島大学歯学部における合格率（新卒）は全国29校中6位（国公立大学12校中2位）であった。新卒の合格率は90.2%であり，良好な合格率は維持されているといえる。合格率は様々な要因に影響されるため、維持できた要因を特定できないが、本講演会が多少なりとも貢献した可能性はある。

(3) 第 3 回歯学部 FD 講演会

講　師：令和 5～6 年度ベストライター受賞者
　歯科矯正学分野　　前田　綾　講師
　咬合機能補綴学分野　村原貞昭　講師
　顎顔面放射線科　　川畑義裕　助教
演　題：ベストライター賞受賞者による学部学生の臨床実習指導に関する FD 講演会
日　時：令和 7年 11月 6日（木）16:30～17:30
場　所：第4講義室及び収録動画のオンデマンド配信
対象者：歯学部教員
参加者：76名（うち、オンデマンド配信視聴による参加者36名）
概　要：臨床実習終了直後の学生によるアンケートで選出された3名のベストライターにご講演いただき、指導のノウハウの共有を図った。後日、欠席者及び希望者を対象として、収録動画のオンデマンド配信を実施した。また、参加者に対し、事後アンケートを実施した。
成　果：成果の検証は難しいが、次年度以降も学生による授業評価や教員相互による授業参観・授業評価等により、PDCAサイクルを継続する予定である。

(4) 第 4 回歯学部 FD 講演会
講　師：窪木拓男 教授 （岡山大学）
演　題：デジタル歯科・AIに関するFD研修会
日　時：令和 7年 11月 28日（金）16:30～17:30
場　所：Web（Zoom）及び収録動画のオンデマンド配信
対象者：歯学部教員
参加者：61名（うち、オンデマンド配信視聴による参加者23名）
概　要：前年度のFD実施後のアンケートにおいて、デジタル歯科やAIに関する希望が多く認められた。これらについて教員が学ぶことで、今後の教育活動のみならず、研究活動に関する意識の向上と活性化を図るために岡山大学の窪木拓男教授にご講演いただいた。
成　果：短期的な成果検証は困難であるが、今後の学生による授業評価等や教員の研究業績の推移を基に検証する予定である。

(5) 学生による授業評価

歯学部 FD 委員会から各分野の教員に対して「学生による授業評価」の実施を依頼し，科目毎の授業評価アンケートを授業最終回に manaba を利用して実施した。評価項目（アンケートの質問事項）は全 23 項目である。授業担当者には、アンケートを実施した翌年度に当該科目及びすべての科目の評価項目別平均や自由記述欄のコメントが匿名化されて伝えられる。評価を受けた授業担当者は、「授業改善シート」の項目毎にアンケート結果に対する感想と今後の改善点を記入し、歯学部教育委員会へ提出することが求められている。令和 7 年度では、同年度に開講された授業についてアンケートを実施するとともに、令和 7 年度に実施したアンケートの結果に対して担当教員に授業改善シートの提出を依頼した。なお、アンケート結果（自由記述欄を除く）は学内専用ウェブサイトに掲載されている。

授業評価アンケート結果に基づく授業改善シートの作成は、各教員が自分の授業を振り返り、授業改善の PDCA サイクルにつなげる良い機会である。歯学部教育委員会は、シラバス作成依頼時に科目内容の積極的な改善を呼びかけている。また、PDCA サイクルを充実させるため、平成 31 年度からシラバスに変更履歴を記載する欄を設け、改善点の記載を促している。

集積された授業評価結果・授業改善シートの活用や組織的な PDCA サイクルの構築については、学生による授業評価の限界や各科目の特性を踏まえた上での継続的な検討が必要である。

(7) 教員相互による授業参観・授業評価の実施

各歯系分野から推薦された 1 名の参観教員に、歯学部で開講されている授業の中から希望する授業（自身が所属する分野以外）の参観と manaba のアンケート機能を利用する参観レポートの提出を求めた。授業担当教員に同レポートを配付するとともに、授業改善シートの歯学部教育委員会への提出を依頼する予定である。学生とは異なる視点での評価が得られ、その評価を基にする授業改善が期待される。集積された授業評価結果・授業改善シートの活用や組織的な PDCA サイクルの構築については、学生の授業評価の場合と同様に継続的な検討が必要である。

(8) 歯学部ベストティーチャー賞の選考

平成 30 年度に「鹿児島大学ベストティーチャー賞」表彰制度が制定され、歯学部で「歯学部ベストティーチャー賞」の選考が行われるようになった。同賞の選考は、「ベストティーチャー賞選定のための教員授業評価実施要綱」に基づき実施される。具体的には、2 年次生から 4 年次生の学生に対してアンケートを実施し、アンケート結果を基に選考している。選考基準は「授業方法や学びへの工夫がなされているか（技法）」、「教育に対する姿勢や取り組みが優れているか（熱意）」、「授業を受けることによってその科目に対する関心が深まったか（理解）」の 3 項目である。各学生が教員 1 名を選び、各学年で得票率の最も高い教員に「歯学部ベストティーチャー賞」を授与している。さらに、「歯学部ベストティーチャー賞」受賞者の中から最も得票率の高い者 1 名を「鹿児島大学ベストティーチャー賞」の候補者として歯学部から推薦している。また、令和 2 年度から、選考カテゴリーが大学院 [医歯学総合研究科（歯学系）]と同一になり、歯学部 FD 委員会と研究科 FD 委員会（歯系）で協議の上、推薦する 1 名を決定している。令和 7 年度でも同様に歯学部ベストティーチャー賞と鹿児島大学ベストティーチャー賞の受賞者を決定した。

5．特筆すべき事項と改善例

FD 活動の重要性と歯学部教員の煩忙を考慮して、今年度の FD 講演会等の開催回数を 4 回に留め、開催時間を柔軟に変更した。FD 講演会当日に参加できなかった教員に対して、後日のオンデマンド視聴で対応した。学生のアンケート回答率や教員による授業参観・評価の実施率が低いため、更に積極的な催促が必要であると考えられる。

工学部

令和７年度 鹿児島大学工学部FD委員会活動報告書

はじめに

工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会（以下，FD 委員会）は，各教員の教育改善の取組を支援するとともに，各学科（プログラム）および学部教育全体の教育の質向上を目的として活動を展開している．

工学部に設置された全７プログラムのうちの５プログラムは日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定を受けており，残る２プログラムにおいても JABEE 基準に準拠した教育が行われている．これまで継続して実施してきた授業アンケートに基づく改善などの FD 活動は，JABEE の求める教育改善のための PDCA サイクルに則って実施されている．

本報告書は令和７年度の工学部 FD 委員会の活動状況を取りまとめたものである．作成にあたっては各プログラムの FD 委員および学生係職員が連携し，評価アンケートのデータ処理等については事務支援室職員の協力を得た．ここに，関係各位のご尽力に深く感謝の意を表する．あわせて，本報告書をご高覧のうえ，FD 委員会自体のさらなる改善に向けて忌憚のない意見を賜れば幸いである．

令和７年度鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長　橋本　雅仁

令和７年度 鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長 橋本 雅仁　（工学部副学部長，第１号委員）
委 員　定松 直　　（機械工学プログラム，第２号委員）
委 員　野見山 輝明（電気電子工学プログラム，第２号委員）
委 員　鷹野 敦　　（建築学プログラム，第２号委員）
委 員　二井 晋　　（化学工学プログラム，第２号委員）
委 員　安達 貴浩　（海洋土木工学プログラム，第２号委員）
委 員　加藤 龍蔵　（情報・生体工学プログラム，第２号委員）
委 員　高梨 啓和　（化学生命工学プログラム，第２号委員）
委 員　野間 尚宣　（理工学域事務部長，第４号委員）

事　務　薬丸 洋史　（理工学域事務部・工学系学務課学生係長）
事　務　門田 郁美　（理工学域事務部・工学系学務課学生係）

第１章　令和７年度の鹿児島大学工学部の FD 活動

工学部 FD 委員会の任務は，(a)本学部で実施する FD に関すること，(b)本学部で実施する教育課程および教育活動に関する自己点検・評価に関すること，(c)それに基づく教育の改善および質的向上に関すること，(d)本学 FD 委員会から付託された事項に関することなどを審議し，実施することである．この任務に基づき，令和７年度の工学部の FD 活動は，本 FD 委員会が主体となって，(1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成，(2) 授業公開と授業参観の実施，(3) FD 講演会の実施，(4) 学外 FD 研修会への学部教員の派遣，(5) 授業評価アンケートの分析，(6) 報告書の作成の６つの活動を行った．また，本 FD 委員会では，本学における教育の内部質保証に関する推進要項に基づき，以下の２点のモニタリング項目について自己点検・評価を行うとともに，さらなる改善のための方策等についても議論した．

・卒業時学生からの意見聴取の結果による学生の学習成果に対する認識の把握
・授業の内容および方法の改善を図るための FD の組織的な実施とその成果の把握

第２章　工学部 FD 講演会および鹿児島大学 FD ワークショップ

２．１　工学部 FD 講演会（理工学研究科・理学部との合同）

令和 7 年度の工学部 FD 講演会は，理工学研究科・理学部・共通教育センターとの合同により，令和 7 年 10 月 15 日（水）13 時から開催された．講師は九州大学システム情報科学研究院情報知能工学部門教授の島田敬士氏で，演題は「生成 AI は大学教育と業務をどう変えるか―実践事例と展望―」であった．

本講演は，ChatGPT をはじめとする生成 AI が大学における教育・研究・業務の現場に急速に浸透しつつある中で，導入の端緒や実際の効果に関する戸惑いや疑問に応えることを目的として企画された．

講演ではまず，授業設計への活用として，シラバス作成支援 AI やスライド・講義骨子の自動生成といった設計・準備段階での利用に加え，スライドからの自動ナレーション付き講義動画生成による授業の高度化，RAG 型チャットボットによる質問応答，難易度別の作問やレポート提出前の自動チェックなど，作問・評価に関する活用例が紹介された．続いて，シラバス AI による科目推薦や類似科目の検出など，カリキュラム分析および学生支援への応用についても有用な事例が示された．さらに，導入・運用上のポイントとして，大学としての API 契約による効率的な導入や，Q&A ボットを活用した窓口業務の効率化が挙げられた．一方で，情報漏洩リスクへの対応として，学内ネットワーク内で完結するモデルの必要性など，セキュリティ上の課題についても指摘があった．

本講演は，無理のない範囲で試行し，構築・公開可能な具体例が示されており，生成 AI を即座に活用する上で実用的な内容であった．ご講演いただいた島田氏に深く感謝する．

２．２　学外 FD 研修

会議名：　大学教育学会 2025 年度課題研究集会
開催日：　2025 年 11 月 15 日～16 日
開催地：　東京大学　本郷キャンパス　工学部２号館
主催：　一般社団法人 大学教育学会
共催：　東京大学

参加シンポジウム：
課題シンポジウムⅡ　「AI の有機的活用を目指す大学ライティング教育と支援体制に関する基礎的研究」
セッション開催日時：　2025 年 11 月 16 日(日)　9:30～12:00
セッション開催場所：　213 号講義室
内容：
１．生成 AI 時代の「自律した書き手」の育成を再考する―趣旨説明―　尹 智鉉（中央大学）
２．生成 AI 時代における大学のライティング教育と評価―第二言語としての英語ライティング研究を手がかりに―　石井 雄隆（千葉大学・理化学研究所）
３．大学でのライティング科目における生成 AI 活用の試み　福山 佑樹（関西学院大学）
４．考えることを手放させないためのライティング教育―学生の生成 AI 利用の分析から―
木原 宏子・鈴木 道代・北林 茉莉代・黒須 万貴子・高橋 薫（創価大学）

報告：　本シンポジウムは，今後の教育に欠かせない生成 AI について，特にライティング教育での生成 AI の利用についての講演であった．

まず導入として，ライティング教育では何のために，何を，どう書くかが重要であり，生成 AI を利用させるにあたってはオリジナリティーの維持，正確性・信頼性・倫理性などの AI リテラシー，自己調整能力，プロンプト設計能力について教育することが必要であることが示された．

その後，実際の授業での事例が講演された．まず，英文の要約における自動フィードバックによる評価の事例が報告された．学生に練習として要約を書かせ，チェックリストをもとに自動フィードバックした後，学生に修正させ，ついで別課題を実施させる手順であった．生成 AI でのフィードバックは，学生の行動や認知に影響しており，学習効果があることが示された．

ついで，初年次教育での生成 AI の使用事例が２件報告された．まず，レポート作成での補助的な生成 AI 使用について，１）論文読解の補助（不明単語の説明など）での使用，２）AI の作成した文章を提示しての問題点（ハルシネーションや構文）の分析，３）レポートで使用する問いの作成補助での使用と段階を踏んで使用させた例が報告され，学生の生成

AI の認識が変化したことが示された．また，文章作成で生成 AI を１）アイデア出し，２）文献検索に限定して使用させ，Feedback Studio を用いて AI 使用度を自動検知された例も報告され，AI 検知度が高い学生の成績が約 10%低いことが報告された．

全体を通して，生成 AI を教育に用いることは一定の効果があることがわかった．しかし，すべての学生に有効ではなく，AI リテラシーの問題が残っており，AI の特性を理解せずに無批判で使用する場合は，教育効果が得られないこともわかった．他のセッションの議論も考慮すると，学生に AI 活用科目などを提供し，AI の正しい理解と活用を支援する必要がありそうである．

第３章　学生による授業評価とそれを生かした授業

３．１　学部授業評価アンケート分析結果

３．１．１　学部平均値の推移とその分析結果

図３．１．１（１）に講義･演習科目，図３．１．１（２）に実験系科目の授業評価アンケート調査結果の工学部全体の平均値に関して，令和 3〜7 年度までの 5 年分の授業評価の推移を示す．

講義科目は，全体として安定した評価を維持しており，授業運営の基礎的な部分は概ね良好である．とくに，シラバス，授業の有用性，教材，目標達成，板書や話し方の明瞭さ，教員の熱意に関する評価が高く，授業内容を整理して伝える力や，授業そのものの運営面は高評価であるといえる．推移としても，R4 でやや落ち込みが見られた後，R5 以降は持ち直し，R6，R7 と比較的高い水準で推移している．

R7 に注目すると，全体平均は過年度平均を上回っており，講義科目全体としては近年の中でも良好な年度であったとみられる．実際に，①シラバス，④難易度，⑥教材，⑧目標達成，⑨明瞭な文字，⑩明瞭な声，⑪熱意，⑯満足度は，R3〜R7 の中で R7 が最も高い水準となっている．とくに，話し方の明瞭さ，板書の見やすさ，教員の熱意，満足度は，過年度と比べても改善が比較的明確であり，学生にとって授業が受けやすく，わかりやすい形に整ってきていることがうかがえる．

その一方で，課題も依然として残っている．とくに，予習･復習は全項目の中で最も低く，しかも R7 は R3〜R7 の中で最も低い水準となっている．また，出欠も R7 が最も低く，授業外学習や受講姿勢の面では改善が十分に進んでいないことが読み取れる．さらに，教員の対応，返却，理解に関する評価は，授業の明瞭さや熱意に比べると相対的に伸びが弱い．このため，講義科目は，授業そのものの説明力や運営面では改善が進んでいる一方で，学生の主体的な学習行動や理解の定着にまで十分結びついていないという傾向がある．総じて，R7 の講義科目は，見せ方や伝え方の面ではかなり良好であるが，学習行動の促進という点には，なお課題が残る結果であると推察される．

実験科目は，全体として非常に高い評価を示しており，教育環境と授業運営の両面で良好な状態にある．シラバス，受講人数，実験装置，実験時間，教材，理解，安全教育，TA 支

援，満足度など，実験実施に関わる主要項目が高い水準にまとまっており，授業としての完成度が高いことがわかる．年次推移を見ても，R3 から R7 にかけて大きく崩れることなく，むしろ全体として上昇傾向にあり，実験科目は継続的に改善が進んでいると考えられる．

R7 に注目すると，全体平均は R3〜R6 の平均を明確に上回っており，R7 は実験科目の評価が最も充実している．項目別に見ても，②人数，③実験装置，⑥講義との関連，⑦理解，⑨教員の対応，⑩熱意，⑫TA，⑮満足度は，R3〜R7 の中で R7 が最高水準となっている．とくに，人数配置，装置環境，理解，TA 支援，満足度の伸びは目立っており，教育条件の整備だけでなく，学生が学びやすい支援体制が強化されていることがうかがえる．また，満足度が R7 で最も高いことからも，実験科目が学生にとって学習成果や達成感を得やすいように改善されてきていることが読み取れる．

一方で，R7 がすべての項目で最高というわけではなく，シラバス，教材，実験時間，主体性などは，過年度の一部年度と同程度か，やや下回る項目も見られる．ただし，これらは低水準という意味ではなく，全体として十分高い評価帯の中での小さな変動にとどまっているため問題はないと考える．また，R7 で特定の項目が極端に低下しているわけでもなく，R3〜R7 の中で最低となる項目は見られない．このことから，実験科目は一部項目に細かな上下はあるものの，全体として高水準かつ安定的に推移しており，R7 はその中でも特に総合評価の高い年度であったと言える．

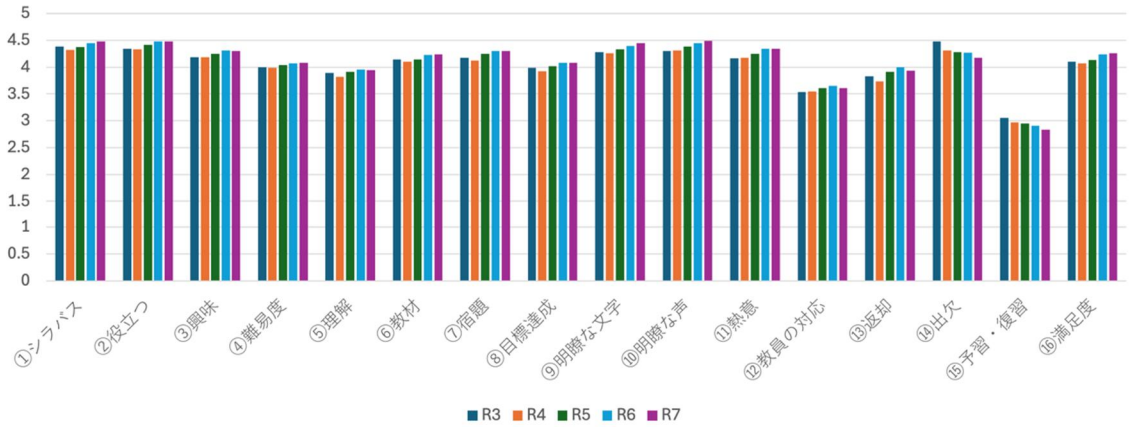


図 3.1.1(1)　講義・演習科目の結果（工学部全体の平均）（令和 3〜7 年度）

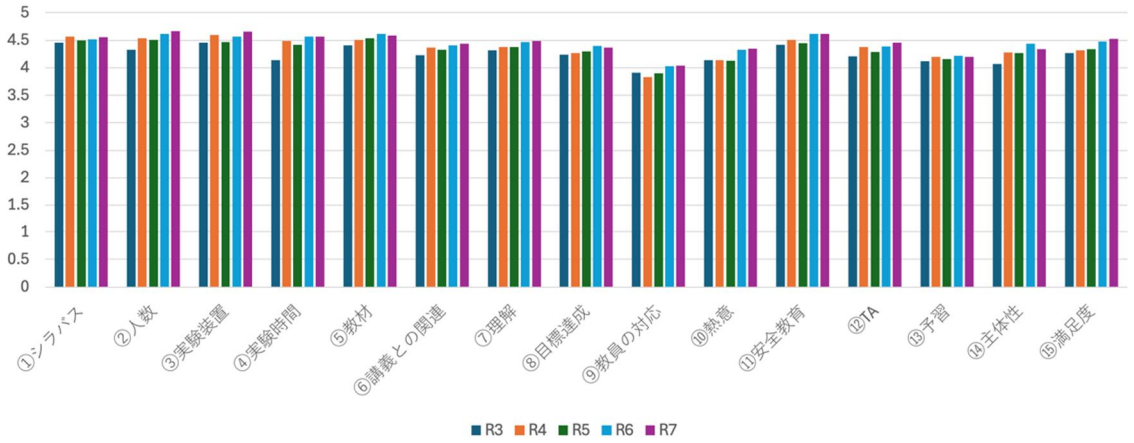


図 3.1.1(2)　実験系科目の結果（工学部全体の平均）（令和 3～7 年度）

３．１．２　機械工学 PG の推移とその分析結果

図 3.1.2（１）には，機械工学 PG の講義科目，図 3.1.2（１）には，機械工学 PG の実験系科目に対して実施された授業評価アンケートの評価結果を示す．

講義系科目は，全体として安定した評価水準を維持しており，授業運営の基本的な部分は概ね良好である．とくに，シラバス，授業内容の有用性，教材，宿題，目標達成，板書の明瞭さ，話し方の明瞭さに関する評価が高く，授業の構成や伝達の面では一定の質が確保されていると考えられる．年度ごとの全体平均を見ると，R3 が約 4.00，R4 が約 4.01，R5 が約 4.06，R6 が約 4.03，R7 が約 4.04 であり，大きな変動はないものの，近年はおおむね 4.0 前後の水準で推移している．

R7 に注目すると，講義系科目は，過年度と比べて総合的には比較的良好な年度であったといえる．実際に，①シラバス，⑥教材，⑦宿題，⑧目標達成，⑨明瞭な文字，⑯満足度は，R3～R7 の中で R7 が最も高い値となっている．また，話し方の明瞭さも R6 に次ぐ高水準であり，R7 の授業は学生にとって，内容が整理されていて受講しやすいものとして受け止められていたことがうかがえる．とくに，板書の明瞭さや宿題，目標達成，満足度の伸びが見られる点から，R7 は授業の見せ方や運営面が比較的よく整った年度であったと考えられる．

一方で，課題も明確である．R7 で最も低いのは予習・復習であり，しかもこの項目は R3～R7 の中で R7 が最も低い値となっている．また，教員の対応や返却も相対的に低い水準にあり，授業内容を伝えることと，個別の学習支援やフィードバックとが十分に結びついていない可能性がある．さらに，出欠も過年度平均と比べるとやや低く，授業外も含めた学習行動の活性化という点ではなお弱さが残る．したがって，講義系科目は，R7 において授業の構成や伝達面では改善が見られる一方で，学生の主体的な学習行動や継続的な学習習慣の形成には引き続き課題があるとまとめられる．

実験系科目は，全体として非常に高い評価を維持しており，教育環境，運営体制，学習支

援の各面で良好な状態にある．シラバス，人数配置，実験装置，実験時間，教材，講義との関連，理解，安全教育，満足度など，実験科目の基盤を構成する項目がいずれも高い水準にあり，機械工学科の実験教育が安定して機能していることがわかる．年度ごとの全体平均を見ると，R3 が約 4.34，R4 が約 4.32，R5 が約 4.53，R6 が約 4.51，R7 が約 4.45 であり，R5，R6 が特に高く，R7 も引き続き高水準を維持している．

R7 に注目すると，R7 は R5 や R6 ほどのピーク水準ではないものの，依然として全体として高い評価を保っている年度である．項目別に見ると，⑨教員の対応は R3～R7 の中で R7 が最も高い．また，実験時間，講義との関連，理解，予習も，過年度平均と比べてやや高く，R7 では単に設備や教材が整っているだけでなく，実験内容と講義内容とのつながりや，学生の理解しやすさといった教育的な側面も比較的良好であったと考えられる．

ただし，シラバスは R3～R7 の中で R7 が最も低く，また TA，目標達成，主体性，満足度なども R5 や R6 と比べるとやや低い．これらは大きな低下というより，高水準の中での相対的な変動にとどまっており，実験系科目全体の評価を大きく損なうものではないと考えられる．総じて，実験系科目は，R7 においても全体として高い評価を維持しつつ，とくに教員対応や理解の面で良好な年度であった一方，ピークであった R5，R6 と比べると一部項目にはやや落ち着きも見られるという結果であった．

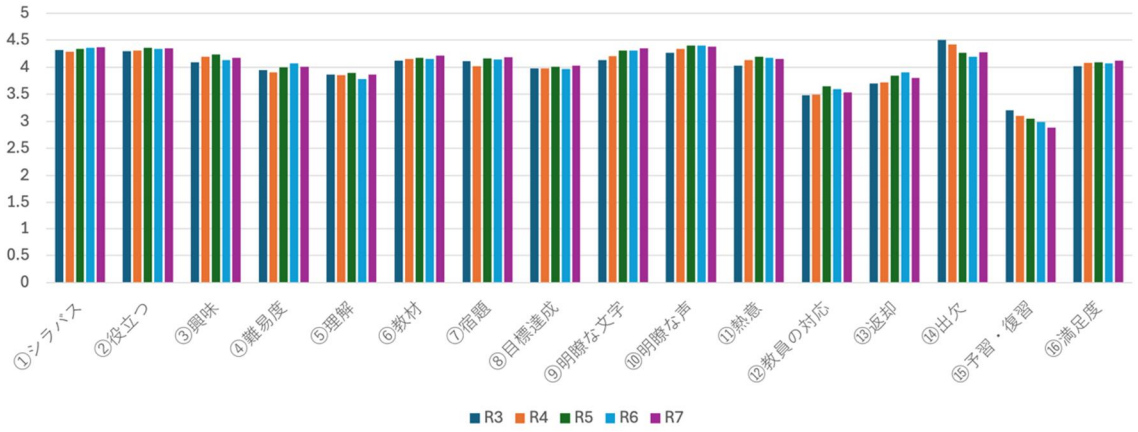


図 3.1.2（1）　機械工学 PG の講義科目の授業評価結果の推移（令和 3～7 年度）

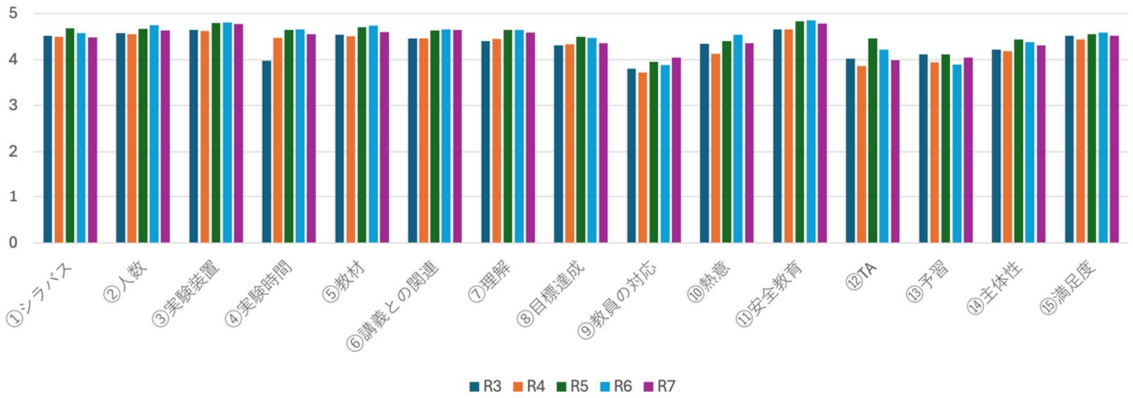


図 3.1.2（2）　機械工学科 PG の実験科目の授業評価結果の推移（令和 3～7 年度）

３．１．３　電気電子工学 PG の推移とその分析結果

図 3.1.3(1)および図 3.1.3(2)に，電気電子工学科（PG）の直近 5 年間（令和 3 年度～令和 7 年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す．

講義科目に関しては，図 3.1.3(1)から，令和 7 年度は全体的に前年度と同水準の評価が得られている．平均値が 4.0 を下回る項目は⑤理解，⑧目標達成，⑫教員の対応，⑬返却，⑮予習・復習であり，このうち⑮予習・復習（2.78）および⑫教員の対応（3.48）は特に低い水準にある．⑮予習・復習は直近 5 年間を通じて最も評点が低い項目であり，理解や目標達成につながるような明確な課題の提示と，そのフォローアップが可能となる授業改善が今後も求められる．一方，その他の多くの項目は R5～R7 年度にかけて 4.0 を超えており，教員による継続的な授業改善の取り組みの成果が表れていると考えられる．

一方，図 3.1.3(2)に示される実験科目では，令和 7 年度もすべての項目において平均点が 4.0 を超えており，令和 6 年度に引き続き高い評価が得られている．引き続きこの高評価を維持するため，継続的な改善が期待される．

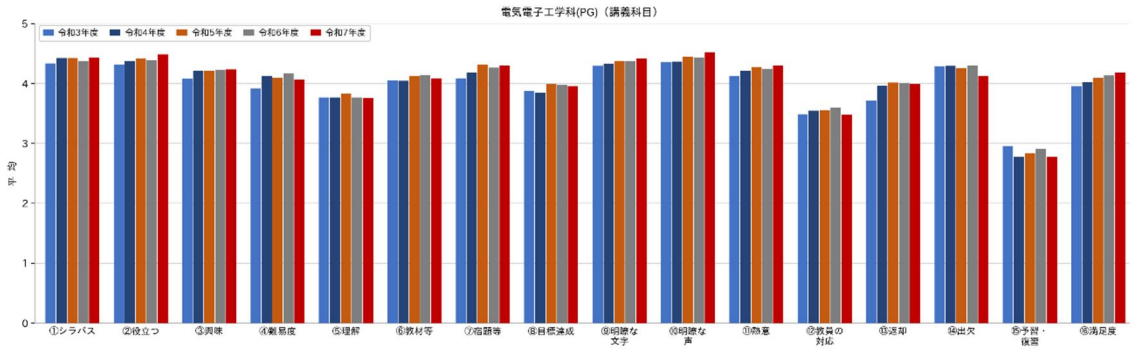


図 3.1.3(1)　電気電子工学科(PG)の講義科目のアンケート結果の推移（令和 3～7 年度）

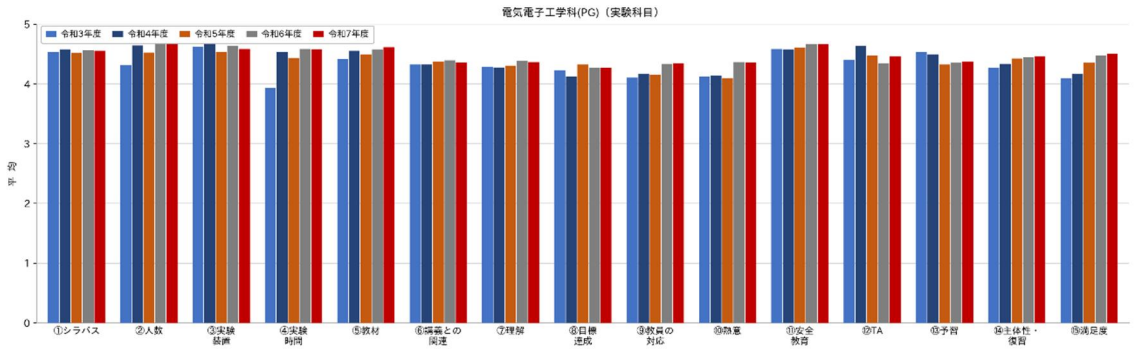


図 3.1.3(2)　電気電子工学科(PG)の実験科目のアンケート結果の推移（令和 3～7 年度）

３．１．４　建築学科の推移とその分析結果

建築学科では建築設計の演習科目が全学年にあり，その形態は講義とも実験とも異なるが，アンケートはこれらを講義科目と位置づけて実施している．実験科目は 1 科目のみであるため，ここでは前年度までと同様に，講義科目を対象として分析する．

図 3.1.4 は，過去 6 年間の年度ごとの結果を示している．ほとんどの項目で改善傾向にあり，評点は 4 以上の高水準を推移している．

評点が 4 以下の項目のうち，⑮予習・復習は標準偏差が大きい傾向がある．科目ごとの特性が出ているため，特性に応じた対応が求められる．⑫教員の対応と⑬返却は近年改善しつつある．一方，⑭出欠（すべて出席したかという設問）は低下傾向にあり，工学部平均を下回っている．科目別の評点を参照すると設計演習の成果物提出直前の座学講義の欠席が考えられる．学生自身のスケジュール管理の問題ではあるものの，科目間での情報共有や調整，提出期日の設定における配慮など，継続して学科としての改善案を検討する必要がある．

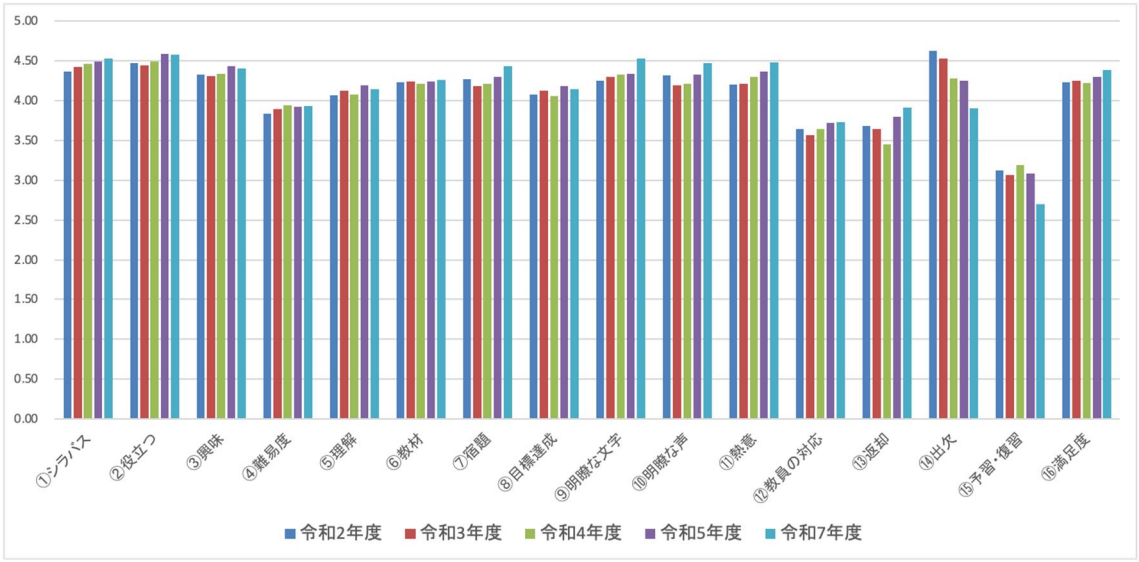


図 3.1.4　建築学科の講義科目の授業評価アンケート結果の推移（令和 2～7 年度）

３．１．５　化学工学 PG の推移とその分析結果

最近６年間（令和２年～令和７年度）の講義科目の授業評価アンケート結果を図 3.1.5(1)に示す．ほぼすべての項目で明らかな上昇傾向が見られ，継続的な FD 活動の成果によるものと考えられる．ただし「⑮予習・復習」の項目は令和３年をピークに連続して低下している．この傾向は工学部全体でも見られており，工学部全体の課題として今後の工夫が必要である．実験科目のアンケート結果を図 3.1.5(2)に示す．年度によるばらつきも大きいが，令和７年度の結果は熱意・興味・返却・満足度など，ほぼ全ての項目で上昇した．令和６年度のの授業アンケートで学生からの意見が示されたことに対して，実施体制を変更した．その効果が着実に表れている．

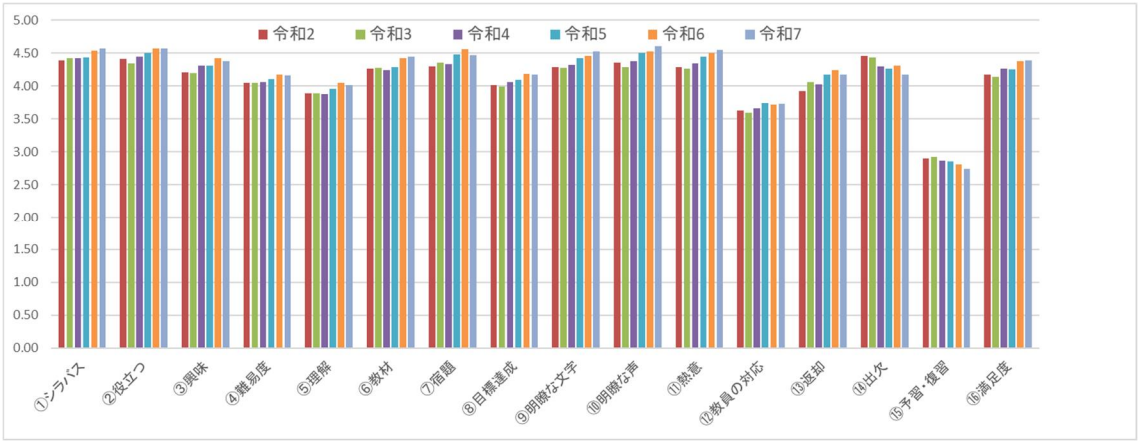


図 3.1.5(1)　化学工学 PG における講義科目の
授業評価アンケート結果の推移（令和２年～令和７年度）

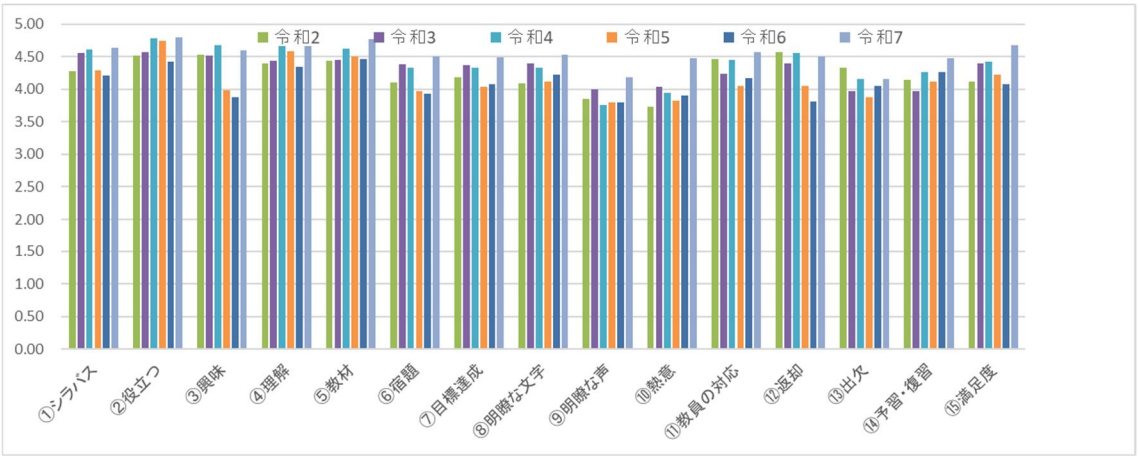


図 3.1.5(2)　化学工学 PG における実験科目の授業評価アンケート結果の推移
（令和２年～令和７度）

３．１．６　海洋土木工学 PG の推移とその分析結果

図 3.1.6(1)は本 PG において，令和 2～7 年度の 6 年間に実施した講義・演習科目の授業評価アンケートの結果を示す．本 PG における令和 7 年度の評価は，令和 6 年度と比べて低下している評価項目があるものの，16 項目中 12 項目で評点 4 以上となっている．さらに，全項目において工学部の平均値以上になっており，各教員による継続的な授業改善によって，全体的には高い評点が維持されていると考えられる．評価の低かった「⑫教員の対応」については，manaba アンケートやヒアリングなどを通じて問題点を明確化し，対応策を検討する必要がある．また，「⑮予習・復習」の評価は，昨年度の 2.91 から 2.77 ポイントになっていることから，やはり manaba アンケートやヒアリングなどを通じ，相対的にこの部分の評点が低い理由を明確にする必要がある．一方で，「⑦宿題」の評価は 4.24 ポイントであり，予習と復習の時間は少ないものの，レポート内容は授業の理解に役立っているとも判断できる．

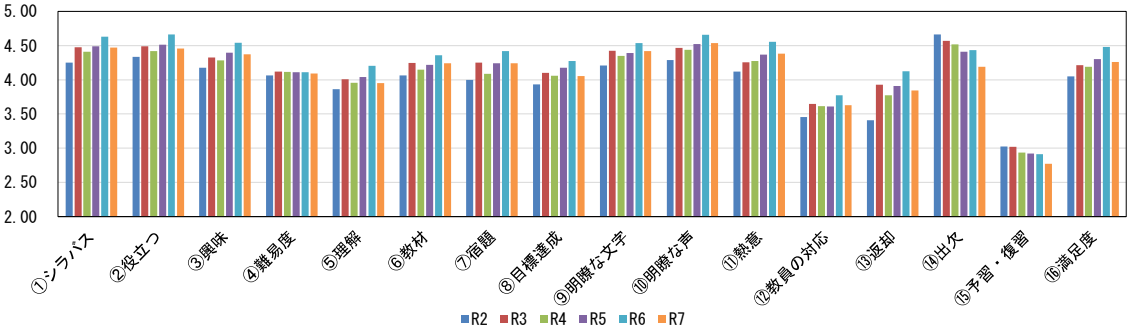


図 3.1.6(1)　海洋土木工学 PG の講義・演習科目の授業評価アンケート結果の推移（令和 2～7 年度）

図 3.1.6(2)は，本プログラムにおいて，令和 2～7 年度の 6 年間に実施した実験科目の授業評価アンケートの結果を示す．令和 2 年度はコロナ禍のため，実験科目の多くが遠隔やオンデマンド授業となったため，この年度は特に低い値となっている．令和 3 年度以降は対面形式による実験の実施が可能となったものの，3 密回避や一部のコマを遠隔形式で実施せざるを得ないなどの制約もあった．そのため，単純に比較し難い面もあるが，令和 4 年度以降は基本的に対面による実験が実施可能となったことで，全項目で 4 ポイント以上の評価を得ている．令和 7 年度についても，前年度と同様にコロナ禍以前と同程度かそれ以上の高い評点が得られている．この結果は実験科目における対面実施の重要性を再認識させるものであり，この水準を維持した教育を継続することが重要である．

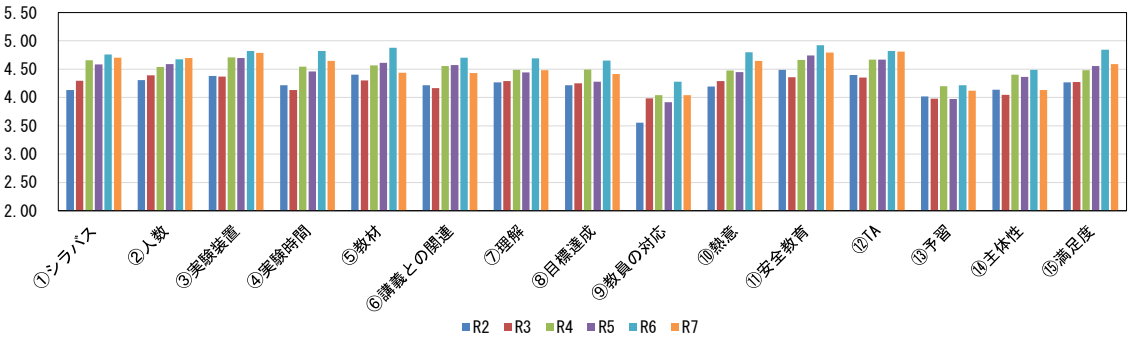


図 3.1.6(2)　海洋土木工学 PG の実験科目の授業評価アンケート結果の推移
（令和 2～7 年度）

３．１．７　情報・生体工学 PG の推移とその分析結果

令和 2 年度の改組により，先進工学科情報・生体工学プログラムとなった．令和 5 年度から 1～４年生の全学年で情報・生体工学プログラムに基づき教育を行っている．

FD 授業評価アンケートは，令和 2 年度～令和 7 年度の 6 年間のデータから経年変化の分析を行う．講義系科目に関するアンケートの質問項目は，①シラバスの内容と実際の授業との一致性，②授業の今後の有用性，③授業の興味深さ，④授業の難易度，⑤授業の理解度，⑥教材等の適切性，⑦レポート等の理解への効果度，⑧授業目標の達成感，⑨文字の明瞭性，⑩声の明瞭さ，⑪教員の熱意度，⑫質問等に対する教員の対応度，⑬レポート等の評価への満足度，⑭出席回数，⑮予習・復習の時間数，⑯総合的満足度であった．講義系科目の集計結果を図 3.1.7(1)に示す．

コロナ禍が始まった令和 2 年度から 2 年間は一部の講義を除き，多くの講義が Zoom によるリアルタイム型又は，動画配信によるオンデマンド型のオンライン講義で実施された．令和４年度は科目によって，対面形式，オンライン形式，及び対面とオンラインのハイブリッド形式が混在した形で実施された．特にコロナ禍の鎮静化により対面講義が増えた令和 4 年度は講義形態が複雑化した影響もあってか，ほぼ全ての項目で評価値が最低となっている．令和 5 年 5 月に新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行したことから，令和 5 年度から対面での講義の割合がコロナ禍以前に戻ったことによりほとんどの項目において評価値が改善されている．

実験系科目の質問項目は，①シラバスの内容と実際の実験との一致性，②実験グループの人数の適切さ，③実験装置の適切さ，④実験時間の適切さ，⑤教材の理解への貢献，⑥講義との関連，⑦理解度，⑧目標達成，⑨教員の対応，⑩教員の熱意，⑪安全教育の実施，⑫TA の熱意，⑬予習の度合い，⑭主体的に実験に取り組めたか，⑮総合的満足度であった．実験系科目の集計結果を図 3.1.7(2)に示す．令和 5 年度は情報・生体工学実験Ⅰ，Ⅱを令和 4 年度と同様にオンラインと対面のハイブリッドで実施し，情報生体工学実験Ⅲについては対面で実施した．さらに，令和 6 年度には，情報・生体工学実験Ⅰ，Ⅱ，Ⅲの全てを対面で

実施したことにより，授業評価アンケートの全項目で改善が見られ，令和 7 年度も令和 6 年度と同程度の水準を維持している．これは対面での実施に戻ったことが大きく影響していると考えられる．

以上のように，講義系科目及び実験科目のアンケート結果の推移及び分析から，情報・生体工学プログラムの授業は，アンケート点数の評価としては今年度も昨年度と同様に，教員及びTA の努力により十分な水準を保っていることがわかった．

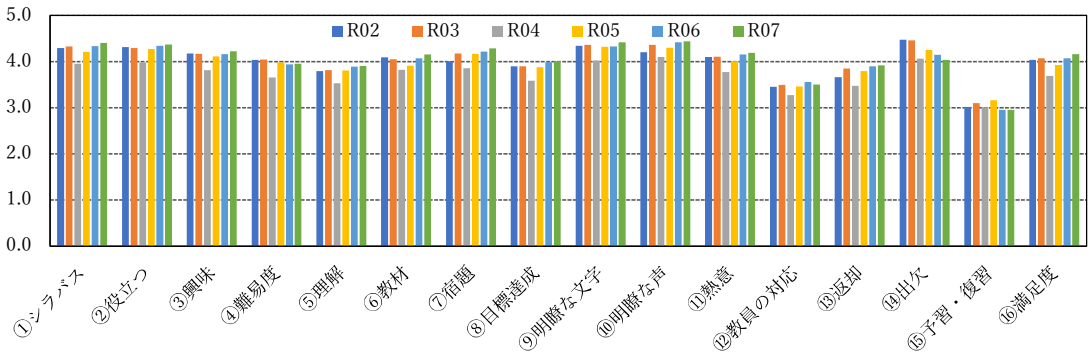


図 3.1.7(1)　情報・生体工学プログラムの講義科目授業評価アンケート結果の推移
（令和 2 年度～令和 7 年度）

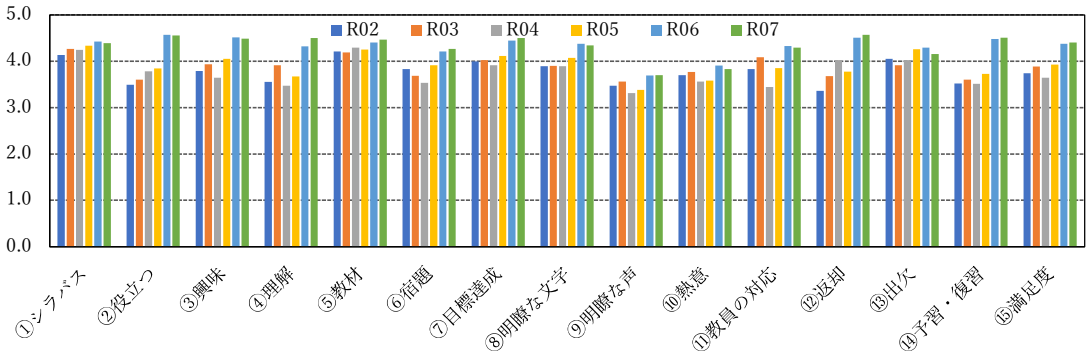


図 3.1.7(2)　情報・生体工学プログラムの実験科目授業評価アンケート結果の推移
（令和 2 年度～令和 7 年度）

３．１．８　化学生命工学 PG の推移とその分析結果

2025 年度の集計結果を，2021～2024 年度分と合わせて図 3.1.8(1)に示す．今年度は，多くの項目で上昇傾向が認められた．今年度の改善状況について主な項目を個別に検討すると，上昇の程度が大きかった項目は①シラバス，④難易度，⑤理解，⑥教材，⑧目標達成，⑨明瞭な文字，⑩明瞭な声であり，④難易度，⑤理解，⑥教材，⑧目標達成が向上していることから学生の資質変化に応じて教員側が講義内容等を変更している様子がうかがわれ，FD 活動の成果が表れていると考えられる．

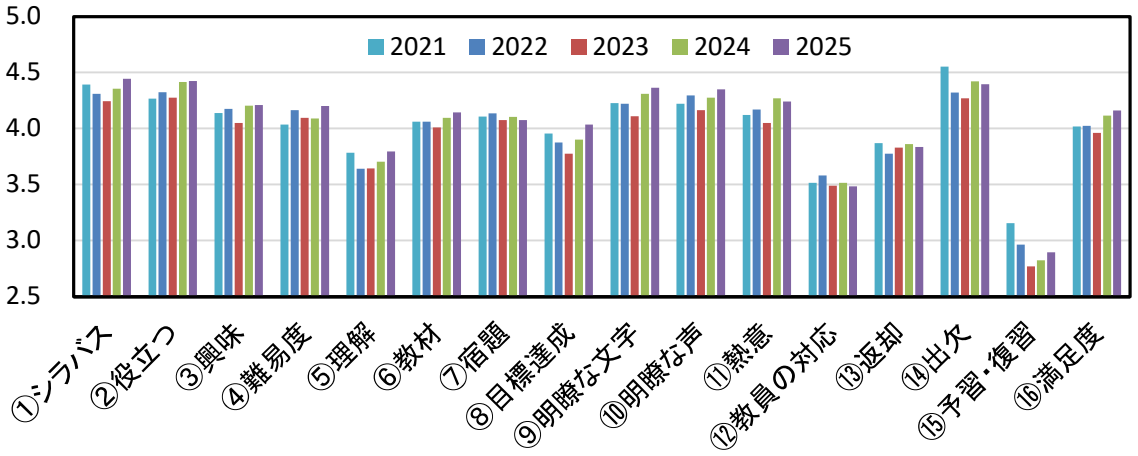


図 3.1.8(1)　化学生命工学 PG における授業評価アンケート結果の推移

３．２　授業計画改善書の各 PG の活用状況

３．２．１　機械工学 PG の活用状況

PGのFD委員が収集した授業計画改善書は，授業評価アンケートの評価点や科目GPAとともにPGの教育評価委員会が整理して分析を行っている．PGの教育評価委員会は，整理した内容と分析した結果を「教育評価委員会報告書」としてまとめている．この報告書は，JABEE活動の一環としても活用されている．授業計画改善書は電子ファイルで保管され，全教員が必要に応じて閲覧できる．また，教育評価委員会報告書も電子ファイルで保管され，授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教員に公開されている．

３．２．２　電気電子工学 PG の活用状況

授業計画改善書は，各科目の授業評価アンケート結果（評点，レーダーチャート，および自由記述）とともに，プログラム事務室および会議室内の JABEE 用保管庫に保管されており，教員はいつでも閲覧できる．これらは主に，プログラム FD 委員会において授業改善に取り組む際の資料として活用されているほか，JABEE 活動の一環としても利用されている．

３．２．３　建築学科の活用状況

教員は，授業評価アンケートの集計結果に基づいて授業計画改善書を作成し，次年度以降の授業に反映させることとなっている．授業アンケートの評点は全科目について学科会議で確認するとともに，問題点を共有することとしている．本学科では，平成 19 年度より授業満足度の評点と授業担当時間を用いて，教員の教育貢献度を評価するシステムを導入している．また，エクセレント・レクチャラーの選出においても，授業評価アンケートの結果を参考資料として用いている．

３．２．４　化学工学 PG の活用状況

化学工学 PG では，前期末および後期末に教員間ネットワークを開催し，成績評価の分布

や授業改善計画書および次期の開講科目のシラバスの確認を実施している．シラバス，授業改善計画書，試験問題および講義資料等は科目毎にファイルボックスに収納して専用の部屋に保管しており，プログラム教員がいつでも閲覧できる仕組みが整備されている．カリキュラムについては，カリキュラム WG で年に数回の検討・精査を実施している．今後もこのような継続的な取り組みにより，評価の再確認と改善を図っていく．

３．２．５　海洋土木工学 PG の活用状況

工学部 FD 委員会が学生に対して実施する専門科目の授業アンケートの結果に基づき，各教員は，シラバスに記載した評価基準との整合性を自己評価した上で，FD 委員もメンバーになっているプログラム教育システム評価委員会に授業計画改善書を提出している．提出された評価資料に加えて，プログラム教育システム評価委員会では，成績評価分布や受講生の合格率などの分析を行い，その結果をプログラム会議で報告している．プログラム教育システム評価委員会で成績評価の偏りなどに問題点が発見された場合には，担当教員に成績評価法の詳細な説明を求め，プログラム会議において成績評価法に問題が無いかを審議している．このように，授業計画改善書を活用した教育の点検および改善を継続的に実施している．

３．２．６　情報・生体工学 PG の活用状況

情報・生体工学プログラムでは旧情報生体システム工学科の平成 22 年度以降，授業計画改善書をプログラム事務室で保管し，全ての教員が閲覧可能な状態で管理を行っている．各教員による授業改善への取り組みおよび結果を教員全員で共有することで，学科全体の教育内容の継続的な改善に貢献している．また，プログラムとしての JABEE 申請は行わないことにし，その代わり学科内で組織している教科グループ WG において，半期に 1 度，全開講科目について担当教員による報告と振り返りを実施し，科目の内容の見直しなどの検討の際に，資料として活用している．また，授業評価アンケートの評価結果をエクセレント・レクチャラー賞受賞候補推薦の資料として活用している．

３．２．７　化学生命工学 PG の活用状況

授業計画改善書は応用化学工学科応用化学コースの時代から引き続き同一の理念の下で活用を図っている．すなわち，授業計画改善書を，卒業生アンケート集計結果，授業参観報告書およびそれに対する回答書等とともに，各教員が分析，評価し，必要に応じて互いに連携する科目の担当教員グループで作るカリキュラム小委員会において，十分な教育効果が達成されているかどうか討論されている．検討した結果や問題に対する対策はプログラム内の教育プログラム改善検討委員会において報告され，全体カリキュラムとの整合性も考慮しつつ，最も効率の良い方法で運用できるよう検討され，必要な改善がなされている．このように，授業計画改善書等のＦＤ活動書類を資料として，教員間で協力･連携そして切磋琢磨するシステムが構築され，その中で授業内容･方法の改善もなされている．

第４章　PG における FD と JABEE への取り組み

４．１　JABEE 認定プログラムを実施している学科(PG)での取り組み

４．１．１　機械工学 PG

機械工学科(PG)は，平成 16 年度に JABEE 認定の審査を受審した．ここで評価 W の指摘を受けていた評価項目に対しては,平成 18 年度の JABEE 中間審査において全て改善している．平成 21 年度実施の JABEE 認定継続審査では，評価 C を受けた項目が 10 箇所あったが，評価 W 以下の評価を受けた項目は無く，6 年間の JABEE 認定継続が認められた．平成 27 年度実施の JABEE 認定継続審査では，評価 C を受けた項目が 11 箇所あったが，評価 W 以下の評価を受けた項目は無く，さらに 6 年間の JABEE 認定継続が認められた．令和 3 年度に再び JABEE 認定継続審査を受審予定であったが，新型コロナウイルス感染症の影響により令和 4 年度秋に延期された.

本 PG は，平成 22 年度から広範囲にわたる機械工学領域の教育・研究を，生産工学，エネルギー工学，機械システム工学の 3 つのコース（分野）で分担実施している．各コース（分野）は，複数の研究室により構成され，それぞれのコース（分野）にコース長（分野長）をおいている．この 3 名のコース長（分野長）と副専攻長（副 PG 長）から組織される「専攻教育委員会」において，学科の教育プログラムを点検していたが，平成 25 年度からその役割は「コース長（分野長）会議」に移管された．この「コース長（分野長）会議」での議論と各教員への提案・指摘をもとに，学科(PG)の教育環境のさらなる改善と実施体制の強化が図られている．さらに学科(PG)内には，教務委員会委員，FD 委員会委員，JABEE 委員会委員等からなる教育の現状を分析する委員会としての「教育評価委員会」と，JABEE 認定のための審査資料作成を行う「JABEE ワーキンググループ」がある.

令和 4 年度は，JABEE 認定継続審査を受審するための審査項目や評価項目の確認などを行い,審査資料の作成を行った.令和 4 年度秋に受審し,令和 5 年 4 月 1 日から 6 年間の JABEE 認定継続が認められた．さらに,「JABEE ワーキンググループ」では，4 年生の卒業時における JABEEE 修了判定の評価を行った．平成 27 年度より，1 年生から 4 年生まで成績の自己点検として「学習・教育達成目標（教育目標）の達成度の自己点検」を続けている．また，卒業論文発表時に複数教員による発表評価を「卒業論文発表評価表」により実施しており，評価結果をすべての発表学生にフィードバックしている．令和 7 年度も，これらの委員会・ワーキンググループによって，教育の改善に関する実質的・継続的な活動を実施している.

４．１．２　電気電子工学 PG

電気電子工学 PG では，令和 5 年度に令和 4 年度分の JABEE 継続審査を受審し，6 年間の継続認定を取得した.プログラム FD 委員会では,今年度,計 3 回の委員会を開催したほか,プログラム会議や電子メールでの議論，各種アンケートの実施などを通じて，プログラムの教育改善に取り組んだ．プログラム FD 委員会を含む教育改善活動の内容は，以下の通りで

ある.

(1) シラバスの点検：専門教育科目の全シラバスについて点検を行い，内容の整備を進めている.

(2) 授業評価アンケート結果等を活用した授業改善：プログラム FD 委員会において，各科目の成績評価，授業評価アンケート結果，授業計画改善書等をもとに授業の検証を行い，その結果をプログラム会議に報告している.

(3) 新入生アンケートと追跡アンケートの実施：入学時とその 1 年後にアンケートを実施し，学生の実態を把握して，教育改善のための資料として活用している.

(4) 学生定期面談の実施：各学期末に，指導教員による学生との定期面談を実施し，継続的な指導・助言体制を整備している.

(5) 教員間連絡ネットワークの構築：基礎教育科目および専門教育科目（電子物性デバイス工学，電気エネルギー工学，通信システム工学）において，科目間連携会議を開催し，その内容をプログラム FD 委員会で議論している.

(6) 社会からの要望調査の実施：卒業生と教員によるカリキュラムに関する外部連携会議を開催し，教育改善に活用している．また，卒業生に対するアンケートを実施し，その結果を改善の資料としている.

４．１．３　建築学科

建築学科では，令和 6 年度に JABEE 継続審査を受審し，6 年間の継続認定が認められた．建築学科における近年の FD 活動は，JABEE 関連の取組を中心に認定継続審査に向けた自己点検として，以下のとおり実施している.

(1) JABEE 基準 1(1)に関係する社会の要求への配慮に関して，幅広い年代の卒業生を対象に建築学科の教育プログラムに関するアンケートを実施し，教育プログラムに対する社会の要求を確認した．また若手中堅技術者に相当する設計系 OB・OG と在学生との懇談会を開催し，その内容を学科会議で報告・共有することを通じて，ディプロマポリシーに定める「技術者像」との整合を再確認した.

(2) JABEE 基準 1(2)に関して，学習・教育到達目標の能力の設定において国際基準との対応を確認するために，UNESCO-UIA 建築教育憲章が求める要件と本プログラムの学習・教育到達目標との対応を整理し，要件を満たしていることを確認した.

(3) JABEE 基準 3(5)に関して，卒業論文と卒業設計の両科目を通してプログラムの学習・教育到達目標の達成度を総合的に評価し，修了生が知識・能力観点の内容を獲得していることを点検・確認するよう改善した．これに関連して，卒業論文の達成度評価について，1) 指導教員による評価，2) 卒業論文発表会での複数の教員による確認，3) 学科の全教員による論文の審査，という多段階での評価プロセスを明確化した.

(4) JABEE 基準 4 に関して，教育点検の仕組み自体の機能点検を強化するために，建築学科教育改善委員会の組織に卒業生および一級建築士の資格を持つ技術者らを加えた.

(5) 2・3 年年生が受講する建築設計 I～IV の構成と内容について，カリキュラム全体との整合性や設計演習としての階梯性を踏まえつつ，各教員の得意分野を活かして演習のテーマや設計の方法論等を明確化しやすいスタジオ制に刷新した.

４．１．４　海洋土木工学 PG

海洋土木工学 PG では，平成 16 年度に JABEE 認定を受けた教育プログラムを提供している．教育プログラムに関する情報は，本プログラムのホームページを通じて広く公開されており，学習･教育到達目標と JABEE 基準との対応，各学習・教育到達目標の学習保証時間（目標時間），学習･教育到達目標を達成するための授業課題の流れ，各科目の学習保証時間などの情報を閲覧することが可能である．その後も，本教育プログラムが育てようとする技術者像，学習・教育到達目標，教育カリキュラムなどに関して，技術士の資格を有する技術者を外部評価委員とする外部評価を定期的に受け，継続した教育改善を実施している.

本教育プログラムでは，教育改善の一環として次のような手順を確立している．授業担当教員は，工学部 FD 委員会が実施している授業評価アンケートの集計結果を基に，『授業計画改善書』を作成する．授業担当教員は，「シラバスに記載された授業計画に沿って授業が行われたか」，「シラバスに記載された成績評価基準に沿って成績評価が行われたか」，「シラバスに記載された受講学生が達成すべき目標の教育達成度」，「科目に割り当てられた学習・教育到達目標は達成できたか」といった視点から，専門科目の学習・教育到達目標の達成度を自己評価し，その評価結果を『授業計画改善書』に反映させた上で，プログラム教育システム評価委員会に提出する．この過程で，授業評価アンケートを通して，学生の要望が反映される仕組みになっている．また，FD 委員を含むプログラム教育システム評価委員会において，受講生の合格率や成績評価分布などの分析結果，および各科目の成績評価方法について点検し，その結果をプログラム会議で報告することになっている．これらの結果より，教育上の問題点等が認められる場合には，プログラム内の各委員会で議論し，改善計画を策定している．以上の手続きによって，教育活動を点検する仕組み自体を点検する機能を実現している.

その他にも，教育活動に関する評価として，授業評価アンケートの結果に基づいて，教育貢献賞の候補者を選定している．また，FD 講演会等の活動や工学部 FD 報告書の内容も，教育活動の質的向上を図る仕組みとして活用している．令和 7 年度においても，上記の仕組みが着実に実行され，本教育プログラムの教育の点検がなされている.

４．１．５　化学生命工学 PG

化学生命工学科の前身である応用化学工学科応用化学コースが，平成 18 年度の審査により JABEE 認定を受け，平成 29 年度に認定継続審査を受審し，昨年度に全項目最高評価の S 評価を得て 6 年間の追加認定を受けた．JABEE に関する情報は当プログラムのホームページ

を通じて広く公開されており，学習･教育目標と JABEE 基準との対応，学習･教育目標を達成するための授業課題の流れ，授業時間などの情報を閲覧することが可能になっている．また，教育改善のためのアンケート調査が，化学工学プログラムおよび同窓会との共催による講演会開催の際に既卒業・修了生を対象に 1 回，年度末に新卒業・修了生を対象に 1 回，計 2 回継続的に実施され，結果はプログラム会議およびプログラムホームページを通じて情報共有，公表されている．アンケート項目中の共同利用施設に対する評価結果はプログラム長名で各施設長等へ送付され，改善等の一助としてもらうとともに，プログラムと施設等との連絡網の構築を図っている．さらに，自己採点シート（全学基盤ルーブリック）を活用し，学生自らが自己点検を行い継続して改善する仕組みを導入している．新入生については初年度に重点的なケアが必要であるとの考えから，後期が開始される時期に全学生の面談を担任教員が行い，単位の取得状況，サークル活動やアルバイトと勉学との両立状況，進路の検討状況についてインタビューを実施，指導している．同様に，成績不調者に対しても，インタビューを実施している．これらのインタビューでは，報告の書式を学科独自に作成し，重要なインタビュー項目が欠落しないように工夫している．さらに，インタビューの結果を書面として保管し，必要に応じて，当該学生の過去のインタビュー結果を参照しながらインタビューを実施できるようにしている．これらの活動は平成 26 年度に工学部で新入生に対して導入されたアドバイザー制度･学生相談員制度に先んじて行ってきたものであり，これらの新制度発足後もそれらと矛盾の無いように自己採点シート（全学基盤ルーブリック）等を継続的に運用している．令和 7 年度は，これまでのノウハウも活用して，学生相談員の協力のもと WEB 上でのリモート会議ツールや電子メールなどを活用して，学生の指導を行った．また，授業公開･参観についても積極的に取り組んでいる．各教員が年間 1 科目は必ず授業を公開し，どの科目に誰が参観するかを予め定め，全教員が必ず 1 回は他の教員の授業参観を受ける仕組みを導入している．また，令和 2 年度に試行的に行われた成績評価分布等の確認を今年度も継続して実施し，単位の認定状況に問題がないことを確認した．

以上のような取り組みを継続的に実施しているが，更なる改善を目指しプログラム内に教育プログラム改善検討委員会を設置して検討を重ねており，PDCA サイクルを構築している．

４．２　JABEE を受審していない PG(学科)での取り組み

４．２．１　化学工学 PG

本 PG では平成 16 年度より継続してきた JABEE 認定を平成 26 年度に終了し，これに代わる取り組みとして，平成 26 年度入学生より公益社団法人化学工学会の認定資格である「化学工学技士（基礎)」の取得を意識したカリキュラムを整備して，本学を試験会場とした団体受験も実施している．合格率アップに向けて演習科目を設けて対策を継続実施している．令和 7 年度の受験者は 35 名（すべて学部学生）で，合格者は 10 名であり合格率は 29%であった．令和 6 年度の合格率の 60%に対して大きく低下したことから講義での理解度を高め

る工夫を委員から教員に呼びかけた.

PG の FD 活動においては，学期末および学期中間に行われる学生授業アンケートやその結果に対する授業改善計画書の作成，FD 講演会への参加などに取り組んでいる．さらに，本 PG 教員は，原則として前期末および後期末に開催される教員間ネットワークに参加している．教員間ネットワークは開講期の直前に開催されるもので，各教員が行う講義のシラバスを公開して教員間の相互理解を深めている．また，令和２年度からは成績評価の分布についての点検も追加した．シラバス，授業改善計画書，試験問題および講義資料等は科目毎にファイルボックスに収納して専用の部屋に保管しており，PG 教員がいつでも閲覧できる仕組みが整備されている．

将来のカリキュラムについては年に数回のカリキュラム検討ワーキングを開催し，PG として開講科目をどの順番で実施するか，担当者などについて綿密に検討を行い，新入生に配布される履修要項の更新を毎年度行っている．

学生は毎期ごとに個人の学習達成目標の到達度を再確認・自己評価させる目的でポートフォリオを作成している．学部 1，2 年生には年 2 回，全教員が面談員となり定期個別指導（学生面談）をアドバイザー委員の教員が企画し実施することで，学修指導ならびに生活指導を行い学生と教員との間のコミュニケーションをとっている．３年生は後期の研究室仮配属後に研究室で面談を実施しているほか，４年生には卒業研究の従事記録を記録させている．また，学生相談員による相談会を実施し，学修，生活について気軽に相談できる機会を設けている．

４．２．２　情報・生体工学 PG

令和２年度から先進工学科情報・生体工学プログラムとなり.1～４年生の全学年で情報・生体工学プログラムのシラバスで教育を実施している．

情報・生体工学プログラムは，JABEE への申請は行わないことを決定しているが，その代わりにプログラム内の教科グループ WG を組織し，開講科目とカリキュラムの改善に取り組んでいる．情報・生体工学プログラムでは，教育企画委員会と，ＦＤ推進委員会により，学科の教育改善などのＦＤ活動を担っている．ＦＤ推進委員会の下には，教科グループ WG（情報基礎科目，ソフトウェア科目，工学基礎・教養科目，語学科目，実験科目）が設置されており，前期と後期の終わりに全教員による科目ワーキングを開催し，各科目の履修状況，単位取得状況，講義内容，成績評価基準などを報告し，学科の教育内容についての評価・検討を行っている．ここ数年，学生の数学の学力低下が懸念されており，工学基礎・教養科目 WG では，数学に関する授業の内容を科目間で調整している．また，ソフトウェア科目 WG でも同様に，プログラミング言語に関する講義や演習の内容を検討し，プログラミングに関する教育の充実を図っている．さらに，実験科目 WG では，実験機器の更新や内容の見直しを引き続き検討している．情報・生体工学プログラムでは，授業計画改善書を教員間で互いに閲覧し，各教科グループ WG で積極的に活用できるように学科事務室に保管・管理している．

また，1 年生には，高校における数学・理科の詳細な履修状況，志望動機，進路希望などを調査する新入生アンケートを実施して，学生への指導の参考にするとともに，カリキュラム改善に役立てている．

第５章　GPA 制度の現状と学習成果

５．１　年間 GPA の推移

図 5.1 には，工学部全学生の入学年度別に見た年間 GPA 平均の推移を示している．また，それ以降に GPA の変動要因と考えられる社会的動向や教務関連事項をまとめている．なお，データの制約により，年間 GPA 平均は GPA が 1.5 以上の学生を対象に算出しており，4 年目は取得単位数が少ないため比較の対象外としている．

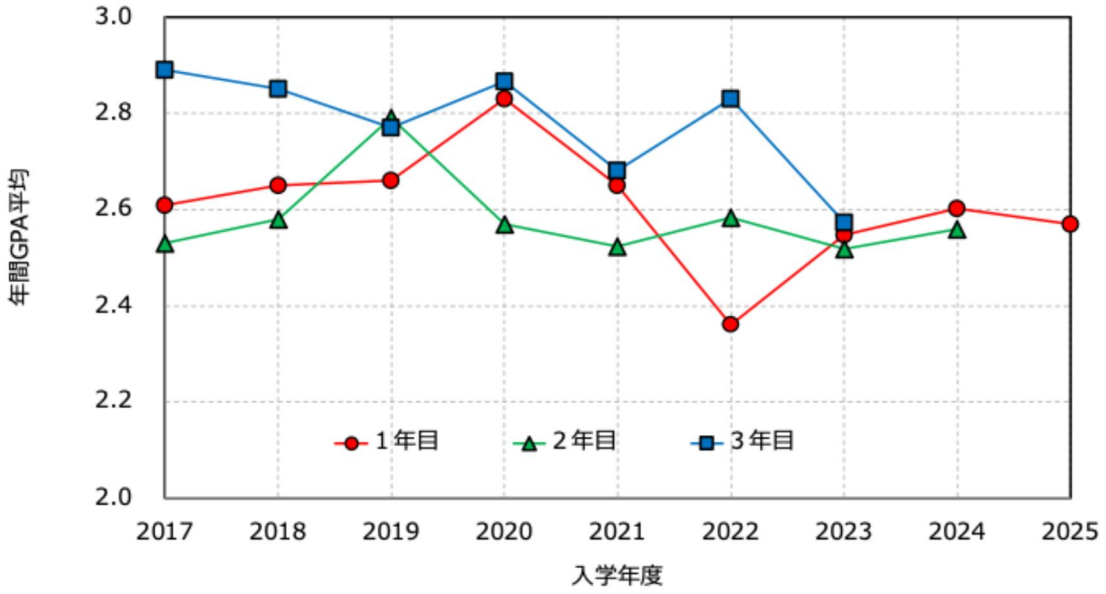


図 5.1　入学年度による年間 GPA 平均の推移

【年間 GPA 平均の変動要因】

2016 共通教育改革

・初年次セミナーI, II，英語の改革，異文化理解の新設

・基礎教育科目(微積分学，基礎物理学)を工学部での開講

2020 新型コロナウイルス感染症の拡大：遠隔講義の増加

工学部改組

・工学概論と共通クラス向け工学分野実験・演習を新設

2021 新型コロナウイルス感染症：遠隔講義と対面講義が混在

2022 新型コロナウイルス感染症：遠隔講義と対面講義が混在

成績評価基準の変更

・A 判定の割合を約 20%とする

2023 新型コロナウイルス感染症の分類 5 種へ：全面対面講義

2016（平成 28）年度の共通教育改革以降，2020 年度までの年間 GPA 平均は，2019 年度の一部例外（2 年目が 1 年目を上回る）を除き，3 年目 ＞ 1 年目 ＞ 2 年目という傾向が安定して見られた．2 年目での GPA 低下は，大学生活に慣れたことによる学習意欲の低下が一因と考えられる．2019 年度に限って 2 年目の平均が高くなったのは，同年 12 月以降に急速に拡大した新型コロナウイルス感染症によって教育環境が変化し，遠隔講義の導入や，従来の対面授業との評価基準のぶれなどにより GPA の値に影響が生じたためと推察される．

この安定した傾向は，2021 年度に大きく崩れる．特に 1 年目における GPA の顕著な低下は，遠隔講義の拡大によって学生の学習パターンが変化し，学習機会が減少したことが原因とみられる．一方で，2・3 年目の学生については，2021 年度には一時的に GPA が低下したものの，その後は回復傾向を示していることから，新型コロナウイルス感染症が特に初年次教育に与えた影響が大きかったことがうかがえる．

2021 年度の 1 年目 GPA の下落以降，2023～2024 年度には回復傾向が見られ，対面講義の再開とともに教育体制が安定してきたことを示している．感染症が沈静化した 2023 年度以降，年間 GPA は徐々に 2016～2020 年度の傾向に近づきつつある．

従来から見られる 2 年目での GPA 低下は，今後の教育改善における重要な課題である．2 年次では受講科目の大半が専門科目となり，実験や演習に伴うレポート課題が増加することに加え，求められる学習量も大幅に増える．このため，GPA の低下はある程度避けがたいが，1 年目の工学系基礎教育において，専門科目に備えた基礎力を充実させることで，2 年目の GPA 低下を緩和できる可能性がある．

このように，新型コロナウイルス感染症の影響を受けて年間 GPA は大きく変動したが，2024 年度にはその影響から脱しつつある．近年は GPA に影響を与える大きな教務上の変更も少ないことから，今後の年間 GPA の推移を丁寧に観察することで，教育改善に向けた示唆が得られると期待される．2025 年度は，1・2 年次の GPA は前年からほぼ横ばいであるが，3 年次が大きく低下している．現時点でこの現象の理由や原因は断定できないが，継続して観察する必要がある．

５．２　年間修得単位数の推移

鹿児島大学工学部では，確定 GPA が 1.5 以上の学生の年間修得単位数の平均値が，各学年ごとにデータベース化されている．データが欠落している年度もあるが，図 5.2 に，過去のデータに令和 7（2025）年 3 月のデータを追加して示す．

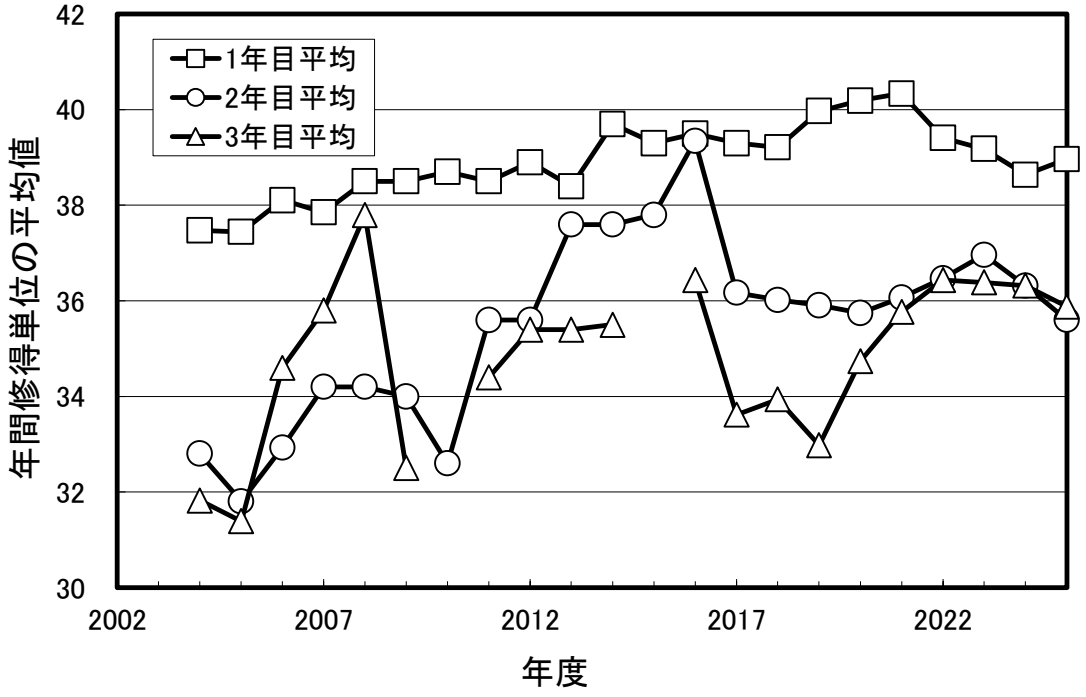


図 5.2　学年別年間修得平均単位数の年度による相違

既に過去の FD 報告書で一定の分析がなされているが，過去 22 年間の全体的な傾向を見ると，1 年次の修得単位数は 38～40 単位と比較的安定しているのに対し，専門教育へ移行する 2，3 年次では，年度によって修得単位数に大きな変動が見られる（最大値と最小値の差は，2 年次で 7.5 単位，3 年次で 6.4 単位である）．ここ 2～3 年程度を見ると，2，3 年次の年間修得単位数は減少傾向にあるものの，短期的に極端な変化は見られない．ただし，図 5-2 のように短期的に修得単位が急減することも想定されることから，年ごとの学生の特性の違いを考慮した教育の実施が必要だと言える．

５．３　卒業者数と卒業延期者数の割合の推移

図5.3には，卒業者数と卒業延期者数の合計に対する卒業者数の占める割合を示す．平成15（2003）年度から，令和7（2025）年度までの経年変化を示している．

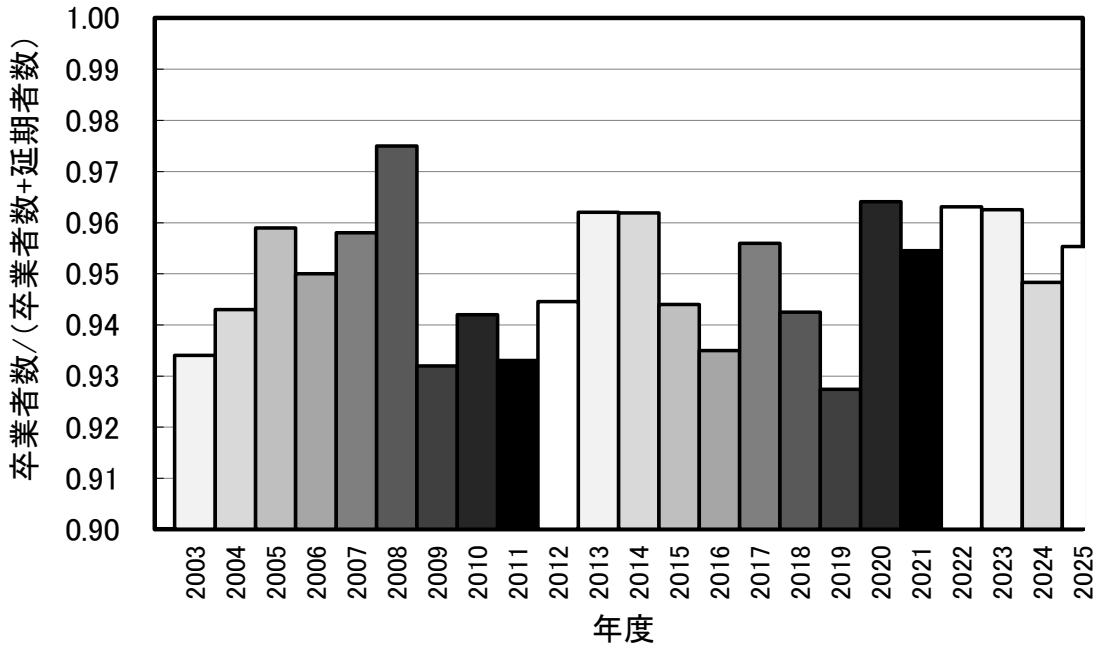


図5.3　卒業者数と卒業延期者数の合計に対する卒業者数の占める割合の経年変化

統計を取り始めた平成14（2002）年度～平成24（2012）年度のトレンドの分析は，昨年度のFD報告書にまとめられているので，そちらを参照されたい．直近5年程度に絞った傾向を見ると，大きな変動はなく95%程度の4年生が卒業，5%程度（20名程度）の学生が卒業を延期している．卒業延期の理由の一つとして単位不足が挙げられるが，4年生になっても卒業を延期せざるを得ないことがあることを学生に周知し，油断せず授業に臨むように指導する必要があると思われる．

５．４　学習成果と質の向上

昨年度に引き続き，これまで蓄積されてきた講義・演習科目の授業評価アンケートから，学生の学習の質と関連があると考えられる「⑤理解」，「⑧学習目標の達成」，「⑮予習・復習の時間」及び「⑯満足度」の４項目に，令和 2(2020)年度から新たに追加された「④難易度」を加えた５項目に着目し，これらと GPA の科目平均値の関係を調べ，学習成果と質の向上に関して検討する．

５．４．１　学習成果と質の向上の経年変化

平成 16（2004）年度～令和 7（2025）年度における，講義・演習科目の授業評価アンケートのうち，「⑤理解」，「⑧目標達成」，「⑮予習・復習の時間」及び「⑯満足度」の４項目と

令和 2(2020)年度から追加された「④難易度」の各評価の工学部平均値と，GP の科目毎の平均値（科目 GPA）の工学部平均値の推移を図 5.4.1 に示す．「④難易度」の評価の工学部平均値は，「⑧学習目標の達成」の評価とほぼ同一の値となっている．令和 7（2025）年度の「④難易度」，「⑤理解」，「⑧学習目標の達成」，「⑯満足度」の評価の工学部平均値は，令和 6（2024）年度から横ばいであり引続き高い水準を維持している．これらの 4 項目は変化傾向が類似している．一方，「⑮予習・復習の時間」は，平成 23（2011）年度に一度低下したものの，平成 17（2005）年度～平成 29（2017）年度では緩やかな上昇傾向であったが，令和 2（2020）年以降は低下傾向にある．令和 7（2025）年度は，0.07 ポイント低下して平成 19（2007）年度より低下している．なお，平成 29（2017）年度～令和 2（2020）年度に大きな変動がみられるが，これはアンケートの実施方法を LMS（manaba）内での WEB アンケートに変更した後にみられ，さらに遠隔授業が導入された令和元(2019)年度に大きく低下した．このことから，manaba の導入によるアンケート回答率の低下や授業実施形態の変化の影響と考えられる．

科目 GPA については，令和 3（2021）年に低下したが，令和 5（2023）年には増加に転じ，令和 7（2025）年度は，前年度より 0.01 ポイント増加しており，わずかであるが上昇傾向となっている．このような年度ごとの値の変動はあるものの，近年の科目 GPA の値は，平成 29（2017）以前の科目 GPA の水準と比べてやや高い値を示している．令和 7（2025）年度は，「④難易度」，「⑤理解」，「⑧学習目標の達成」，「⑮予習・復習の時間」，「⑯満足度」の全てで 0.1 ポイント未満の増減で横ばいの傾向であり，科目 GPA の評価の工学部平均値は同じように横ばいの傾向である．「⑮予習・復習の時間」の減少傾向が続いていることから，多様な入試で入学した学力差のある学生に対して，授業時間外学習を促すためのより一層の工夫により，授業内容の理解を深めて学生の成績(GPA)向上につなげることが必要である．

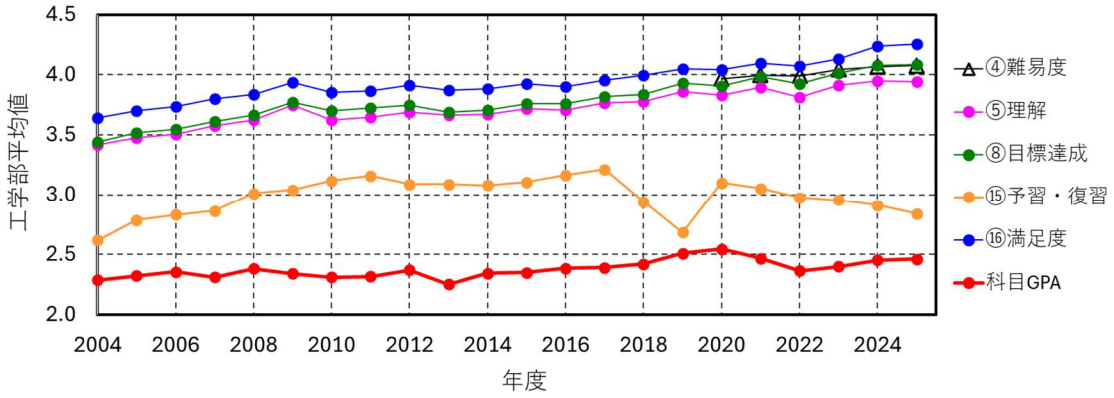


図 5.4.1　授業評価アンケートのうちの 4 項目の評価及び科目 GPA の工学部平均値の推移

５．４．２　令和７年度の学習成果と質の向上

令和 7 (2025) 年度の科目 GPA と授業評価アンケートの「④難易度」,「⑤理解」,「⑧学習目標の達成」,「⑮予習・復習の時間」及び「⑯満足度」の科目平均の相関関係を図 5.4.2(1)に示す．図中の R^2 は，相関係数の 2 乗である決定係数である．科目 GPA と「④難易度」,「⑤理解」,「⑧学習目標の達成」,「⑮予習・復習の時間」,「⑯満足度」の相関係数は，それぞれ，$-0.27,\ 0.31,\ 0.29,\ 0.01,\ 0.24$ であり，「⑤理解」,「⑧学習目標の達成」,「⑯満足度」の 3 項目は，正の値で弱い相関関係があると考えられるが,「④難易度」については，負の弱い相関関係があると考えられる．一方,「⑮予習・復習」については，科目 GPA との相関関係がないと考えられる．

令和 7 (2025) 年度の授業評価アンケートの「⑤理解」の科目平均と「⑧学習目標の達成」及び「⑯満足度」の科目平均の相関関係を図 5.4.2(2)に示す．「⑤理解」と「⑧学習目標の達成」及び「⑯満足度」の相関係数は，それぞれ，$0.84,\ 0.75$ であり，これらの 2 項目は,「⑤理解」と正の相関関係があると考えられる．

令和 7 (2025) 年度の授業評価アンケートの「④難易度」の科目平均と「⑤理解」及び「⑮予習・復習」の科目平均の相関関係を図 5.4.2(3)に示す．「④難易度」と「⑤理解」及び「⑮予習・復習」の相関係数は，それぞれ，$-0.45,\ 0.30$ であり,「⑤理解」と負の弱い相関関係があるが,「⑮予習・復習」とは，正の弱い相関関係があると考えられる．

以上の分析により，授業評価アンケートの「⑤理解」の科目平均が高いほど，科目 GPA も高まる傾向がみられる一方で,「④難易度」の科目平均が高いほど，科目 GPA が低下する傾向がみられる．「⑭予習・復習の時間」の科目平均については，ばらつきが大きく科目 GPA との相関関係がなく，授業評価アンケートの「④難易度」の科目平均が高くなるほど「⑭予習・復習の時間」の科目平均が高くなるが，科目 GPA が低下する傾向がみられる．学習成果と質を向上させるためには，授業毎に取り扱う内容の難易度を適切な水準に維持しながら，学生の幅広い学力に対応した授業の改善策を講じる必要がある．

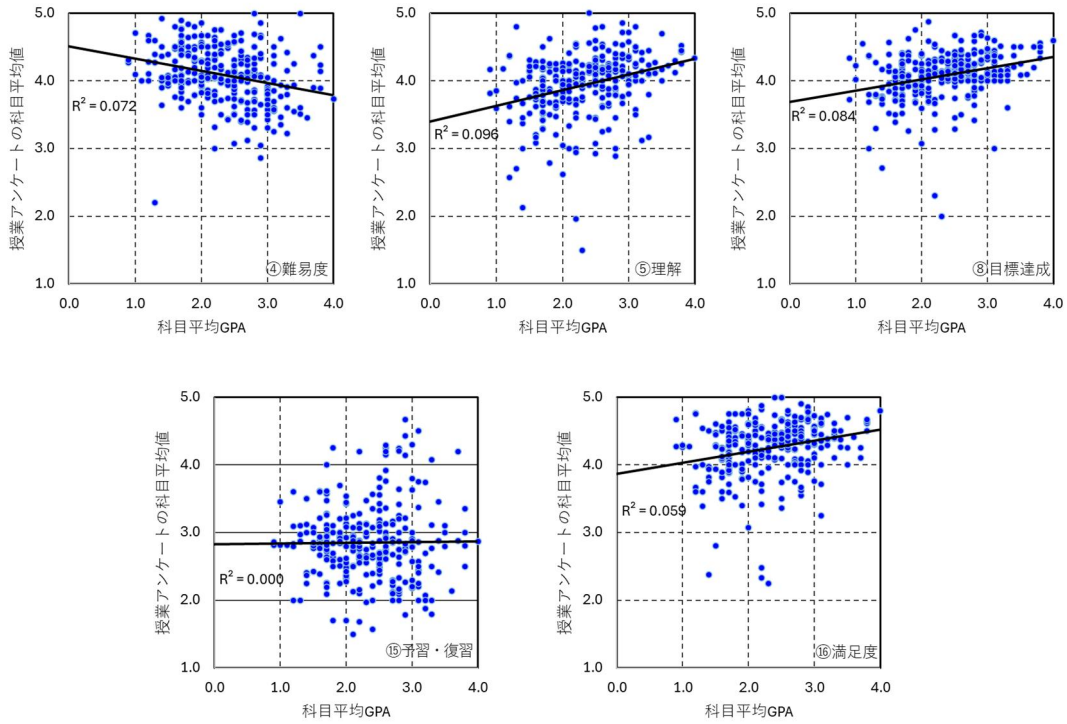


図 5.4.2(1) 令和７年度の科目 GPA と授業評価アンケートの科目平均の相関

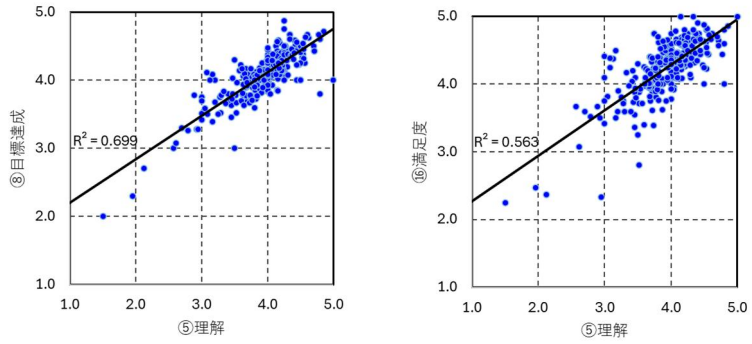


図 5.4.2(2) 令和７年度の授業評価アンケートの⑤理解に対する相関

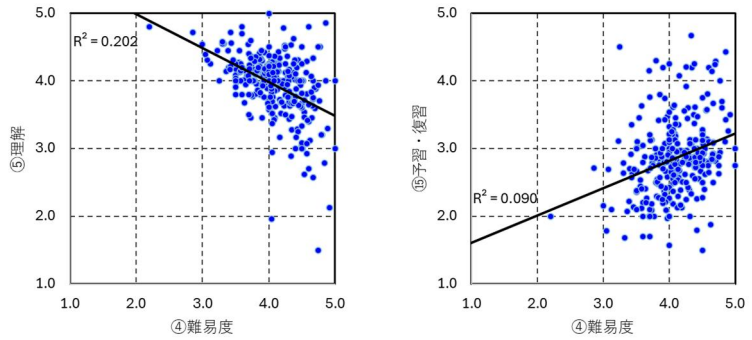


図 5.4.2(3) 令和７年度の授業評価アンケートの④難易度に対する相関

第６章　特筆すべき取り組みや改善事例

・授業関係

各プログラムにおいて，前期・後期の授業科目を対象に，成績評価が適正に行われているかの点検を継続的に実施するとともに，各教員が作成する授業計画改善書に当該科目の成績評価分布を記載した．各プログラムのFD委員は，プログラム教員から提出された授業計画改善書を取りまとめ，成績評価分布一覧表に基づき授業評価の点検を行った．本取組はJABEE認定にも活用されており，今後も継続して実施する予定である．

また，今年度も100件以上の授業を参観希望者に公開するとともに，工学部独自のエクセレント・レクチャラー賞の選定および表彰を行った．これらの取組に関する情報はWeb上で公開し可視化しており，教育改善に資する機会となっている．

・ピアサポート企画

近年，メンタル面で不調を抱える教職員および学生が増加しており，対応の難しさから休職・休学や退学に至る事例も見受けられる．このような状況を踏まえ，令和7年度は専門コンサルタントによる相談会を学部長主導で企画し，10 月に試行的に実施した．初回であったため相談者数は多くはなかったものの，本企画の有用性が確認されたことから，令和8年度以降はFD関連企画として位置づけることを視野に検討を進めている．

第７章　令和７年度の工学部FD活動の総括と今後のFD活動

７．１　令和７年度の工学部FD活動の総括

令和7年度第1回工学部FD委員会において，冒頭で述べた6項目のFD活動を継続して実施することが決定され，すべての活動が計画どおり実施された．授業評価アンケートの各項目の評点は概ね良好である．一方で，予習・復習に関する項目の評点は全体的に低く，改善の余地が認められることから，近年の学生の傾向も踏まえた対応策について検討を進める必要がある．他方，実験科目については引き続き高い評価を維持している．これらは，各教員による教育の質向上に向けた取組の成果であると考えられる．

また，毎年度，各部局において全専任教員の75%以上がFD活動に参加することが求められている．令和７年度に工学部または理工学研究科主催・共催および学内で実施された FD関連企画への参加状況を表7.1に示す．いずれかの活動に参加した教員は101名中93名であり，参加率は93.1%と高い水準を維持している．一方で，FD講演会については，12月12日実施分が他部局主催かつ金曜日開催であったこと，また 12 月 17 日実施分がオンデマンド形式であったことなどから参加率が低く，周知方法を含めた運営面に課題が残された．今後も活発なFD活動を通じて，工学部における教育のさらなる充実が期待される．

表 7.1　令和７年度専任教員の FD 活動参加の状況

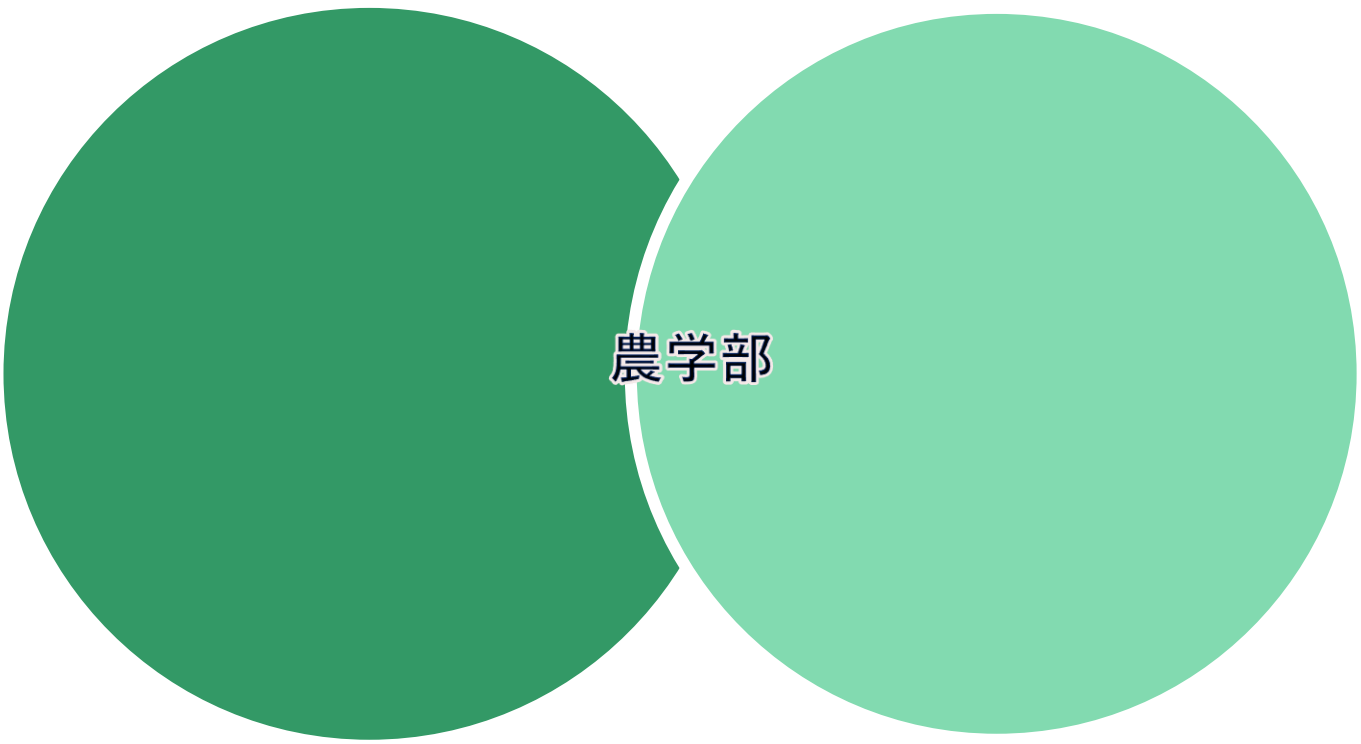
合計参加率		93.1 % （専任教員 101 名中 94 名 参加）							
企画別参加率	理工系研究科・工学部・理学部・共通教育センター合同FD講演会（10.15）	74.3	%	（専任教員	101	名中	75	名 参加）
	理工系研究科・工学部・理学部合同FD講演会（11.19）	80.2	%	（専任教員	101	名中	81	名 参加）
	共通教育センター・理工学研究科合同FD講演会（12.12）	8.9	%	（専任教員	101	名中	9	名 参加）
	理学部・理工学研究科共催FD講演会（12.17）	14.9	%	（専任教員	101	名中	15	名 参加）
	FD・SD合同フォーラム	1.0	%	（専任教員	101	名中	1	名 参加）
	FD・SD講演会	2.0	%	（専任教員	101	名中	2	名 参加）
	前期授業計画改善書	53.5	%	（専任教員	101	名中	54	名 参加）
	後期授業計画改善書	48.5	%	（専任教員	101	名中	49	名 参加）
	前期授業参観報告書	10.9	%	（専任教員	101	名中	11	名 参加）
	後期授業参観報告書	5.9	%	（専任教員	101	名中	6	名 参加）

７．２　今後の FD 活動

工学部では，平成 16 年度より授業アンケートを実施し，各教員による授業改善の取組を推進してきた．また，平成 28 年度からはエクセレント・レクチャラー表彰を導入し，各教員の改善成果を学外にも可視化している．授業の質の向上は，学生への教育効果のみならず，学生および保証人の大学に対する満足度の向上にも寄与することから，今後も継続的な改善が求められる．

さらに，COVID-19 の影響下で導入が進んだオンデマンド授業に加え，生成 AI をはじめとする最新技術への対応も不可欠となっている．このため，教員の知識および教育技術の向上に向けた取組を引き続き推進する必要がある．今後も，適切な講師を招聘した講演会等を継続的に実施していく予定である．

加えて，学生および教職員のメンタル面への支援の重要性も高まっていることから，専門家による相談会の企画等を通じて対応を進めていく．


農学部

ＦＤ活動報告書

（令和７年度）

鹿児島大学農学部

令和８年３月

農学部 FD 活動報告書

1. はじめに

令和 7 年度の農学部 FD 委員会は、委員長を含む教員 6 名と学務課長で構成され、教務係の支援を得て運営された。委員会は、メール会議を主体として行われた。今年度の当委員会で計画・実施した FD 活動事項は、授業公開・参観、授業評価アンケート、農学部ベストティーチャー賞の選考、FD 講習会（電子黒板と双方向遠隔授業システムを活用した教育の DX 化）、教員の FD 活動参加状況の把握・集計、令和 7 年度卒業生アンケート（毎年実施及び 2 年毎に実施）、かごしま農学キャリアマップシステムの更新、令和 7 年度マイナビ自己診断テスト・レクチャーの計画と実施、令和 6 年度改組による教育効果の調査である。以下では、これらの活動の実施概要や調査結果について報告する。

2. 授業公開・参観

授業公開・参観は、農学部の「FD 月間」として授業アンケートと共に農学部における基幹的な FD 活動に位置付けている。実施日程は、以下のとおりである。

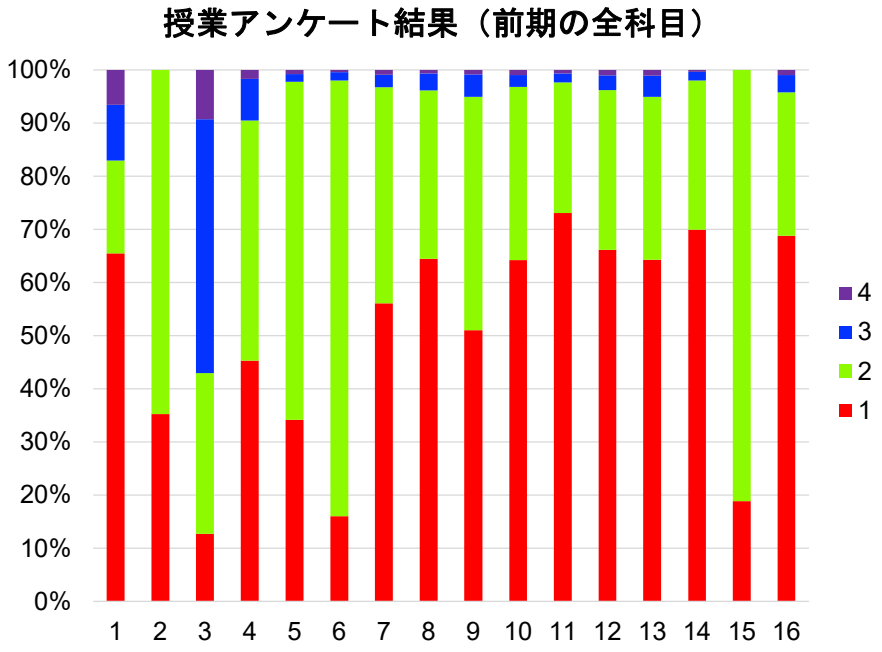
授業参観関連日程
11 月 10 日（月）～ 12 月 12 日（金）（4 週間）：授業参観予約
11 月 10 日（月）～ 12 月 12 日（金）（4 週間）：授業公開（農学部 FD 月間）
12 月 12 日（金）～ 12 月 19 日（金）：授業参観報告書作成・提出

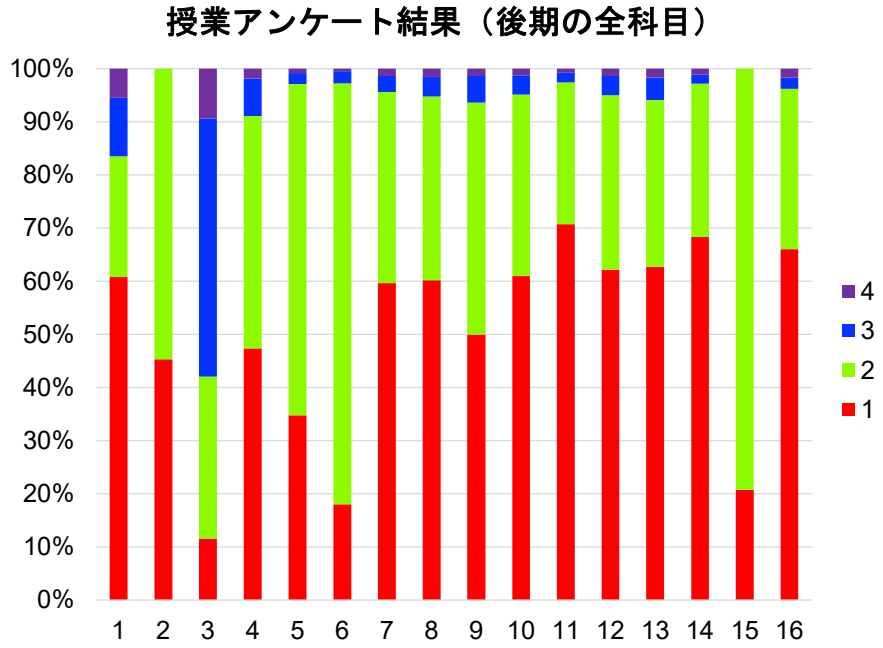
上記の日程で、開講される全科目の授業形態をアナウンスした上で実施した結果、授業参観者は専任教員 58 名中 27 名で参観率は 46.6%であった。昨年度よりも参観率は 16.1%向上したが、今後、参観率をさらに向上させるため、メールや書面による案内に加え、会議等で直接案内するなど、学部全体で FD 月間の意識を高める必要がある。

3. 授業評価アンケート

令和 7 年度の授業評価アンケートの回答率（非常勤講師の授業に対するアンケート回答率を含む）は、前期が 24.1%、後期が 22.5%であり、令和 6 年度の前期 37.0%、後期 21.6%、令和 5 年度と令和 4 年度の全体の平均回答率 38.2%と 38.3%に比べると低かった。特に重要なアンケート結果として、学生からの授業や教員への評価に関する設問 7～14（設問内容は下記参照）については、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した受講生の割合が前期と後期とも 90%以上であった。令和 6 年度及び令和 5 年度においても、設問 7～14 について「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した受講生は 90%以上となっており、農学部全体の講義について、学生からの満足度はある程度の水準で確保できていると判断される。一方、評価の低かった項目は、設問 15「教員への質問」であり、質問

をしなかった割合が前期と後期とも 80%程度であった（令和 6 年度と令和 5 年度の結果も同様）。上記のように、学生からの授業や教員に対する評価は一定の水準にあることから、この結果は、学生が授業に魅力を感じていないことが原因と言うよりは、少なからず受講に対して受動的で消極的な姿勢が関係していると考えられ、本学部が重視する主体的かつ積極的な学習姿勢を養成する教育をさらに推進する必要がある。農学部では、令和 6 年度の改組により、将来の進路（目標）を早期に明確にし、目標に沿った履修計画を自身で立案して学修することを、初年次からキャリア教育科目を通して教育している。本アンケートの対象科目の多くは 2 年生と 3 年生に開講されており、今回アンケートに回答した改組後の学生は 2 年生と 1 年生であることから、キャリア教育の効果を十分に評価したアンケート結果とは言い難い。したがって、学生の主体性や積極性の向上については、今後のアンケート結果（主体性・積極性を評価し得るその他の設問として講義外学習に関する設問 2）等も含め、また経年変化にも着目してモニタリングしていく必要がある。





＜アンケートの設問＞

1.この授業の出席状況を教えてください。

(1: 全て出席　2: 1 回欠席　3: 2 回欠席　4: 3 回以上欠席)

2.この授業に関連のある参考書、論文、雑誌などを読みましたか。

(1: はい　2: いいえ)

3.この授業について、１コマあたり、どの程度予習や復習をしましたか。（レポート作成を含む）

(1: 90 分以上　2: 60 分～90 分以上　3: 60 分未満　4: しなかった)

4.この授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか。

(1: そう思う　2: 1 どちらかと言えばそう思う　3: どちらかと言えばそう思わない　4: 思わない)

5.この授業内容の水準はどうでしたか。

(1: 高かった　2: 1 妥当だった　3: 少し低かった　4: かなり低かった)

6.この授業の分量はどうでしたか。

(1: 多かった　2: 1 妥当だった　3: やや少なかった　4: かなり少なかった)

7.この授業は知力や学力の向上に役立ちましたか。

(1: そう思う　2: 1 どちらかと言えばそう思う　3: どちらかと言えばそう思わない　4: 思わない)

8.この授業は将来役立つと思いますか。

(1: そう思う　2: 1 どちらかと言えばそう思う　3: どちらかと言えばそう思わない　4: 思わない)

9.この授業の学習目標は達成できたと思いますか。
(1: そう思う　2: 1 どちらかと言えばそう思う　3: どちらかと言えばそう思わない　4: 思わない)
10.この授業は総合的にみて満足できるものでしたか。
(1: そう思う　2: 1 どちらかと言えばそう思う　3: どちらかと言えばそう思わない　4: 思わない)
11.この授業はシラバスに沿って進められましたか。
(1: そう思う　2: 1 どちらかと言えばそう思う　3: どちらかと言えばそう思わない　4: 思わない)
12.板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか。
(1: そう思う　2: 1 どちらかと言えばそう思う　3: どちらかと言えばそう思わない　4: 思わない)
13.教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思いましたか。
(1: そう思う　2: 1 どちらかと言えばそう思う　3: どちらかと言えばそう思わない　4: 思わない)
14.教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか。
(1: そう思う　2: 1 どちらかと言えばそう思う　3: どちらかと言えばそう思わない　4: 思わない)
15.講義・演習中やオフィスアワー等で教員に質問をしましたか。
(1: 質問した　2: 1 質問しなかった)
16.質問に対する教員の対応に満足しましたか。
(1: そう思う　2: 1 どちらかと言えばそう思う　3: どちらかと言えばそう思わない　4: 思わない)

4. 農学部ベストティーチャー賞の選考

農学部ベストティーチャーの選考にあたっては、授業評価アンケートの結果を基に、下記の①から④の基準に沿って前期と後期のすべての講義科目をスコア化して比較した。

① 授業評価アンケートで FD 委員会として意味の大きいと思われる下記の項目 9〜14 を点数化した。点数化の詳細は、回答番号の 1 が最高、4 が最低の 4 段階評価のため、1 が 15 点、2 が 10 点、3 が-10 点、4 が-15 点とし、その合計を算出した。また、アンケート回答率については 100%が 10 点になるよう比例配分した。

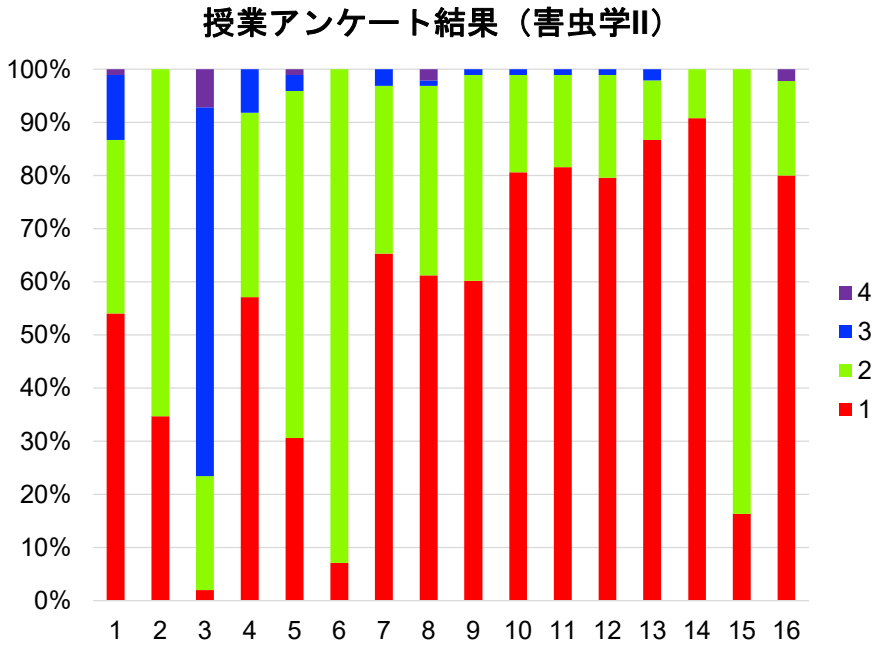
9. この授業の学習目標は達成できたと思いますか。（15 点）
10. この授業は総合的にみて満足できるものでしたか。（15 点）
11. この授業はシラバスに沿って進められましたか。（15 点）
12. 板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか。（15点）

13. 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思いましたか。（15 点）
14. 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか。（15 点）

② 授業参観によるベストティーチャーの被推薦数を基に加点した。4 人以上を 4 点、3 人を 3 点、2 人を 2 点、1 人を 1 点とした。

③ 受講者数に応じた重みを付けるため、受講者数 150 人以上に係数 1.05 を、受講者数 100 人以上に係数 1.00 を、受講者数 50 人以上に係数 0.95 を、受講者数 50 人未満に係数 0.90 をそれぞれかけた。

④ 授業評価アンケートの回答率が低いことによって正当な評価が得られない危険性を排除するために、選考対象を回答率 50%以上の教員に限定した。



以上の結果、害虫学 II（担当：坂巻祥孝先生）が 93.4 点で最高点となり、同科目を令和 7 年度農学部ベストティーチャーの対象科目に決定した（報告会は令和 7 年度 4 月に実施）。得られたアンケートの中で、回答率が 50%以上の科目は 42 科目であり、その平均スコアは 78 点であった（令和 6 年度の平均点 77 点）。42 科目の中で 90 点以上の科目は害虫学 II のみであった。詳細な選出理由は、以下の通りである。

害虫学 II が、卓越した指導力で教育効果の高い授業であったと考えられる理由として、アンケート項目の「この授業は総合的に見て満足できたか」の問で、「そう思う」を選んだ割合は、当推薦科目が 81%で、前期全科目の平均 64%、後期全科目の平均 61%より高かった。また、「板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか」の問でも、「そう思う」を選んだ割合が、当推薦科目は 80%で、前期全科目の 66%，後期全科目の 62%よ

り高かった。学生からのコメントでも、「資料やスライドが大変見やすく勉強しやすかった」、「授業がわかりやすく面白かった」などの意見が多数寄せられており、担当の坂巻先生が意識されている「現場を訪問した際に体感したことを中心に授業を組み立てるようにしている」教育効果が発揮されていることが伺える。

教育方法の工夫または改善に取り組み、顕著な教育成果をあげたと考えられる理由として、担当の坂巻先生によれば、過去の講義からの改善として、現場で体感したことを中心に授業を組み立てること、配布プリントに空欄をつくり、受講生が授業中に説明を聞きながら空欄を埋めることで、配布プリントが教科書として完成するようにしていること、ミニッツペーパーのすべての質問に対する質疑応答を PDF 化し、次週の授業よりも前に manaba 上に掲示して復習の効果を高めていることが挙げられる。こうした教育方法の工夫と改善による教育効果は、授業を参観した他の教員からも評価されている。また、アンケート結果より、「板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか」、「教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいか」、「教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられたか」の問で、「そう思う」を選んだ割合は、いずれも 80%以上で、全科目の平均よりいずれも 10%以上高かった。この結果に加え、ミニッツペーパーの書き込み・質問が多く、活発な意見交換がなされていることからも、学生が得た学習成果が大きいことが伺える。

5. FD 講習会：電子黒板 MAXHUB 及び双方向遠隔授業システムを活用した教育の DX 化

農学部は、令和 6 年度の改組に伴い、従来の 3 学科から 1 学科 4 プログラムからなる教育体制となった。新体制では、「キャリア教育」と「教育環境の DX 化」を改革の大きな柱としている。そのため、令和 5 年度は、キャリア教育についての講習会を開催し（令和 5 年 7 月 19 日実施）、令和 6 年度は、改革のもう 1 つの柱である「教育環境の DX 化」に関連し、最新の電子黒板 MAXHUB の活用方法と活用による教育効果についてのオンライン講習会を開催した（令和 7 年 2 月 19 日実施）。令和 7 年度は、「教育環境の DX 化」に関し、電子黒板 MAXHUB による教育効果を高める利用方法に加え、双方向遠隔授業システムの紹介を目的とする講習会を、令和 7 年 12 月 17 日に 101 講義室で開催した。講習会には専任教員 58 名中 40 名が参加し、参加率は 69.0%であった。



電子黒板 MAXHUB の利用方法の講習会



双方向遠隔授業システム



双方向遠隔授業システムの概要説明資料

農学部では、今後、改組案に沿って教育の DX 化を順次進めていく。MAXHUB は、ホワイトボード機能を備え、Windows の OS を搭載している。大型ディスプレイが Windows タブレットのように使用できることから、普段から Windows PC を操作する教員においては、マニュアルがなくても使用しながら操作を覚えることができる。講習会では、そうした Windows に依存した機能の説明は割愛され、本機特有の機能が紹介された。例えば画面上で受講生と双方向に意見を交換でき、それを受講生も共有できる機能や Teams と組み合わせた双方向授業の可能性について理解を深めた。なお、農学部では、令和 8 年 4 月日時点で、5 つの講義室（101 講義室、105 講義室、201 講義室、202 講義室、204 講義室）に配備済みである。また、改組案では、農学部の遠隔附属施設と郡元講義室を双方向に結ぶ遠隔授業システム、高速ネットワーク、VR コンテンツ、モバイル講義受配信インフラ等を整備し、教員・学生ともに現場を重視する教育体制を強化することを掲げている。こうした将来計画を実現するための準備として、講習会では現在 101 教室に設置されている双方向遠隔授業システムの概要を知ることを目的として、その概要の説明がなされた。

6. FD 活動参加状況

農学部専任教員の令和 7 年度の FD 活動参加率は以下のとおりである。

合計参加率		84.5 % （基幹教員等 58 名中 49 名 参加）
企画別参加率	授業参観	46.6 % （基幹教員等 58 名中 27 名 参加）
	農学部FD講習会	69.0 % （基幹教員等 58 名中 40 名 参加）

7. 令和 7 年度卒業生アンケート（毎年及び 2 年毎に実施）

毎年のアンケート結果

本アンケートの対象は令和 7 年度の卒業生である。アンケート回答率は 25%（概算の卒業生 200 名に対して回答者数 50 名で男女比は概ね 1:2）と低かったため、得られた結果の代表性は低いが、農学部の教育に特に深く関係するアンケート結果を以下に記す。まず、「鹿児島大学農学部を選択した理由は何ですか」の問いで、「自分の希望する専攻」が 47%（前年度 69%）で最も多かった。また、「大学教育に何を求めますか」の問では、「専門的知識を身につける」、「広い教養を身につける」、「就職のことを考えて」がほぼ同率であった（前年度は「専門知識を身につける」が最高率）。これらの結果から、前年度とはやや異なり、本学部における就学目的は学生それぞれで多様である可能性がある。次に、「社会に出ていくための十分な実力がついたと思いますか」、「大学に入学するときに考えていた学習・研究が十分にできたと思いますか」、「専門課程での教育は社会や学生の要求にこたえていると思いましたか」の問いでは、いずれも約 80%が「はい」と回答しており（前年度も同様）、前年度に引き続き、専門教育の一定の効果を学生が実感していることが伺える。これに関連し、「専門教育はあなたの進路決定に役立ちましたか」の問い対して、90%（前年度 82%）の学生が「大変役に立った」、「役に立った」と回答している一方、「あまり役に立たなかった」、「役に立たなかった」を選択した学生が 10%（前年度 18%）であった。この設問の重要性より、「あまり役に立たなかった」、「役に立たなかった」を選択する学生はいないことが望ましい。令和 7 年度の結果は前年度から改善傾向にあるものの、今後、現状よりも本設問の結果が悪化しないことを基準とし、可能な限り改善していくことが重要である。その他に、特に高い割合が認められた学生からの要望として、「他学科・他学部の単位をもっと取得できるようにした方が良い」と回答した学生の割合は 60%に上った。

2 年毎のアンケート結果

本アンケートは、農学部独自の設問を設定し、令和 3 年度の卒業生を対象に実施した。アンケート回答率は 8.4%（卒業生 202 名に対して回答者数 17 名）と低かったため、得られた結果の代表性は低いが、農学部の教育に特に深く関係する 2 つの設問について結果を以下に記す。「専門教育で受けた教育」の評価を尋ねたところ、「とても良かった」と「ある程度良かった」の回答率は 82%であり、毎年実施のアンケート結果と同様に、卒業後も専

門教育の一定の効果を学生が実感していることが伺える。また、「専門教育における勉強にどのくらい一生懸命に取り組みましたか」の問いに対して、「とても一生懸命だった」、「ある程度一生懸命だった」の回答率は59%であり、上記の設問と矛盾する回答が認められた。つまり、農学部で受けた教育にはある程度満足しているが、卒業後に振り返ると、もっと充実した学修を自身の努力で行うことができたとの後悔の思いが伺える。卒業生が感じるこうした思いは、教員が実際に教え子から比較的頻繁に聞くこともあり、大学生活において学生がより勉学に真面目に向かい合う姿勢を有し、それを卒業まで継続することができるように、教育サイドとしても何らかのサポートが必要と思われる課題の一つである。

対策、実際の取組み、その評価

以上の卒業生アンケート結果より、考えられる対策、過去（令和6年度農学部改組）からの改善事項、令和7年度のFD委員会による取組み、各取組み結果に対する評価を以下に整理する。なお、今回抽出した要望「多様な分野の講義を広く受講したい」と課題「学生が勉学により真面目に取組む姿勢の維持・向上」に対する取組み成果の評価については、下記の表に記載したアンケートの今後の結果で評価する必要がある。

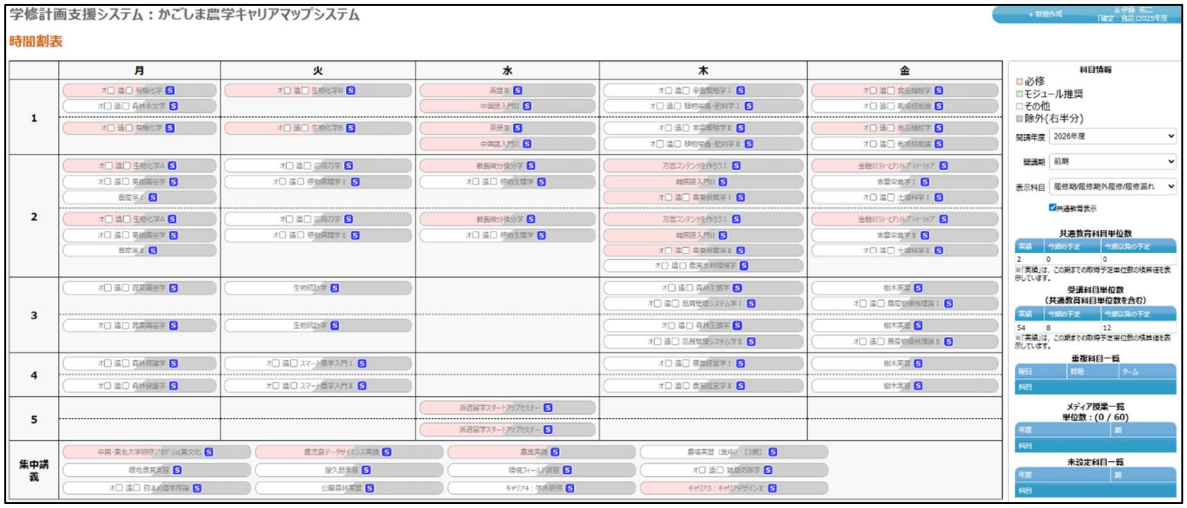
卒業生アンケートから抽出した課題・要望とその対策・取組み・評価

	毎年アンケート		2年毎アンケート
課題・要望	多様な分野の講義を幅広く受講したい	専門教育に対する満足度の維持・向上	学生が勉学により真面目に取組む姿勢の維持・向上
対策	農学部の中ですべての講義科目を受講できるように科目の選択自由度を向上させるカリキュラム改革	個々の学生が自身で検討した学修意義・目的に沿って、主体的に受講することができる教育及び学修環境の構築→進路のミスマッチを軽減し、学生が主体的かつ能動的に学修する環境を構築	左記に同じ
令和6年度の改組による改善事項	農学部で開講されるすべての科目を受講することを可能とした分野横断対応の1学科制の整備 ↓ 農学部で開講される全科目の開講情報（履修期や時間割の情報）や学修によって身につく技術や能力などの情報がデータベースとして組み込まれた「学習計画支援システム：かごしま農学キャリアマップシステム」を独自に開発	1年次前期に、農学の多岐にわたる分野の概要を知ることを目的とした導入的講義（座学による紹介科目）や学内外のフィールドを活用した演習科目を編成し、同時に個々の学生が将来の進路（学習意義・目的）を自身で明確にしていく重要性・必要性を教えるキャリア教育科目を配置 ＋ 個々の学生が検討した多様な将来進路（教育に対する学生からの多様な要求）に応えるため、農学部で開講されるすべての科目を受講することを可能とした分野横断対応の1学科制の整備 ↓ 1年次後期に、学生自ら2～4年生までの履修計画（時間割）を立案するキャリアデザイン科目を編成 ＋ 「学習計画支援システム：かごしま農学キャリアマップシステム」を独自に開発	左記に同じ
令和7年度の取組み	・学生が自身の将来進路に対応した科目を検索し、簡単で分かりやすく履修計画を立案することができるように、かごしま農学キャリアマップシステムを改良（詳細は、第8節参照）	・左記に同じ ・学生の将来進路に対する意識をより強くするため、また内面の成長を促すために、キャリア形成に対する姿勢、社会で求められる基礎的能力などを客観的に測定する自己診断テストとそれに関連する講義を、株式会社マイナビと協力して計画・実施	左記に同じ
取組み成果の評価	・毎年の卒業生アンケートの設問「他学科・他学部の単位をもっと取得できるようにした方が良い」	・毎年の卒業生アンケートの設問（専門教育の効果を調査する設問：第7節参照） ・教育効果を調査する農学部独自のアンケート調査（第10節参照）	・2年後の卒業生・修了生アンケートの設問「専門教育における勉強にどのくらい一生懸命に取り組みましたか」

8. かごしま農学キャリアマップシステムの更新

令和 6 年度の改組に伴い、本システムは農学部で独自に開発されたが（作製業者：株式会社南日本情報処理センター）、本年度はより扱いやすいシステムとするためにシステムの改良を行った。具体的には、時間割の編集において、各科目ラベルにシラバスボタンを加え、学生が時間割を検討する際に対象科目のシラバスを迅速かつ簡単に確認することができるようにした。また、各期の単位数を確認するトップページで、共通教育科目の単位数を個別に表示するように改善した。その他、システムを安定的に運用していくために、不要な表示やメモリを余計に消費するシステムのデザイン面を見直した。さらに、本システムの運用に

おいて、毎年度または毎期、履修課程表と時間割のデータを学内システムからマニュアル操作で出力し本システムに取り込む必要があり、この作業の際にデータベースにエラーが生じ、学生が実際に時間割を編集する際に問題（たとえば、同じ科目が重複して表示されるなど）が生じていた。こうした問題に対処するために、上記の操作を可能限り自動化し、データベースのエラーチェック機能を備えたシステム管理者用ツールを構築・整備した。



かごしま農学キャリアマップシステムの時間割編集ページ

9. 令和 7 年度マイナビ自己診断テスト・レクチャーの計画と実施

農学部では、令和 6 年度の改組時に新規に開講したキャリア教育科目と並行して、株式会社マイナビが運用する自己診断テストとこれに関連する講義を計画し、これらを試験的に実施してきた。このテストは、学生のキャリア形成に対する姿勢や社会で求められる基礎的能力（社会人基礎力）などを客観的に測定することができ、スマートフォンを用いて web で受験することができる。テストは 15 分程度で終了するため、自己診断の意義や診断結果のキャリア形成への活用方法を教える講義もテストと同時に 1 コマ 90 分の時間で実施する。学生の将来進路に対する意識をより強くし、内面の成長を促す効果を期待し、本年度以降も継続して実施する計画である。令和 7 年 3 月と令和 8 年 2 月に伊藤祐二准教授（FD 委員長）、濱中大介准教授（現教授，キャリア教育科目の担当）、遠城道雄教授（農学キャリア教育担当）とマイナビ担当者間で会議を開催し、自己診断テスト・レクチャーの計画や講義内容等について相談した。その結果、1 年次 4 月から 3 年次 4 月までに概ね半年以上の期間を空けて合計 4 回の自己診断テストと講義を実施することを基本とし、令和 7 年度の各学年への実施日を決定した。



株式会社マイナビによる自己診断テストと講義（農学部 101 講義室）

10. 令和 6 年度改組による教育効果の調査

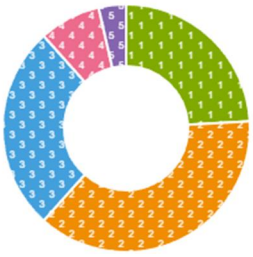
農学部の令和 6 年度改組は、キャリア教育、専門導入科目に基づいた初年次教育、1 学科分野横断教育の教育改革を中核とする。その要点は、まず学生の主体性を重視し、多岐にわたる農学の広範な分野特性を活かし個々の学生が自ら検討した多様な学修目的や進路に対応できるように、1 学科制を採用して農学部のすべての科目を受講できる分野横断教育を編成したことである。たとえば、専門性、就職分野、資格などに対応した科目のモジュール化とその無数の組み合わせにより、多様な学生ニーズに対応した履修カリキュラムを編成できる仕組みは、他大学でも類を見ない本学部独自の発想によって生まれた教育体制の一つと言える。さらに、こうしたカリキュラムの検討を学生自身が主体的に行うことを教える。これを実現するために、学習計画支援システム：かごしま農学キャリアマップシステムを独自に開発し、初年次に開講されるキャリア形成演習科目（キャリアデザイン I 及び II）の中で、このシステムを活用した 2 年生～4 年生までの履修計画を立案（時間割まで作成）するキャリア教育体制を整えている。以上のように、令和 6 年度の改組以降の教育は極めて独自的で先進的な内容であることから、この教育成果の評価は極めて重要である。農学部では、改組による教育効果を評価するため、改組前と改組後に教育を受けた学生（前者が令和 4 年度と令和 5 年度入学生、後者が令和 6 年度と令和 7 年度入学生）を対象とし、各入学生の 1 年終了時、3 年終了時、卒業時にアンケート調査を実施していくことにしている。以下では、昨年度までに得られたアンケートデータの中から、改組前と改組後の教育効果を直接比較可能な 1 年生終了時の 2 学年分のデータを集計して結果を示すとともに、教育効果についての評価点を整理した。

まず，各アンケートの回答率（各図のタイトルに併記）は 59%～86%であり比較的高かった。各年とも同じ内容の 3 つの設問「①入学後 1 年間の農学部教育 （共通教育を除く農学部の教育） が，学修計画，進学計画，就職計画（キャリアアッププラン）にどの程度役に立ちましたか？」、「②入学後 1 年間の農学部教育（共通教育を除く農学部の教育）にどの程度満足しましたか？」、「③入学後 1 年間の農学部教育 （共通教育を除く農学部の教育） が，進路の決定にどの程度貢献したと思いますか？」について回答を求めた。その結果、改組前の令和 4 年と令和 5 年入学生については、①の設問で「大いに役に立った」または「役に立った」と回答した学生は 62%と 62%、②の設問で「大変満足」または「満足」と回答した学生は 72%と 72%、③の設問で「大いに貢献した」または「貢献した」と回答した学生は 51%と 62%であった。一方、改組後の令和 6 年と令和 7 年入学生については、①の設問で「大いに役に立った」または「役に立った」と回答した学生は 76%と 79%、②の設問で「大変満足」または「満足」と回答した学生は 81%と 81%、③の設問で「大いに貢献した」または「貢献した」と回答した学生は 71%と 72%であり、いずれも概ね 10%程度改組前の回答率よりも高かった。したがって、入学後 1 年間の学修期間の比較ではあるが、農学部における学修とともに推進されるキャリア形成と将来進路の検討に至るまで、改組によって新たに展開する農学部の教育の効果は全般的に確実に向上している。

①入学後1年間の農学部教育（共通教育を除く農学部の教育）が，学修計画，進学計画，就職計画（キャリアアッププラン）にどの程度役に立ちましたか？(選択必須)

1.1 回答結果 ON OFF

1. 大いに役に立った
2. 役に立った
3. どちらとも言えない
4. 役に立たなかった
5. まったく役に立たなかった

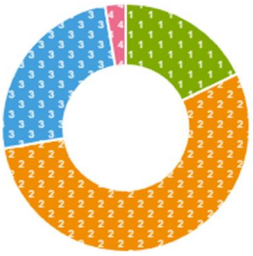


大いに役に立った	24%	(27)
役に立った	38%	(42)
どちらとも言えない	27%	(30)
役に立たなかった	8%	(9)
まったく役に立た..	4%	(4)

②入学後1年間の農学部教育（共通教育を除く農学部の教育）にどの程度満足しましたか？(選択必須)

1.2 回答結果 ON OFF

1. 大変満足
2. 満足
3. どちらとも言えない
4. 不満
5. 大変不満

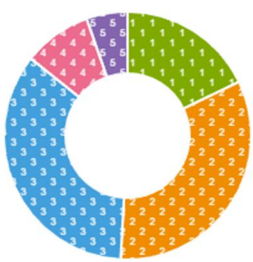


大変満足	18%	(20)
満足	54%	(61)
どちらとも言えない	25%	(28)
不満	3%	(3)
大変不満	0%	(0)

③入学後1年間の農学部教育（共通教育を除く農学部の教育）が，進路の決定にどの程度貢献したと思いますか？(選択必須)

1.3 回答結果 ON OFF

1. 大いに貢献した
2. 貢献した
3. どちらとも言えない
4. 貢献しなかった
5. まったく貢献しなかった



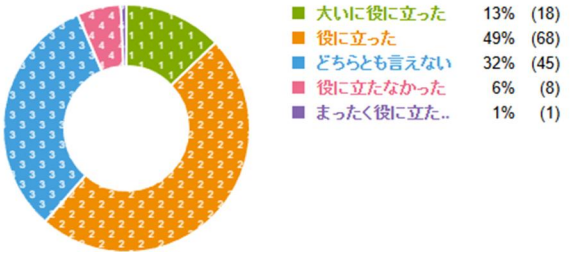
大いに貢献した	18%	(20)
貢献した	33%	(37)
どちらとも言えない	35%	(39)
貢献しなかった	9%	(10)
まったく貢献しなか..	5%	(6)

令和 4 年入学生（改組前学生）の 1 年終了時の結果（回答率 59%）

①入学後1年間の農学部教育（共通教育を除く農学部の教育）が，学修計画，進学計画，就職計画（キャリアアッププラン）にどの程度役に立ちましたか？**(選択必須)**

1.1 回答結果 ON OFF

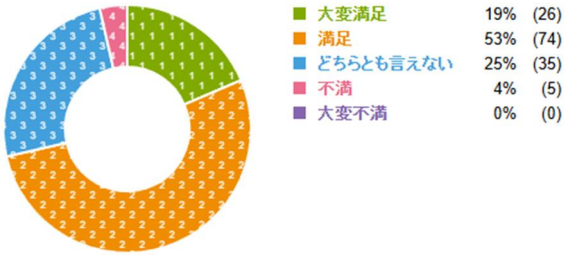
1. 大いに役に立った
2. 役に立った
3. どちらとも言えない
4. 役に立たなかった
5. まったく役に立たなかった



②入学後1年間の農学部教育（共通教育を除く農学部の教育）にどの程度満足しましたか？**(選択必須)**

1.2 回答結果 ON OFF

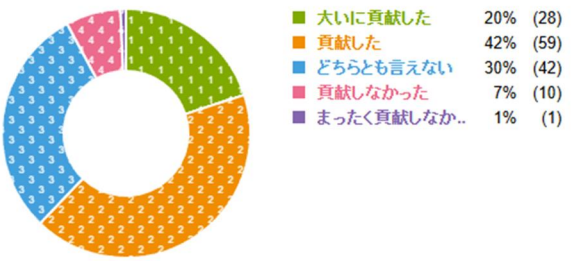
1. 大変満足
2. 満足
3. どちらとも言えない
4. 不満
5. 大変不満



③入学後1年間の農学部教育（共通教育を除く農学部の教育）が，進路の決定にどの程度貢献したと思いますか？**(選択必須)**

1.3 回答結果 ON OFF

1. 大いに貢献した
2. 貢献した
3. どちらとも言えない
4. 貢献しなかった
5. まったく貢献しなかった

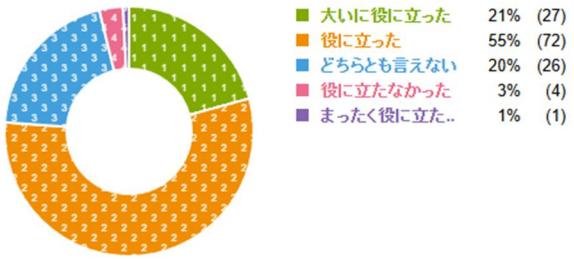


令和 5 年入学生（改組前学生）の 1 年終了時の結果（回答率 69%）

①入学後1年間の農学部教育 （共通教育を除く農学部の教育） が，学修計画，進学計画，就職計画（キャリアアッププラン）にどの程度役に立ちましたか？(選択必須)

1.1 回答結果 ON OFF

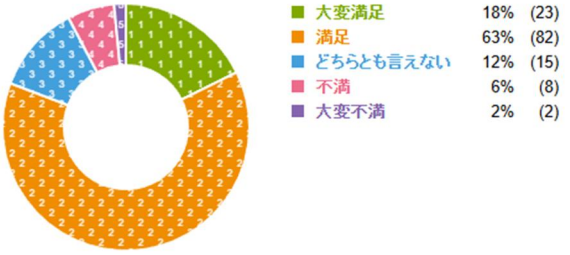
1. 大いに役に立った
2. 役に立った
3. どちらとも言えない
4. 役に立たなかった
5. まったく役に立たなかった



②入学後1年間の農学部教育（共通教育を除く農学部の教育）にどの程度満足しましたか？(選択必須)

1.2 回答結果 ON OFF

1. 大変満足
2. 満足
3. どちらとも言えない
4. 不満
5. 大変不満



③入学後1年間の農学部教育 （共通教育を除く農学部の教育） が，進路の決定にどの程度貢献したと思いますか？(選択必須)

1.3 回答結果 ON OFF

1. 大いに貢献した
2. 貢献した
3. どちらとも言えない
4. 貢献しなかった
5. まったく貢献しなかった

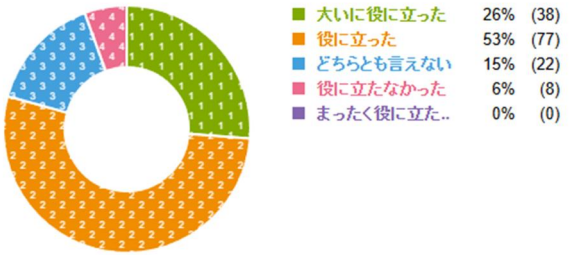


令和 6 年入学生（改組後学生）の 1 年終了時の結果（回答率 78%）

①入学後1年間の農学部教育 （共通教育を除く農学部の教育） が，学修計画，進学計画，就職計画（キャリアアッププラン）にどの程度役に立ちましたか？(選択必須)

1.1 回答結果 ON OFF

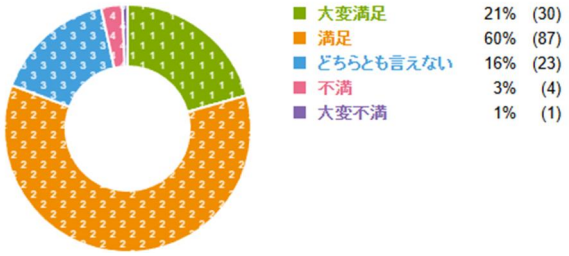
1. 大いに役に立った
2. 役に立った
3. どちらとも言えない
4. 役に立たなかった
5. まったく役に立たなかった



②入学後1年間の農学部教育（共通教育を除く農学部の教育）にどの程度満足しましたか？(選択必須)

1.2 回答結果 ON OFF

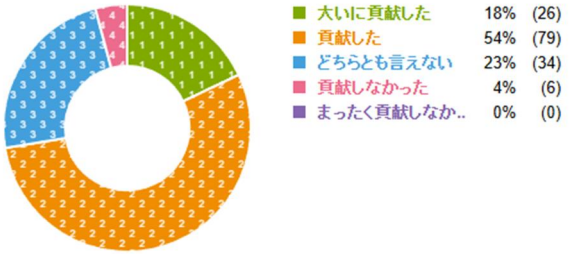
1. 大変満足
2. 満足
3. どちらとも言えない
4. 不満
5. 大変不満



③入学後1年間の農学部教育 （共通教育を除く農学部の教育） が，進路の決定にどの程度貢献したと思いますか？(選択必須)

1.3 回答結果 ON OFF

1. 大いに貢献した
2. 貢献した
3. どちらとも言えない
4. 貢献しなかった
5. まったく貢献しなかった



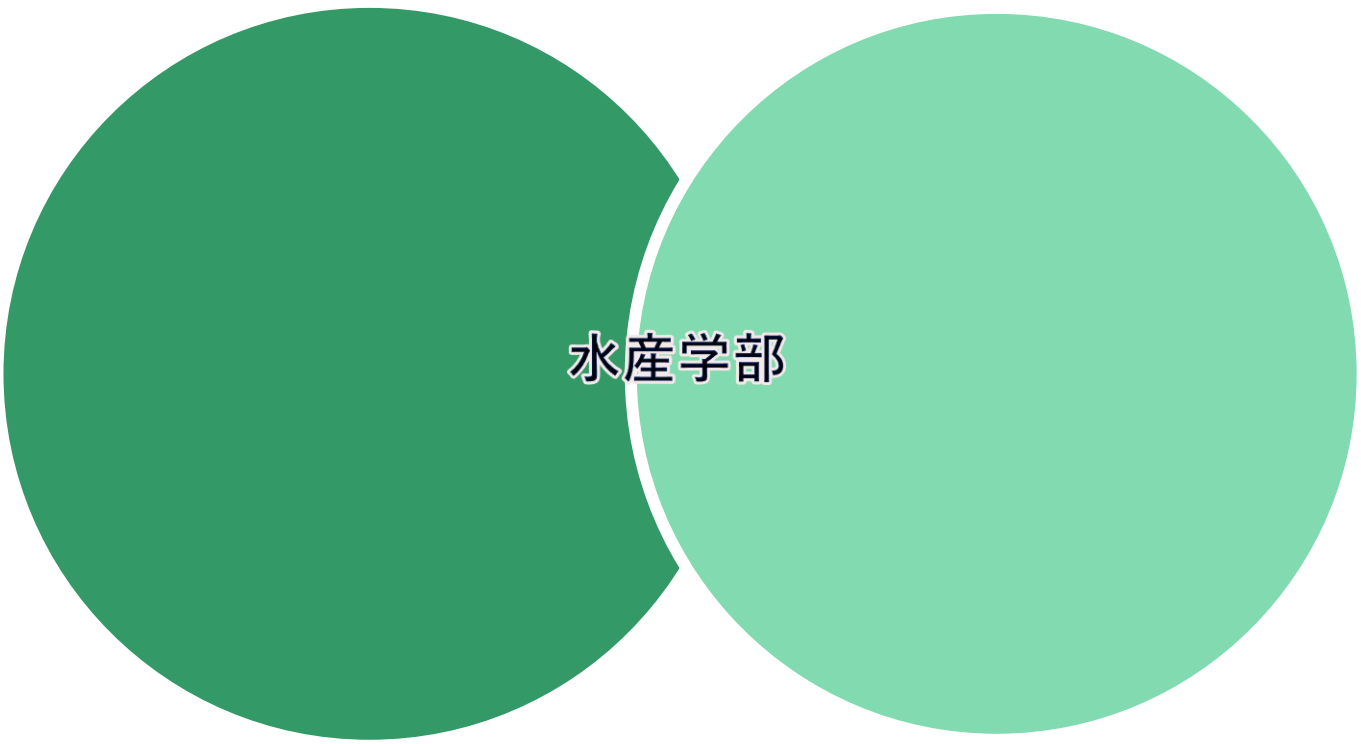
令和７年入学生（改組後学生）の１年終了時の結果（回答率 86%）

11. おわりに

本報告書では、農学部が従来からFD関連活動として実施している授業公開・参観（第2節）、授業評価アンケート（第3節）、ベストティーチャー賞の選考（第4節）、農学部教員のFDイベントへの参加状況（第6節）、卒業生アンケート（第7節）に加え、令和6年度改組で重点化した教育のDX化（第5節）とキャリア教育（第8節、第9節）に関連するFD活動及びこれらを評価するアンケート（第10節）について整理した。従来から行っている活動については、今後も継続しつつ、アンケート調査結果に基づく評価も踏まえ、より意義の高いFD活動について、当委員会を中心に検討することが重要である。アンケート調査は、農学部の教育及びFD活動の効果を調べる上で重要な資料であるが、回答数が不足し、それらの効果を適切に評価できない調査もある。この原因の一つとして、アンケート調査の数が多く、また重複した設問も存在するため、学生から回答を得難いことが考えられ、回答率を向上させるためのアンケート調査の方法についても今後継続して検討すべきである。改組に伴い、農学部の教育は大きく変革されたが、その教育効果をモニタリングしながら、課題について農学部教員で情報を共有し、対応策について学部全体で取り組む体制が求められる。そのためにも、第8節と第9節で報告したようなFD活動に加え、第5節で報告したFD講習会は重要な意味を持つ。改組後2年が経過し、現時点では、改組後の教育を評価することができる学生は2学年のみである。本報告書の第10節では、一部ではあるが改組による教育効果を確認するアンケート結果について記すことができた。今後も学年進行とともにデータを蓄積し、改組によって改革された教育及びFD活動の効果を継続的にモニタリングしていく必要がある。

令和7年度　鹿児島大学農学部ＦＤ委員会委員

委　員　長	伊藤　祐二	（農学科環境共生科学プログラム担当）
副委員長	志水　勝好	（農学科植物資源科学プログラム担当）
委　　員	清水　圭一	（農学科植物資源科学プログラム担当）
委　　員	榮村奈緒子	（農学科環境共生科学プログラム担当）
委　　員	坂尾こず枝	（農学科食品生命科学プログラム担当）
委　　員	亀川　藍	（農学科農食産業・地域ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄプログラム担当）
事務担当者	新田誠一郎	（学務課長）
事務担当者	神宮司浩二	（教務係長）


水産学部

よりよい教育環境を創るために

学生と教職員による、学生のための
ファカルティ・ディベロップメントの取り組み

2025 年度

鹿児島大学水産学部 FD 委員

目次

1.	取り組みの概要	P.1
2.	特筆すべき取り組みや改善事例等	P.2
3.	授業アンケート	P.3
4.	授業公開・参観と授業改善	P.6
5.	FD 講習会	P.9
6.	卒業時アンケート	P.15
7.	ベストティーチャー賞	P.19

1. 取り組みの概要

鹿児島大学水産学部ファカルティディベロップメント（以下「FD」）委員会では、各教員の教育技術・能力の研鑽、学生の授業に対する理解力・満足度の向上、教育・研究現場が抱える問題点への対応などを課題とした活動に取り組んできた。2025年度に水産学部および農林水産学研究科（水産学系）で企画・開催した FD 活動は、以下のとおりである。

1. 授業アンケート（前期・後期）
2. 授業改善報告（前期・後期）
3. 授業公開（前期・後期）
4. 授業参観・報告（前期・後期）
5. 第１回 FD 講習会「若手・中堅研究者向け研究セミナー」
6. 第２回 FD 講習会「若手・中堅研究者向け研究セミナー」
7. 第３回 FD 講習会「教育システムと連携した「西太平洋地域人材国際連携構想」について」

これら FD 活動に対する参加状況（令和 7 年度基幹教員等）は、以下のとおりである。

1. 授業アンケート（前期91科目・後期92科目）
2. 授業改善報告（22人：参加率55%）
3. 授業公開（学部前期91科目・学部後期92科目：参加率 100%）
4. 授業参観・報告（11人：参加率 27.5%）
5. 第１回 FD 講習会（35人：参加率87．5%）
6. 第２回 FD 講習会（29人：参加率72．5%）
7. 第３回 FD 講習会（31人：参加率77．5%）

各 FD 活動への参加状況を実人数の教員単位で集計すると、殆どの教員が何らかの FD 活動に参加しており、水産学部全体の参加率は97．5%であった。このことからも、水産学部における FD 活動の意識醸成が高いことが見て取れる。

なお、農林水産学研究科 FD 活動は各教員が所属する学系（部局）の FD 活動において実施されることとなっている。このため、農林水産学研究科の水産学系に所属する殆どの教員は、水産学部 FD 活動のいずれかに参加したこととなった。

2. 特筆すべき取り組みや改善事項例等

2-1. 特筆事項

2025 年 12 月 17 日、第 3 回 FD 講習会を開催した。本講習会では、加用監事を講師として招き、現在、水産学部・農林水産学研究科において構想中の「教育システムと連携した西太平洋地域人材国際連携構想」を踏まえ、その前提となる鹿児島大学の国際化戦略について、方向性や今後の展望に関する講演をいただいた。

農林水産学研究科では、アジアの複数の大学により開設された Postgraduate（Master）Programme on Tropical Fisheries with International Linkage（国際連携による研究科熱帯水産学プログラム）を運用しており、各教員が国際化を意識した教育活動を実施している。本講習会を通じて、国際化教育のさらなる推進に向けた方向性や課題が明確となり、今後の学生教育の在り方を検討する上で有意義な機会となった。

また、本講習会には教員に加え、事務職員および技術職員（事務系職員）も参加した。事務系職員にとっても、国際化を支える体制づくりに関する理解を深める機会となったと考えられる。

2-2. 改善事例

水産学部 FD 委員会では、授業アンケートの実施と、それに基づく授業改善報告書の作成を通じた授業改善の取組を重視している。授業アンケートには、講義内容や授業方法に関して多様な観点からの意見が寄せられる。これらの意見を次年度の講義内容や授業方法に反映させることは、授業内容の充実と学生の理解向上を図る上で重要である。

例：授業科目「水産制度論」：水産関連の制度とその具体的な活用について解説

水産制度論では、水産関連制度の内容とその具体的な活用について、事例を用いて解説している。2024 年度の授業アンケートでは、「詳細なレジメにより復習しやすい」、「公務員試験対策として有用」、「難解な内容が分かりやすい」などの評価が得られた。一方で、「小テストの解説を行ってほしい」、「板書の文字を大きくしてほしい」、「レジュメや小テストを manaba で共有してほしい」といった改善要望も寄せられた。

これらの意見を踏まえ、2025 年度には以下の改善を実施した。

- 小テスト実施後に解説の時間を設け、理解の定着を図った。
- 板書の視認性への対応として、学生に前方の座席への着席を促した。
- 欠席者への対応として、講義資料および小テストを次回の講義時に配付した。

その結果、2025年度の授業アンケートでは、①学習目標の達成度：100%、②授業の分かりやすさ：100%、③発言・質問のしやすさ：94.1%、④授業構成・進行の適切さ：97.1%、⑤授業内容への満足度：97.1%と、全体として高い評価を得た。

以上の取組は個々の対応としては小さな改善であるが、学生の要望を的確に把握し、継続的に授業へ反映させることにより、授業の質の向上および学修意欲の向上につながるものと考えられる。

3. 授業アンケート

水産学部 FD 委員会では、各期の授業が終了する毎に受講した学生に対して授業アンケート（表1）を行っている。アンケートは manaba を利用して行われ、受講生の授業を選択した動機や予習及び復習時間などの調査、授業に対する満足度を計ることを中心に据えた質問を設定し、回答の集計結果から各科目の評価を行った。ここでは、2025 年度前期と後期のアンケートを分析結果の概要について報告する。

3-1. 授業アンケート内容

2025年度前期および後期の授業アンケートは manaba で行い、アンケートは2024年度後期までの内容を継続して実施した。manaba では表1の通り、受講生の満足度を「はい」か「いいえ」で回答した後、満足できた点あるいは満足できなかった点について具体的な記述ができる様式になっており、より学生の講義への期待や理解を把握する結果を得られるアンケートとなっている。

表１　manaba を用いた水産学部授業アンケートの質問項目

番号	質問内容	選択肢
1	この授業を選んだ動機は何ですか？	授業内容に興味・関心を持ったから/専攻分野との関連性を考えて/履修しやすい曜日や時間帯だったから/必修科目だから/単位修得のため
2	この授業について、毎週平均でどのくらい自宅学習（予習、復習、宿題など）をしましたか。週あたりのおよその平均時間を選択してください。	0 時間（学習していない） ～30 分 31 分～1 時間 1 時間 1 分～1 時間 30 分 1 時間 31 分～2 時間 2 時間 1 分～
3	授業はシラバスどおりに進められましたか？	はい/いいえ
4	シラバスに示された学習目標を達成できましたか？	はい/いいえ
5	授業は分かりやすかったですか？	はい/いいえ
6	授業中や授業時間外に発言や質問しやすいような配慮が感じられましたか？	はい/いいえ
7	授業の構成や進め方は適切だと思いましたか？	はい/いいえ
8	他の科目と重複あるいは類似している内容がありましたか？	はい/いいえ
9	授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか？	はい/いいえ
10	担当教員が次年度の授業改善に役立てますので、この授業に対する意見・要望などを自由に記述してください。	

3-2. 授業アンケート提出率と回答率

図 1 に 2023～2025 年度における前期および後期のアンケート提出率を示す。2025 年度前期のアンケート対象科目は 91 科目で、履修者延べ人数の提出率は 39%であった。後期のアンケート対象科目は 74 科目で、履修者延べ人数の提出率は 34%であった。

回答率（履修者数に対する回答者数の割合）が 60%を超える科目は前期で 27%、後期で 30%であった。アンケートの提出率は 2025 年度前期では前年度と比べて微減となったが、後期では 17%から 30%と増加した。

今年度も昨年度から継続して、提出率および回答率を改善するために、講義終了直前における教員へのアンケート実施の周知や、教室にアンケートの回答を促す掲示物を貼るなどの対策を試みた。引き続き、授業中にアンケートの回答時間を設けるなど、回答率の改善を目指す工夫が必要であると示唆された。

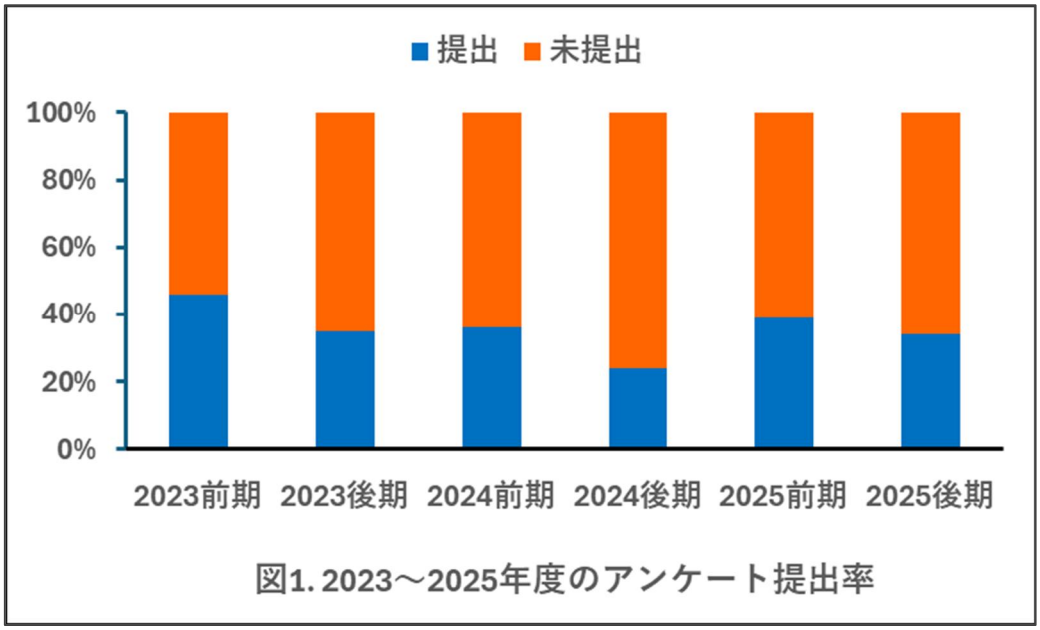


図1. 2023～2025年度のアンケート提出率

3-3. アンケートの各項目集計結果および総評

表2に基づき、各アンケート項目の集計結果について概要を報告する。1 科目に対する予習・復習・宿題などを含めた 1 週間あたりの自宅学習時間の平均は、2025 年度前期・後期ともに～30 分が最も多い結果となった。

「シラバス通りの授業だったか」の質問に対しては、「はい」と答えた割合が前期では 95%、後期では 98%であり、前年度に引き続き教員が対面または遠隔の授業形態にあわせてシラバスを作成したためと考えられた。

「シラバスの学習目標は達成できたか」の問いに対しては、「はい」と答えた割合が前期では 98%、後期 98%といずれも高い満足度であり、肯定的な意見が多い結果となった。

「授業がわかりやすかったか」の質問に対しては、「はい」と答えた割合が前期では 93%、後期では 95%と肯定的であった。

「質問や発言がしやすい配慮があったか」の質問に関しては、「はい」と答えた割合が前期では90%、後期では 93%であった。

質問や発言がしやすい理由としては、「質問する時間を設けてくれた」「質問を促してくれた」以外に「質問もできるミニッツペーパーがあった」など学習システムを教員が上手く利用している様子が伺える意見があった。一方、否定的意見には「特に配慮はなかった」「基本一方的に話すだけだから」「(manaba における)個別指導を全く見てくれない」などもあった。

「授業構成や進め方は最適だったか」の質問に関しては、「はい」と答えた割合は前期では 95%、後期で 96%となった。

「他の科目との重複や類似」に関しては、前期では 28%、後期では 19%が重複や類似性があると答えているものの否定的な意見ではなく、「忘れそうな頃に改めて学び直しができ、良かったと思う」「他の科目よりも内容が深く専門的であった」といった意見が多くを占めており、専門分野の内容の理解を深めることになっていると感じられた。

授業全体の満足度を問う質問に対しては、「はい」と答えた割合は前期では 97%、後期で 97%となり、満足度は 2024 年度と概ね同じであった。また、満足した理由として「○○について学べ、理解でき、興味を持ち、知識を得られた」や「解りやすかった」が多くを占めた。一方、否定的な意見は「おもしろくなかった・興味を持てなかった」または「スピードについていけない・難しかった」の両極に分かれていた。

表 2. 各アンケート項目の集計結果(2025 年度)

質問内容	前期	後期
1. 自宅学習時間(回答数最多)	～30 分	～30 分
2. シラバスどおりの授業だったか。	95.4	98.2
3. シラバスの学習目標を達成できたか。	97.5	98.2
4. 授業はわかりやすかったか。	93.4	95.4
5. 質問や発言がしやすい配慮があったか。	89.9	93.1
6. 授業構成や進め方は適切だったか。	94.6	95.8
7. 授業に重複あるいは類似している内容があったか。	27.9	18.6
8. 全体的に内容に満足しているか。	96.7	97.1

※項目 2～8 の表中の数字はアンケートに「はい」と答えた割合(%)

4． 授業公開・参観と授業改善

4-1. 授業公開・参観

授業公開および授業参観を下記の要領で実施した。

- 水産学部専任教員が担当する学部専門教育科目は、常時参観できるように原則として全て授業公開科目とする。
- 水産学部に着任して 3 年以内の新任教員は、年間 2 科目以上の授業参観および授業参観報告提出を推奨する。

（1）授業公開：授業公開の対象は下記の科目であり、全ての教職員が常時、参観可能

【専門科目・前期】（計 91 科目）

養殖・水産食品加工実習、海外研修、海洋観測学、基礎測位学、海洋生態学、卒業プロジェクト、微生物学、Fisheries Production Science、増養殖学実習、水産増養殖学、実用英語D、卒業研究（食品生命科学分野）実用英語（海外研修）、食品衛生学、生物化学実験、養殖経済論、環境分析化学実験、食品化学、教職概論、海事法規論、漁業管理学、水産流通論
食品生命科学演習、水圏科学実験基礎、資源利用化学実験、漁具設計学、地学概論、栄養生理学、水産海洋学、沿岸域乗船実習E、亜熱帯域水産調査乗船実習、応用藻類学、海洋測位学、キャリアデザイン、水産学概論、環境微生物・化学実習、水産資源生物学、公海域水産乗船実習、水産生物学、水産資源科学乗船実習Ⅰ、水産基礎数学、応用微生物学、生化学
水圏生物学実験Ⅱ、水産企業論、生物学概論、漁具漁法学、実用英語A、国際経済論、航海技術乗船実習Ⅰ、海洋観測乗船実習Ⅰ、沿岸域乗船実習B、海洋物理環境学、水産科教育法Ⅰ、水産業と倫理、水産学とキャリア、水産資源科学、卒業研究（水圏環境保全学分野）、
資源生産管理学、水産動物行動学、水産経済調査実習Ⅰ、教育実習事前・事後指導、水産政策論、博物館実習、インターンシップ、魚類学、実用英語B、航海技術乗船実習Ⅲ、増養殖学実験、基礎水産資源学、水産経済調査実習Ⅱ、理科教材研究法Ⅱ、電子工学基礎、世界の食料問題と持続的開発、卒業研究（水圏科学分野）、教育実習、種苗生産学、卒業研究（水産資源科学分野）、海洋学、環境保全学実習、食品工学実験・実習、水産食品加工・保蔵学、
水産統計学演習、プランクトン学、日本水産業概論、卒業研究（水産経済学分野）、沿岸域乗船実習T、食品衛生学実験、資源生産学実験、理科教材研究法Ⅰ、水圏生物科学野外調査実習

【専門科目・後期】（計 92 科目）
魚病学、卒業研究（水圏環境保全学分野）、水産食品製造学実習、海事英語、赤潮・アオコの科学、藻類学、職業指導、（松元クラス1）実用英語 C、水産経済学、水産科学英語（水圏環境保全学）、水産総合演習、食品工学、魚類栄養学、食品生命科学、船舶環境衛生学
電波測器学、水産物理学演習、船舶運用学、化学概論、沿岸海洋学、食品生命科学情報演習、水産地域論、水産総合分析演習（水圏環境保全）、教職実践演習、実用英語E、卒業研究（水産資源科学分野）、国際関係法概論、航海技術乗船実習Ⅱ、インターンシップ、漁家経営論、水産総合分析

演習（水産資源科学）、化学概論、海洋測位学演習、プログラミング演習、Fisheries Products Utilization、先進生命科学基礎実験、（松元クラス2）実用英語C
（仮屋クラス）実用英語 C、海洋観測乗船実習Ⅱ、卒業研究（水産経済学分野）、水圏環境保全科学、流体力学基礎、物理学概論、水産増養殖学、水産科学英語（食品生命科学）、
水産総合分析演習（水圏科学）、鹿児島水産学、資源生物学実験、沿岸域乗船実習T、陸水学、公衆衛生学、生体防御学、国際食料関係論、浮体工学、理科教材研究法Ⅲ、水産総合乗船実習、水産資源科学乗船実習Ⅱ、沿岸域乗船実習B、フードビジネス論、水産科学英語（水産資源科学）、水質保全学、水産総合分析演習（食品生命科学）、Elements of Fisheries Science、分子生物学、無脊椎動物学、水産総合分析演習（水産経済学）、食品科学基礎実験
先進資源利用科学、（竹下クラス）実用英語 C、卒業プロジェクト、航海英語、卒業研究（水圏科学分野）、漁具設計学演習、水産マーケティング論、魚類生理学、理科教育法、水産基礎数学演習、増養殖学実験基礎、水産資源解析学、微生物学実験、水産科学英語（水圏科学）
（新福クラス）実用英語 C、水産科教育法Ⅱ、水圏生物学実験Ⅰ、水産商品学、生物学概論
水産科学英語（水産経済学）、卒業研究（食品生命科学分野）、水産制度論、沿岸域乗船実習E、水産加工経済論、代謝生化学

（2）授業参観

授業参観報告が提出されたのは、以下の通りである。参観者が作成した授業参観報告は、FD委員会を通じて担当教員へのフィードバックが行われた。授業参観者の意見には各教員の授業方法の工夫について参考になったとのコメントが多かった。今後も授業公開・参観を継続することには大きな意義があることから、今後も公開事業への参観を促したい。

前期（4 科目）
水産経済調査実習Ⅱ、キャリアデザイン、水圏科学実験基礎、水産企業論

後期（2 科目）
フードビジネス論、プログラミング演習

4-2. 授業改善報告書

授業内容・教授手法を向上させるため、学生アンケートに基づいた「授業改善報告書」を科目担当者が作成している。2025 年度は合計 27 科目において報告書が提出された。それぞれの科目担当教員（群）が授業アンケートの結果を踏まえ、報告書を作成することで、授業における教授手法の評価点と改善点を振り返る機会となった。なお、提出された授業改善報告書は全て水産学部のホームページへ掲載し、他教職員も閲覧できるようにしている。

学部専門科目前期（計 17 科目）
プランクトン学、海洋学、海洋生態学、漁具漁法学、魚類学、食品衛生学実験、水圏科学実験基礎、

水圏生物学実験Ⅱ、水産海洋学、水産企業論、水産基礎数学、水産資源生物学、水産生物学、水産統計学演習、生物学概論、基礎水産資源学、水産政策論

学部専門科目後期(計 10 科目)

海洋観測乗船実習Ⅱ、漁具設計学演習、鹿児島水産学、水産加工経済論、水産資源解析学、水産制度論、水産総合演習、先進資源利用科学、卒業研究(水産経済学分野)、水産総合分析演習(水産経済学)

5. FD 講習会

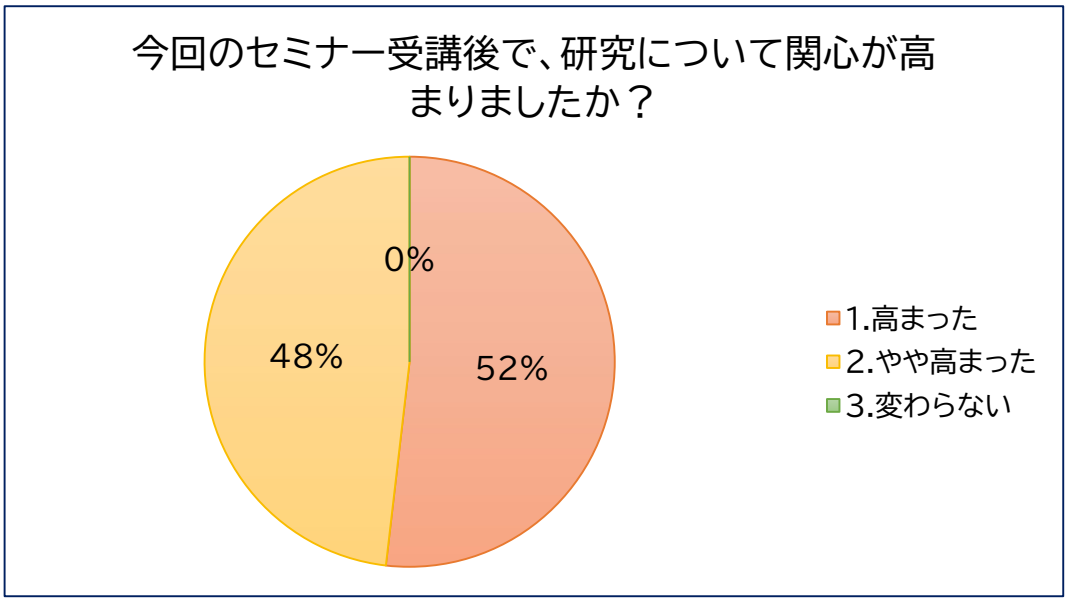
5-1. 第 1 回 FD 講習会

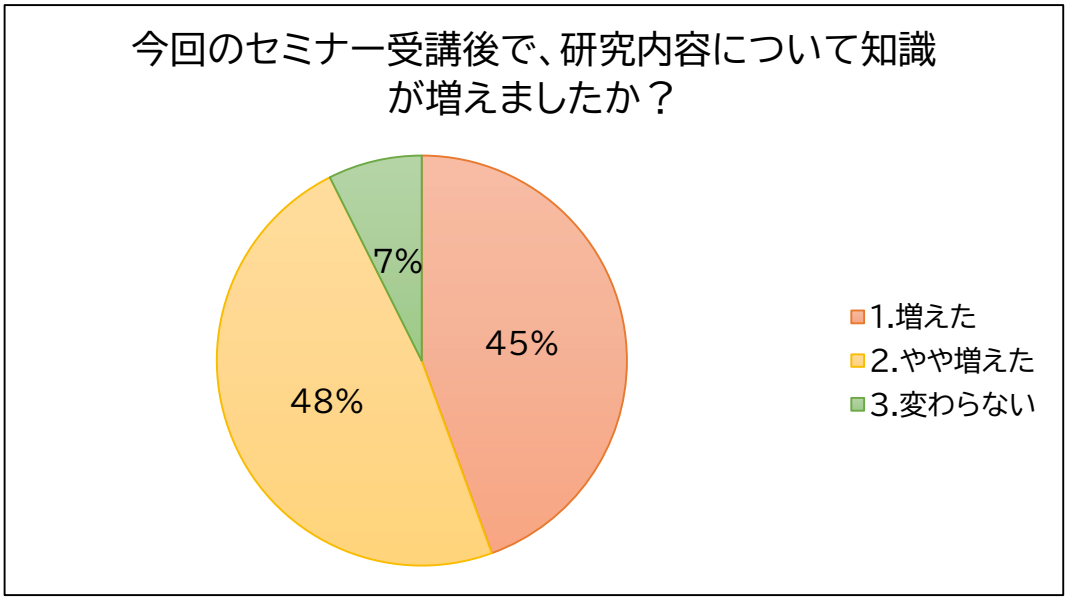
(1)実施要領

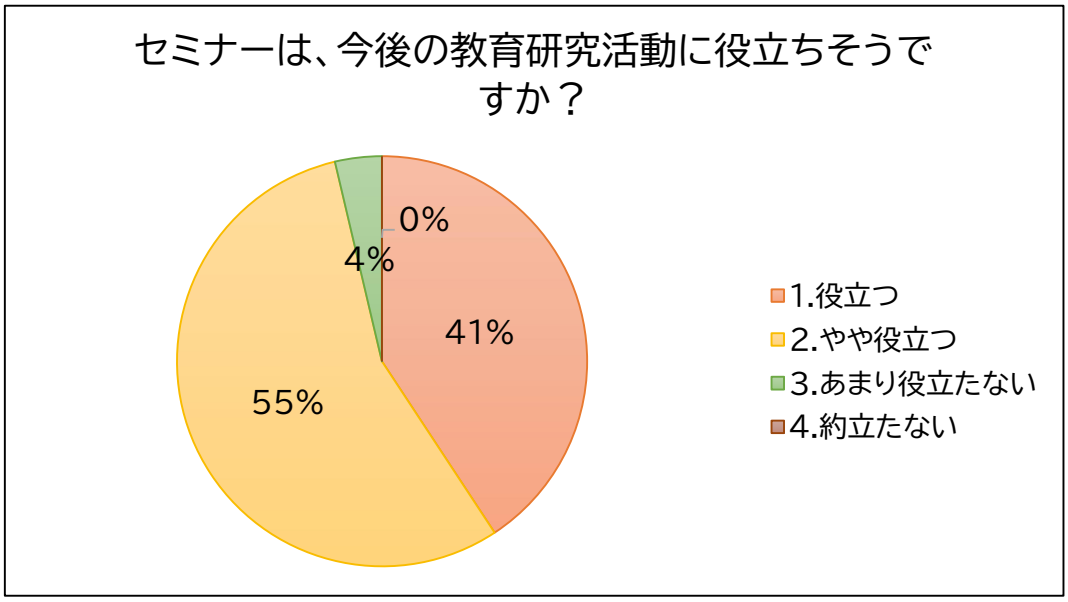
内容:若手・中堅研究者向け研究セミナー「沿岸・海岸域の人と行き物を取り囲む環境の保全」
日時:令和 7 年5月 21 日(水)13時～13時半
講師:西　隆一郎(教授・水産学部長)
場所:水産学部1号館大会議室
講演対象:水産学部教職員
趣旨:明るく健康的で活力ある水産学部を築いていくためには、若手・中堅研究者の教員に研究の楽しさや意義を実感していただく機会を提供し、加えて異分野への理解や協働・協創を促進することが重要であると考えられる。その一環として、水産学に係る学会等の受賞・表彰等を受けられた教員の方々に、広い研究に関するセミナーを実施する。

(2)結果

講習会には 37 名(教員 35 名、事務/技術系職員 2 名)の参加者があった。以下は、事後アンケートを実施した結果(回答者数:27 名)である。







また、自由回答には以下のコメントが寄せられた。（適宜修正の上、抜粋）

・私の専門分野とは異なる内容でしたので、とても興味深く聞かせていただきました。
・他分野の先生がどのような研究活動を行っているのか知ることができた。
・研究の中身について興味深く拝聴しました。受賞・表彰にいたる研究の具体的なところもうかがえればと思いました。
・ドローンを用いた干潟の動物、表層の魚等のカウントに興味を持っています。
・離岸流の研究についてはとくに興味をもちました。
・学部長のご説明では、年配者からのご紹介ということでしたが、新たに着任された先生方からの研究ご紹介があったほうが、コラボレーションを促進・推進するための基礎資料となるように思う。また、大型研究費を採択された先生などの申請書作成・研究推進のご苦労などもためになりそうです。何となくやるよりは、目的が明確なほうがよろしいかと思いました。
・質疑応答の時間を増やして欲しいので、発表は 25 分くらいにして頂けたらと思いました。
・久しぶりに水産学のお話をきけて非常に有意義な研修でした。
・水産学部で他分野の先生の研究のお話を聞く機会を貴重で、質疑応答の時間が取れると良いと思いました。もし質疑応答合わせて 1 時間程度の時間で開催されればより有意義になるように思いました。

以上のアンケート結果より、本講習会によって、当初の目的である「若手・中堅研究者の教員に研究の楽しさや意義を実感していただく機会を提供し、加えて異分野への理解や協働・協創を促進することが重要性」について、提供できたと考えられる。また、コメントより、質疑応答の必要性や時間の設定など、今後の FD 講習会企画における参考となる意見をもらうことができた。

5-2. 第2回 FD 講習会

(1)実施要領

内容:若手・中堅研究者向け研究セミナー「ワムシ・微細藻類の生物学的特性と有用海産魚類仔魚の摂餌・消化特性」

日時:令和 7 年 6 月 18 日(水)13時～13時半

講師:小谷　知也(教授・水産学部副学部長)

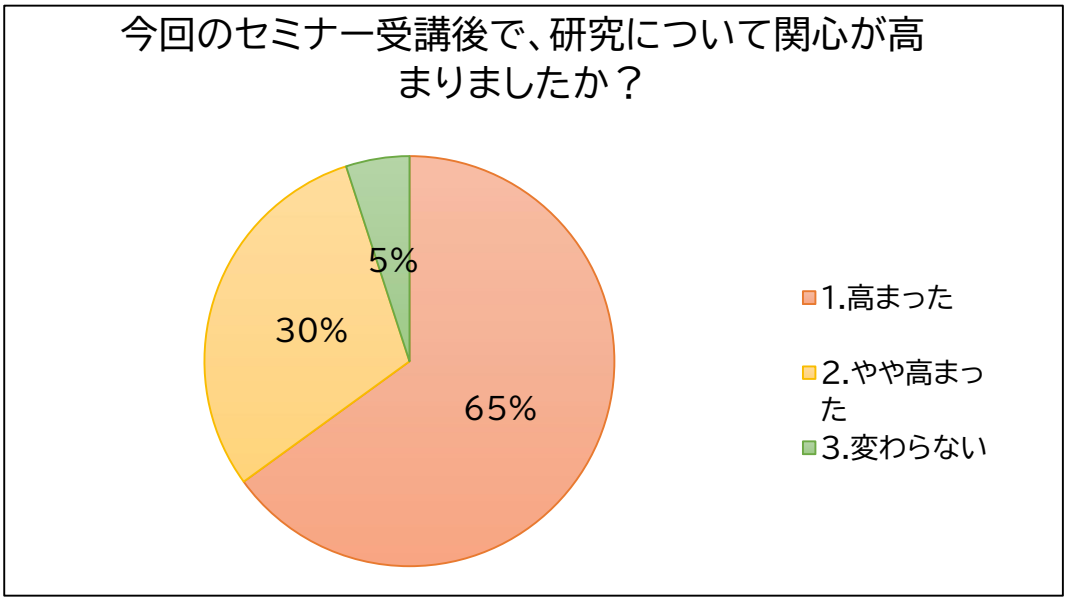
場所:水産学部1号館大会議室

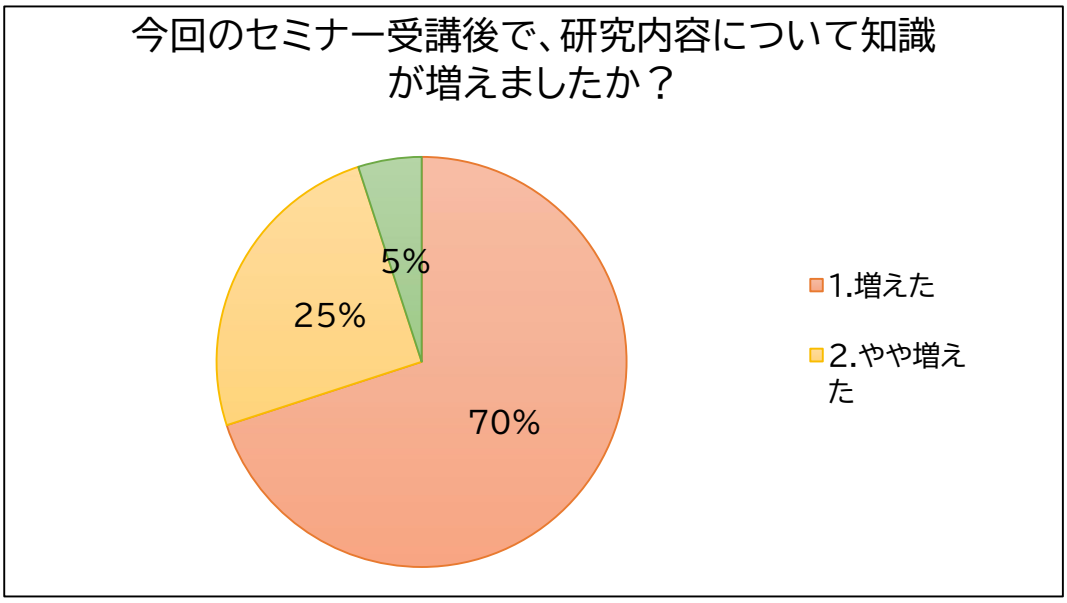
講演対象:水産学部教職員

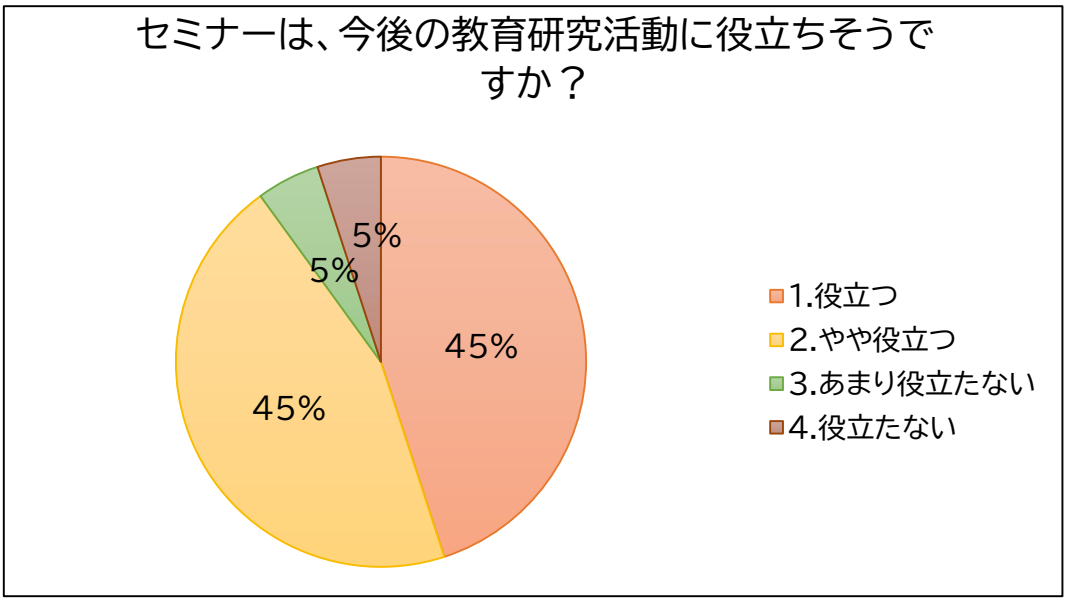
趣旨:前回のセミナーに引き続き、若手・中堅研究者の教員に研究の楽しさや意義を実感していただく機会を提供し、加えて異分野への理解や協働・協創を促進するためのセミナーを企画した。今回は、「令和 6 年度日本水産学会水産学進歩賞」を受賞した小谷教授により、その受賞内容に関する研究について紹介が行われた。

(2)結果

講習会には 39 名(教員 29 名、事務/技術系職員 11 名)の参加者があった。以下は、事後アンケートを実施した結果(回答者数:20 名)である。







また、自由回答には以下のコメントが寄せられた。（適宜修正の上、抜粋）

・おめでとうございます。先生の努力のたまものです。講演内容もとてもよかったです。
・受賞の経緯や学生指導の方針などなどもお伺いできて大変有意義でした。
・私自身も最近、ワムシとバクテリアの相互作用に興味を持っているところでしたので、興味深く拝聴いたしました。また、業績（論文）を挙げるためには学生さんとともに積み上げていく、というところも今後の展開を考える上で大変参考になりました。
・学会の賞を受賞することは大学や学部にとっても良いことだと仰っていた件、そのような気はするのですが、具体的にはどのように良いのか少し気になりました。そこの論理を強めることができたら、もっと賞を狙っていきましょうという雰囲気になるかもしれないと思いました。また、業績がありそうな若手が賞に応募するよう促進する方がいたら良いな、あるいはそういう仕組みがあったら良いなと少し思いました。

以上のアンケート結果より、前回に引き続き、本講習会によって、当初の目的である「若手・中堅研究者の教員に研究の楽しさや意義を実感していただく機会を提供し、加えて異分野への理解や協働・協創を促進することが重要性」について、提供できたと考えられる。また、コメントから、学会賞の受賞などが研究者としてのモチベーション向上に繋がることも把握できた。

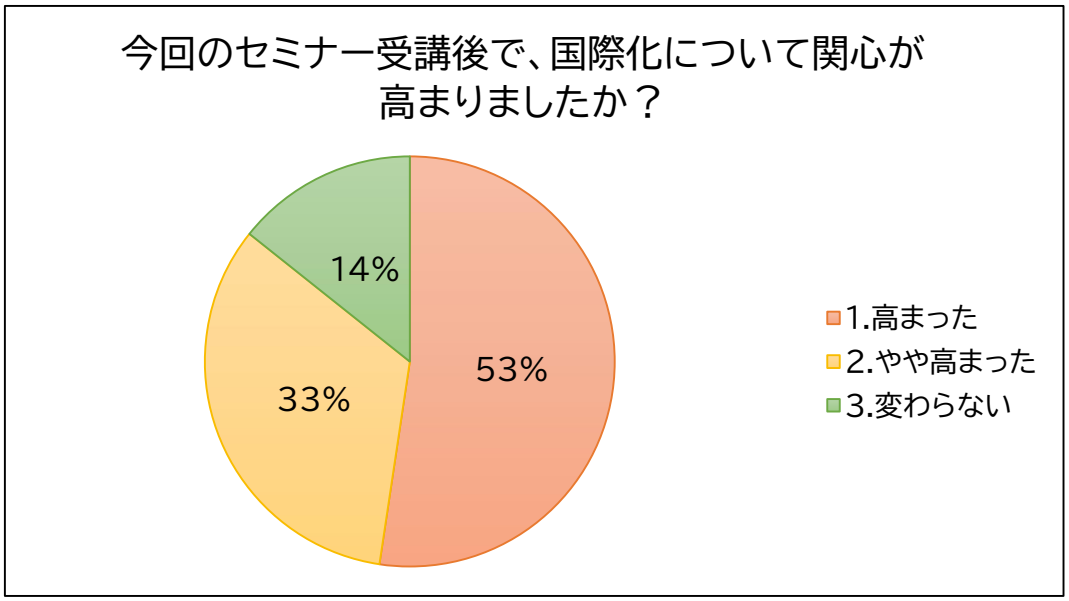
5-3. 第 3 回 FD 講習会

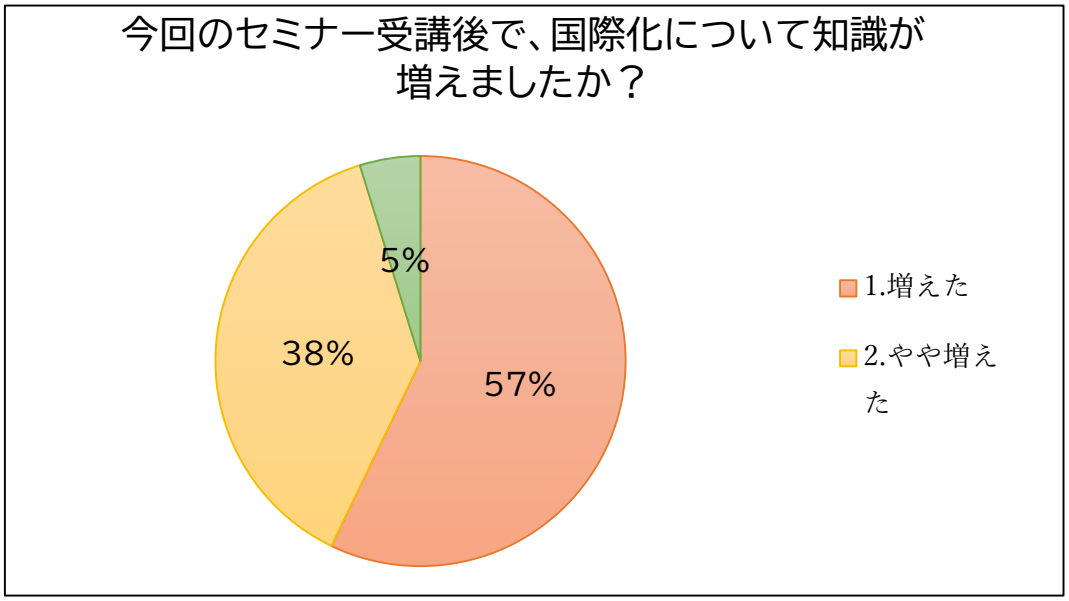
(1)実施要領

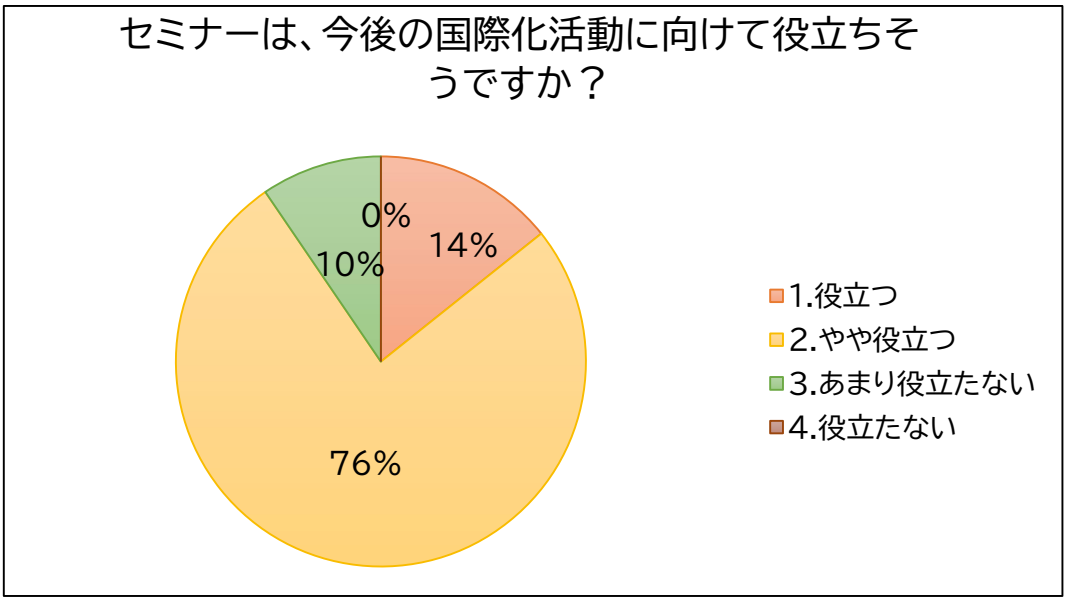
内容:教育システムと連携した「西太平洋地域人材国際連携構想」について
日時:令和 7 年 12 月 17 日(水)13時～13時半
講師:加用　利彦(鹿児島大学監事)
場所:水産学部1号館大会議室
講演対象:水産学部教職員
趣旨:現在、水産学部・農林水産学研究科で構想中である「教育システムと連携した「西太平洋地域人材国際連携構想」」に関して、それらの前提となる鹿児島大学における国際化戦略について、独立行政法人国際協力機構(JICA)の理事長特別補佐も務められた加用監事から、その方向性や今後の展望等を伺う講習会を開催する。

(2)結果

講習会には名(教員 31 名、事務/技術系職員 9 名)の参加者があった。以下は、事後アンケートを実施した結果(回答者数:21 名)である。







また、自由回答には以下のコメントが寄せられた。(適宜修正の上、抜粋)

・国際性の話もですが、欧州中心に第 4 世代の大学という発想があることは、大変勉強になった。
・トップマネージメントが策定した枠組みの中で、構成員が貢献できる仕組みを作るという点が現実的と感じました。
・既存の仕事量との調整が必要だと感じた。
・国際連携の発展と並行して、留学生受入体制の強化(チューターの増員、支援期間の延長、日常生活支援など)も必要と感じた。
・西太平洋構想に関する事情が理解できて有意義でした。

以上のアンケート結果より、当初の目的である「鹿児島大学における国際化戦略について、その方向性や今後の展望等を伺う」という点にについて、提供できたと考えられる。また、コメントから、国際化に係る様々な問題点も挙げられたことから、有益な講演会であったことが把握できる。

5-4. 総評

今年度行った３回のFD講習会はいずれも、定例の教授会前に行うことで教員が参加しやすく、また事務職員及び技術職員(事務系職員)の参加も促したことからそれら職員の多数の参加もあった。教職協働の観点からも FD 講習会は教員のみならず、事務系職員の参加も広く促したことで、2025 度の水産学部の FD 活動としては充実した内容となったものと考える。

6. 卒業時アンケート

水産学部ではカリキュラム計画書で掲げられている学部教育目標、各分野のカリキュラム目標に対する達成度を調査することを目的に、卒業時アンケートを実施している。アンケートでは、学部の教育目標、各分野のカリキュラム目標、グローバル化に関する取り組み、卒業後の進路決定などに関する質問を設定した。

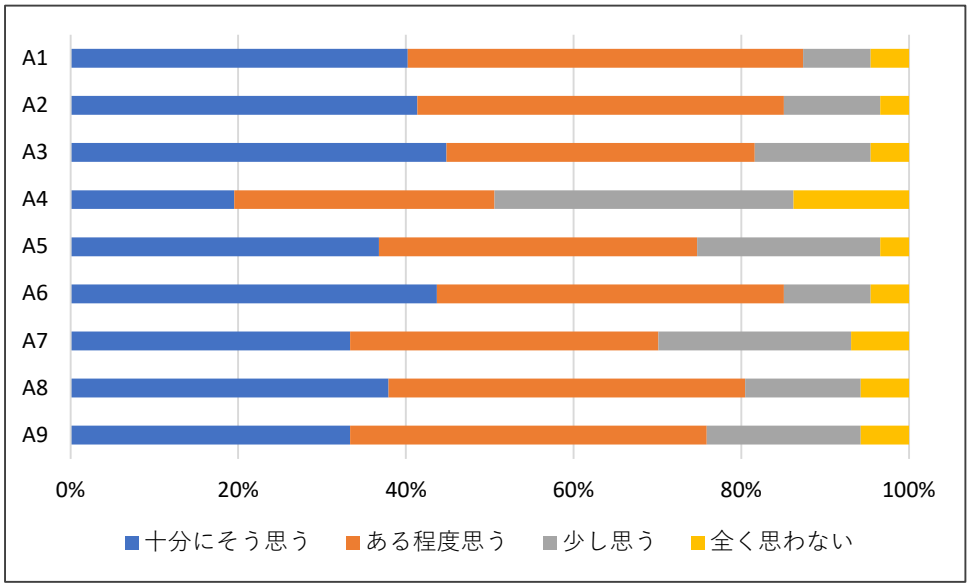
2024 年度は、卒業式直前にアンケートを実施した。回答率は 66.9%（130 名中 87 名）であった。

6-1. 教育目標に関する質問

水産学部が掲げる教育目標について、学生自身が習得できたか尋ねたところ、「十分にそう思う」、「ある程度思う」と回答した学生の割合は、2023 年度よりも増加した。

とくに、「地域・国際両面で水産技術者に必要な教養と基本的知識を習得」（A1）、「実践的で高いレベルの知識・技術を習得取得」（A2）、「基礎学力と生涯学べる能力取得」（A3）、「報告書作成・プレゼンテーション能力・問題解決型の能力取得」（A6）は回答率 80%を超えている。水産学部では教育 PDM の達成を念頭に置きながら講義や演習が実施されており、その成果が現れていることが窺える。

また、「英語能力」（A4）については、2023 年度の回答をみると「十分にそう思う」、「ある程度思う」の割合は半数に満たなかったが、2024 年度は 50.6%を記録した。学生が語学力の習得に対して積極的に取り組んだことが思量される。



A1：地域・国際両面で、資源・環境・食品分野に強い水産技術者に必要な教養と基本的な知識を体系的に習得した。

A2：水産学の各専門分野で、実践的で高いレベルの知識・技術を習得した。

A3：水産技術者として十分な基礎学力が身につき、生涯学べる能力を習得した。

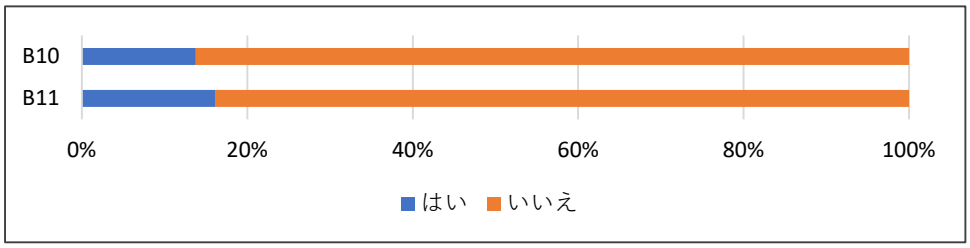
A4：水産技術者として必要な英語能力が向上した。
A5：水産技術者として実務に必要な情報処理能力が身に付いた。
A6：水産技術者として必要な報告書作成、プレゼンテーション能力、問題解決型の能力が身に付いた。
A7：水産技術者として必要なレベルの現場対応能力が備わった。
A8：水産技術者として適切な協働（チームワーク）能力や倫理観、判断力及び職業観が身に付いた。
A9：水産技術者として国際社会や地域社会の課題に果敢に取り組む意識と思考力が身に付いた。

6-2. グローバル化に関する質問

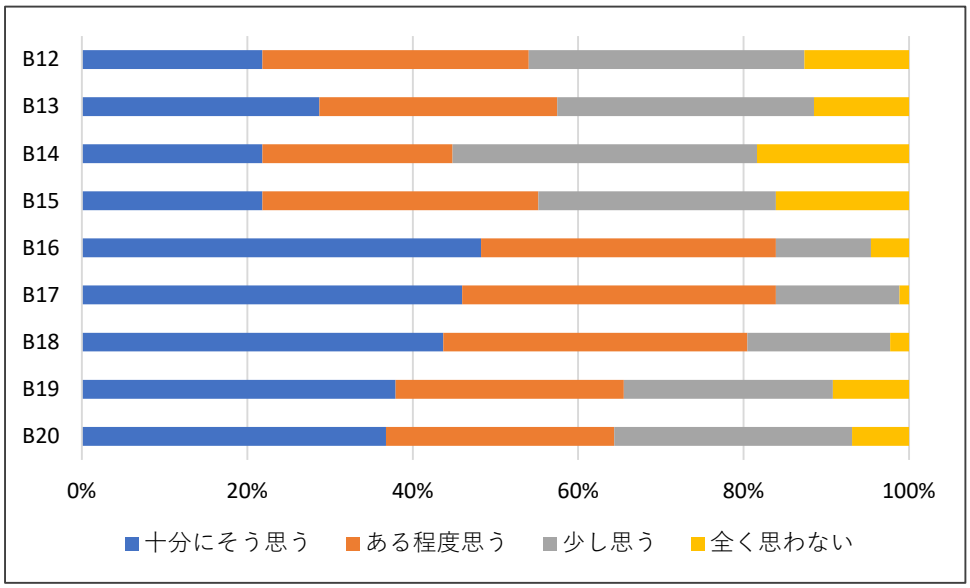
グローバル化に関する考えや取り組みについて、学生に尋ねた。海外研修に参加した学生は13.8％であり、そのうち共通教育や学部など大学として開講されたものに参加した学生は16.1％であった。海外研修へ参加した学生の割合は、2023 年度に比べてやや増加した。

続いて、英語力を伸ばすための取り組み、異文化理解を深める取り組みを行った学生は半数を超えた。TOEIC などのスコアを問うと、550 点から 910 点の範囲であったが、入学前に比べて英語力が向上したとの回答割合は 80％を超えており、在学中に継続的に学習に取り組んだ学生が多いことが窺える。

さらに、今後、英語力、異文化理解、他民族理解を向上させたいと回答する学生が 90％を超えており、高い意欲をもって卒業したこと評価できよう。



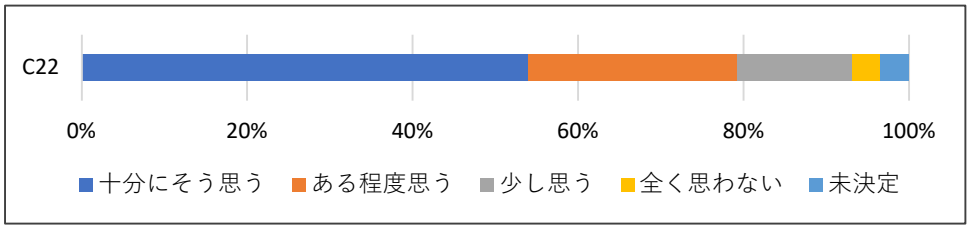
B10：在学中に海外研修に参加しましたか。
B11：（B10 で「はい」と答えた学生のみ）その海外研修は共通教育や学部など大学として開講されているものですか。



B12：在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか。
B13：在学中に異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか。
B14：在学中に他民族について理解を福嘯めるための取り組みを何かしましたか。
B15：入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか。
B16：これから英語の力（語学力）を伸ばしていこうと思いますか。
B17：これから異文化理解を深めていきたいと思いますか。
B18：これから他民族について理解を深めていきたいと思いますか。
B19：これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国士的な知識や理解が期待されますか。
B20：これから国際的に活躍していきたいと思いますか。

6-3. 就職・進学に関する質問

就職・進学について尋ねたところ、90％を超える学生が、在学期間中に習得した知識や技術を活かすことができ、かつ、希望した職種等に就職・進学できたと回答している。2023 年度は、希望した職種等に就けなかったり、就職・進学先が未決定だったりする学生が 20％近く存在したが、大きく改善された。水産学部では教職員や学生係職員が学生に対して就職情報の提供や相談に積極的にのっており、こうした体制を今後も維持することが重要であろう。



C22：あなたが習得した知識や技術が生かせて、希望する職種等に就職・進学できた。

6-4. 水産学部に対する意見

最後に、水産学部に対する意見を集ったところ、「アットホームなキャンパスだった」、「非常に密なコミュニケーションが取りやすかった」「面白い学生・先生・職員・船員さんとの出会いがあり、自身の将来設計の基礎になった」、「入学したときの期待以上」、「指導教官をはじめ教職員のサポートが充実していた」という意見がみられた。水産学部は、学生数が少なく、キャンパスもこぢんまりとしていることから、普段のゼミや実験・実習を通じて学生と教職員などが接する機会が多い。こうしたキャンパスや学習環境に対して、肯定的に評価する学生が多かった。

さらに、「実践的な教育が評価されると思う」、「セントルシアでの JICA 短期・長期派遣プロジェクトが今後も続くことを望む」という意見もみられた。水産学部では理論や知識を学ぶだけではなく、水産業の現場を体験し、問題解決型能力の育成を目指す実習科目も複数用意されている。こうした点が学生から評価されているものと考えられる。

また、「全国でも珍しい水産学部生として、鹿児島大学で学んだ経験を誇らしく思う」といった意見もみられた。鹿児島大学は全国でも数少ない水産学部を有する大学である。そこでの学びそのものが貴重である、と認識する学生もみられた。

一方で、「乗船実習による講義の欠席を公欠などにして欲しい」、「通常の講義への出席を考えると、長期の乗船実習の受講をためらいました」といった意見が寄せられた。カリキュラムの日程上、通常開講の講義と乗船実習が重なるケースが多々あることから、通常の講義を欠席せざるを得ないケースが発生する。乗船実習は水産学部ならではの特徴ある実習であることから、通常の講義と重複した際の対応について検討することが求められよう。

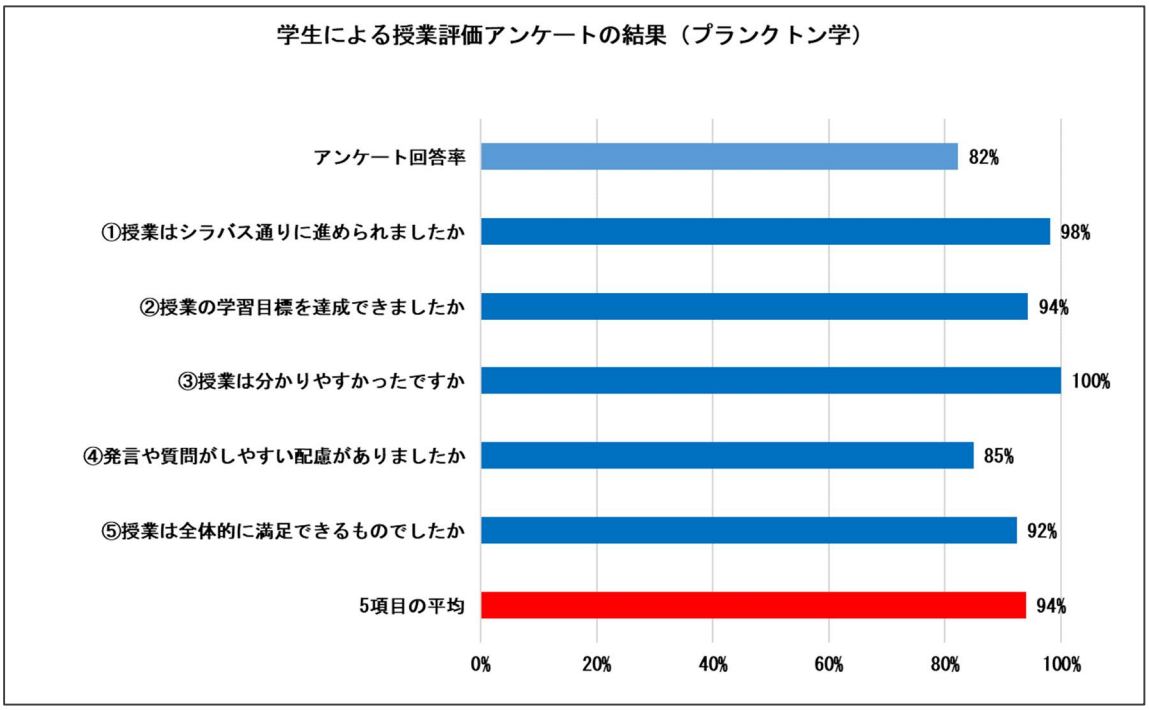
7. ベストティーチャー賞

本学では、優れた授業を実施した教員を表彰することにより教育の質向上を図ることを目的に、2018 年度より「ベストティーチャー賞」制度を実施している。本年度も授業アンケートの結果を基に、FD 委員会において審議を行い、被推薦者の選考を実施した。

選考にあたっては、2024 年度後期および 2025 年度前期に実施した授業アンケートを対象とし、特に①目標達成度、②分かりやすさ、③発言・質問のしやすさへの配慮、④授業の構成・進行の適切性、⑤授業満足度に関する評価項目を重視して分析を行った。あわせて、評価の信頼性を確保するため、履修者数 10 名以下の少人数科目は除外し、アンケート回答率が受講者の 50%以上の科目を対象とした。

その結果、「プランクトン学」（担当：小針統教授）が最高得点（94.0 点）を記録し、本年度のベストティーチャーとして選出された。受講学生からは、「資料が分かりやすく講義内容が有意義である」「難解な内容について丁寧な説明があった」「各回の冒頭で前回内容の復習が行われ、理解の定着に役立った」などの評価が寄せられた。

このような授業実践は、他の教員にとっても参考となるものである。2026 年度は、ベストティーチャーが担当する授業の参観機会を設け、優れた教育手法の共有を図ることにより、水産学部における教育のさらなる質向上に取り組む予定である。



編集：鹿児島大学水産学部 FD 委員会

委 員 長：鳥居 享司
副委員長：小谷 知也
委　　員：須本 祐史、田角 聡志、加藤 早苗、半渡 聡

共同獣医学部・
共同獣医学研究科

令和７年度共同獣医学部、共同獣医学研究科 FD 活動の記録

Ⅰ．共同獣医学部 FD 活動組織（FD 委員会の構成と活動状況）

委員長　小澤　真　教授
委　員　内藤　清惟　准教授
委　員　一二三　達郎　准教授
委　員　畠添　孝　准教授
委　員　大島　一郎　准教授

第１回共同獣医学部 FD 委員会（web 会議）
日時：令和７年４月 17 日(木) 14 時～15 時
議題１．授業参観の実施形式、特に両学科教員の相互参観について
議題２．山口大学との合同 FD 研修会の開催形式について

第２回共同獣医学部 FD 委員会（メール会議）
日時：令和７年５月 13 日(火)～５月 14 日(水)
議題１．合同 FD 研修会の開催日時について

第３回共同獣医学部 FD 委員会（メール会議）
日時：令和７年９月 13 日(土)～９月 17 日(水)
議題１．合同 FD 研修会の役割分担等について

第４回共同獣医学部 FD 委員会（メール会議）
日時：令和７年９月 24 日(水)～10 月７日(火)
議題１．合同 FD 研修会の議事録について

第５回共同獣医学部 FD 委員会（メール会議）
日時：令和８年３月９日(月)
議題１．委員会予算の執行について

第６回共同獣医学部 FD 委員会（メール会議）
日時：令和８年３月 11 日(水)～３月 16 日(月)
議題１．令和８年度 FD 活動計画について

Ⅱ．授業公開と授業参観の取り組み

共同獣医学部では、農学部所属の平成 15 年度後期より授業公開・授業参観を実施しており、平成 28 年度後期より山口大学共同獣医学部も本取り組みに一部参画している。両大学の教員が互いに参観できる仕組みとしており、参加者拡大を図ると共に、本取り組みの内容をより一層充実させている。

具体的な実施方法としては、あらかじめ１名につき２名の参観者を専門分野、職位に関係なく割り振り、年間を通して任意の時期に参観を行うことができるようにしている。参観者には「授業参観報告書」書式を配布し、参観を実施した授業にかかる報告書を作成・提出してもらっている。平成 26 年度からは授業担当者に参観者からの報告書に対する対策書を作成・提出してもらい、本取り組みの PDCA サイクルを確立している。また、令和３年度より、参観者には授業担当者の授業について、運営方法や授業の魅力度等に関する２つの観点により数値的に評価してもらい、当年度のベストティーチャーを選出する際の一つの材料としている。

本年度の共同獣医学部専任教員の授業参観参加者数は、年間通して 41 名の参加があり、参加率は 93.2%となっている。

Ⅲ. 学生による授業評価

前後期にそれぞれ学生による授業評価のアンケートを manaba によって実施した。共同獣医学部では、山口大学と共通の授業評価アンケートを作成し、実施している。質問項目は下記のとおりである。

授業評価アンケート（講義・演習用）

授業科目番号：	９９９９		受講者氏名	（氏名の記載は任意です。）
授業科目名　：	●●●●	（☑）遠隔授業システム	教員名：	●●●●

＊ このアンケートは、授業をより良くするために行うもので、回答者の成績には一切影響ありません。考えを率直に記入してください。

＊ この回答用紙は機械（OCR）で読み取り集計しますので、該当する番号の前の○印を塗りつぶしてください。

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか?（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）				
	○1. 90%以上（14回以上）	○2. 80～90%（12～13回）	○3. 60～80%（9～11回）	○4. 40～60%（6～8回）	○5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。				
	○1. 3時間程度または以上	○2. 2時間程度	○3. 1時間程度	○4. 30～50分程度	○5. 30分未満
3	この授業内容の水準はどうでしたか？				
	○1. 高かった	○2. やや高かった	○3. 妥当だった	○4. やや低かった	○5. 低かった
4	この授業の分量はどうでしたか？				
	○1. 多かった	○2. やや多かった	○3. 妥当だった	○4. やや少なかった	○5. 少なかった
5	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いましたか？				
	○1. そう思う	○2. ややそう思う	○3. どちらとも言えない	○4. あまりそう思わない	○5. そう思わない
6	板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか？				
	○1. そう思う	○2. ややそう思う	○3. どちらとも言えない	○4. あまりそう思わない	○5. そう思わない
	○6. この授業は該当しない				
7	授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？				
	○1. そう思う	○2. ややそう思う	○3. どちらとも言えない	○4. あまりそう思わない	○5. そう思わない
8	この授業はシラバスに沿って進められましたか？				
	○1. そう思う	○2. ややそう思う	○3. どちらとも言えない	○4. あまりそう思わない	○5. そう思わない
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？				
	○1. そう思う	○2. ややそう思う	○3. どちらとも言えない	○4. あまりそう思わない	○5. そう思わない
	○6. 答えられない				
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？				
	○1. そう思う	○2. ややそう思う	○3. どちらとも言えない	○4. あまりそう思わない	○5. そう思わない
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？				
	○1. そう思う	○2. ややそう思う	○3. どちらとも言えない	○4. あまりそう思わない	○5. そう思わない
＊	以下は、遠隔授業システムに関する質問です。該当する場合（授業科目名の横にチェックあり）、送信・受信に関わらず回答してください。				
12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？				
	○1. そう思う	○2. ややそう思う	○3. どちらとも言えない	○4. あまりそう思わない	○5. そう思わない
13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？				
	○1. そう思う	○2. ややそう思う	○3. どちらとも言えない	○4. あまりそう思わない	○5. そう思わない
14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？				
	○1. そう思う	○2. ややそう思う	○3. どちらとも言えない	○4. あまりそう思わない	○5. そう思わない
15	授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？				
	○1. そう思う	○2. ややそう思う	○3. どちらとも言えない	○4. あまりそう思わない	○5. そう思わない
16	対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？				
	○1. そう思う	○2. ややそう思う	○3. どちらとも言えない	○4. あまりそう思わない	○5. そう思わない
＊	以下は、授業担当教員の各自設定質問です。教員によって異なりますので、指示があれば回答してください。				
17	（自　由　質　問　①）				
	○1. 選択肢　1	○2. 選択肢　2	○3. 選択肢　3	○4. 選択肢　4	○5. 選択肢　5
18	（自　由　質　問　②）				
	○1. 選択肢　1	○2. 選択肢　2	○3. 選択肢　3	○4. 選択肢　4	○5. 選択肢　5

自 由 記 述

この授業についての意見・要望・感想などを自由にご記入下さい。スペースが足りない場合、適宜裏面にご記入下さい。

ご協力ありがとうございました。

共同獣医学部ファカルティ・ディベロップメント委員会

様式に記載している「遠隔授業」とは、遠隔授業システムを使って、教員の映像や音声、授業の資料等をリアルタイムで送信あるいは受信して行う授業である。共同獣医学部では、この「遠隔授業」に関する設問を用意し、学生の授業環境に対する満足度を測っている。

共同獣医学部所属の学生に対して実施し、専門教育科目について、前期 75 科目（講義・演習：60 科目、実験・実習：15 科目）、後期 59 科目（講義・演習：45 科目、実験・実習：14 科目）の回答を回収した。

以下の通り、令和７年度のアンケート集計結果を紹介する。

●アンケート集計結果（全科目集計）

【講義・演習科目】

授業評価アンケート集計（講義・演習）						
No.	質問項目	回答	R７前期	%（R７前）	R７後期	%（R７後）
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上	346	92.3%	201	87.0%
		80～90%	26	6.9%	27	11.7%
		60～80%	2	0.5%	3	1.3%
		40～60%	0	0.0%	0	0.0%
		40%未満	1	0.3%	0	0.0%
		計	**375**	**100.0%**	**231**	**100.0%**
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。（授業１回あたりの時間）	3 時間程度または以上	61	16.3%	42	18.2%
		2 時間程度	49	13.1%	53	22.9%
		1 時間程度	115	30.7%	76	32.9%
		30～50 分程度	85	22.7%	35	15.2%
		30 分未満	65	17.3%	25	10.8%
		計	**375**	**100.0%**	**231**	**100.0%**
3	この授業内容の水準はどうでしたか？	高かった	130	34.7%	83	35.9%
		やや高かった	109	29.1%	52	22.5%
		妥当だった	132	35.2%	93	40.3%
		やや低かった	3	0.8%	3	1.3%
		低かった	1	0.3%	0	0.0%
		計	**375**	**100.0%**	**231**	**100.0%**
4	この授業の分量はどうでしたか？	多かった	54	14.4%	47	20.3%
		やや多かった	82	21.9%	53	22.9%
		妥当だった	233	62.1%	123	53.2%
		やや少なかった	6	1.6%	7	3.0%
		少なかった	0	0.0%	1	0.4%
		計	**375**	**100.0%**	**231**	**100.0%**

5	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いましたか？	そう思う	187	49.9%	140	60.6%
		ややそう思う	129	34.4%	69	29.9%
		どちらとも言えない	38	10.1%	14	6.1%
		あまりそう思わない	19	5.1%	7	3.0%
		そう思わない	2	0.5%	1	0.4%
		計	**375**	**100.0%**	**231**	**100.0%**
6	板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか？	そう思う	217	57.9%	145	62.8%
		ややそう思う	118	31.5%	73	31.6%
		どちらとも言えない	26	6.9%	7	3.0%
		あまりそう思わない	10	2.7%	4	1.7%
		そう思わない	4	1.1%	2	0.9%
		この授業は該当しない	0	0.0%	0	0.0%
		計	**375**	**100.0%**	**231**	**100.0%**
7	授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う	207	55.2%	136	58.9%
		ややそう思う	85	22.7%	59	25.5%
		どちらとも言えない	76	20.3%	35	15.2%
		あまりそう思わない	6	1.6%	1	0.4%
		そう思わない	1	0.3%	0	0.0%
		この授業は該当しない	0	0.0%	0	0.0%
		計	**375**	**100.0%**	**231**	**100.0%**
8	この授業はシラバスに沿って進められましたか？	そう思う	247	65.9%	162	70.1%
		ややそう思う	107	28.5%	63	27.3%
		どちらとも言えない	19	5.1%	4	1.7%
		あまりそう思わない	1	0.3%	1	0.4%
		そう思わない	1	0.3%	1	0.4%
		計	**375**	**100.0%**	**231**	**100.0%**
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	164	43.7%	102	44.2%
		ややそう思う	154	41.1%	113	48.9%
		どちらとも言えない	48	12.8%	12	5.2%
		あまりそう思わない	6	1.6%	1	0.4%
		そう思わない	2	0.5%	2	0.9%
		答えられない	1	0.3%	1	0.4%
		計	**375**	**100.0%**	**231**	**100.0%**
10	あなたは、この授業の内容を理	そう思う	163	43.5%	105	45.5%
		ややそう思う	155	41.3%	107	46.3%
		どちらとも言えない	43	11.5%	13	5.6%

	解できましたか？	あまりそう思わない	12	3.2%	6	2.6%
		そう思わない	2	0.5%	0	0.0%
		計	**375**	**100.0%**	**231**	**100.0%**
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	211	56.3%	140	60.6%
		ややそう思う	128	34.1%	81	35.1%
		どちらとも言えない	28	7.5%	6	2.6%
		あまりそう思わない	7	1.9%	4	1.7%
		そう思わない	1	0.3%	0	0.0%
		計	**375**	**100.0%**	**231**	**100.0%**
※12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	111	62.4%	65	68.4%
		ややそう思う	22	12.4%	19	20.0%
		どちらとも言えない	33	18.5%	9	9.5%
		あまりそう思わない	10	5.6%	2	2.1%
		そう思わない	2	1.1%	0	0.0%
		計	**178**	**100.0%**	**95**	**100.0%**
※13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	105	62.5%	66	71.0%
		ややそう思う	32	19.0%	17	18.3%
		どちらとも言えない	26	15.5%	8	8.6%
		あまりそう思わない	4	2.4%	2	2.2%
		そう思わない	1	0.6%	0	0.0%
		計	**168**	**100.0%**	**93**	**100.0%**
※14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	99	59.3%	61	67.8%
		ややそう思う	35	21.0%	22	24.4%
		どちらとも言えない	26	15.6%	5	5.6%
		あまりそう思わない	6	3.6%	2	2.2%
		そう思わない	1	0.6%	0	0.0%
		計	**167**	**100.0%**	**90**	**100.0%**
※15	授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	99	60.0%	58	64.4%
		ややそう思う	26	15.8%	24	26.7%
		どちらとも言えない	36	21.8%	6	6.7%
		あまりそう思わない	3	1.8%	1	1.1%
		そう思わない	1	0.6%	1	1.1%
		計	**165**	**100.0%**	**90**	**100.0%**
※16	対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	90	54.9%	55	61.8%
		ややそう思う	27	16.5%	21	23.6%
		どちらとも言えない	37	22.6%	7	7.9%
		あまりそう思わない	8	4.9%	4	4.5%
		そう思わない	2	1.2%	2	2.2%
		計	**164**	**100.0%**	**89**	**100.0%**

【実験・実習科目】

授業評価アンケート集計（実験・実習）						
No.	質問項目	回答	R7 前期	%（R７前）	R７後期	%（R７後）
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上	37	97.4%	92	96.8%
		80～90%	1	2.6%	2	2.1%
		60～80%	0	0.0%	1	1.1%
		40～60%	0	0.0%	0	0.0%
		40%未満	0	0.0%	0	0.0%
		計	**38**	**100.0%**	**95**	**100.0%**
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。（授業１回あたりの時間）	3 時間程度または以上	6	15.8%	16	16.8%
		2 時間程度	8	21.1%	18	18.9%
		1 時間程度	10	26.3%	34	35.8%
		30～50 分程度	6	15.8%	14	14.7%
		30 分未満	8	21.1%	13	13.7%
		計	**38**	**100.0%**	**95**	**100.0%**
3	この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか？	そう思う	16	42.1%	29	30.5%
		ややそう思う	13	34.2%	47	49.5%
		どちらとも言えない	8	21.1%	11	11.6%
		あまりそう思わない	1	2.6%	8	8.4%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	**38**	**100.0%**	**95**	**100.0%**
4	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、実験・実習の方法などの説明はわかりやすいと思いましたか？	そう思う	28	73.7%	71	74.7%
		ややそう思う	10	26.3%	20	21.1%
		どちらとも言えない	0	0.0%	1	1.1%
		あまりそう思わない	0	0.0%	3	3.2%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	**38**	**100.0%**	**95**	**100.0%**
5	板書や配布資料、実験マニュアルなどは、実験・実習の内容理解と実施に役立ちましたか？	そう思う	33	86.8%	77	81.1%
		ややそう思う	3	7.9%	14	14.7%
		どちらとも言えない	2	5.3%	2	2.1%
		あまりそう思わない	0	0.0%	2	2.1%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	**38**	**100.0%**	**95**	**100.0%**
6	実験・実習中やオフィスアワー	そう思う	27	71.1%	62	65.3%
		ややそう思う	9	23.7%	22	23.2%

	での質問に対する教員の対応に満足しましたか？	どちらとも言えない	1	2.6%	10	10.5%
		あまりそう思わない	0	0.0%	1	1.1%
		そう思わない	1	2.6%	0	0.0%
		計	**38**	**100.0%**	**95**	**100.0%**
7	動物を扱う実験・実習は、安全性に重点が置かれていましたか？	そう思う	30	78.9%	65	80.2%
		ややそう思う	7	18.4%	13	16.0%
		どちらとも言えない	0	0.0%	1	1.2%
		あまりそう思わない	0	0.0%	2	2.5%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		この授業は該当しない	1	2.6%	0	0.0%
		計	**38**	**100.0%**	**81**	**100.0%**
8	この実験・実習は、シラバスに沿って進められましたか？	そう思う	30	78.9%	63	66.3%
		ややそう思う	7	18.4%	28	29.5%
		どちらとも言えない	0	0.0%	4	4.2%
		あまりそう思わない	1	2.6%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	**38**	**100.0%**	**95**	**100.0%**
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	24	63.2%	51	53.7%
		ややそう思う	10	26.3%	39	41.1%
		どちらとも言えない	4	10.5%	4	4.2%
		あまりそう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	1	1.1%
		答えられない	0	0.0%	0	0.0%
		計	**38**	**100.0%**	**95**	**100.0%**
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	そう思う	25	65.8%	53	55.8%
		ややそう思う	9	23.7%	37	38.9%
		どちらとも言えない	4	10.5%	4	4.2%
		あまりそう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	1	1.1%
		計	**38**	**100.0%**	**95**	**100.0%**
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	29	76.3%	73	76.8%
		ややそう思う	8	21.1%	17	17.9%
		どちらとも言えない	0	0.0%	1	1.1%
		あまりそう思わない	0	0.0%	4	4.2%
		そう思わない	1	2.6%	0	0.0%
		計	**38**	**100.0%**	**95**	**100.0%**
		そう思う	7	70.0%	18	69.2%

※12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	ややそう思う	1	10.0%	2	7.7%
		どちらとも言えない	2	20.0%	6	23.1%
		あまりそう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	**10**	**100.0%**	**26**	**100.0%**
※13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	6	60.0%	16	64.0%
		ややそう思う	2	20.0%	3	12.0%
		どちらとも言えない	2	20.0%	6	24.0%
		あまりそう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	**10**	**100.0%**	**25**	**100.0%**
※14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	6	60.0%	16	64.0%
		ややそう思う	1	10.0%	3	12.0%
		どちらとも言えない	2	20.0%	6	24.0%
		あまりそう思わない	1	10.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	**10**	**100.0%**	**25**	**100.0%**
※15	授業中は、実験・実習に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	5	55.6%	16	64.0%
		ややそう思う	1	11.1%	4	16.0%
		どちらとも言えない	2	22.2%	5	20.0%
		あまりそう思わない	1	11.1%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	**9**	**100.0%**	**25**	**100.0%**
※16	対面式の実験・実習と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	7	70.0%	17	68.0%
		ややそう思う	1	10.0%	3	12.0%
		どちらとも言えない	2	20.0%	5	20.0%
		あまりそう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	**10**	**100.0%**	**25**	**100.0%**

※講義・演習科目および実験・実習科目の No.12～16 は、遠隔授業システムを利用した科目のみ対象の設問

Ⅳ. 令和７年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部 合同 FD 研修会 報告書

1. はじめに

令和 7 年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部 合同 FD 研修会が、本年度は鹿児島大学共同獣学部の主催により、令和 7 年 9 月 22 日（月）に開催された。Microsoft Teams を用いたオンライン形式で実施され、山口大学共同獣医学部および鹿児島大学共同獣医学部の教員が参加した。以下に、本年度の合同 FD 研修会の詳細を報告する。

2. 研修会次第

日時： 令和７年９月 22 日（木） 13:00～15:30
形式： オンライン形式（Microsoft Teams）

1) 開会の挨拶（鹿児島大学 遠藤学部長）
2) 基調講演
「現代学生の特徴と教職員としての支援のあり方」
高野 明 先生 （東京大学 相談支援研究開発センター 教授）
3) 教育ワークショップ
①基礎、②病態予防、③伴侶動物臨床、④産業動物臨床
4) 閉会の挨拶（山口大学 度会学部長）

3. 基調講演について

基調講演として、東京大学の相談支援研究開発センターにおいて日常的に学生支援を実施されている高野明先生に、現代学生の特徴や教職員としての支援のあり方に関して解説していただいた。講演では、学生相談から見た現代学生の特徴をご紹介いただき、教職員としての支援のあり方について、具体的な対応事例も交えながらお話しいただいた。講演終了後には、受講者より多くの質問が集まり、活発な意見交換がなされた。

4. 教育ワークショップについて

各ワークショップの議事録は以下の通り。

教育ワークショップ（基礎系）議事録

文責：内藤 清惟（鹿児島大学）

日時：2025 年 9 月 22 日(月) 14:10～15:10

教育ワークショップ参加者（敬称略，順不同）

山口大学：　日下部、今井、大濱、辻、岡本、日暮、羽原、加納、藤野

鹿児島大学：　辻尾、松屋、白石、内藤（世話役）、藤田、宇野、近藤、浅野、ヘンリー

議題：

1) 各分野・研究室の近況（新しく着任された先生方の紹介など）（情報共有）

新しく着任された教員の紹介が行われた。

山口大学：岡本先生（生化学・生理学）、辻先生（薬理学）

2) 現在の実習の状況について（情報共有）

実習担当の先生から、実習の現状についてお話いただき、情報共有を行った。山口大学では実習経費の削減が求められており、実験動物の購入が難しくなっている現状が報告された。鹿児島大学でも予算状況は厳しく、畜産学科の実習も始まったことも合わせて、同様の状況であることが情報共有された。今後の検討事項として、このまま予算の削減が続く場合、実習項目の削減によって対応せざるを得なくなる懸念があり、教育の質の担保が難しくなる可能性が議論された。今後も情報を共有していくことが確認された。

3) ポリクリと卒研の両立について（情報共有）

鹿児島大学教員より、今年度より研究室配属が４年生の 10 月からとなることが報告された。これにより、企業への就職を希望する学生が、就職活動において研究成果が発表できないという問題が改善されることを期待する意見が出た。配属時期の前倒しによる効果について、継続的に情報共有していくことが確認された。

4) 入試の改革とその影響について（継続協議事項）

鹿児島大学で実施している入試の方式（前期ａとｂ）と、それによる学生の質の変化について情報共有された。

5) 山口大学と鹿児島大学の成績の差について（情報共有）

参加者から、山口大学と鹿児島大学で成績の平均点に大きな開きがあることが報告され、その要因について議論された。山口大学では研究室配属の時期が早いので

GPA を早くから意識する可能性、鹿児島大学側の物理選択者が多いことに起因する可能性、入試の方式による差異の可能性などが議論された。

6) 大学院進学者の確保について

鹿児島大学では、大学院進学者が少ないことが問題となっていることが報告され、その解決策について議論された。山口大学では高学年に向けて「大学院への誘い」という説明会を実施予定とのことだった。大学院への進学者を増やすためには、実験を通して研究に興味を持ってもらうことが必須であり、継続的にモチベーションを維持することが必要不可欠である、という認識が共有された。また、若手の教員より、大学院への進学を決めたタイミングは研究室で実験を始めてからで、最初の興味に関わらず実験を経験させることが重要であることが共有された。また、研究室内で先輩後輩の関わりがあることが、大学院進学への雰囲気の醸成に重要であるため、鹿児島大学での研究室配属時期の前倒しの効果に期待する意見が出た。

7) その他

遠隔授業における受け手側の受講態度について、意見交換がなされた。

教育ワークショップ（病態予防系）議事録

文責：一二三 達郎（鹿児島大学）

日時：2025 年 9 月 22 日(月) 14:10～15:10

教育ワークショップ参加者（敬称略，順不同）

山口大学：　Alice Lau、森本、櫻井、吉嵜、渡邊、柳田、三宅、清水、Ishara、下田

鹿児島大学：　三好、一二三（世話役）、小尾、松尾、小澤、中馬、小原、松本、藤本、平野、奥谷、三角（和）

議題：

1. 事前の議題提案について

今回は事前に議題を募集せず、当日の出席者からの議題提案を基に意見交換を行った。

2. 病理学の講義・実習について

・病理解剖用の装備の更新

鹿児島大学から、8 年前に購入した病理解剖用の長靴が経年劣化で靴底の摩耗が進み、更新が必要であるとの指摘があった。一方、山口大学では病理解剖用の装備は問題なく使用できており、防護服には洗濯可能な登山用ジャケットを使用しているとの報告があった。

・参加意欲の低い学生

山口大学から、参加意欲の低い学生が参加型臨床実習における病理解剖への参加を後回しにする傾向があることが課題として指摘された。

3. 微生物系（細菌・ウイルス・寄生虫）の講義・実習について

・講義の流れ

山口大学から、微生物学、感染症学、人獣共通感染症学の科目をどの順番で教えるのが最適かについて提議があった。鹿児島大学からは、現状の流れ（微生物学⇒感染症学⇒人獣共通感染症学）で問題はなく、各科目（特に微生物学と感染症学）の内容の棲み分けができていれば問題ないとの回答があった。

・実習での作業の偏りへの対応

鹿児島大学の感染症系実習では、学生が複数の班に分かれて作業に取り組んでいるが、その中で特定の学生に作業負担が偏ってしまうという問題が指摘された。

この問題に対し、山口大学では、班の人数分の作業を準備することで、学生全員が均等に実習に参加できるようにしているとの回答があった。

・実習の頻度

細菌やウイルスの観察・培養を伴う感染症系実習については、週 2 回または集中講義形式で行うのが望ましいとの提案があった。実習日程の再編などが必要かもしれないとの意見もあった。

・寄生虫学実習

鹿児島大学では、実習用顕微鏡の数が不足しているため、前半・後半で学生を交代させることにより実習を進めているとの報告があった。

4. 学外実習について

・食肉衛生検査学実習

鹿児島大学では、鹿児島県から食肉衛生検査学実習の期間短縮を求められており、新しい実習計画を立案中との報告があった。山口大学でも同様の実習が実施されているが、実習先の確保に苦労している状況が共有された。

・食品加工実習

山口大学では牛乳の実習が実施できないため、VR を代用しているとの報告があった。

鹿児島大学では食品加工実習において開始時間の関係上、大学バスと民間バスを併用して移動を行っているが、民間バスの利用では高額の費用がかかることが課題として挙げられた。さらに、昨年度から共同獣医学部に畜産学科が加わったこともあり、食品加工実習の指導を畜産学科の先生に依頼する案が挙げられた。

5. 全体について

・実習経費

両大学から、近年の実習経費の縮減について報告があった。山口大学では、実習で使用する材料を削減するなど、経費削減への工夫を行っているとのことであった。

教育ワークショップ（産業動物臨床系）議事録

文責：畠添 孝（鹿児島大学）

日時：2025 年 9 月 22 日(月) 14:10～15:10

教育ワークショップ参加者（敬称略，順不同）

山口大学：　谷口、角川、小野

鹿児島大学：　三角、帆保、乙丸、加藤、山下、井尻、畠添（世話役）

議題：学生とのコミュニケーションについて

上記議題に関するご意見（苦労している事およびその対処方法等）は以下の通りであった。

・意見①（鹿大）：馬に関することを学生に教えているが、一学年約３０人のなかに馬に興味がある学生は３人程度である。つまり大部分は馬に対してモチベーションを保つのが難しい。このような状況なので、学生対しては獣医学というより、馬という動物についてまず教えて、少しでも興味を持ってもらうようにしている。

・意見②（山大）：牛においても興味がない学生とコミュニケーションをとることに難しさを感じている。往診の際の車内移動中に一般的な話題で話しかけるようにしている。将来の進路についても伺っている。

・意見③（鹿大）：氏名を覚えるようにしている。積極的に話しかけて性格を概ね把握するようにしている。獣医療を行っている上で厳しい指摘をすることがあるが、学生が萎縮してしまわない様にすることに苦労している。

・意見④（鹿大）：学生に指摘する際には、“君たちのためを思って指摘していること”、“指摘してもらうことはありがたいと思うべきであること”を伝えている。

・意見⑤（山大）：何かを学生に教える際に、物事を分解して伝えるようにしている。他の動物との共通点を伝えるようにしている。教員が頑張りすぎているように思う。

・意見⑥（鹿大）：外部の実習に引率する際にモチベーションが低いと先方に少し失礼になるように思うので、フォローするように心がけている。

・意見⑦（山大）：最近、大動物分野に就職する学生が増えてきている。ポニーの飼養管理を１年生に主体的に行わせていて、そこで学生と教員が触れ合っていることがいいのではと感じている。参加型臨床実習の診療時には学生一人一人に具体的にタスクを渡して、チームとして医療するようにしている。さまざなことを国家試験に紐づけて説明している。

・意見⑧（鹿大）：学生と一緒にやりながら、様々なことを説明している。

・意見⑨（鹿大）：昔からいわれているが、まずやってみせて、それを説明し、やらせてみて、ほめてあげることで、彼らのモチベーションを維持するように心がけている。

・まとめ
　すべての教員が学生とのコミュニケ―ションに対して、時折難しさを感じることがあり、それぞれ工夫しながら学生と向き合っていた。対処方法について非常に参考になる意見が多くあり、有意義なワークショップであった。

教育ワークショップ（伴侶動物臨床系）議事録

文責：高橋 雅（鹿児島大学）

日時：2025 年 9 月 22 日(月) 14:15～14:50

教育ワークショップ参加者（敬称略，順不同）

山口大学：　板本、砂原、西堀、馬場、上林、水野、伊賀瀬

鹿児島大学：　三浦、遠藤、藤木、石川、大和、溝口、柳川、矢吹、十川、高橋雅（世話役）、蔵元、松尾、野口

議題：

1. 新任教員の自己紹介

ワークショップに先立ち昨年度の FD 研修会以降の新任の先生より簡単な自己紹介をいただいた。

2. 授業担当者の再振り分け

授業の担当者の割り振りの見直しに関する提案があった。両大学の双方向授業であれば、担当教員の変更はしやすいため、山口と鹿児島からそれぞれ代表を決めて、現在の授業の担当の確認からはじめることとした。

3. 実習内容の確認

生体が使用できなってきているため実習内容に制限が出てきている。そのため各大学の実習での工夫内容の情報共有を行った。山口大学では外科実習において、豚の皮膚などから臓器を購入し、縫合実習に用いているとのことであった。

4. 研修医の教育について

それぞれの大学だけでは人数も少なく難しい部分があるため、両大学がオンライン症例検討会などを進めていくことができればという案が出された。

Ⅴ．令和７年度専任教員の FD 参加率

部局名（　共同獣医学部　）

合計参加率		**97.8　%　（専任教員　46　名中　45　名 参加）**
企画別参加率	合同 FD 研修会	71.1　%　（専任教員　45　名中　32　名 参加）
	授業評価アンケート	82.6　%　（専任教員　46　名中　38　名 参加）
	授業参観	93.2　%　（専任教員　44　名中　41　名 参加）
備考		

Ⅵ．共同獣医学部における特筆すべき取り組みや改善事例など

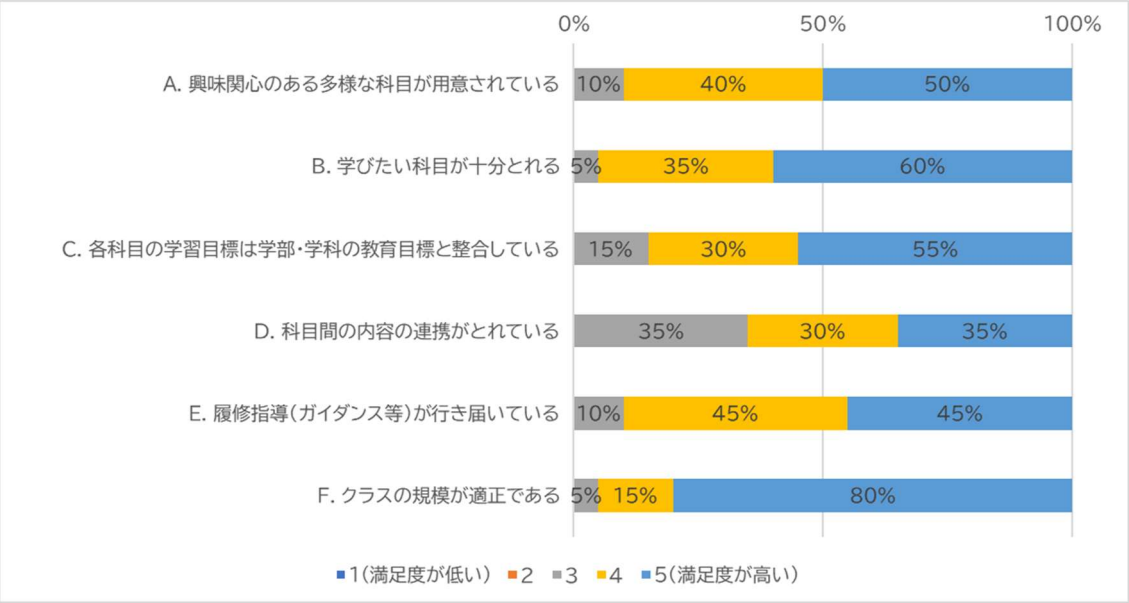
FD 活動の一環として実施した学生の授業評価アンケートの結果から浮かび上がってきたカリキュラムの課題に対応し、共同獣医学科カリキュラムの一部を変更した。具体的には、これまで卒業論文指導教員への学生配属と卒論研究活動の開始は５年次前期からであったが、アンケート結果から、研究活動の円滑なスタートや５年次のカリキュラムでメインとなる参加型臨床実習との両立に支障が生じている状況が確認された。そこで、卒論指導教員への学生配属を半年前倒しして、４年次後期から卒論研究活動を開始できるようにカリキュラムを変更した。この変更の成果評価については、数年後の実施を予定している。

Ⅷ. 自己点検・評価

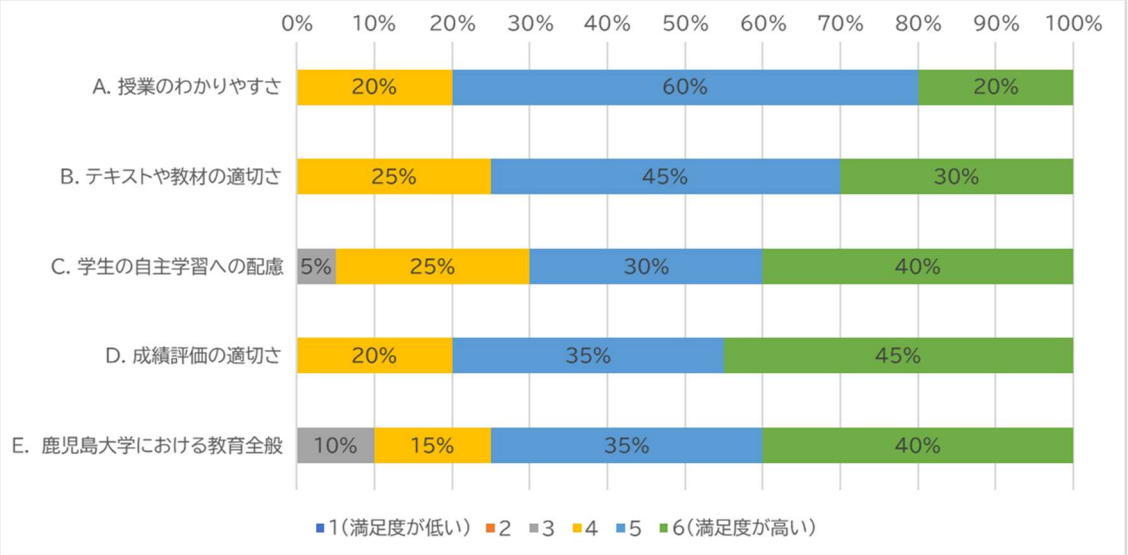
【令和７年度共同獣医学科卒業予定者アンケート結果】

A. 本学に対する評価

問1　本学のカリキュラム（履修科目の数や構成、学年配当、時間割等）に対して、総じてどれくらい満足していますか。それぞれについてお答えください。

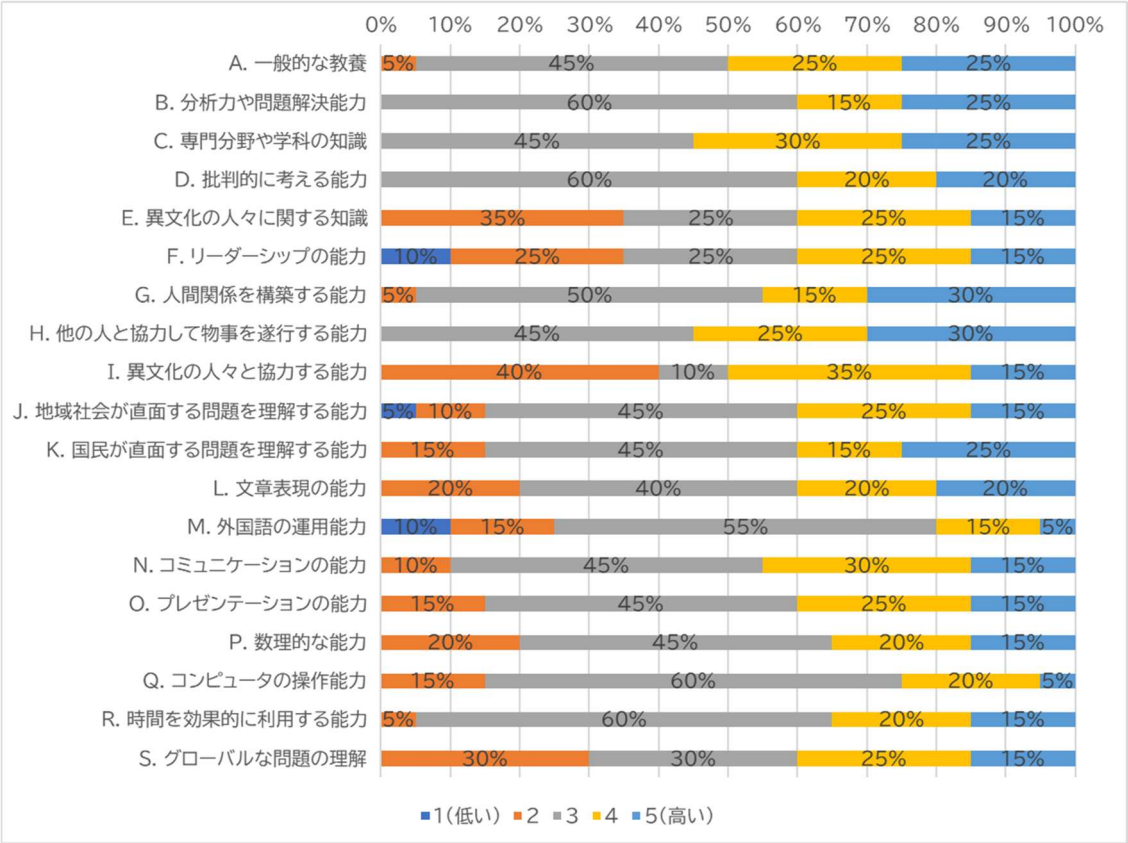


問2　本学の教育内容に対して、総じてどれくらい満足していますか。それぞれについてお答えください。

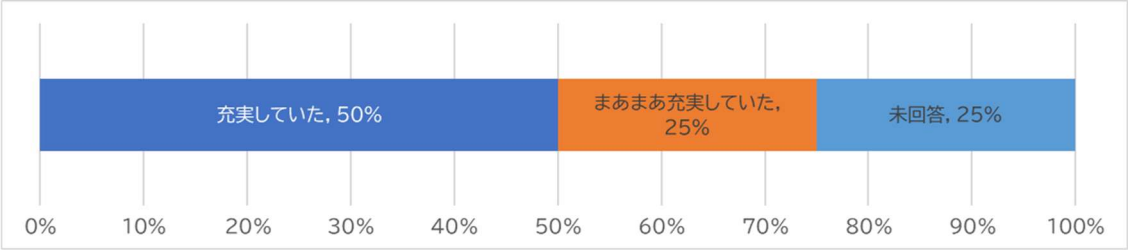


B. あなた自身の学生生活について

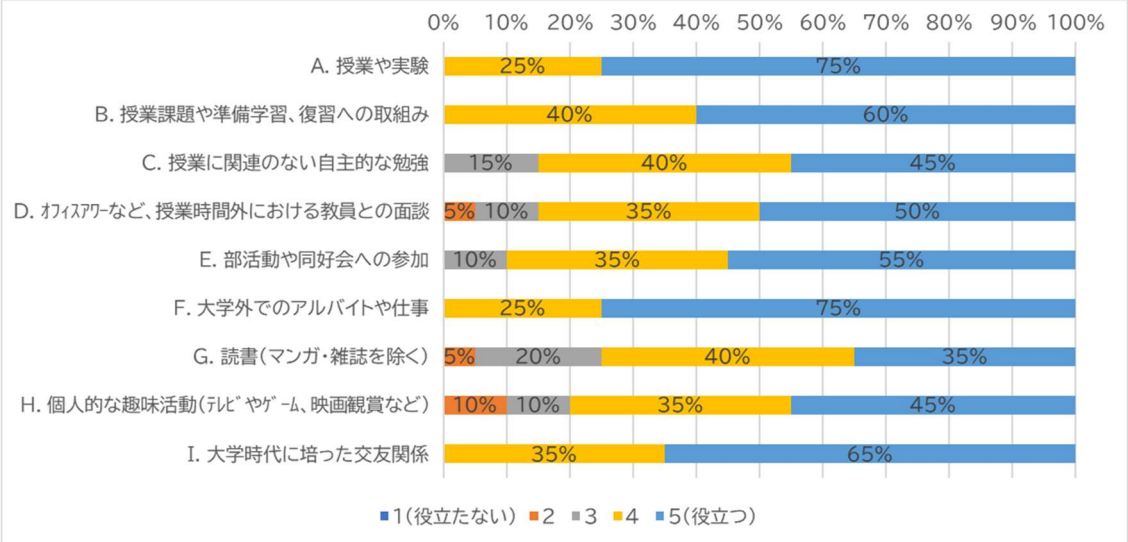
問3　あなたは現在、次の能力や知識をどの程度持っていますか。それぞれについてお答えください。



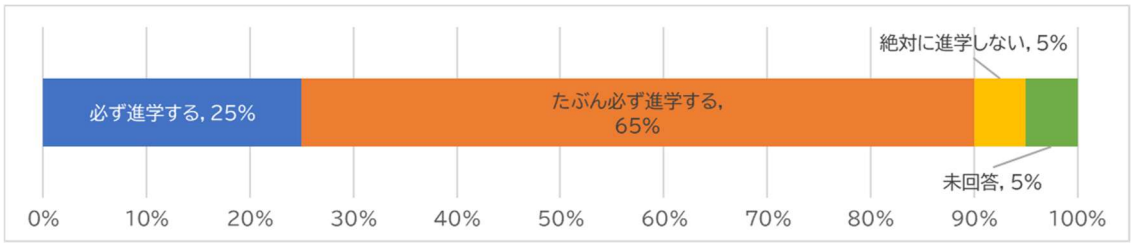
問4　本学での学生生活は充実していましたか。



問5　大学生活での活動や経験は、今後のあなたの成長にどれくらい役立つと思いますか。それぞれについてお答えください。



問6　もし大学を選び直せたら、あなたはもう一度、本学に進学しますか。

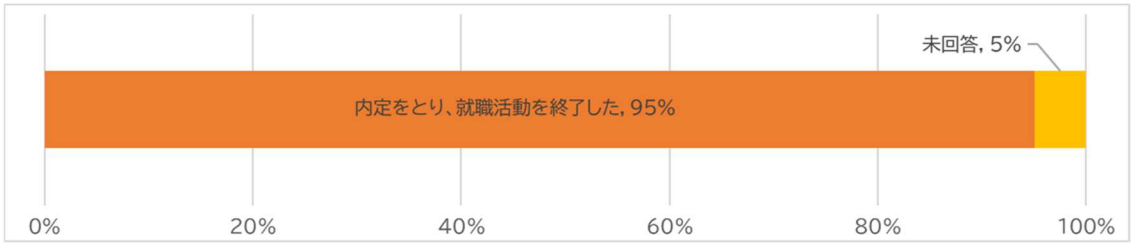


C．今後について

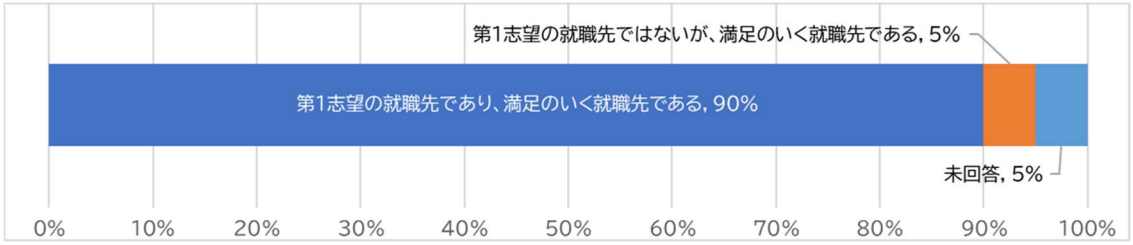
問7　あなたは、就職活動をしましたか。あるいは、採用に関する試験（公務員・教員採用試験・専門職等の採用に関する試験のこと）を受けましたか。最も近いと思われるものを1つ選んでください。



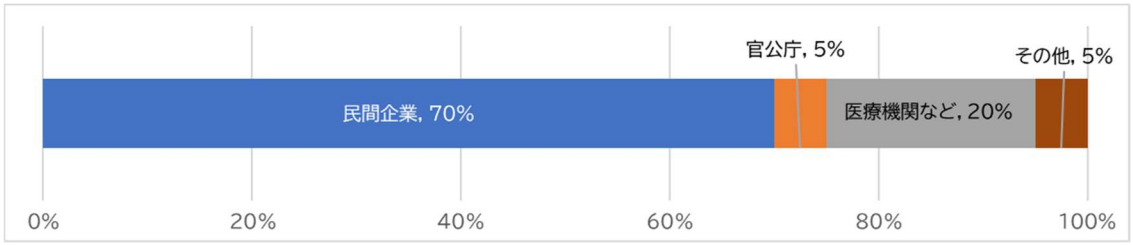
問8　あなたの就職活動は終了しましたか。



問9　最終的に決定した就職先は第1志望でしたか。



問10　あなたの卒業後の進路を教えてください。



【考察】

共同獣医学部卒業予定者のカリキュラムおよび教育内容に対する満足度は、総じて高い水準にある。また、学生生活を通じて身につけた能力や充実度、活動・経験の将来性に関する評価についても高い傾向が認められる。下学年を対象とした同様のアンケート結果と比較すると、全体的に前向きな回答が多いが、その背景には、多くの学生が第 1 志望の就職先への進路をすでに確定していることが影響している可能性が考えられる。

すなわち、教育内容と就職成果との因果関係が結果論的に肯定的に評価されている可能性があり、本アンケート結果のみをもって共同獣医学部の教育課程の質の高さを十分に裏付けるものとは言い難い。したがって、今後も継続的な検証と改善に向けた取り組みを進めていく必要があると考えられる。

理工学研究科

令和７年度　鹿児島大学大学院理工学研究科FD委員会活動報告

はじめに

理工学研究科のファカルティ・ディベロップメント委員会（以下，FD 委員会）は，当研究科の教育目標である「今日の諸課題に対応できる倫理的判断力及び人間生活を取り巻く自然についての総合的な知識をもち，自然科学に関する学問の高度化と多様化に幅広く柔軟に対応できる，次世代を担う技術者，研究者，さらには高度専門職業人を養成する」を実現するため，教育内容および教育方法の改善に取り組む目的で設置されている．以下に，令和７年度における理工学研究科の FD 活動の概要を報告する．活動計画の策定から本報告書作成まで，委員各位をはじめ理工学研究科等研究科および工学系総務課総務係をはじめとする事務職員の方々から多大なるご協力を賜った．ここに深く感謝の意を表する．

令和７年度鹿児島大学大学院理工学研究科ファカルティ・ ディベロップメント委員

委員長	橋本雅仁	（全学 FD 委員会委員，工学部 FD 委員長，１号・３号委員）
委　員	近藤剛史	（数理情報プログラム，２号委員）
委　員	重田出	（物理・宇宙プログラム，２号委員）
委　員	加藤太一郎	（化学プログラム，２号委員）
委　員	渡部俊太郎	（生物学プログラム，２号委員）
委　員	小林励司	（地球科学プログラム，２号委員）
委　員	定松直	（機械工学プログラム，２号委員）
委　員	野見山輝明	（電気電子工学プログラム，２号委員）
委　員	安達貴浩	（海洋土木工学プログラム，２号委員）
委　員	二井晋	（化学工学プログラム，２号委員）
委　員	高梨啓和	（化学生命工学プログラム，２号委員）
委　員	加藤龍蔵	（情報・生体工学プログラム，２号委員）
委　員	鷹野敦	（建築学プログラム，２号委員）
委　員	新留康朗	（理学部 FD 委員長，３号委員）
委　員	野間尚宜	（理工学研究科等事務部長，４号委員）

第1章　令和7年度の鹿児島大学大学院理工学研究科の FD 活動

1.1　鹿児島大学の中期計画・年次計画と理工学研究科の FD 活動（橋本雅仁）

理工学研究科の FD 活動は，令和４～９年度の第４期中期目標のうち「I 教育研究の質の向上に関する事項」に関する中期計画である「I 教育研究の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置」の「２ 教育に関する目標を達成するための措置」の実現に関して具体的な教育の質的向上を目指す．研究科の大学院生は，中期計画の「３ 研究に関する目標を達成するための措置」に謳われている国際水準の研究拠点形成，国際レベルの研究の実現，地域との連繋や地域の活性化，知的財産の創出や社会実装の実現などに不可欠な存在であり，未来社会を担う大学院生の意識を的確に捉えつつ，教育の内容や方法の改善を続けることが求められる．令和７年度も，FD 委員会の任務である「本研究科で実施する FD に関すること，本研究科で実施する教育課程および教育活動に関する自己点検・評価に関すること，それに基づく教育の改善および質的向上に関すること，本学 FD 委員会から付託された事項に関することなどを審議し実施すること」に基づき FD 活動を実施した．以下，第２章で企画１の理工学研究科・理学部・工学部 FD 講演会と企画３の他機関主催 FD 研修会参加，第３章で企画２の学生による授業評価アンケートおよびその結果を踏まえた授業計画改善書の提出，第６章で企画４の博士前期・後期課程修了予定者アンケートについて報告する．

1.2　理工学研究科 FD 委員会（橋本雅仁）

令和７年度理工学研究科 FD 委員会を３回（オンライン会議２回，メール会議１回）開催した．議事要旨の概要を本稿末尾に参考資料として掲載した．なお，理工学研究科 FD 委員会開催の有無にかかわらず，全学 FD 委員会開催後に資料を 2 号委員へ配布し，全学 FD 委員会からの持ち帰り事項がある場合は主にメールによる照会を行い，1 号委員と事務担当者がとりまとめた．

第2章　理工学研究科 FD 講演会と他機関主催 FD 研修会

2.1　理工学研究科 FD 講演会（橋本雅仁）

令和 7 年 11 月 19 日に，大学院理工学研究科・理学部・工学部の合同 FD 講演会（企画 1）として，サイバー大学教授および鹿児島大学理工学研究科特任教授の勝眞一郎氏を迎え，「大学の地域貢献と DX」と題する約 45 分間の講演の後，約 10 分間の質疑応答を行った．講演ではまず，今後の大学に求められる重要なテーマである地域貢献とデジタルトランスフォーメーション（DX）について解説がなされた．続いて，少子高齢化や過疎化，離島を抱える鹿児島において期待される課題解決に対し，理工学の知見が果たす役割につい

ての大学と地域の関わり方や貢献の在り方を，演者の奄美での経験を交えて説明があった．さらに，DX の基本概念と地域課題解決への貢献についても紹介された．また，理工学系の技術や人材が，スマート農業，遠隔医療，観光振興，環境文化の体系整備などに貢献し得る可能性が具体例とともに示された．最後に，大学内の連携や地域との共創を通じて持続可能な地域 DX を実現するための意見交換が行われた．本講演会は，地域貢献と DX に大学がどのように関わり得るかを考える有意義な機会となった．ご講演いただいた勝氏に深く感謝する．

2.2 他機関主催の FD 研修会参加報告(橋本　雅仁)

会議名：　第 98 回日本生化学会大会

開催日：　2025 年 11 月 3 日～5 日

開催地　：　国立京都国際会館

主催：　公益社団法人 日本生化学会

後援：　文部科学省

参加セッション：　シンポジウム[2S11e]　オープンサイエンス時代を生き抜く研究者とは?

セッション開催日時：　2025 年 11 月 4 日(火) 16:30 ～ 18:30

セッション開催場所：　第 11 会場 (Room G)

オーガナイザー：田中 智之 (京都薬科大学)，木村 洋子 (静岡大学)

講演演題：

[2S11e-00]イントロダクション　○田中 智之 (京都薬科大学)

[2S11e-01]オープンサイエンスの潮流を踏まえた科学と社会の変容にみる，研究，研究者コミュニティ，研究機関の再構成

○林 和弘 (文部科学省科学技術・学術政策研究所)

[2S11e-02]Trust in Research in the Age of Generative AI

○McIntosh Leslie, Draux Helene (Digital Science)

[2S11e-03]大規模データ時代の実験生データ保存戦略 ―東大・定量研での実践と教訓―

○須谷 尚史 (東京大学 定量生命科学研究所)

[2S11e-04]総合討論

報告：　本セッションは，近年必要性が強調されているオープンサイエンスと，今後の教育研究に欠かせない生成 AI の活用について，研究者としてどのように取り組むべきかという方向性についての講演であった．

まず，イントロダクションとして，生化学会員へのアンケートが紹介され，生成AIについては認知度高く活用が進んでいるものの，オープンサイエンスについてはあまり知られていない実情が報告された．

ついで，政策決定の立場からオープンサイエンスについての歴史，考え方，今後の方向性について講演された．歴史的には，過去にグーテンベルグの印刷の発明によって起きた学術のオープン化の流れが，再度Webの発明とAIの発展によってさらに大規模・広範囲に大変革されつつある最中と考えられる．特に今回の大変革では，従来の仮説主導型研究がデータ主導型へ，査読出版システムがプレプリントとオープンレビューへ，情報入手の対価が高価格から低価格・無料へと変化している．この動きの中で，政策的としてのオープンサイエンスは，これまでよりも「より」公開を進める，という考え方で，論文＋データの公開を目標としている．また，データベースの整備だけでなく，データを活用するためにAI for ScienceとしてAIの活用も盛り込まれつつある．しかし，現状のAIには問題点も多く，特に完全捏造論文の乱造により従来の査読システムでは排除が難しいレベルとなり，研究の構成が脅かされる状況である．このような状況で，オープンサイエンスが研究者の研究ログとして研究公正の確保に使用することが期待できる，とまとめられた．

続いて海外から，研究におけるTrustについての講演があった．生成AIの普及によって前述のようにペーパーミルによる論文の捏造が多発しており，この認識・排除が追いつかない状況になっている．この状況でTrustを見分けるには，研究の来歴，著者の実在性の確認，元データの開示など透明性の確保，再現性の確認などが必要である．このためにフォレンジック科学計量分析という手法があり，著者のパターンや引用など異常な挙動を特定し，研究のTrustを維持することの必要性が述べられた．

さらに，オープンサイエンスのデータ公開の実例として，東京大学 定量生命科学研究所の取り組みが報告された．分生研時代の２件の大規模不正の発覚を背景に，研究データの収集・保管・公開を開始した．現在は，論文が受理された場合に，①論文採集原稿と図表，②根拠データとしての生データ，中間加工データ，③作成者，取得機器などの情報をまとめて，原則として１ヶ月以内に研究所に提出し，Googleドライブを用いて研究所内限定で公開されるフローになっている．今後の課題としては，動画などのデータ容量の増加による保管の困難化，実験ノートやソフトの収集の是非などがある．研究者自身の公正性を守れることから若手研究者には概ね好印象で捉えられていることが述べられた．

最後に総合討論として，質疑応答があった．まず予算の問題が取り上げられたが，東大ですら情報管理用の予算確保が難しい現状が明らかとなった．また，論文かの費用高騰もあり，プレプリントを業績として認めるかどうかの議論もあった．ついで，特許のための秘匿と研究公開の間の線引きは個別の対応が必要であることもわかった．主には特許化が

終了してから論文発表と公開をする方向性で意見が述べられた．さらにデータの保持期間，研究者の定年・事故の際の管理責任などにも問題が残っていることがわかった．

講演を聞いて，オープンサイエンスと AI の現状を理解することができた．一方で研究公正を確保するためには，これを教員だけでなく学生に理解させることも必要であると感じた．研究の最前線を担う学生が最終的なデータの行方を理解して研究に取り組むことで，信頼性の高いデータ取得，保存が可能になるものと思う．今後の教育研究な活かせるようにしたい．

第 3 章　学生による授業評価

3. 1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

3. 1. 1　理学専攻の授業評価アンケートの結果報告（加藤　太一郎）

令和２年度から令和７年度の授業評価アンケート結果を図 3.1.1 に示す．令和５年度までは 11 項目中 10 項目が 4.0 以上の評価であり，概ね学生の授業に対する満足度は高いと考えられた．一方「②予習と復習」以外の項目について，令和６年度に評点が 0.4～0.8 点も下がり軒並み３点台の値となった．令和７年度は前年と比べて横ばいであった．「②予習と復習」は 3 点付近の値が続いており，また「①出席」については年度を重ねるごとに評価が下がっているため，来年度も同様の傾向が続くようであれば，その理由を見極めることが授業改善に重要となる．また受講生が少なかったり，受講数が多くても回答数が少ない講義もあるようなので，アンケート結果をどのように受けとめ活用するべきなのかについても再考する必要があると考える．

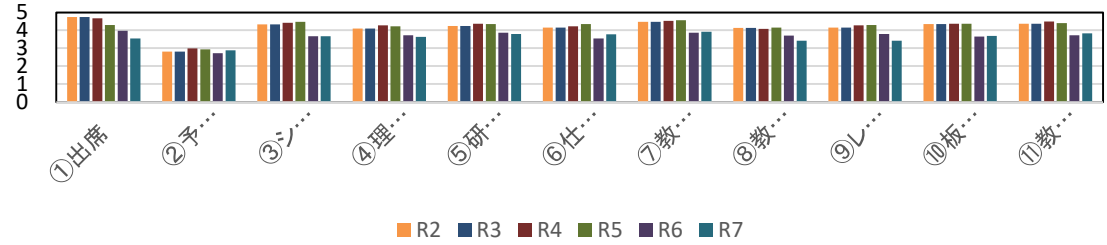


図 3.1.1　博士前期課程（理学専攻）の授業評価アンケート結果の推移

3. 1. 2　工学専攻の授業評価アンケートの結果報告（定松　直）

令和２年度から令和７年度までの工学系専攻の授業評価アンケート結果を比較したものを図 3.1.2 に示す．全体として，各年度とも多くの項目が 4 点台を維持しており，工学系の教育は概ね高い評価を得ていることがわかる．とくに，③シラバス，⑤研究に，⑥仕事に，⑦教養に，⑪教員の熱意は継続的に高水準で推移しており，教育内容の体系性や，学修成果の社会的・学術的有用性に対する評価は比較的安定して高いといえる．

一方で，②予習と復習は全年度を通して他項目より低く，3 点台前半にとどまっている．この点は，学生の主体的学修が相対的に弱いことを示しており，長期的な課題であると考えられる．また，R2 から R6 にかけては，多くの項目で緩やかな上昇傾向が見られたが，R7 年度は一部項目でやや低下が見られ，全体平均も R6 年度より下がっている．したがって，R7 年度は高評価を維持しつつも，一部で頭打ちや後退が見られる年度であったと推察できる．

今後は，②の点数の低さの改善のため，学生の主体的学修を促す仕組みづくり，教材・説明方法の改善，教員の関与の可視化を重点的に進めることが必要であると考えられる．

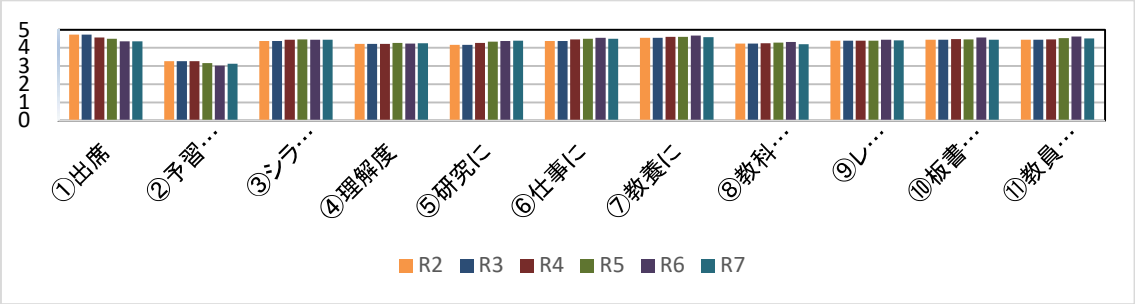


図 3.1.2　博士前期課程（工学専攻）の授業評価アンケート結果の推移

3. 2 博士前期課程の各プログラムにおける授業評価アンケート分析結果

3. 2. 1　数理情報科学プログラムの授業評価アンケートの結果報告（近藤　剛史）

直近 6 年の授業評価アンケートの結果を図 3.2.1 に示す．本年度のデータが無いが，これは今年度は受講者数が少なかったためアンケートの回答が得られなかったためである．前年度は回答者の特定を避ける必要性から，後期開講科目の授業アンケートの実施を見送ったことで後期の数値が全ての項目で 0 となり，図 3.2.1 の数値は前期の数値と後期の数値の平均値として作成されている為，全ての項目において数値が急落したようなグラフとなっている．「②予習と復習」のスコアが例年低めであるが，これは授業によっては予習をしなくても理解できるように教員が配慮している影響があると思われ，特に問題視はしていない．なお，今年度のように受講者数が少ない場合はやむを得ないが，アンケートの実施率の低さは改善の余地がある．

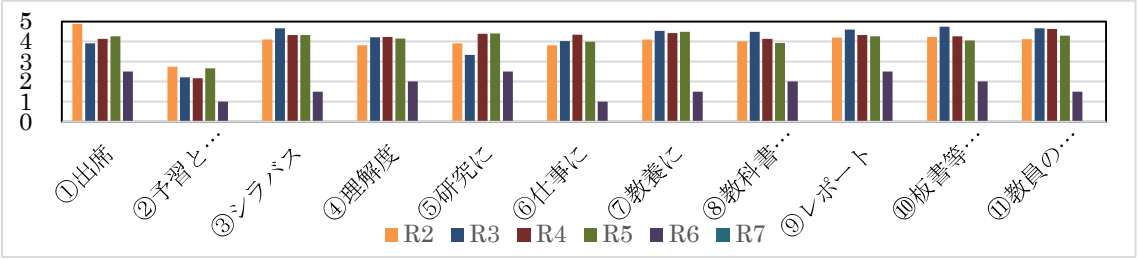


図 3.2.1　数理情報科学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3. 2. 2 物理･宇宙プログラムの授業評価アンケートの結果報告（重田出）

令和 2 年度から令和 7 年度までの 6 年間のアンケート結果を図 3.2.2 に示す.令和 6 年度に大きく評価が落ちている項目が目立つものの，令和 7 年度は過去 6 年間の結果の中でも全ての項目において高い評価であり，概ね学生の授業に対する満足度は高いと考えられる.一方で，「②予習と復習」も改善は見られるものの，他の評価項目と比較して，低い評価の値に留まっている.「④理解度」は高い評価が得られているものの，「②予習と復習」とは密接な関係があると考えられるため，予習と復習をより意欲的に取り組んで欲しい.全ての項目の評価を高いレベルで維持するために，今後も継続的に推移を観察していく必要がある.

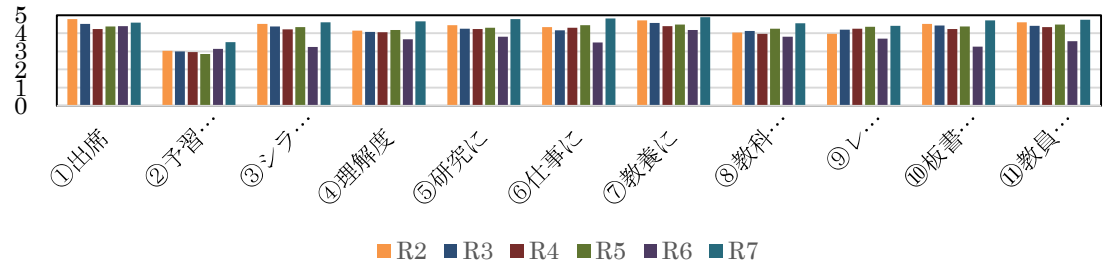


図 3.2.2　物理・宇宙プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3. 2. 3 化学プログラムの授業評価アンケートの結果報告（加藤 太一郎）

令和 2 年度～令和 7 年度の授業評価アンケートの結果を図 3.2.3 に示す．ほとんどの項目で評価は 4 を上回っているが，「②予習と復習」のスコアが評価 3 程度と毎年低い値にとどまっている．これは「④理解度」や「⑧教科書・教材」，「⑨レポート」のスコアが若干低いこととも関連があると考えられる.つまり大学院の講義では学部での講義ほど予習と復習を促す機会が少ないことが原因の一つではないかと考えられる．大学院の講義は受講生の研究内容からやや離れた分野も多いため，多岐にわたる知識を得るためにも，予習と復習を行って欲しいところである．令和 7 年度は項目②以外で前年度より評価値が上昇していることは喜ばしいことである．各教員が教材や授業方法の工夫をしたことで「⑪教員の熱意」が 4.81 という高い値を獲得したことに加え，発表や討論等のアクティブラーニングを取り入れたことで⑤～⑦の今後に活かせる項目のスコア向上に寄与したのではないかと考えられる．来年度以降もより高い値の取得を目指して教員・学生双方が協力してより良い講義の実施を目指していくことが重要である.

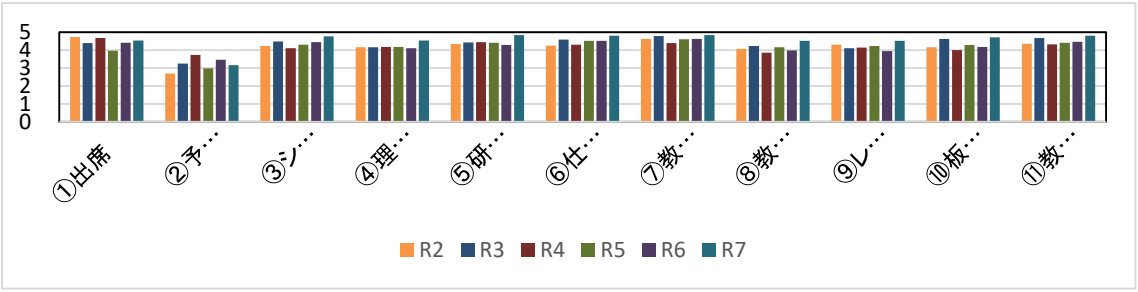


図 3.2.3　化学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.4　生物学プログラムの授業評価アンケートの結果報告（渡部　俊太郎）

令和２年度～令和７年度のアンケート結果を下図に示す. 令和７年度のアンケートでは，昨年度と同様に全 11 項目中 10 項目で 4.0 以上の評価となっていた．令和 6 年においては 4.0 以上の評価となっていた科目は 7 科目であったことから，改善が見られていると考えられる． また，いずれの項目も理学専攻全体の平均よりは高くなっていた．これらのことから，学生の授業に対する評価は概ね良好であり，ただちに改善すべき問題点はない. ただし，令和 3 年度以降継続して評価が低下していた「⑨レポートに」の項目については，理学専攻全体でも評価が低く，研究科全体としてのレポート課題・評価方法について検討しつつ，今後の推移を観察していくことが必要である.

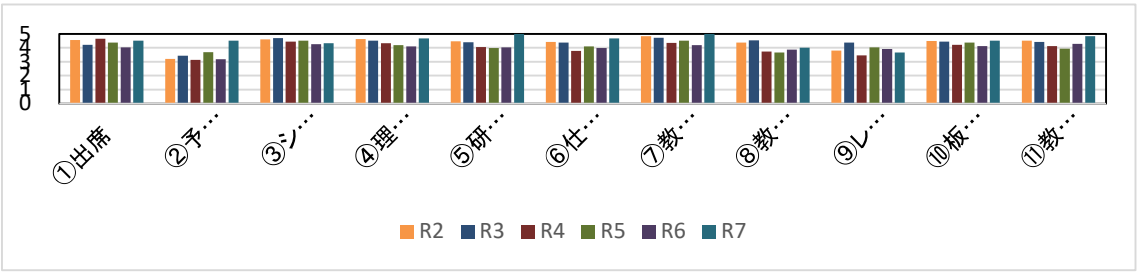


図 3.2.4　生物学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.5　地球科学プログラムの授業評価アンケートの結果報告（小林　励司）

令和２年度～令和７年度の６年分のアンケート結果を図　3.2.12　に示す．地球科学プログラムでは 1 学年の目安定員は 6 名であるため，全体的に授業アンケートの回答数が少ない．そのため，年度ごとの変動が大きく，分析には限界がある.

地球科学プログラムの令和 7 年度のアンケート項目全 11 項目中，10 項目において，4.0 以上の高い水準を維持している．しかしながら，全体的に令和 4 年度をピークに下がっている傾向が見られ，懸念材料である.

「2. 予習と復習」については，これまでにも指摘されているように，全体的に低い傾向がある．しかし，今年度はこの 6 年で最も高かった．各科目でレポート課題等を検討したり，学生へ予習復習の指導をしたりするなどの改善があったのかもしれない．ただし，

それでもまだ低いため，さらなる改善が求められるだろう．

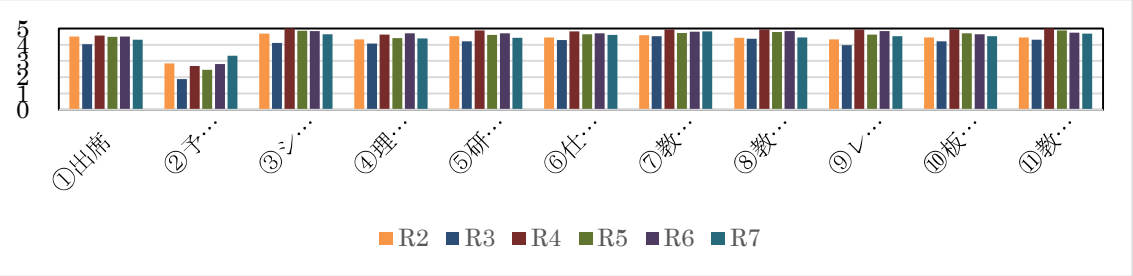


図 3.2.5　地球科学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.6　機械工学プログラムの授業評価アンケートの結果報告（定松　直）

図 3.2.6 に，機械工学プログラムの講義科目に対して実施された授業評価アンケートの結果を示す．図 3.2.6 の結果は，主なアンケート項目の評価点において，1 年間に開講された科目で平均した値の過去 6 年間における推移を示している．

図 3.2.6 から，評点は 1 項目を除き 4 以上で推移しており，学生の授業に対する評価は概ね良好で特段の問題は無い．項目「②予習と復習」は，例年最も評点が低いが R7 では改善傾向がある．さらなる改善策として，予習・復習に連動するような授業およびレポート課題の内容を検討する等，学生が予習・復習を行うことに繋がるようなさらなる取り組みが必要と思われる．今後も授業評価アンケートの実施と分析および活用により，教員と学生の授業に対する取り組みの改善を継続的に実施することが重要である．

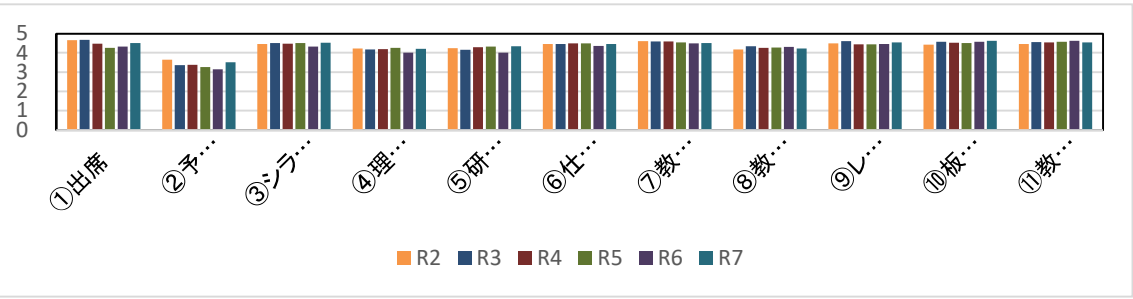


図3.2.6　機械工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.7　電気電子工学プログラムの授業評価アンケートの結果報告（野見山　輝明）

図 3.2.7 に，電気電子工学プログラムの過去６年分（令和２年度から令和７年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す．②予習と復習の評点は，全６年間を通じて 3.0 前後で推移しており，他の項目と比較して依然として低い水準にある．④理解度は R3 年度に一時的に低下したものの，その後は 4.0 以上を維持しており，概ね良好である．②予習と復習の改善に向けては，理解度の向上に繋がるような予習・復習課題の提示などに継続的な工夫が必要である．その他の項目は評点４以上を保ち，概ね横ばいないし上昇傾向にあ

る．これらは教員による授業改善の取り組みの成果であり，今後も継続的な取り組みが期待される．

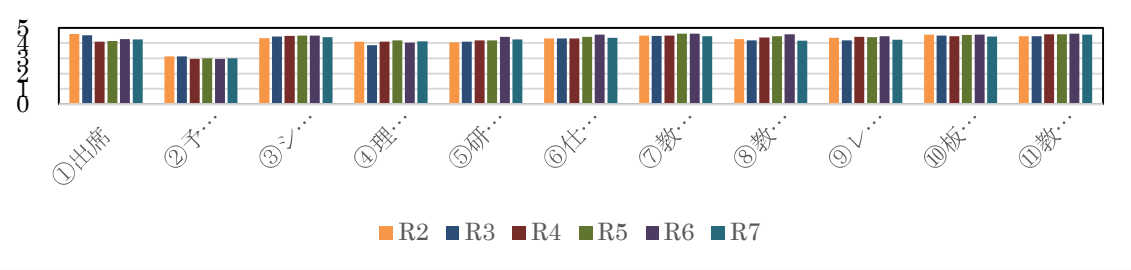


図 3.2.7 電気電子工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3. 2. 8 海洋土木工学プログラムの授業評価アンケートの結果報告（安達　貴浩）

海洋土木工学プログラムにおいて，令和２年～令和７年度の６年間に実施した授業評価アンケート結果を図 3.2.8 に示す．この結果は，授業評価アンケートの主要項目に対する評価について，その年度のアンケート実施科目全体の平均評価である．この６年間における評価は，「②予習と復習」を除いて４ポイント以上であり高い水準を維持している．大学院の講義に対して学生は一定の満足を得ているものと判断され，授業改善の継続的な効果が表れている結果であると考えられる．評価項目の中で最も評価が低い「②予習と復習」に関しては，令和元年度から評価が上昇傾向にあったが（昨年度の報告書を参照），ここ３，４年は 3.1 ポイント前後で頭打ちとなっている．大学院の授業は科目毎に受講生数や講義形式が大きく異なり，分析しがたい面もあるが，学生へのヒアリング等を通じて，この設問の評価が相対的に低い理由を分析し，継続的な授業改善に努める必要がある．

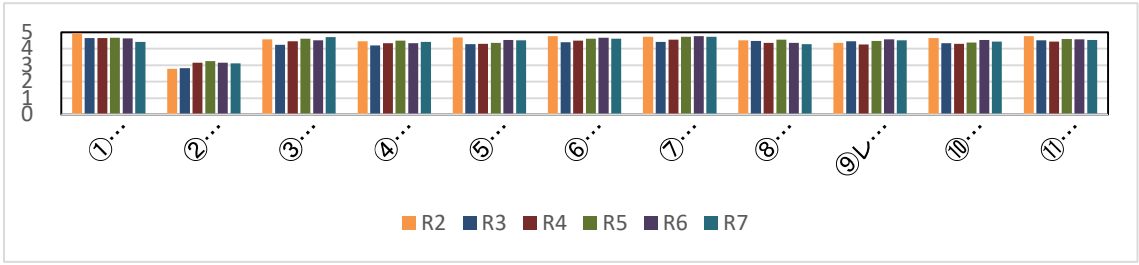


図 3.2.8　海洋土木工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3. 2. 9 化学工学プログラムの授業評価アンケートの結果報告（二井　晋）

化学工学プログラムの最近６年間（令和２～令和７年度）の授業アンケート結果を図 3.2.9 に示す．項目「②予習と復習」の評価を除き，すべての項目で４を超えており総じて高い評価を得ている．「②予習と復習」はこの５年間で比較的高く推移し，遠隔講義が正に作用したことも考えられるが，COVID の影響がなくなった令和５年度以降３年間上昇を続けており，各教員による改善の効果が現れてきている．この４年間の傾向として気に

なるのは①出席の低下である．この傾向は研究科全体でも見られ，勾配については全体での低下勾配よりは小さいものの明確である．これは就職活動の早期化により，講義を欠席する学生が増えたことが要因と推測され，少子化の現在ではこの低下傾向に歯止めをかけることは困難である．出席できなくても学生が学習できるようなしくみを工夫する必要があろう．教員数の減少，財政の劣悪化や諸業務の肥大化の傾向にも歯止めがかからないが，このような状況においても最大限の改善に努めたい．

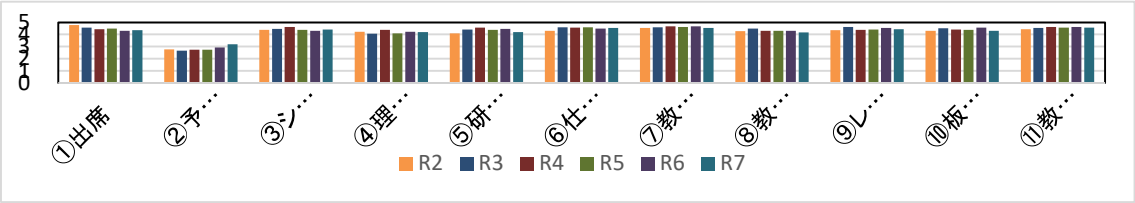


図 3.2.9 化学工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3. 2. 10 化学生命工学プログラムの授業評価アンケートの結果報告（高梨 啓和）

化学生命工学プログラムは，令和２年度の改組によって化学生命・化学工学専攻から工学専攻化学生命工学プログラムとなった．これに伴い授業評価アンケートについても化学生命工学プログラム独自で集計することになった．図 3.2.10 に最近 6 年間のアンケート結果を示す．項目②予習と復習の評価が低いが，その他の項目では良好であった．①出席や②予習と復習などの評価が昨年度よりも低下しているが，長引いたコロナ禍の影響で学生の気の緩みが生じた結果と予想する．今後も，継続的な FD 活動を実施し，改善することが重要である．すなわち，プログラム会議の場で授業評価アンケートの分析結果および考察をフィードバックすることが必要であろう．

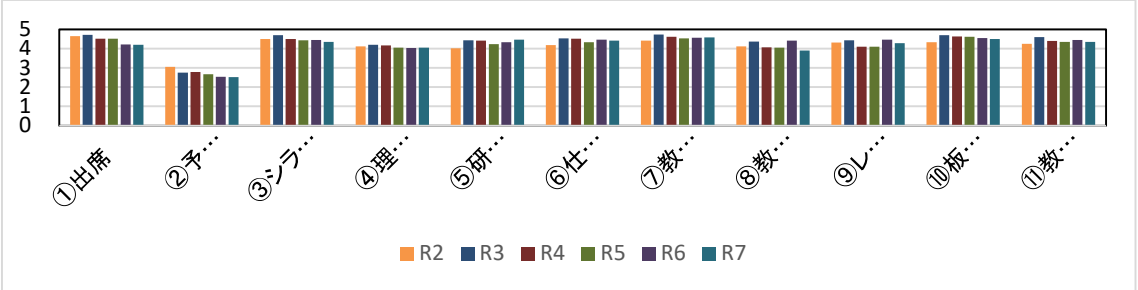


図 3.2.10 化学生命工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3.2.11 情報･生体工学プログラムの授業評価アンケートの結果報告（加藤 龍蔵）

令和 2 年度からの 6 年間において，経年比較の対象となった 11 項目について情報・生体工学プログラムの集計結果を図 3.2.11 に示す．令和 2 年度～令和 7 年度の期間において，授業形態は対面授業，遠隔授業，対面・遠隔のハイブリッド型と変化してきた．令和 6 年度では，すべての項目において令和 5 年度から評価値が低下していたが，令和 7 年度は，多くの項目で評価値が若干ではあるが向上した．「①出席」の評価値は，令和 5 年度に引き続き

２年連続で低下していたものが，ごくわずかに向上したが，以前と比較すると低い水準となっている．また，「②予習と復習」については，今年度も評価点がわずかながら低下しており，他の項目と比較すると低い水準である．次年度以降は，これらの２項目を重点的に改善に努める必要がある．

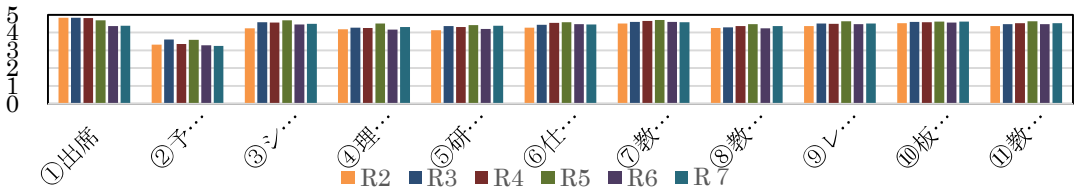


図 3.2.11 情報・生体工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

3. 2. 12 建築学プログラムの授業評価アンケートの結果報告（鷹野 敦）

過去６年間の項目別平均値を図 3.2.12 に示す．「②予習と復習」以外は概ね 4.0 を上回っており結果は良好といえるが，隔年開講科目があることや回答率の低さから的確な解釈は難しい．工学専攻全体の平均値と比較すると，概ね同等または高評価となっており，特に過去２年は多くの指標で上昇傾向にある．授業改善においては「②予習と復讐」と「⑧教科書」が重点項目である．

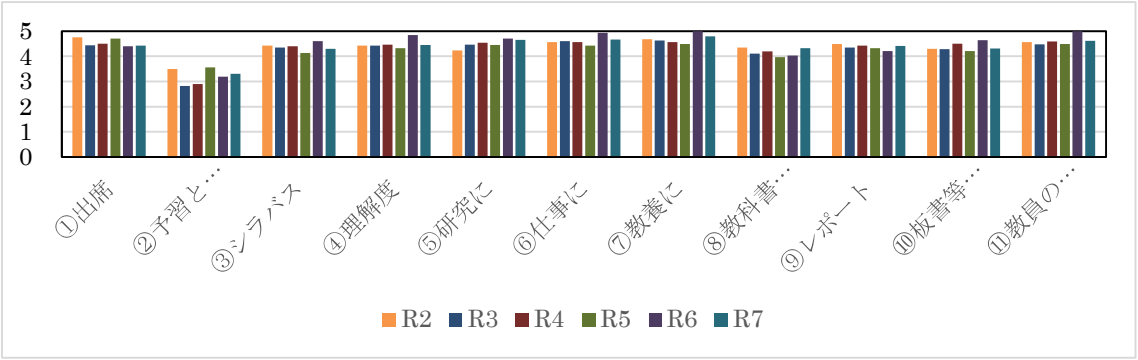


図 3.2.12 建築学プログラムの授業評価アンケートの結果の推移

3. 3 授業計画改善書の活用

（1）数理情報科学プログラム

今年度は授業アンケートの回答が得られなかったため，アンケートに基づく「授業計画改善書」は作成されなかった．しかし，例年，授業計画改善書における昨年や一昨年の評点と比較することで評点の推移を確認することができ，継続的かつ効率的な授業改善につながっている．授業アンケートおよび授業計画改善書をプログラム内の他の教員に公開はしていないが，プログラム会議ですべての科目について，授業状況や成績分布に関する情報交

換を行っている.

(2)物理・宇宙プログラム

アンケート結果の分析は，受講者数が少ないことに加えて回答率も低いケースも多いため，分析が難しい側面がある．しかし，授業アンケートの分析報告でも述べたように，アンケートの評価自体が概ね良好であるが，改善書の作成，提出を通して各教員は授業の改善への取り組みを継続している．授業アンケートの結果はプログラム会議で共有した上で，提出された授業計画改善書は FD 委員が確認して保管しており，必要に応じて FD 委員が提示するようにしている．

(3)化学プログラム

成績分布確認は毎年プログラム会議で行っている．アンケート結果の分析は，受講者数が少ないことに加えて回答率も低いため実施が難しい．よって提出される授業計画改善書は少ないものにとどまっている．また講義形態や内容についての改善方法等は共有していきたいが，そのような機会が設けられていないのが現状である．各教員の取り組みを紹介する等，プログラム内にて情報共有を行っていく予定である．

(4)生物学プログラム

令和7年度は2件の授業計画改善書が提出された．授業アンケートの分析結果でも触れたように，アンケートの評価自体が概ね良好であるが，改善書の作成，提出によって各教員は授業の改善への取り組みを続けている．提出された授業計画改善書はFD委員が確認して保管している．現在の時点では，提出された授業計画改善書を各教員が自由に確認できるような仕組みではないが，必要に応じてFD委員が提示することとしている．

(5)地球環境科学プログラム

令和 7 年度は 8 科目の授業の開講があり，そのうち，6 名の担当教員から授業計画改善書が提出された．アンケート結果に基づき，授業計画改善書を作成することによって，授業の改善に継続的に取り組んできている．プログラム内で成績分布の確認がされ，評価方法の自己点検を行っている．

(6)機械工学プログラム

学部と同様に，プログラムの FD 委員が収集した授業計画改善書は，授業評価アンケートの評価点や科目 GPA とともにプログラム教育評価委員会が整理して分析を行っている．プログラム教育評価委員会は，整理した内容と分析した結果を「プログラム教育評価委員会報告書」としてまとめている．この報告書は電子ファイルとして保管されており，授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている．

(7)電気電子工学プログラム

授業計画改善書は，学部と同様に，各科目の授業評価アンケート結果（評点とそのレーダ

ーチャート，および自由記述）と共にプログラム事務室にて保管され，教員はいつでも閲覧できる．プログラムFD委員会での検討をはじめ，授業改善に取り組むための資料として活用されている．

(8)海洋土木工学プログラム

各教員は，シラバスに記載した評価基準との整合性を自己評価した上で，FD 委員が所属するプログラム教育システム評価委員会に授業計画改善書を提出している．プログラム教育システム評価委員会は，提出された資料に基づいて成績評価分布や合格率などを分析し，その結果をプログラム会議で報告している．成績評価に極端な偏りなどがあった場合には，授業担当教員に成績評価の手続きについての説明を求め，プログラム会議において問題の有無を審議している．以上のように，授業計画改善書を活用した教育の点検および改善を継続的に実施している．

(9)化学工学プログラム

各教員は授業評価アンケート結果に基づいて授業計画改善書を作成することにより授業内容や進め方および成績評価を確認するとともに，改善への取り組みを継続的に行ってきた．FD 委員は各教員より提出された 授業計画改善書を確認して保管している．不備がある場合にはFD 委員が差し戻しを行い，指摘して再提出してもらっている．それでも問題が解決されない場合にはプログラム長との協議，もしくはプログラム会議で議論して対応を検討している．

(10)化学生命工学プログラム

各教員は，授業評価アンケートの結果を受け取り，授業内容や進め方，評価方法に問題がなかったかなどを検証して授業計画改善書を作成し，次年度以降の授業改善に取り組むことを継続的に実施している．また，授業計画改善書を基にして，単位認定に極端な偏りがないかの状況分析を行っており，受験生全体に占めるA評価の受講生の割合が90%以上の科目，受験生全体に占めるAまたはB 評価の受講生の割合が10%未満の科目，受験生全体に占めるF評価の受講生の割合が40%以上の科目が認められた場合は，担当教員に事情を確認することにしている．本年度は，該当する科目は認められなかった．また，授業の進め方や評価法について問題点が発見された場合には，プログラム長を中心としたプログラム検討委員会にて対応を検討することにしている．

(11)情報・生体工学プログラム

情報生体システム工学専攻を含めた情報・生体工学プログラムでは平成 22 年度より，授業計画改善書を学科事務室に保管し，全ての教員が閲覧可能となるように管理している．各教員による授業改善への取組み及び結果を教員全員で共有することで，情報・生体工学プログラム全体の教育内容への継続的な改善が試みられている．

(12)建築学プログラム

学部と同様に各教員が授業計画改善書を作成し,自己点検と改善に取り組んでいる.成績分布については,全科目を対象としてプログラム内で確認・共有し,成績評価に問題がないか確認している.

第４章　GPA制度の現状と学習成果

４．１　理学専攻のGPA制度の現状と学習成果報告（重田　出）

理学専攻のＭ２学生の令和５～７年度までの３年間の累積GPAの分布の推移と，総修得単位数の推移を図4.1に示す.GPAについては，全体の分布に大きな変化は見られない.しかし，3.0以上に着目すると，令和7年度は令和５～６年度と比較して減少傾向にある.項目ごとに見ると，累積GPA3.6～3.8およびGPA3.8～4.0は年度を追うごとに減少していることがわかる.総修得単位数については,年度によって多少のばらつきはあるものの，ほとんどが30単位から35単位の範囲に分布している.令和７年度は33単位から34単位の割合が減少した一方で，30単位から32単位の割合は増加している.これらの傾向が一時的なものかどうかについては，大学院修了時のアンケートの回答とも照らし合わせつつ，令和8年度以降も分析を継続していく必要がある.

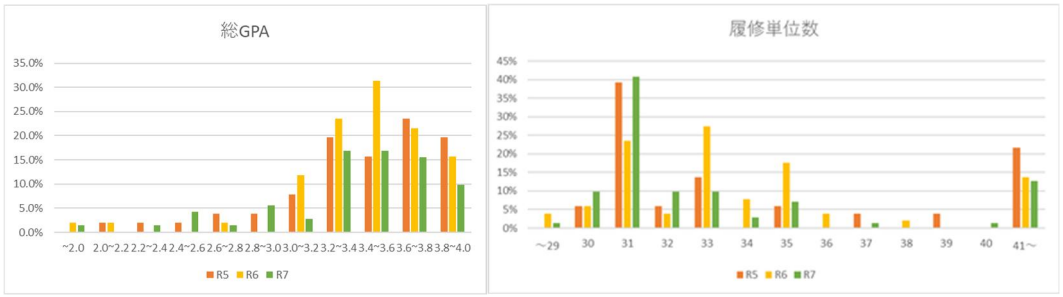


図 4.1　令和５～７年度の理学専攻Ｍ２学生の累積 GPA と総修得単位数の推移

４．２　工学専攻のGPA制度の現状と学習成果報告（野見山　輝明）

工学専攻のＭ２学生の令和５～７年度までの３年間の累積GPAの分布の推移と，総修得単位数の分布の推移を図4.2に示す．累積GPA3.4以上の学生の割合に着目すると，令和５年度は71.8%，令和６年度は79.2%であったが，令和７年度は76.1%とR6年度から若干低下した．項目ごとにみていくと，累積GPA3.8以上の学生の割合は３年間でほぼ横ばいで推移している（令和５年度24.8%，令和６年度25.6%，令和７年度22.6%）．一方，3.4～3.6の学生の割合は３年間で増加傾向にある（令和５年度15.4%，令和６年度18.0%，令和７年度20.8%）．総修得単位数に関しては，修了要件の30単位の割合が減少傾向にあり（令和５年度78.6%，令和６年度71.2%，令和７年度69.5%），32単位以上修得している学生の割合が増加傾向にある（令和５年度12.4%，令和６年度18.8%，令和７年度22.6%）．30単位未

満の学生の割合は３年間で着実に減少している（令和５年度4.3%，令和６年度2.8%，令和７年度1.8%）．これらの傾向が一時的なものかどうかについては，令和８年度以降の状況を含めた継続的な分析が必要である．

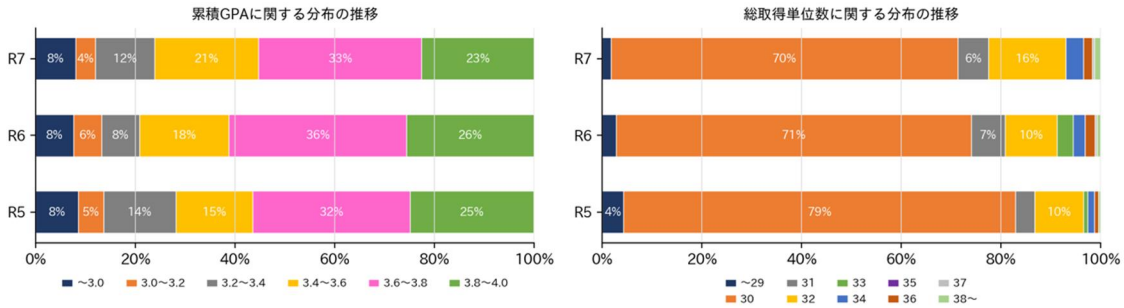


図 4.2　令和５～７年度の工学専攻M２学生の累積 GPA と総修得単位数の推移

第５章　学生の研究活動と教育成果（渡部俊太郎，鷹野敦）

FD活動の目的の１つに，大学院生(表5.1)の研究発表支援がある．国際会議での研究発表件数は増加傾向にある（表5.2）．査読あり論文数も増加している．表5.4は学会等での受賞件数で，全プログラムで43件と令和6年度の受賞件数 71件を下回ったが，例年並みの成果である．全体に学生の研究活動は活発化していると言える．

表 5.1 令和５年度から７年度までのプログラム別在籍者数

年度	機械	電気	海洋	化工	化生	情報	建築	数理	物理	化学	生物	地球	情報（数理）	情報（認生）	情報（協創）	合計
R5	103	92	36	36	64	88	64	13	34	29	20	11	－	－	－	590
R6	106	79	35	43	69	81	64	15	38	39	21	16	－	－	－	606
R7	104	78	30	42	51	36	67	9	39	42	23	14	7	16	47	605

表 5.2 国際会議での発表件数

年度	機械	電気	海洋	化工	化生	情報	建築	数理	物理	化学	生物	地球	合計
R5	4	5	10	3	27	4	10	1	11	3	0	0	78
R6	0	10	9	6	27	27	9	0	10	1	3	1	79
R7	6	8	5	21	11	8	10	1	12	3	0	0	－	－	－	85

表 5.3 査読あり論文数

年度	機械	電気	海洋	化工	化生	情報	建築	数理	物理	化学	生物	地球				合計
R5	1	8	13	2	8	3	9	1	3	6	3	4				61
R6	2	9	12	7	10	10	5	1	5	7	1	0				69
R7	5	8	13	14	4	10	7	0	6	10	5	0	－	－	－	82

表 5.4 R7 年度受賞件数

年度	機械	電気	海洋	化工	化生	情報	建築	物理	化学	総合理工学博士後期			
R7	3	5	6	8	4	4	3	1	7	2	－	－	－

第６章 博士前期・後期課程修了予定者アンケートの分析結果報告（橘本雅仁・新留康郎）

博士前期・博士後期修了予定者アンケートでは教育プログラムについて５段階で評価してもらい，評価理由として「授業内容，研究環境，教員の指導・熱意，施設・設備，その他」から複数回答を求めた．また，学習に一生懸命取り組んだか，研究活動が有意義であったか回答してもらい，有意義だったものとして「講義，演習（ゼミナール），実験・実習（インターンシップ・海外研究を含む），その他」から，入学時と比較して特に身についた能力として「多面的・俯瞰的思考力や倫理的判断力，情報収集・分析力や課題発見力，専門学修力，創造的発想力や課題解決力，コミュニケーション力」からそれぞれ複数回答を求めた．その結果，前期課程・後期課程とも，昨年度とほぼ同様に，大多数が学習に一生懸命に取り組み，研究活動は有意義で，教育プログラムは概ね好評価であった．具体的には次の通りである．

令和６度前期課程修了生より171件の回答があった．教育プログラムは「良かったと答えた割合は85%，普通12%，良くなかった3%」となり，理由として「研究環境，教員の指導や熱意，授業内容，研究施設・設備」の順に回答が多かった．その他として，指導が丁寧だった，指導は良かったが研究環境が悪い，ノウハウが蓄積していない，様々な能力が上がった，海外研修にも参加できた，研究が楽しいと感じたとの記述があった．学習への取組については「一生懸命だった88%，普通9%，一生懸命でなかった2%」，研究活動については「有意義だった90%，普通8%，有意義ではなかった2%」となり，有意義であったのは実験・実習，講義，演習の順であった．その他として，海外研修で海外学生と交流できた，ゼミで様々な議論をできた，就活教育，学会への参加，専門科目以外の講義を受講できたという内容の記述があった．特に身についた能力としては「多面的・俯瞰的思

考力や倫理的判断力，情報収集・分析力や課題発見力，創造的発想力や課題解決力，専門学修力，コミュニケーション力」の順に回答が多かった．

令和６年度後期課程基盤研究コース修了生より３件の回答があった．教育プログラムは「とても良かった」２件，「ある程度良かった」１件となり，理由としては，研究環境2件，教員の指導や熱意，研究施設・設備各１件，その他で「海外の研究機関で研究経験を積めた」という結果であった．学習への取組については「とても一生懸命だった」２件，「ある程度一生懸命だった」１件，研究活動は「非常に有意義だった」３件となり，有意義だった項目として演習２件と実験・実習１件が選択されていた．特に身についた能力として「多面的・俯瞰的思考力や倫理的判断力」３件，「情報収集・分析力や課題発見力」，「専門的学修力」，「コミュニケーション力」各２件，「創造的発想力や課題解決力」１件であった．

第７章　特筆すべき取組や改善事例（橋本雅仁）

・FD講演会

FD講演会については，全学FD委員会において複数部局参加が推奨されたため，10月に工学部主催・理工学研究科・共通教育センター共催，11月に理工学研究科・理学部・工学部合同，12月に理学部主催・理工学研究科共催（オンデマンド）の合同講演会とした．今回は，理工学研究科に情報科学専攻が設置されたことを鑑みて，このうち２回をAIおよびDXの講演とし，教職員の知識，技術の改善に努めた．いずれも参加しやすいように定例教授会開催日に実施した．

・会議数の削減

令和６年度に試行した会議数の削減を本年度も継続し，開催回数を３回とし，オンラインおよびメール会議のみとした．特に情報伝達上の支障はなく，来年度以降の会議数削減の継続には問題ないものと考える．

第８章 今後の理工学研究科FD活動への期待 （橋本雅仁）

令和８年度のFD企画に参加した教員は156名中145名（92.9%）であった．内訳としては，FD講演会のうち最多の回の参加数は117名（75.0%）である．FD活動への参加率は安定して高いが，さらに全員参加を目指して講演会の事前周知，教員の問題意識を反映した企画などをはかる．前期授業評価アンケート参加者数は77名（49.4%），後期授業評価アンケート参加者数は56名（35.9%）で，ほぼ例年通りであるが，参加率はあまり高くない．学生アンケートについては，全学でも問題視されている学生のアンケート疲れは部局でも問題視されている．情報収集および情報伝達・共有の重要性を鑑みて，次年度以降の

検討課題としたい.

令和７年度に理工学研究科博士前期課程の情報科学専攻と後期課程総合理工学専攻の情報科学コースが新設され，初年度学生学が入学した．情報の分析は今後の課題となるが，社会の期待，学生の要望を適切に収集して，理工学研究科の教育かをさらに充実させていくため，効率的かつ効果的なFD活動を展開していきたい.

参考資料

令和７年５月１２日開催「令和７年度第１回理工学研究科ＦＤ委員会（オンライン会議）議事要旨」

議題１　プログラムにおける成績評価分布の確認について．委員長から,議題１資料に基づき,プログラムにおける成績評価分布の確認について諮られ,各プログラムのＦＤ委員から,令和６年後期の理工学研究科開講科目に対する成績評価分布の点検結果について説明があり,審議の結果,全てのプログラムにおいて適切な成績評価がされていることが確認され,一部文言を修正することとし承認された.議題２　令和７年度理工学研究科ＦＤ活動経費の要求について．委員長から,議題２資料に基づき,令和７年度ＦＤ経費予算要求について説明があった後,令和７年度理工学研究科ＦＤ経費の予算要求について諮られ,審議の結果,原案のとおり承認された.議題３　委員の活動分担及びＦＤ報告書原稿作成分担について．委員長から,議題３資料に基づき,令和７年度ＦＤ活動分担及びＦＤ報告書原稿作成分担について諮られ,審議の結果,原案のとおり承認された.議題４　その他(１)今後の理工学研究科ＦＤ委員会の開催方法について．委員長から,本年度の委員会の開催方法について,昨年度と同様,原則対面又はオンラインでの実施とし,内容が軽微な議題の場合はメール会議に実施したい旨の提案があり,審議の結果,承認された.(２)ＦＤ講演会について．講演会のテーマ,日時等については,委員長に一任することが承認された.報告事項１　博士前期・後期課程修了予定者アンケートの分析結果報告について．委員長から報告事項１資料に基づき,令和６年度に博士前期・後期課程の修了予定者を対象としたアンケート結果に関する報告があった.なお,資料に不備があったため,修正のうえ,委員へ再度配布することとなった.報告事項２　令和７年度第１回（全学）ＦＤ委員会報告について．委員長から,４月２３日開催の令和７年度第１回ＦＤ委員会における議事の報告があった.

令和７年11月10～17日開催「令和７年度第２回理工学研究科ＦＤ委員会（メール会議）議事要旨」

議題１　令和７年度前期開講科目に係る成績評価分布の確認について．資料１に基づき,各プログラムのＦＤ委員から提出された内容を令和７年度前期の理工学研究科開講科目に対する成績評価分布の点検結果とすることについて,審議の結果,原案どおり承認された.議題２　授業アンケート実施科目について．資料２に基づき,以下の科目についてはアン

ケートを実施しない科目とすることについて,審議の結果，原案どおり承認された.（１）複数教員が担当している科目,（２）受講生が少人数のため回答者が特定されてしまう科目,（３）e-ラーニングによる倫理教育，他研究科の学生が広く受講できる語学関連の科目.議題３　令和７年度修了時アンケートについて．資料３に基づき,今年度も昨年度と同じ設問内容で引き続き実施することについて,審議の結果,承認された.なお,委員より次年度以降は博士前期課程修了予定者アンケートの問1の選択肢に情報科学プログラムを追加するよう提案があった.

令和８年３月３日開催「令和７年度第３回理工学研究科ＦＤ委員会（オンライン会議）議事要旨」

議題１　令和８年度ＦＤ活動計画について（議題１資料）．委員長から，令和８年度ＦＤ活動計画について諮られ，議題１資料に基づきＦＤ活動計画・経費要求書について説明があり，審議の結果原案どおり承認された．報告事項１　令和７年度ＦＤ活動報告書の作成について（報告事項１資料）.委員長から,令和７年度ＦＤ活動報告書の作成について,報告事項１資料に基づき業務分担の担当者割振り及び提出期限等について,説明があった.なお,一部文言を修正することが確認された．報告事項２　令和７年度後期プログラムにおける成績評価分布の確認について（報告事項２資料）．委員長から,報告事項２資料に基づき,令和７年度後期プログラムにおける成績評価分布の確認について,実施時期,実施方法に関して説明があった後,後日,事務担当者から周知がある旨報告があった.報告事項３令和７年度ＦＤ関係の予算執行について（報告事項３資料）．委員長から,令和７年度ＦＤ関係の予算執行について,報告事項３資料に基づく説明があり,FD経費配分額160,000円のうち,執行額108,010円,未使用額51,990円については返還済みである旨報告があった.報告事項４　令和７年度修了時アンケートの実施状況について（報告事項４資料）．委員長から,報告事項４資料に基づき,manabaで実施中の令和７年度修了時アンケートの実施状況について報告があり,各プログラムにおいて対象学生に対して改めてアンケートへの回答について周知いただくよう依頼があった．報告事項５　令和７年度第８回全学ＦＤ委員会報告について（報告事項５資料）．委員長から,報告事項５資料に基づき,２月２６日に開催された第８回全学ＦＤ委員会における議事の報告があった.

（註：　出席者・陪席者氏名，「議事要旨の確認について」「その他　なし」についての記述，および添付資料を省略し，議事要旨原文の体裁を改変．記録・作成：　橋本，有村）

医歯学総合研究科

医歯学総合研究科 FD 活動報告

1.　はじめに

医歯学総合研究科 FD 委員会は、大学及び研究科が目指す大学院教育の質向上と研究環境の改善を目的として活動している。桜ヶ丘キャンパスの全ての教職員を対象とした効果的な FD とするために、医学部 FD 委員会、歯学部 FD 委員会と連携して活動を行った。

本年度は特に、Learning Management System(LMS)を用いた非同期型学習についての理解を深める機会として、医歯学総合研究科 FD 委員会委員長による講演会を開催した。

令和７年度の FD 参加率は、医学部及び歯学部、全学での FD 活動等を含めて算出したところ、86.5%（専任教員 267 名中 231 名参加）であった。

2.　授業公開

授業公開は「優れた授業を公開し、参観をした教員が授業方法を学ぶ機会を提供する」ことを目的として実施している。医歯学総合研究科 FD 委員会委員長の横尾教授の授業を公開した。

日時	2025 年５月 21 日（水）～2025 年７月 23 日（水）の毎週６限（18：00 ～19：30） ※ ７月９日（水）を除く
科目・テーマ	医療者教育学入門（博士課程・共通コア科目） テーマ：医療者教育の理論や効果的な実践法について
講師	横尾　英孝　教授（医歯学総合研究科 FD 委員会委員長・医学教育学分野）
参観者	２名（科目受講者を除く）
概要	医歯学総合研究科で学ぶ学生は、学部学生指導、卒後研修指導を行い、将来指導者として臨床、研究、 教育の領域で活躍することが求められる。本講義では、医療者教育において注目されているトピックを取り上げ、背景となる教育理論と実践的教育技法についての理解を深める。学生は医療現場での学習、教育経験に基づく討議を遠隔（Teams）で行いながら学習する。 授業参観者も Teams で見学した。

3.　学生による授業評価アンケート

実施方法の概要　昨年度と同様に、講義等を主体とする授業科目の評価アンケートと、演習・実験科目の評価として研究環境と研究指導に関するアンケートを実施した。留学生は英語でのアンケートに回答した。医歯学大学院係がアンケートを作成、対象学生が鹿児島大学 manaba で回答したデータを集計した。令和３年度から manaba での実施に完全移行したが、研究指導に係る学生アンケートの回収率が特に低迷している。令和６年度はアンケートの実施期間を長く確保したことに伴いアンケートの回収率が微増したものの、令和７年度はおおよそ例年通りの実施期間としたためか、回収率は前年度より低下した。引き続き、回収率の改善を図る必要がある。集計結果は科目責任者にフィードバックし、教育委員会への報告も予定している。

アンケート回収率の推移

授業評価アンケート	前期			後期			年度計		
	対象者数	回答数	回収率	対象者数	回答数	回収率	対象者数	回答数	回収率
令和3年度	233	55	23.6%	208	50	24.0%	441	105	23.8%
令和4年度	244	52	21.3%	222	28	12.6%	466	80	17.2%
令和5年度	192	63	32.8%	130	49	37.7%	322	112	34.8%
令和6年度	154	71	46.1%	166	58	34.9%	320	129	40.3%
令和7年度	201	81	40.3%	131	34	26.0%	332	115	34.6%

※ アンケートの「対象者数」は、アンケートを取っている受講者数が３名以上の科目の受講者数変更。（R5～）

研究指導に係る学生アンケート	日本人			留学生			年度計		
	対象者数	回答数	回収率	対象者数	回答数	回収率	対象者数	回答数	回収率
令和3年度	246	42	17.1%	16	12	75.0%	262	54	20.6%
令和4年度	253	12	4.7%	14	3	21.4%	267	15	5.6%
令和5年度	272	22	8.1%	16	3	18.8%	288	25	8.7%
令和6年度	358	42	11.7%	23	9	39.1%	381	51	13.4%
令和7年度	290	20	6.9%	31	5	16.1%	321	25	7.8%

講義科目アンケート　修士課程及び博士課程における講義を主体とする科目アンケートは３名以上の受講生がいる科目を対象として授業評価９項目、学習に対する自己評価２項目、全体評価とし、無記名により各項目について７段階の評定尺度で回答し、自由な意見も記載してもらった。前期は対象 38 科目 81 件、後期は対象 19 科目 34 件の回答が得られた。

演習、実験科目のアンケート　博士課程における演習、実験科目についてのアンケートは 2026 年２～３月に実施し、医系歯系の別、入学年度、演習科目の授業形態、内容と指導３項目、実験科目（研究指導）６項目、研究中断の有無、さらに正課、課外における英語によるコミュニケーション３項目について回答を求めた。選択項目以外は、５段階の評定尺度で回答してもらった。
医系 20 名（内留学生４名）、歯系５名（内留学生１名）から回答が得られた。

（アンケート自由記述欄より）
・年間の行事予定だけでは、内容が見通せず、具体的なスケジュールや内容など〞を前期の早い段階で経験者(上学年)の話を聞いたり、不安なことを質問する機会などがあれば気持ち的に安心出来たかと思う。社会人入学だと日中、大学や研究に行く時間調整に制限があり、イメージもつかない不安なまま、修士論文中間発表の案内が届いた。

・臨床を行いながら研究に汎化できる環境が整っていた。また、研究にも積極的に取り組みそれに対する的確なアドバイスをいただけるような教員、副指導教員であった。

授業評価アンケート

医歯学総合研究科　授業評価アンケート科目別【全体】集計　（R7年度　前期）

アンケート実施科目　21科目　　アンケート回答数　　60　枚

【授 業 評 価】

1.2　この科目はあなたのニーズに合っていましたか

1.3　この科目はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか

1.4　講義の内容はよく理解できましたか　理解できない、わかりにくいと思った点を具体的にお書きください

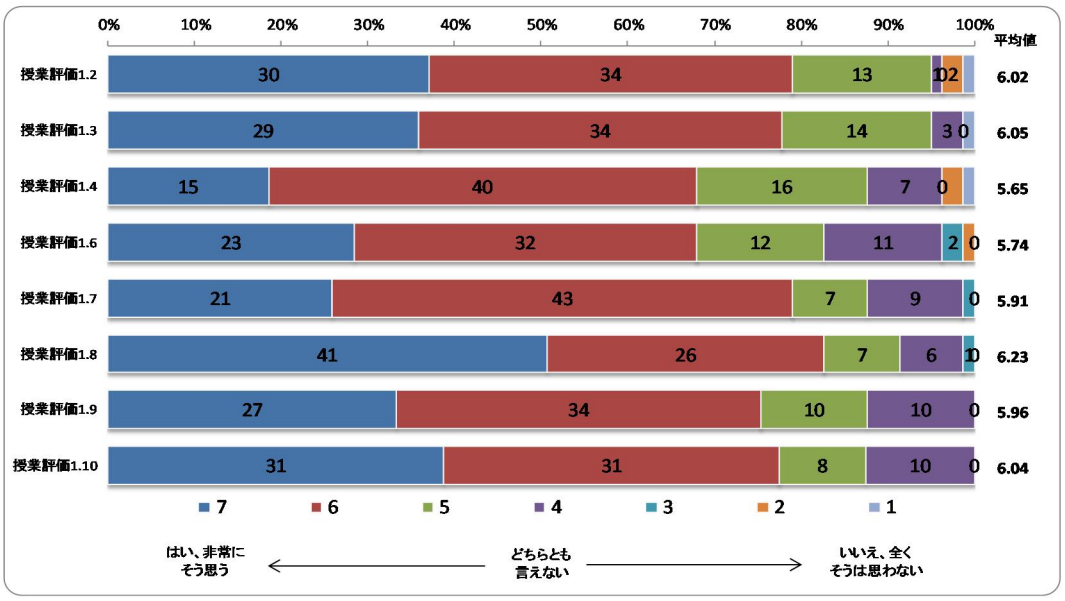
1.6　この科目のシラバスには、必要な情報が記載されていましたか

1.7　シラバスに記載された学習項目、教育方法、評価が行われましたか？

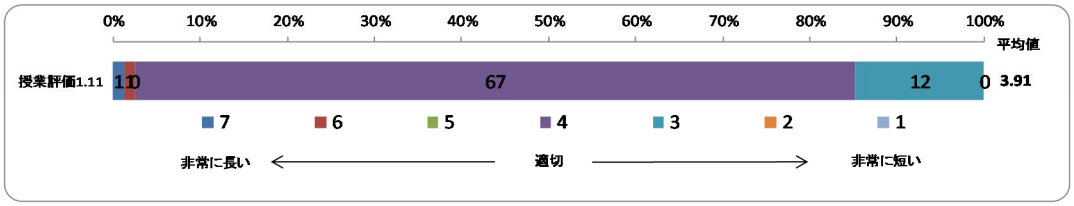
1.8　講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか

1.9　教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

1.10　教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか



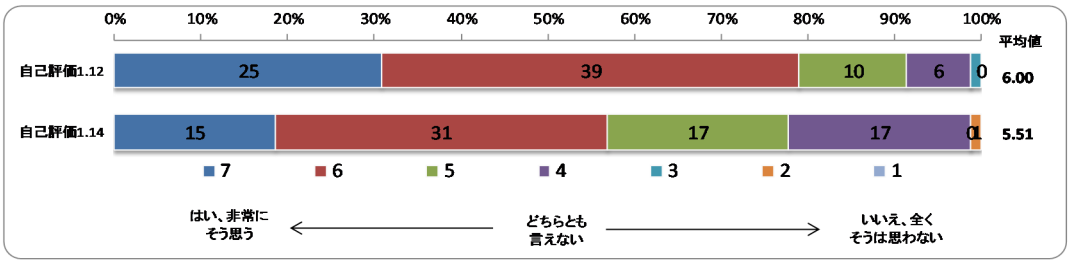
1.11　講義時間は適切でしたか



【自 己 評 価】

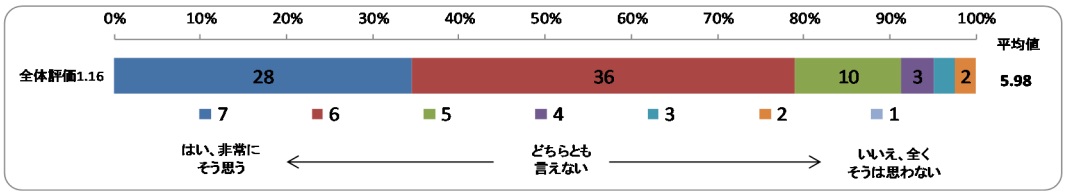
1.12　この科目で新しい知識や考え方を習得しましたか

1.14　授業には積極的に参加しましたか（質問、自習など）



【全 体 評 価】

1.16　この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか



医歯学総合研究科　授業評価アンケート科目別【全体】集計　（R7年度　後期）

アンケート実施科目　19科目　　アンケート回答数　　34　枚

【授 業 評 価】

1.2　この科目はあなたのニーズに合っていましたか

1.3　この科目はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか

1.4　講義の内容はよく理解できましたか　理解できない、わかりにくいと思った点を具体的にお書きください

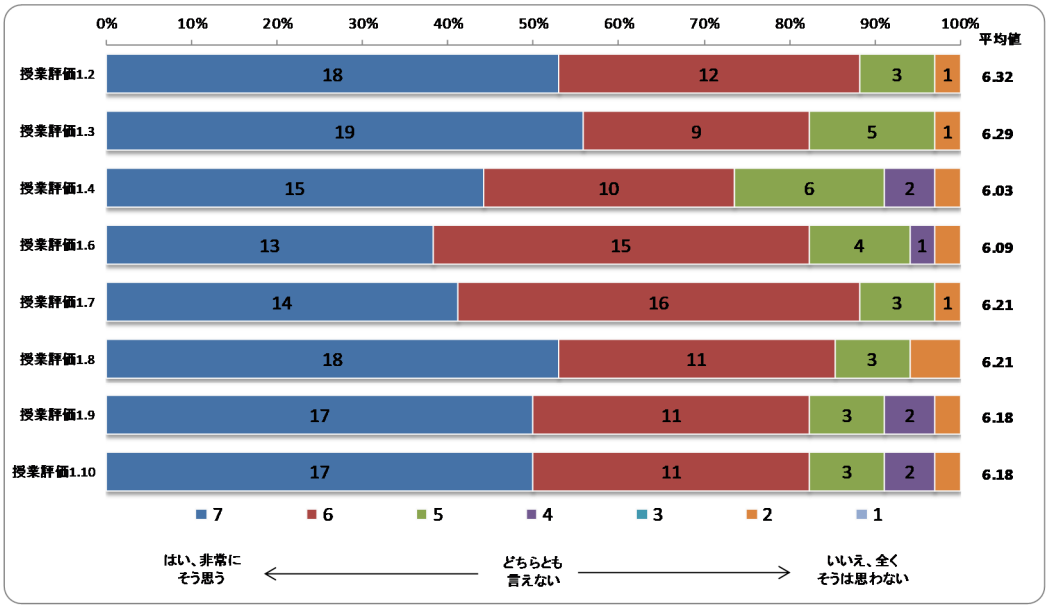
1.6　この科目のシラバスには、必要な情報が記載されていましたか

1.7　シラバスに記載された学習項目、教育方法、評価が行われましたか？

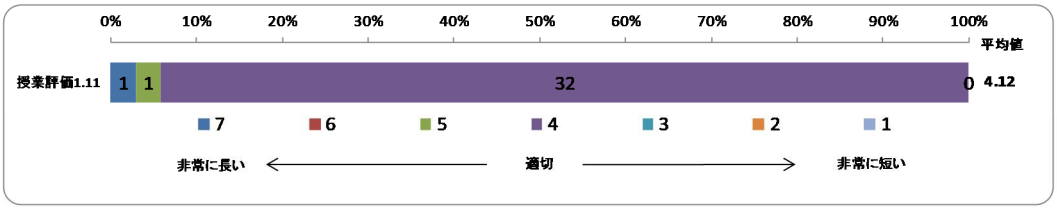
1.8　講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか

1.9　教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

1.10　教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか



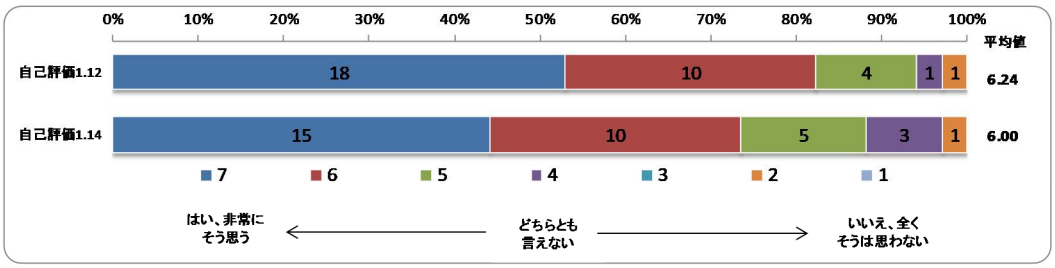
1.11　講義時間は適切でしたか



【自 己 評 価】

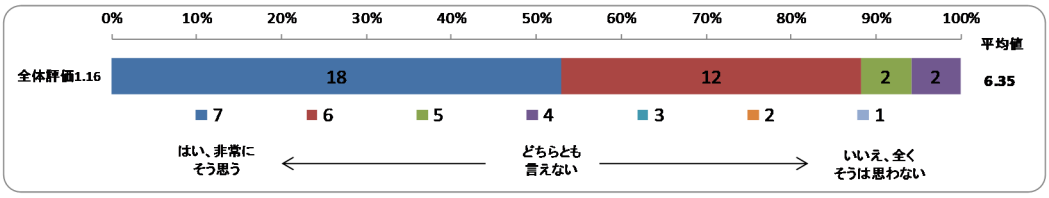
1.12　この科目で新しい知識や考え方を習得しましたか

1.14　授業には積極的に参加しましたか（質問、自習など）



【全 体 評 価】

1.16　この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか



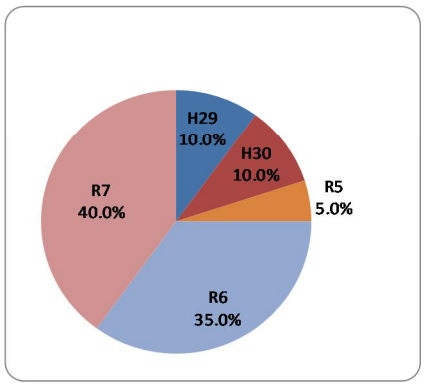
実験科目等アンケート

医　系

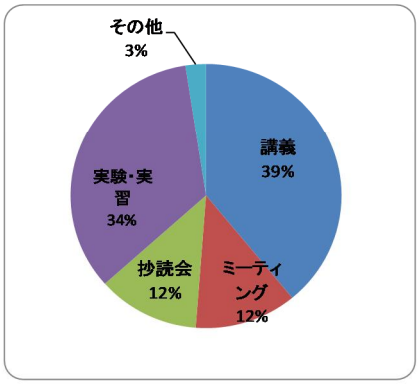
研究指導に係る学生アンケート（2026年　2～3月実施）

アンケート回答件数（医系）　20 件（内、留学生4名）

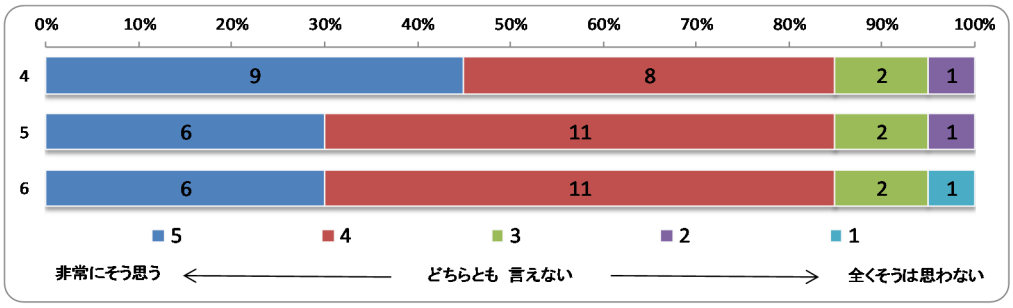
2　入学年度はいつですか



3　あなたが受講している授業科目の授業形態は、
次のうちのどれですか（複数回答可）

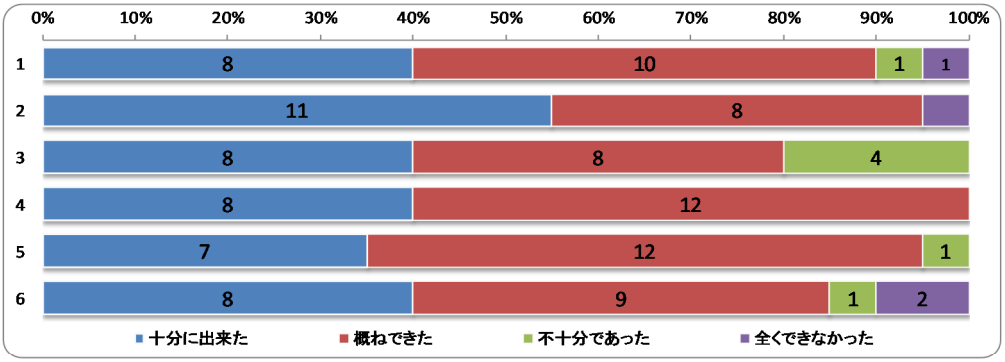


4　あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか
5　教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
6　教員は発展的な学習、研究を支援しましたか

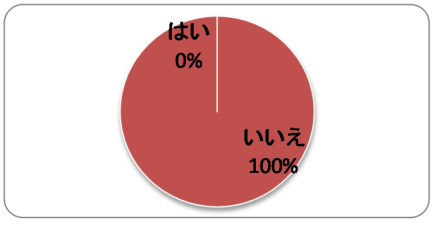


実験科目（研究指導）

1　直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることはできましたか
2　研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか
3　論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか
4　効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか
5　研究開発に必要な考え方を修得できましたか
6　論文作成を自ら行うための指導は受けましたか

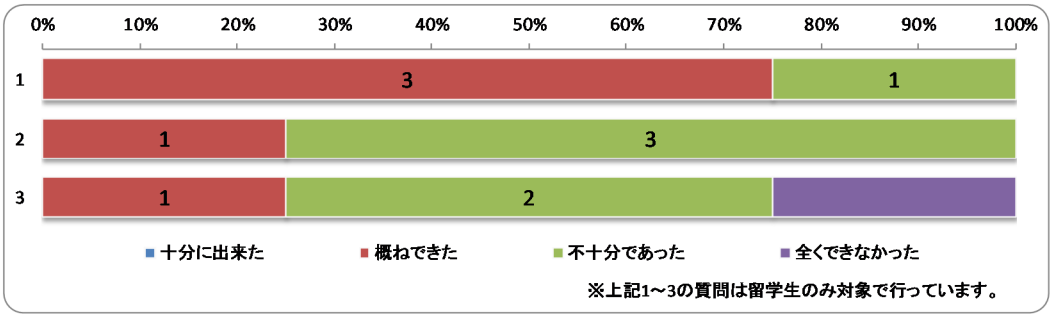


7　個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありましたか



以下は正課・課外における英語でのコミュニケーションに関する質問です。各質問にお答えください。

1　あなたの指導を担当する教員や研究室のスタッフの英語能力に満足していますか。
2　英語もしくはあなたの母国語によって学習や研究、滞在に関する十分な情報を得ることができていますか？
3　英語で教えてもらう授業に満足していますか。



※上記1～3の質問は留学生のみ対象で行っています。

自由記載

1.15 特に良かった点をお聞かせください

・中岡先生がスケジュールを個別に設定してくださり、演習の時間を設けてくださいました。そして実際のデータ解析演習では細かいことまで一人一人丁寧に教えてくださいました。その後のフォローも丁寧で分かりやすかったです。ありがとうございました。
・臨床を行いながら研究に汎化できる環境が整っていた。また、研究にも積極的に取り組みそれに対する的確なアドバイスをいただけるような教員、副指導教員であった。
・自分がやる実験について基礎的な考え方などのレクチャーを受けることができた。
・わからないところを何度も質問してしまいましたが、わかるまで丁寧に教えて下さったので、より一層理解が深まりました。

1.16 改善すべき点をお聞かせください

・分子細胞医科学総論の授業でなるべく桜ケ丘で受講してくださいとのことでしたが、仕事の終わる時間を考慮すると間に合わず、リモートで参加させていただいてました。何回かに1回会場では通常に授業ができているがリモートではスライドが更新できないこともありました。（先生からは設定ができずこのまま授業させてください、すみませんと回答がありました。）ハイブリット開催が今後もされるのであれば、先生方で設定の仕方を共有していただきたいです。また、設定に時間がかかって60分くらいしか授業に使えない日もありました。ご検討お願いいたします。

医歯学総合研究科における英語でのコミュニケーションについてご意見があればお知らせください。
※この質問は留学生のみ対象で行っています。

1.17 その他、自由に感想をお書きください

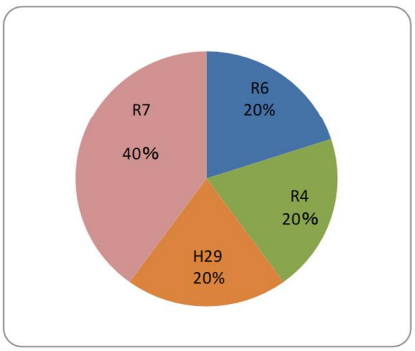
歯　系

研究指導に係る学生アンケート（2026年　2～3月実施）

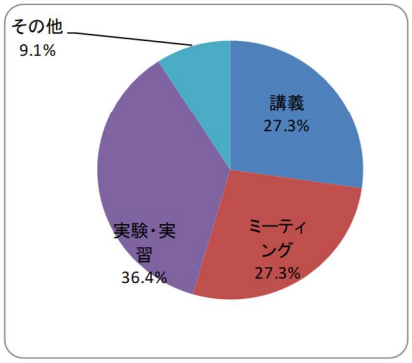
アンケート回答件数（歯系）　5 件（内、留学生1名）

未回答　0　名

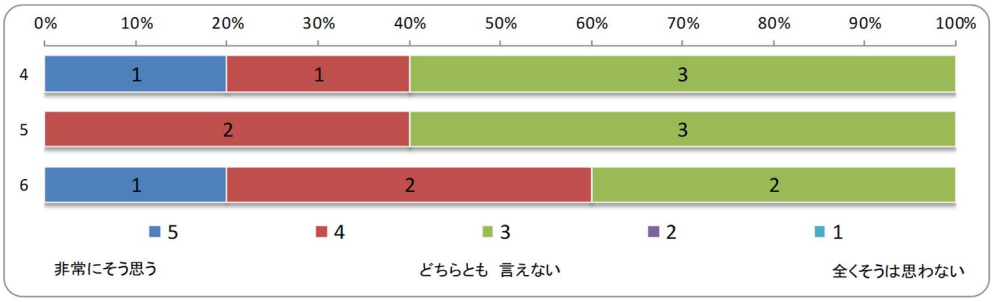
2　入学年度はいつですか



3　あなたが受講している授業科目の授業形態は、
次のうちのどれですか（複数回答可）

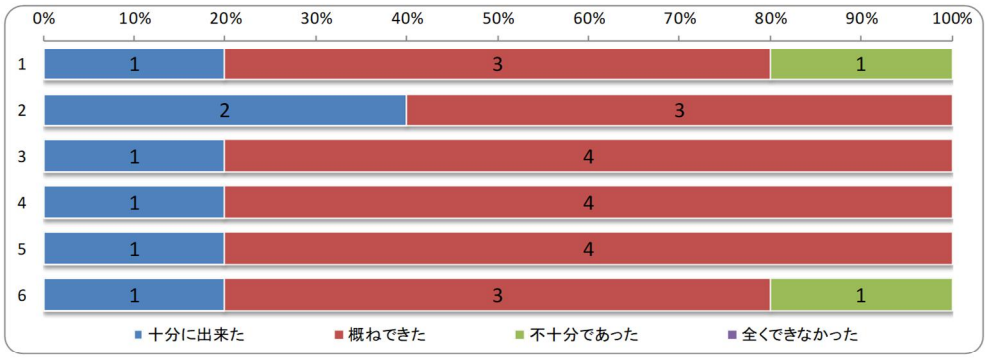


4　あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか
5　教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
6　教員は発展的な学習、研究を支援しましたか

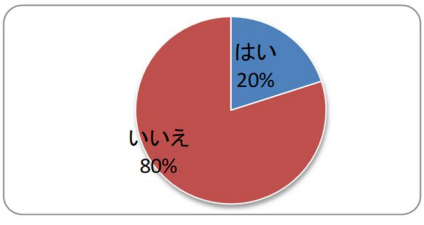


実験科目（研究指導）

1　直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることはできましたか
2　研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか
3　論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか
4　効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか
5　研究開発に必要な考え方を修得できましたか
6　論文作成を自ら行うための指導は受けましたか

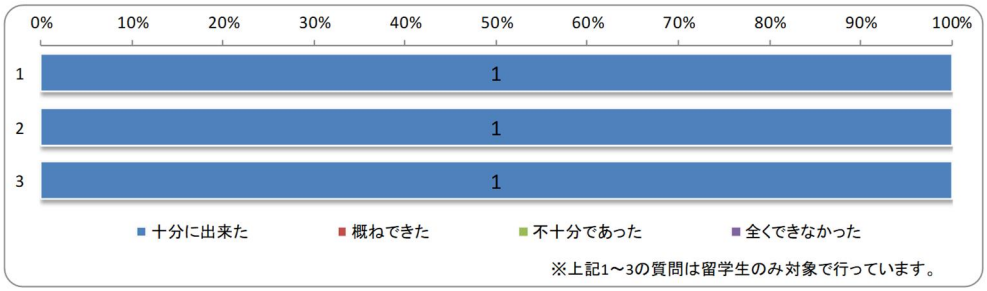


7　個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありましたか



以下は正課・課外における英語でのコミュニケーションに関する質問です。各質問にお答えください。

1　あなたの指導を担当する教員や研究室のスタッフの英語能力に満足していますか。
2　英語もしくはあなたの母国語によって学習や研究、滞在に関する十分な情報を得ることができていますか？
3　英語で教えてもらう授業に満足していますか。



※上記1～3の質問は留学生のみ対象で行っています。

自由記載

1.15 特に良かった点をお聞かせください

・倫理的配慮、研究の考え方
・指導の先生にご相談できたこと。

1.16 改善すべき点をお聞かせください

・臨床もあり、時間が少ない。

医歯学総合研究科における英語でのコミュニケーションについてご意見があればお知らせください。
※この質問は留学生のみ対象で行っています。

1.17 その他、自由に感想をお書きください

・年間の行事予定だけでは、内容が見通せず、具体的なスケジュールや内容など"を前期の早い段階で経験者(上学年)の話を聞いたり、不安なことを質問する機会などがあれば気持ち的に安心出来たかと思う。社会人入学だと日中、大学や研究に行く時間調整に制限があり、イメージもつかない不安なまま、修士論文中間発表の案内が届いた。
・研究実践やゼミなど、教員や大学院生が学部生の対応をしなければならない科目を無くしてほしい。臨床系の診療科は実習やポリクリなど必須でやらなければならないことがただでさえ多いのに、研究実践やゼミなど、特に必要性を感じない科目のために負担が増えて、診療や研究の時間が奪われている。診療と研究で限界なのに、これ以上ボランティアを強いないでほしい。
学部生に大学院を紹介する目的があるのなら、我々に負担のない方法をとってほしい。

4.　FD 講演会等の開催

「第 92 回医学教育セミナーとワークショップ」の開催

日　時：2025 年 11 月 27 日（木）～11 月 28 日（金）

主　催：岐阜大学 医学教育開発研究センター、鹿児島大学医学部 FD 委員会医学科部会、
鹿児島大学歯学部 FD 委員会、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科

会　場：鹿児島大学桜ヶ丘キャンパス

各セミナー、ワークショップで他大学、他分野の取り組みを意見交換し、今後の教育活動の課題を見つけることができた。今回共催となった岐阜大学医学教育開発研究センターは年に数回、医学教育セミナーを催しているため、今後も医学教育についての情報共有の場として利用していく。

「ベストティーチャー賞受賞者による講演会」の開催

日　時：2026 年１月 22 日（木）16：00～17：00

共　催：医学部 FD 委員会医学科部会、医歯学総合研究科 FD 委員会

会　場：Zoom によるオンライン講演・オンデマンド配信

講　師：毛利 翔悟　助教（医歯学教育開発センター）

令和６年度医学部医学科ベストティーチャー賞受賞者である毛利先生に、授業・実習等で実践している工夫等これまでの取り組みをご紹介いただいた。学生から評価を受ける教員の、授業構成を学ぶことができ、大変有意義であった。学生から求められる授業を行うためにも、本講演会は継続して実施していきたい。また、保健学科や歯学部との共催をすることで更に授業改善案に幅を持たせることができるため、来年度以降検討する。

「ハラスメント対策・予防／シラバスの意義と作成のポイントに関する講演会」の開催

日　時：2026 年２月 12 日（木）16：00～17：30

共　催：医学部 FD 委員会医学科部会、医歯学総合研究科 FD 委員会

会　場：Zoom によるオンライン講演・オンデマンド配信

講　師：前田 雅人　学長補佐（学生生活担当）、横尾 英孝（医歯学教育開発センター長）

本講演会第１部では学長補佐学生生活担当の前田雅人先生にご講演いただいた。ハラスメントが生じる原因や相手との関係性の構築、距離感の重要性を学ぶことができた。第２部では第１部の講演を踏まえ、講義や実習、評価方法などの指標となるシラバスの作成のポイントを、医歯学教育開発センター長の横尾英孝先生にご講演いただいた。基礎的な内容を改めて教員間で確認し合い、記載事項とポイントを修得することができた。

5.　ベストティーチャーの選出

本研究科に所属する教員は大学院での医学教育及び歯学教育における実績が評価対象となっている。医歯学総合研究科ベストティーチャーは、今年度から外国人留学生も推薦しやすいよう周知方法を工夫したものの、学生、教員の両方から推薦がなかった。

6.　特筆すべき事項と改善例

令和７年度の特筆すべき事項として、2.の医療者教育学入門の授業公開と 4.の第 92 回医学教育セミナーとワークショップの開催である。前者は医療者教育学修士を所持している教員による授業公開であったが、参観者が少なく周知の時期や方法を改善する必要がある。後者は毎年全国規模で開催される医学教育 FD を初めて鹿児島大学で開催することができ、学外からも多くの医療者が参加した。

臨床心理学研究科

臨床心理学研究科　令和 7 年度 FD 活動報告

臨床心理学研究科 FD 委員長　山口　勇弥
臨床心理学研究科 FD 委員　　今村　智佳子

1. はじめに

臨床心理学研究科では、FD 活動の強化を目的に平成 27 年度から研究科 FD 会議（FD 研修会を含む）を教授会同日に設定し、ほぼ毎月開催する体制を整えている。臨床心理学研究科は教員 9 名という小規模の部局であり、各教員が複数の委員会を兼任するなど業務負担の大きい状況下に置かれているが、そのような環境下においても時間を作り、例年通りに、Web 会議によるほぼ毎月の臨床心理学研究科 FD 会議を堅持することができた。また、全学ＦＤ委員会において教学 IR 体制への方向性が示される中、当研究科においては、令和３年度より定例化した「入学生アンケート」及び、同じく令和４年度より定例化した「修了予定者アンケート」を実施し、過年度から実施してきた各セメスター２回ずつの「授業評価アンケート」及び、８月と２月の「フォローアップセッション・アンケート」、修了生に対して適宜実施してきた「修了生アンケート」を加えて、学生からの要望や意見を取り入れる体制を継続した。このように入学時から修了時までの全教育課程を通して、FD 活動の根幹となる授業内容や教育・指導法の点検を通して、さらに改善に向けて取り組むことができた。また、令和２年度から実施されているベスト・ティーチャー賞については、令和５年度以降推薦を見送る状況が続いていたが、検討を重ねることで、選考方法を策定することができた。

以下に、令和 7 年度の FD 活動全体の概要を具体的に報告する。

2. 臨床心理学研究科専任教員全員による研究科 FD 会議　　（特筆すべき取り組み１）

臨床心理学研究科の FD 会議は、原則、毎月第３水曜日の教授会同日に設定している。

以下、令和 7 年度の臨床心理学研究科 FD 活動実績について表 2-1 に示した。また、表 2-2 には、専任教員の参加率を示した。

表 2-1 令和 7 年度臨床心理学研究科 FD 活動実績

	年月日	内容
第 1 回 FD 会議	令和 7 年 4 月 16 日（水） 13：30～	1. 臨床心理分野専門職大学院認証評価基準について 2. 入学生アンケートについて 3. 修了生アンケートについて
第 2 回 FD 会議	令和 7 年 5 月 21 日（水）	1. 入学生アンケート実施結果について

	13：30～	
第 3 回 FD 会議	令和 7 年 6 月 18 日（水） 南九州・南西諸島域イノベーションセンター部局キャラバン終了後～	1. 令和 7 年度前期第 1 回授業評価アンケート結果報告と意見交換
第 4 回 FD 会議	令和 7 年 7 月 16 日（水） 13：30～	1. ベストティーチャー賞の選定に関する検討
第 5 回 FD 会議	令和 7 年 9 月 17 日（水） 13：30～	1. 令和 7 年度前期第 2 回授業評価アンケート結果報告と意見交換 2. 令和 7 年度前期フォローアップセッションの振り返りと意見交換
第 6 回 FD 会議	令和 7 年 10 月 15 日(水) 教授会終了後～	1. ベストティーチャー賞の選定に関する検討
第 7 回 FD 会議	令和 7 年 11 月 19 日(水) 教授会終了後～	1. 修了生アンケートについて
第 8 回 FD 会議	令和 7 年 12 月 17 日（水） 13：30～	1. 令和 7 年度後期第 1 回授業評価アンケート結果報告と意見交換
第 9 回 FD 会議	令和 8 年 1 月 14 日（水） 13：30～	1. ベストティーチャー賞の選定に関する検討
第 10 回 FD 会議	令和 8 年 2 月 4 日（水） 13：30～	1. FD 研修会「心理臨床における人間理解と倫理」（講師：福岡女学院大学　奇 恵英教授）
第 11 回 FD 会議	令和 7 年 3 月 18 日（水） 13：30～	1. 令和 7 年度後期第 2 回授業評価アンケート結果報告と意見交換 2. 令和 7 年度後期フォローアップセッションの振り返りと意見交換 3. 修了生アンケートについて 4. ベストティーチャー賞の選定に関する検討 5. 令和 7 年度 FD 活動の振り返りと次年度に向けての課題 6. 学外研修参加報告

※原則 Microsoft teams により開催した（第１、６、７、10 回は対面で開催）

表 2-2 令和 7 年度臨床心理学研究科専任教員の FD 参加率

合計参加率		**100.0　%　（専任教員　　9　名中　　9　名 参加）**
企画別参加率	FD 会議（審議関係）	100.0　%　（専任教員　　9　名中　　9　名 参加）
	FD 会議（授業評価アンケート結果に関する検討）	100.0　%　（専任教員　　9　名中　　9　名 参加）

	FD 会議（フォローアップセッションに関する検討）	100.0	%	（専任教員	9	名中	9	名 参加）
	FD 会議（学外の関連研修会の報告）	100.0	%	（専任教員	9	名中	9	名 参加）
	FD 会議（入学生アンケート検討）	100.0	%	（専任教員	9	名中	9	名 参加）
	FD 会議（修了生アンケート検討）	100.0	%	（専任教員	9	名中	9	名 参加）
	FD 会議（修了時アンケート検討）	100.0	%	（専任教員	9	名中	9	名 参加）
	FD 研修会	100.0	%	（専任教員	9	名中	9	名 参加）
	全学 FD 研修会・講演会・フォーラム	33.3	%	（専任教員	9	名中	3	名 参加）

※FD 会議に複数の企画が重複する回もある。

令和 7 年度は、FD 研修会などの企画上の都合や、研究科行事との兼ね合いで予定していた日程・時間帯を変更することはあったものの、11 回の FD 会議を開催し、予定していた企画全てを実施することができた。また、できる限り Microsoft Teams による Web 会議を設定するなど、業務効率化・教員の負担軽減に努めた。

FD 活動の主軸となる学生による授業評価アンケートは、前期・後期の授業 7 周目と 14 周目に実施したが、この結果を受け、第 3 回、第 5 回、第 8 回、第 11 回の研究科 FD 会議において、授業改善の検討とその改善結果の検証を行った。

また、FD 研修会は学内の講師 1 件、学外の講師 1 件の合計 2 件実施された。第 1 回の「臨床心理分野専門職大学院認証評価基準について」では、翌年度に控えている臨床心理分野専門職大学院認証評価基準に向けて、研究科教員が講師となり評価基準や認証評価のスケジュールに関する情報共有を行った。第 10 回の研究科 FD 会議においては、福岡女学院大学人間関係学部教授である奇恵英先生を講師に招き、臨床心理学研究科 FD 研修会「心理臨床における人間理解と倫理」を開催した。当日は、希望する大学院生も参加し、教員・学生共に貴重な学びの機会を得ることができた。

入学生アンケート、修了生アンケート及び修了予定者アンケートについては、これまで定例化して実施されてきた流れを引き継ぎ、例年通りの時期に実施することができた。また、アンケート結果についても FD 会議内で報告・検討することによって、入学から修了までの全教育課程において、学生からの意見を聞き取る体制が整い、FD 活動の根幹である、学生への授業内容及び教育・指導の改善に系統立てて取り組むことができた。今後、アンケートを積み重ね、包括的なデータ分析を行うことで、専門職学位課程である高度専門職業人の教育方法に関する、より具体的な改善が可能となると期待している。

ベストティーチャー賞については、被推薦者の選出に関する根拠資料やその論理の妥当性について、令和４年度ベストティーチャー賞選考委員会から、授業アンケート等の学生からの声だけでは不十分であるなどの指摘を受け、臨床心理学研究科の教育の性質を加味した上での独自の基準を再度検討する必要が生じた。そのため、令和５年度及び令和６年度は、臨床心理学研究科からの候補者の推薦は見送られることとなった。しかし、令和７年度に臨床心理学研究科の教育内容に適する基準を再考し、新たな基準を設定できるよう検討を重ねた結果、選考基準・方法を策定することができた。

教員の FD 参加率については、令和６年度に引き続き、定例会議として教授会後に枠づけしたことにより、引き続き出席率は高く、FD 参加率は全ての企画において 100％であった。なお、全学あるいは他部局企画の FD 研修会・講演会・フォーラム等への参加は、研究科企画に比して限られており、部局内の研究科教員の業務多忙を勘案しながら、高度専門職業人の養成に益する自身の研究機会を探るより積極的な姿勢が求められる。

３. 授業評価アンケート及びフォローアップセッション実施に対する検討

（１）授業評価アンケートの実施　　**（特筆すべき取り組み２）**

学生による授業評価アンケートは、臨床心理学研究科教員が担当する本研究科の全開講科目（講義科目、演習科目、実習科目）を対象とし、通常は、前期は６月初旬と７月中旬の２回、後期は 11 月中旬と１月中旬の２回、毎年計４回の授業評価アンケートを実施している。また、受講生に対し、アンケート結果と、それをふまえての授業改善対策を報告できるよう、授業の 7 回目と 14 回目にアンケートを実施する仕組みを作っている。例年と同様、令和７年度も実習科目を含め全ての授業において授業評価アンケートは予定通りに実施できた。

講義科目、演習科目、実習科目の評価項目は、それぞれ以下の枠内の通りである。回答形式は、評価５の「そう思う」から評価１の「そう思わない」までの５件法であった。

＜講義科目＞

1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか。
2. 本講義科目のテキスト・資料等適切でしたか。（テキスト・資料等を使用した場合のみ回答してください）。
3. 本講義科目の内容は理解できましたか。
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか。
5. 本講義科目の内容に満足していますか。
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください。
7. 本講義科目に対するご意見を自由に書いてください。

＜演習科目＞

1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか。
2. 本演習科目の内容は理解できましたか。
3. 本演習科目の内容に満足していますか。
4. 本演習科目を通して講義（理論）の理解や実習体験の理解につながりましたか。
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか。
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください。
7. 本演習科目に対するご意見を自由に書いてください。

＜実習科目＞

1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか。
2. 本実習科目で実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか。
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか。
4. 本実習科目で実習体験に満足していますか。
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください。
6. 本実習科目に対するご意見を自由に書いてください。

（2）授業評価アンケートの結果

学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りであった。

表 3-1. 前期第１～２回目の講義科目における授業評価（３科目平均評価点）

	第１回目			第２回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか	5.0	4.3	4.7	5.0	4.0	4.6
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	4.00	4.7	5.0	4.5	4.9
3. 本講義科目の内容は理解できましたか	5.0	3.7	4.4	5.0	3.5	4.4
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	4.0	4.7	5.0	4.5	4.9
5. 本講義科目の内容に満足していますか	5.0	4.0	4.7	5.0	4.5	5.0
6. 本講義科目を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	4.0	4.7	5.0	4.5	4.9

（科目名）臨床心理学原論（1 回目のみ）／臨床心理学入門／コミュニティ心理学特論

表 3-2. 前期第１～２回目の演習科目における授業評価（７科目平均評価点）

	第１回目			第２回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか	5.0	4.0	4.8	5.0	4.3	4.9
2. 本演習科目の内容は理解できましたか	5.0	3.8	4.6	5.0	4.0	4.7
3. 本演習科目の内容に満足していますか	5.0	3.9	4.8	5.0	4.0	4.9
4. 本演習科目を通して講義（理論）の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	4.1	4.8	5.0	4.0	4.9

5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.8	4.8	5.0	4.3	4.9
6. 本演習科目を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	4.1	4.9	5.0	4.3	4.9

（科目名）臨床心理査定演習Ⅰ（1 回目のみ）／臨床心理面接演習Ⅰ／臨床心理関連行政論／臨床心理事例研究演習Ⅰ／総合的事例研究演習Ⅰ／福祉心理臨床論／臨床心理倫理特論／発達障害心理臨床論

表 3-3. 前期第 1 ～ 2 回目の学内実習科目における授業評価（4 科目平均評価点）

	第１回目			第２回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか	5.0	4.3	4.9	5.0	4.3	4.9
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか	5.0	4.0	4.9	5.0	4.3	4.9
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	4.3	4.9	5.0	4.0	4.9
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか	5.0	3.8	4.9	5.0	3.3	4.8
5. 本実習科目を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	4.3	4.9	5.0	4.0	4.9

（科目名）臨床心理査定･面接実習Ⅰ／臨床心理査定･面接実習Ⅲ／臨床心理実践研究Ⅰ／臨床心理実践研究Ⅲ

表 3-4. 前期第 1 ～ 2 回目の学外実習科目における授業評価（2 科目平均評価点）

	第１回目			第２回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか				5.0	5.0	5.0
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか				5.0	4.0	4.9
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	（実施なし）			5.0	4.5	5.0
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか				5.0	3.5	4.9
5. 本実習科目を総合的に 5 段階で評価してください				5.0	4.5	5.0

（科目名）臨床心理地域援助実習Ⅰ／臨床心理地域援助実習Ⅲ

表 3-5. 後期第 1 ～ 2 回目の講義科目における授業評価（3 科目平均評価点）

	第１回目			第２回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均

1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.3	4.9	5.0	5.0	5.0
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	4.3	5.0	5.0	4.0	4.9
3. 本講義科目の内容は理解できましたか	5.0	3.3	4.4	5.0	3.0	4.3
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.7	4.8	5.0	4.0	4.9
5. 本講義科目の内容に満足していますか	5.0	3.3	4.8	5.0	4.0	4.8
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.7	4.9	5.0	3.7	4.8

（科目名）臨床心理面接学原論／集団心理臨床論／ストレスマネジメント論

表 3-6. 後期第１～２回目の演習科目における授業評価（7科目平均評価点）

	第１回目			第２回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか	5.0	4.6	5.0	5.0	4.6	5.0
2. 本演習科目の内容は理解できましたか	5.0	4.2	4.7	5.0	4.0	4.8
3. 本演習科目の内容に満足していますか	5.0	4.0	4.9	5.0	3.6	4.8
4. 本演習科目を通して講義（理論）の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	4.0	4.8	5.0	3.4	4.9
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.6	4.9	5.0	3.8	4.9
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.8	4.8	5.0	4.0	4.8

（科目名）臨床心理査定演習Ⅱ／臨床心理面接演習Ⅱ／臨床心理事例研究演習Ⅱ／総合的事例研究演習Ⅱ／医療心理臨床論

表 3-7. 後期第１～２回目の学内実習科目における授業評価（４科目平均評価点）

	第１回目			第２回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか	5.0	4.3	4.9	5.0	4.5	5.0
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか	5.0	4.0	4.9	5.0	4.5	5.0
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	4.0	4.9	5.0	4.0	4.9
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか	5.0	3.3	4.8	5.0	3.8	4.9
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.8	4.8	5.0	4.3	4.9

（科目名）臨床心理査定・面接実習Ⅱ／臨床心理査定・面接実習Ⅳ／臨床心理実践研究Ⅱ／臨床心理実践研究Ⅳ

表 3-8. 後期第１～２回目の学外実習科目における授業評価（２科目平均評価点）

	第１回目			第２回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか				5.0	4.5	5.0
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか				5.0	4.5	5.0
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	（実施なし）			5.0	4.5	5.0
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか				5.0	4.0	4.9
5. 本実習科目を総合的に 5 段階で評価してください				5.0	4.5	5.0

（科目名）臨床心理地域援助実習Ⅱ／臨床心理地域援助実習Ⅳ

（３）集計結果のフィードバックと授業評価報告書の提出及び授業改善に向けた組織的対応

（特筆すべき取り組み３・改善事例１）

学生による授業評価アンケートは無記名で回答を求め、かつ研究科事務補佐員が実施からデータ処理･集計を担当する方法を取っており、このプロセスに研究科教員は関与しない。各担当教員は、フィードバックされた集計結果を確認し、授業に対する自己評価や自由記述欄に記載されている学生からの意見等も考慮した上で、「学生による授業評価を受けての報告書」を作成する。前期・後期それぞれ２回の授業評価アンケート結果については、該当月の教授会にてファカルティ・ディベロップメント委員長が報告を行い、加えて同日に開催される研究科 FD 会議においても学生による授業評価アンケート結果を改めて全教員で共有する。そして各担当教員がアンケート結果を受けて作成した「学生による授業評価を受けての報告書」をもとに、授業改善とその改善結果の検証を行っている。令和７年度は第３回、第５回、第８回、第 11 回の研究 FD 会議において、授業評価アンケート結果について全教員で共有し、意見交換を行った。

授業改善とその改善結果の検証について、当研究科においては、学生による授業評価アンケートを１セメスターで２回実施し、１回目のアンケート結果を受けた授業改善の結果を２回目のアンケートで検証できるように設定している。さらに、授業担当教員は、授業毎に作成する「学生による授業評価を受けての報告書」に授業改善、学生へのフィードバックや改善結果の検証についても記載している。これらのことから、令和３年度より研究科 FD 会議において、授業評価アンケートの結果報告と授業内容及び方法の改善についての意見交換を実施する際に、「学生による授業評価を受けての報告書」をもとに、各授業の担当教員から授業改善とその改善結果の検証についても報告を受け、全教員で共有し、意見交換を行ってきている。令和７年度においても引き続き、前述の「学生による授業評価を受けての報告書」を積極的に活かし、研究科 FD 会議において学生のニーズに応じた授業科目の内容検

討及び改善、さらに改善結果の検証についての意見交換を行うことを通して、ファカルティ・ディベロップメント活動に資することができた。

また、「学生による授業評価を受けての報告書」には、授業評価アンケートの実施方法に関する教員からの意見を収集する項目も設けている。令和7年度においては、特定の科目における自由記述の回答率の低さについて意見が上がった。アンケートは授業の開始前後に実施しているが、実習科目等では複数のアンケート一度に実施することもあり、学生が余裕を持って回答できるような環境づくりの必要性が示唆された。アンケートの実施方法については、学生の秘匿性を担保できる方法を維持しつつ、学生や事務補佐員の負担等を軽減できるような工夫が求められ、令和8年度以降検討を進めていきたい。

（4）臨床心理学研究科独自の取組みとしてのフォローアップセッション

（特筆すべき取り組み4）

本研究科では、専門職大学院における臨床心理実習の評価方法として、平成20年度より九州大学との共同で、専門職GPとして「臨床心理実習における客観的評価の方法の構築」と題する臨床心理実習到達度チェックシステムを導入し、各セメスターにおいて臨床心理実習の客観的評価を実施していたが、これらの評価システムは学生や教職員の負担が大きかったため、平成23年度～平成25年度の間中断された。しかしながら、臨床心理実習において、学生が主体的に到達度評価を行い、かつ教員が学生に対して適切なフィードバックを行うという教育方法の実践が、実務実習教育上、重要であることが再確認されたことから、平成26年度より臨床心理実習到達度チェックシステムの中から、学生が学内及び学外実習体験を指導教員と共有することを目的としたフォローアップセッションの部分が再開された。以降も、より充実した臨床心理実習の実現と教育方法の改善を目指して、フォローアップセッションの実施が継続された。なお、この試みは臨床心理実習科目のGPA導入を視野に入れた新たな評価方法の構築可能性を検討することを目的としていたこともあり、これまで、セルフモニタリングの機会として、学生自身による臨床心理実習到達度チェックシートにもとづくポートフォリオの作成を義務付けていた。しかし、この作業自体に負担を感じる学生もいたため、平成29年度からポートフォリオ作成については、各臨床ゼミの方針に委ねることとなった。そのため、令和7年度もチェックシートに設定された評価項目毎の統計的な数値化は行わず、心理臨床の本質である学生各自の学びを重視するフォローアップセッションを実施した。その内容は、第5回と第11回の研究科FD会議で報告され、フォローアップセッションの実施方法と内容について共有し、改善すべき点を話し合った。

本研究科の学生たちは、学修の目標について、例えば、ポートフォリオの一部であるセルフモニタリングシートにおいて、「今期の目標」をセメスターの始めに設定し、セメスター終了後には、指導教員とのフォローアップセッションを通して、「成長した点」、「課題」、「フォローアップセッションでの気づき」等について話し合うなどして、セメスター毎に自身の学修や課題を振り返る作業を行っている。このような指導教員とのフォローアップセッショ

ンは、各学生と個別に実施される場合や学年毎に実施される場合など、様々な形態があり、どのような形態で実施するかは指導教員に任されている。指導教員はセメスター毎に、学生の学修状況や態度、関係性等から、その実施形態を検討・選択して実施している。個別に実施される場合は、臨床ゼミでは取り上げにくいような個人的な指導が可能となり、学年別や臨床ゼミ全体で実施される場合には、他学生の振り返りを知ることで、自身の学修をより相対的なものへと深化させることが可能になる。当研究科の学生たちは、このようなフォローアップセッションを通して、専門職業人としての臨床力を向上させていくことが期待されている。令和7年度も、ポートフォリオの一部であったセルフモニタリングシートを「自己評価シート」とし、項目を「今期の目標」「達成した点」「今後の課題」「フォローアップセッションでの気づき」と読み替えて、学生の実習に関する根拠資料である「実習記録ノート」の一部とすることにした。このことにより、学生各自が「自己評価シート」を用いて、「今期の目標」をセメスターの始めに設定し、学修の目標を意識できる。そしてセメスター終了後に実施される指導教員とのフォローアップセッションにおいて、「達成した点」「今後の課題」「フォローアップセッションでの気づき」の振り返りを深め、学修の深化が期待される。

また、令和3年度から再開されたフォローアップセッション・アンケートについても、継続して実施した。本アンケートは、学生が記入後、研究科専門職大学院支援室事務補佐員へ提出し、学年毎に取りまとめたアンケート結果については、同事務補佐員から FD 委員長にフィードバックされた後、研究科 FD 会議において全教員に共有され、フォローアップセッションのあり方や実施方法等について検討された。令和7年度については、対面にて実施した臨床ゼミがほとんどで、アンケートの回答率は前期 97%（31 名）、後期 94%（30 名）だった。設問1つ目のフォローアップセッションの感想については、前期 31 件、後期 28 件寄せられ、「多くの気づきが得られた。」「自分をより深めることができたように感じた。」「自分の課題と強みについて整理し、また改めて考える機会になった。」「学業のことだけでなく、生活面や就活、対人関係場面でのことを親身になって聞いてくださるので、気軽に相談しやすいです。」「他のゼミ生が学外実習・学内実習でどのような学びを得たか知ることができよかった。」等、肯定的な意見が多くを占めた。また、設問2つ目の実施方法や目的などについての要望に関しては、前期8件、後期8件の意見が寄せられ、実施方法について教員が柔軟な対応をとってくれたことへの感謝、フォローアップセッションを今後も実施してほしいという要望、ゼミごとの特色や魅力などの肯定的意見と、「個別」「集団」という実施形式に関する要望やシートの記載方法についてもう少し説明してほしいという意見も見られた。フォローアップセッションのあり方については、今後もアンケートを積み重ねながら研究科 FD 会議で引き続き検討していきたい。

４．ベストティーチャー賞候補者の選定に関する検討　（改善事例２）

本研究科のベストティーチャー賞候補者の選定基準としては、令和4年度に2種のアンケートに基づく評価方法を採用したものの、令和4年度ベストティーチャー賞選考委員会よ

りその選定根拠の妥当性に関する意見が示され、新たな評価方法を再考せざるを得ない状況に迫られた。本研究科においては、授業科目の特質からアンケート以上の根拠資料を提出するためには、全授業科目に関して担当教員相互の審査機会を設けるなどの工夫が必要であり、現行のカリキュラム運営をこなす上では相当の負担をクリアしなければならない。これらの事情から、令和５年度及び令和６年度においては、やむを得ず推薦を見送ることとなった。

この事態を改善すべく、第４、６、９、11 回研究科 FD 会議において、上記課題を共有した上で選定基準を整備し、エビデンスを収集するための方法を全教員で検討した。その結果、現行の授業評価アンケートの自由記述欄を一部改訂し、また、教員相互の審査機会としてのアンケート結果の共有方法を一部修正するといった意見が上がり、それらを取り入れることで候補者の選定基準・選定方法を策定することができた。これにより、令和８年度におけるベストティーチャー賞の候補者の推薦のための準備が整ったと言える。

５.入学生アンケートの定例化　　（特筆すべき取り組み５）

本研究科では、入学後、高度専門職業人を養成する学習へとスムーズに導入する教育のあり方を検討すること、及び今後の入試広報等に活かすことを目的とし、令和３年度から入学生アンケートの実施を定例化している。

令和７年度の入学生アンケートの結果は、以下の通りであった。

回答期間:2025 年 4 月 30 日(水)～5 月 7 日(水) ／ 回答数:12 件(回答率 75%)

項目１：本研究科を志望・受験した理由をご記入ください。複数、理由を記入して構いません。(回答 22)

＊教育内容･実践的教育　7名
＊教員･指導体制　6名
＊専門職大学院･資格取得　5名
＊立地･環境･生活条件　3名
＊その他　1名

項目２：本研究科をどうやって知りましたか。(回答 13)

＊HP(ネット含む)　6名
＊学部が鹿児島大学だったため　2名
＊大学院を調べる中で知った　3名
＊その他　2名

項目３－１：入学前に本研究科の HP は見ましたか。(回答 12)

＊はい　12 名

項目３－２：HP には知りたい、役に立つ情報がありましたか。それはどんな項目ですか。また不足している内容があればご記入ください。(回答 10) ※一つの回答に複数の項目の回答有

＜役に立った＞

＊全般的な有用性　3名　＊カリキュラム　5名　＊入試･受験･合格者情報　5名　＊進路･修了生動向　3名
＊資格情報　4名　＊教員･スタッフ　3名　　＊説明会等　２名

＜欲しい情報＞

＊　大学院生のスケジュール　1名

項目４：本研究科の資料請求等の内容や事務手続き（回答 13）

＊肯定的意見（スムーズだったなど）９名
＊入試時期に関する意見　2名
＊願書等の取り寄せに関する意見　1名
＊合格発表に関する意見　1名

項目５：本研究科以外に大学院を受験されましたか。どこか差しさわりがなければ具体名を教えてください。また、合格通知後、本研究科を選択するにあたって、何が決め手となりましたか。（回答 13）

＊受験していない　７名
＊九州圏内大学　4名
＊九州圏外大学　1名

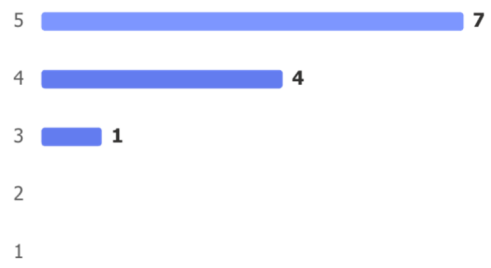
＜決め手＞
＊教員の専門領域　2名
＊国立大学　1名
＊立地　1名
＊少人数制の教育体制　1名

項目６：入学前、臨床心理士としてどのような職域に就きたいと考えていましたか。（回答 12）

＊医療領域　４名　＊福祉領域　６名　＊教育領域　１名　＊司法･矯正領域　１名

項目７－１：入学前、本研究科のカリキュラムは魅力あるものでしたか。（回答 12）

※　１：魅力ない　～　５：魅力ある



項目７－２：特に，魅力があると思われた点をご記入ください。（回答 10）

＊実習や SV など実践的教育　4名　＊カリキュラム　2名　＊少人数制の教育体制　2名　＊長期履修制度　1名

項目８－１：入学前、本研究科の実習（学内実習・学外実習）は魅力あるものでしたか。（回答 15）

※　１：魅力ない　～　５：魅力ある

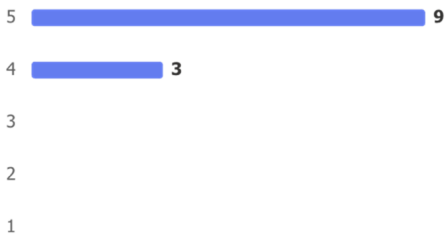


項目８−２：特に，魅力があると思われた点をご記入ください。（回答 9）

＊領域横断的な学外実習 ６名　＊指導の手厚さや実践経験を積めること ４名

項目９−１：入学前、本研究科の教員（その研究領域）は魅力あるものでしたか。（回答 15）

※　１：魅力ない　～　５：魅力ある



項目９−２：特に，魅力があると思われた点をご記入ください。（回答 9）

＊多領域の教員 3名　＊関心のある研究･実践領域 5名　＊研究室訪問等で知った教員の人柄 2名

項目 10：入学前、鹿児島大学のキャンパスはどのくらい魅力を感じましたか。（駅からのアクセスの利便性等含む）。（回答 12）

※　１：魅力ない　～　５：魅力ある



専門職学位課程という本研究科の特色あるカリキュラムや豊富な実習等については、令和６年度同様の高い評価を得ており、実践力をつけたいという入学生のニーズともマッチしていると言える。

６．修了予定者アンケートの定例化　（特筆すべき取り組み６）

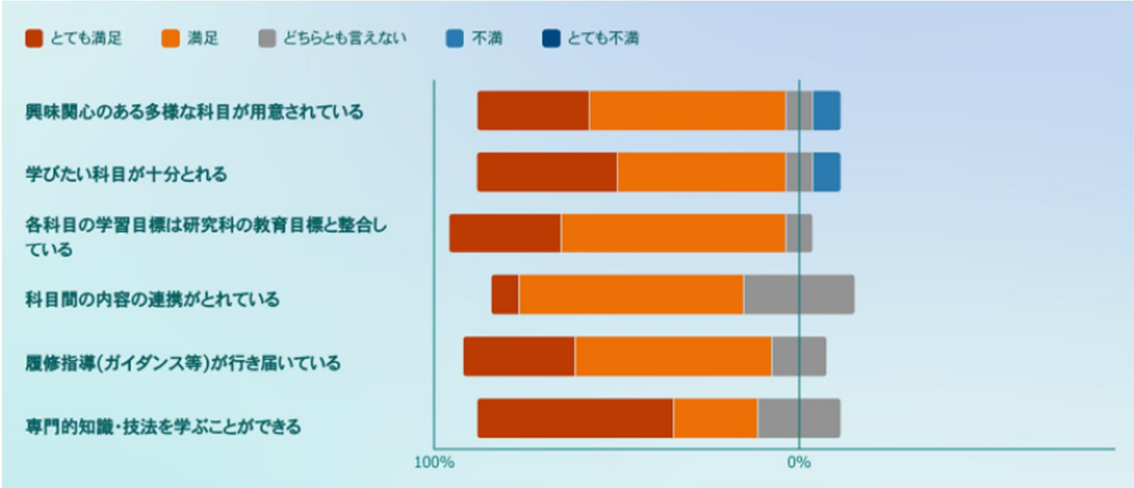
鹿児島大学では、本学の教育の内部質保障に関する推進要項（令和３年６月 24 日学長決

裁）第５条及び第６条に基づき、実施単位（各部局）ごとに自己点検・評価を行う必要がある。そのうち、毎年度実施するモニタリングの「卒業（修了）時の学生からの意見聴取の結果により、大学等の目的及び学位授与方針に即した学習成果が得られていることを確認しているか」という観点に基づき、当研究科においても修了予定者アンケートを設定し、令和４年度より実施している。

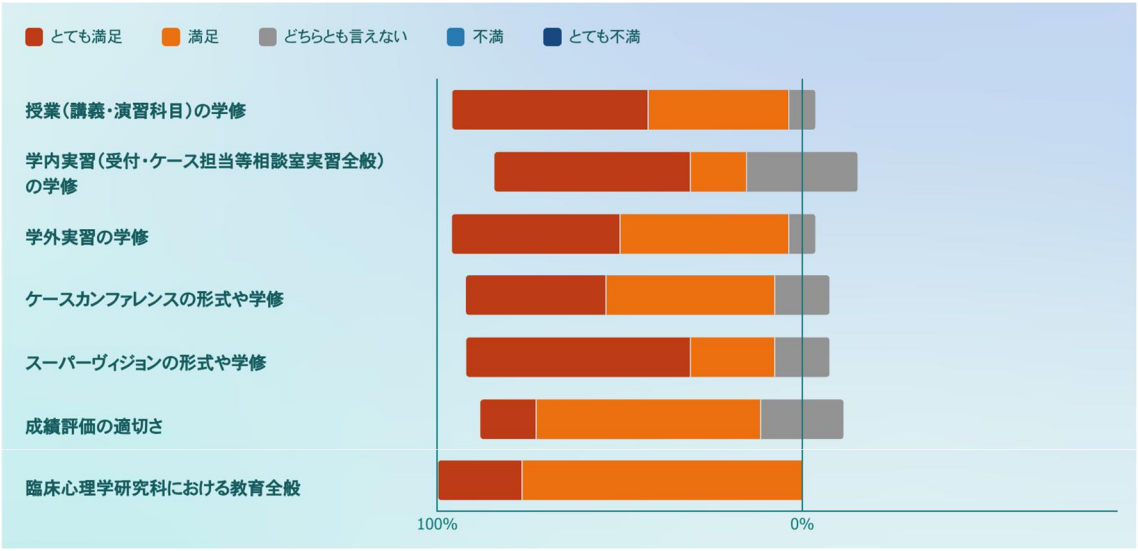
令和７年度の修了予定者アンケートの結果は、以下の通りであった。

回答期間:2026 年 3 月 2 日(月)～3 月 13 日(金) ／ 回答数:13 件(回答率 87%)

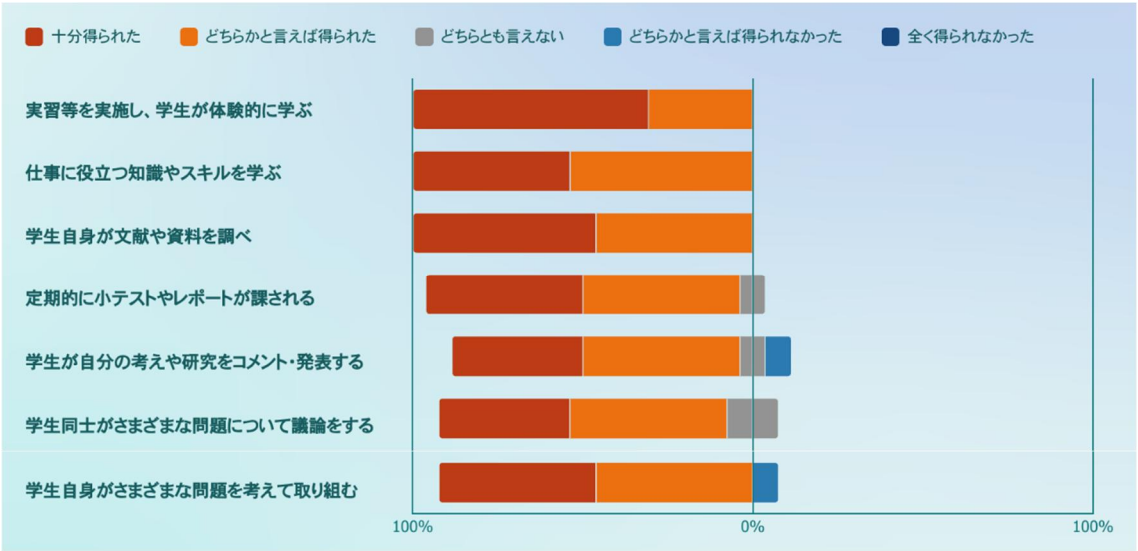
項目１：本研究科のカリキュラム（履修科目の数や構成、学年配当、時間割等）に対して、総じてどれくらい満足していますか。それぞれについてお答えください。



項目２：本研究科の教育内容に対して、総じてどれくらい満足していますか。それぞれにお答えください。

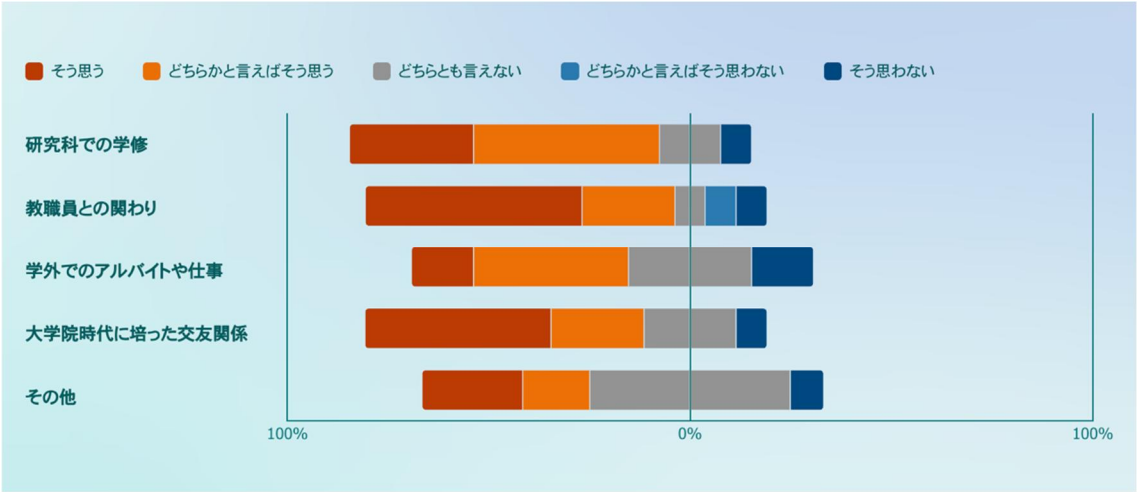


項目３：あなたは、次のような授業経験を通して、十分な学びが得られましたか。それぞれにお答えください。



項目４：これまでの学生生活について教えてください。

４－１　令和６年度修了予定の皆さんにとって、学生生活は「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)」に大きく影響を受けたものと思います。以下の活動は、コロナ流行下の学生生活を乗り切る「原動力」にどの程度なったと思いますか。それぞれについてお答えください。



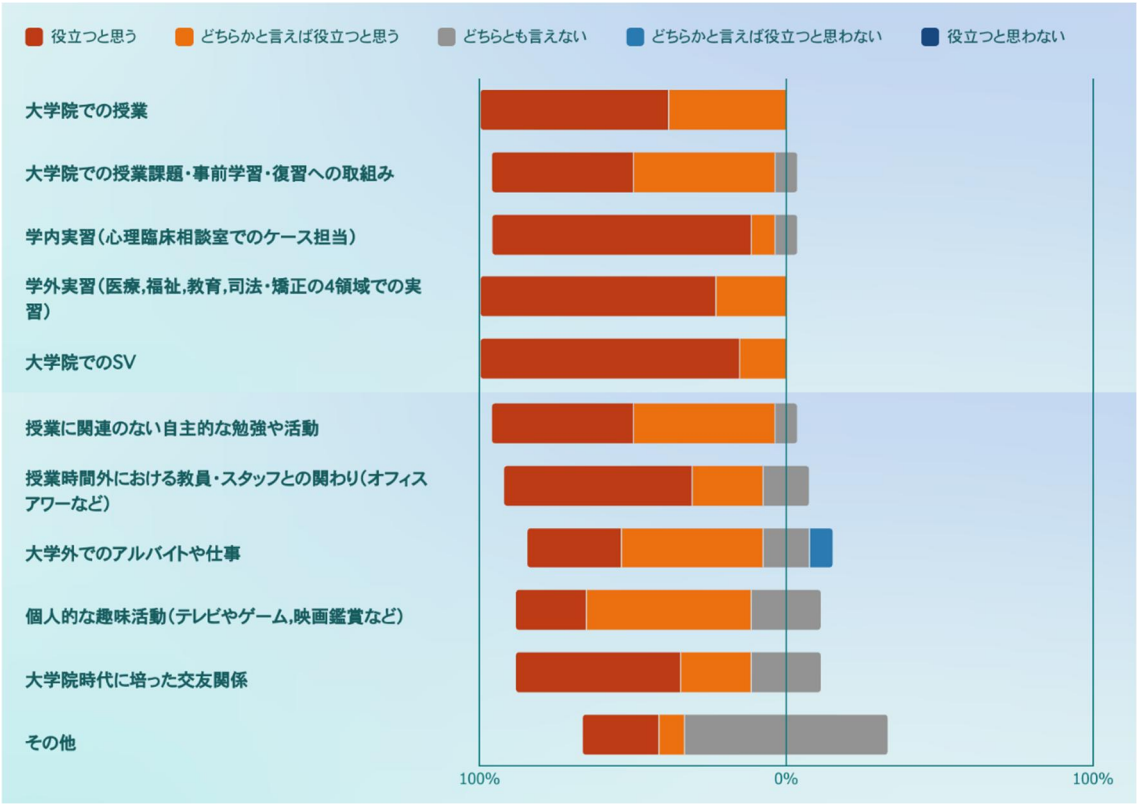
４－２　上記４－１で「その他」に「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した方のみ，可能な範囲でその具体的な内容についてお答えください。

＊教員　＊他の大学院生

４－３　本研究科のより良い教育に向けた改善点があれば教えてください。

＊事例研究発表会の方法　＊科目の幅　＊教員の相談体制

項目５－１：最後に、大学院生活での以下の活動や経験は、今後のあなたの成長（職場での臨床実践など）にどれくらい役立つと思いますか。それぞれお答えください。



項目５−２：上記問５で「その他」に「役立つと思う」「どちらかと言えば役立つと思う」と回答した方のみ，可能な範囲でその具体的な内容についてお答えください。

＊SV　＊趣味活動

『カリキュラム』『教育内容』『授業を通しての学び』について、概ね満足しているという回答が得られた。COVID-19 に関する項目では例年に比べて「そう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」「どちらとも言えない」の割合が高く、当該年度の修了生にとってはさほど影響を感じなかったのかもしれない。また、研究科教育の改善に関して、教員の相談体制や科目に関する意見もあった。それぞれの意見に関しては詳細が不明なところもあるが、今後もデータを積み重ね、丁寧な検討が必要と思われる。

７. 臨床心理学研究科 FD 研修会の開催　　（特筆すべき取り組み７）

本研究科では、全学ＦＤ委員会による FD 研修に加え、臨床心理学研究科 FD 委員が全学・学外で研修した内容を FD 会議で共有することが定例化している。令和 7 年度は、全学 FD 委員会が企画した FD・SD 合同フォーラムに加え、臨床心理士養成大学院協議会主催の FD 研修会及び大学コンソーシアム京都が主催する FD・SD フォーラムに FD 委員が参加し、その内容を第 7 回及び第 11 回の研究科 FD 会議で報告・共有した。また、表 7-1 に示

すように、学内講師による研修を１件実施したことに加え、令和６年度に引き続き、学外講師を招いたFD研修会も対面形式で実施することができた。いずれの研修も、本研究科がまさに直面している課題を乗り切るために必要なテーマに触れた講話をいただいた。質疑応答の時間には本研究科の教員から積極的な質問がなされ、講師からの応答を通して場全体に活発な交流の雰囲気が生まれた。また、学外講師を招いたFD研修会には本研究科教員のみではなく、養成中の大学院生にも参加してもらい、貴重な学びの機会となった。

表 7-1 臨床心理学研究科内で開催された研修会

月　日	テーマ	講師
4月16日	「臨床心理分野専門職大学院認証評価基準について」	中原睦美氏（当研究科教授）
2月4日	「心理臨床における人間理解と倫理」	奇恵英氏（福岡女学院大学人間関係学部教授）

８.授業公開・参観の取組み

当研究科では、専任教員が心理臨床相談室で相談ケースを担当することに加え、学生が担当するケースのスーパーヴィジョンを行う等の実習指導に時間をかけるため、授業時間割をスライドして編成せざるを得ず、また、守秘義務の観点からは、研究科内のみの公開とせざるを得ないため、授業参観が困難であった。実際、平成30年度まで実績がないままとなっていたが、令和３年度FD活動報告にあるように、他教員の授業参観を希望する声が挙がったことを契機に、授業公開・参観が再開されることになり、授業期間全体を実施期間と設定し、適宜、参観を希望する教員が直接、授業担当教員と調整して実施することとした。具体的には、授業参観が実施された場合には、参観教員が「鹿児島大学大学院臨床心理学研究科授業参観報告書」を作成し、ＦＤ委員会に提出し、ファカルティ・ディベロップメント委員長が研究科FD会議にて全教員へ報告するという体制を整えている。令和７年度は、授業参観希望者がいなかったため授業公開・参観が実施されなかった。次年度以降は、より積極的に授業公開･参観が実施されて授業改善に繋げることを研究科内の教員間に醸成する必要性が考えられる。また、FD会議における授業評価アンケートの振り返りにおいて各授業担当者に授業内容･授業改善案等について報告を求めるなどし、授業参観とは異なる方法でも教員間の学び合いの機会を提供するなど、工夫していきたい。

９.臨床心理学研究科FD活動の特筆すべき取組みや改善事例

令和７年度の臨床心理学研究科 FD 活動における特筆すべき取り組みや改善事例については、上記２～７に詳細に記載しているが、以下に要点を示す。

（２）臨床心理学研究科専任教員全員による研究科 FD 会議　　（特筆すべき取り組み１）

本研究科では、研究科 FD 会議を教授会同日に設定し、毎月開催する体制を整えている。令和 7 年度はスケジュールの再調整が必要となる自体は生じたものの、Web 会議を活用しながら、ほぼ毎月、年間 11 回の研究科 FD を開催することができた。FD 活動の主軸となる授業評価アンケートの振り返りをはじめ、研修会の企画・実施、フォローアップセッションに関する意見交換等を定期的に実施することで、研究科の教育の現状把握や授業改善に向けた取り組みを組織的に進めることができた。

（３）授業評価アンケート及びフォローアップセッション実施に対する検討

(3-1) 授業評価アンケートの実施　（特筆すべき取り組み２）

本研究科では、「学生による授業評価アンケート」を授業改善に活かすために、各セメスターの第 1 回目アンケートを 7 回目授業、第 2 回目アンケートを 14 回目授業に実施し、その翌週の第 8 回目と第 15 回目授業で、各教員が受講生の意見や授業改善についてフィードバックすることを組織的に実施している。また、各セメスターで 2 回の授業評価アンケートを実施することで、1 回目の授業改善について、2 回目のアンケート結果から改善結果の検証ができるように設定されている。令和 7 年度も 2 セメスターで計 4 回の授業評価アンケートを実施し、結果は教授会で報告された。また、同日に開催される研究科 FD 会議にて、授業担当教員が担当授業について報告し、全教員で共有し、授業の改善について検討された。

(3-3) 集計結果のフィードバックと授業評価報告書の提出及び授業改善に向けた組織的対応

（特筆すべき取り組み３・改善事例１）

学生による授業評価アンケート結果は、研究科事務補佐員により回答者の匿名性が担保された状態で処理・集計がなされ、各担当教員に集計結果がフィードバックされる。各担当教員は、集計結果を確認し、授業に対する自己評価や自由記述欄に記載されている学生からの意見等も考慮した上で、「学生による授業評価を受けての報告書」を作成する。当研究科では、1 回目のアンケート後になされた授業改善について、2 回目のアンケートで改善結果の検証を行うことができる仕組みを作っており、それらについても「学生による授業評価を受けての報告書」に記載される。令和 6 年度も第 3 回、第 5 回、第 8 回、第 11 回の研究科 FD 会議において、授業担当者がこの報告書をもとに授業改善や改善結果の検証について報告し、全教員で共有して意見交換を行った。

また、令和 7 年度の「学生による授業評価を受けての報告書」には、特定の科目における自由記述の回答率の低さについて意見が上がった。複数の科目のアンケートを一度に実施せざるを得ない状況によって学生や事務補佐員の負担が懸念されるところであり、令和 8 年度以降改善に向けた検討を進めていきたい。

(3-4) 臨床心理学研究科独自の取組みとしてのフォローアップセッション

（特筆すべき取り組み４）

本研究科では、各セメスター終了後に臨床ゼミ担当教員によるフォローアップセッションを実施している。そこでは、学生の臨床実習に伴う不安が軽減されたり、学生間で振り返りを共有したりすることで自身の学びが相対化される等、より充実した学修がなされている。令和４年度のフォローアップセッションから、それまでその使用が任意であった「セルフモニタリングシート」を「自己評価シート」と改め、学生の実習に関する根拠資料である「実習記録ノート」の一部に組み込んで、学生各自が各セメスターの始めに「今期の目標」を意識し、セメスター終了後に実施される指導教員とのフォローアップセッションにおいて、「達成した点」「今後の課題」「フォローアップセッションでの気づき」の振り返りができるように改善された。令和７年度のアンケート結果については、研究科 FD 会議において全教員に共有され、フォローアップセッションのあり方や実施方法等について検討された。

（４）ベストティーチャー賞候補者の選定に関する検討　　（改善事例２）

鹿児島大学では、令和２年度より教員の意欲向上と大学教育の活性化を図るために、教育実践に顕著な成果をあげた教員をベストティーチャー賞として表彰する取り組みが始まっている。本研究科においては、令和３年度に選定基準の検討を始め、令和４年度にベストティーチャー賞候補者の選定基準を設定し、実際に候補者を推薦することができた。しかし、令和５年度の全学 FD 委員会において、各部局としてベストティーチャー賞候補者の被推薦者を選出するに当たって採用した根拠資料及びその論理に関する妥当性が問われることとなり、選考方法を再考する必要が出てきた。その結果、令和５年度及び令和６年度は候補者を立てないこととなった。

令和７年度、複数回の検討の機会を設け、各研究科教員からの意見を踏まえて、ベストティーチャー賞候補者の選定基準・選定方法を策定することができた。令和８年度以降の候補者選定の準備が整ったことで、今後の研究科の教育の活性化が図られることが期待できる。

（５）入学生アンケートの定例化　　（特筆すべき取り組み５）

入学生を対象にした入学生アンケートは、令和３年度から定例化されており、令和７年度も継続して実施した。専門職学位課程としての本研究科の特色あるカリキュラムや豊富な実習などは、昨年度と同様、入学生から高い評価を得ており、幅広い専門性を有する教員のもとで実践力をつけたいという入学生のニーズともマッチしていると考えられた。

（６）修了予定者アンケートの定例化　　（特筆すべき取り組み６）

本研究科においては、「国立大学法人鹿児島大学における教育の内部質保障に関する推進要項」に定めのある「卒業（修了）時の学生からの意見聴取の結果により、大学等の目的及び学位授与方針に即した学習成果が得られていることを確認しているか」という観点に基づき、当研究科独自に修了予定者アンケートを設定し、令和４年度より実施してきた。令和７年度の分析からは、「カリキュラム」「教育内容」「授業を通しての学び」について、概ね

満足しているという回答が得られた。一方で、研究科教育の改善に関して意見もあったことから、今後もデータを積み重ね、検討してく必要があると考えられた。

（７）臨床心理学研究科 FD 研修会の開催　　（特筆すべき取り組み７）

本研究科では、全学ＦＤ委員会による FD 研修に加え、ＦＤ委員が全学・学外で研修した内容を FD 会議で共有することが定例化している。令和 7 年度は、臨床心理士養成大学院協議会主催の FD 研修会及び大学コンソーシアム京都が主催する FD・SD フォーラムに FD 委員が参加し、研究科 FD 会議で報告した。また、学外講師を本学に招いた FD 研修会も対面で実施することができ、本研究科が直面している課題を乗り切るために必要なテーマに触れた講話をいただいた。質疑応答の時間には本部局の教員及び学生から積極的に質問がなされ、 講師からの応答を通して場全体に活発な交流の雰囲気が生まれた。

以上

連合農学研究科

ＦＤ活動報告書

（令和７年度）

鹿児島大学大学院連合農学研究科

令和８年３月

大学院連合農学研究科ＦＤ活動報告

１．はじめに

鹿児島大学院連合農学研究科（鹿児島連大）は、佐賀大学、琉球大学と鹿児島大学の３大学が相互に協力して教育を行う農林水産学系の博士課程大学院である。連大は、農学に関連する幅広い学問と高度な専門知識・技能を修得し、諸課題を探索・解決する能力を有する人材を育成すると共に、確かな分析力・俯瞰力・説明能力を身につけ、困難な課題に挑むチャレンジ精神やグローバルな視野を備え、地域社会と国際社会に貢献できる人材を育成することを目的としている。また、社会人並びに留学生を積極的に受け入れており、九州・沖縄からアジア、アフリカを見据えた農林水産学の教育研究の中核となるとともに、農林水産業及び地域の発展に寄与することを目的としている。

本研究科は、昭和 63 年（1988 年)に設立され、約 1,500 名（内、留学生約 800 名）の学生を受け入れてきた。設立時は４専攻 11 連合講座であったが、平成 21 年（2009 年）に３専攻９連合講座に改組、令和７年（2025 年）には１専攻３領域とする改組を行った。令和７年４月１日現在、日本人学生 67 名、外国人留学生 50 名、計 117 名が在籍している。

博士の学位論文は、カリキュラムに基づいて 12 単位以上を修得の上、学位論文提出の基準を満たした者が提出する。学位論文を提出した学位申請者には、学位論文の公開審査及び最終試験を行い、合格した者に対して博士（農学、水産学、学術）の学位が授与される。鹿児島連大では、学位取得後のキャリアパスを考えることを意図したキャリア開発特論や大学教育インターンシップ、研究インターンシップなど、学士課程や修士課程では見られない特色ある科目を設け、大学院教育の実質化を目指している。さらに、年に一度、地理的に離れた３構成大学の学生が一堂に会して行う農学特別講義の実施や、多地点制御遠隔講義システム（SINET）を用いた授業を行うことで教育方法等の工夫を行っている。特に、SINET による「農学共通講義（英語)」では、全国に６つ設置されている連合農学研究科（全国６連大）から選出された教員（鹿児島連大からは２名選出）による先端研究に関する講義を英語で実施している。このセミナーでは、全国６連大の様々な地域の学生と同一の講義を共有することで、専門知識に加えて農林水産学における諸課題を俯瞰することが可能となっており、他に類を見ないユニークな教育システムとして高く評価されている。このような連大ならではと言える教育連携をさらに強固にするために、全国６連大の博士課程学生の教育・研究指導委託に関する覚書を平成 29 年（2017 年）10 月に取り交わした。

本研究科では、学生１人に対し主指導教員１名、副指導教員２名の計３名による指導体制を取り入れているが、副指導教員には他の構成大学・研究科の教員を原則含めており、学生の研究指導においても構成大学の連携と指導の透明性を確保している。また、各年次１回ずつ修了時までに中間報告会を課すことで、学位取得へ向けた研究の進捗状況を検証している（旧カリ学生は中間発表会、学位論文を受理された学生は除く)。

FD 活動に関しては、平成 19 年度に代議委員会の傘下として FD 委員会が設けられ、毎年、農学特別講義を中心とした授業アンケートの集計・解析評価を行い、改善に向けて取り組んでいる。令和７年度は合計２回の FD 委員会を開催した。

令和７年度の活動報告では主に、農学特別講義、キャリア開発特論、分野別セミナー、修了生アンケート、連大教員資格取得者研修会等について取りまとめている。

２．農学特別講義

令和７年度鹿児島大学大学院連合農学研究科（博士課程）「農学特別講義」が、令和７年 11 月 10 日（月）から 11 月 12 日（水）の３日間で開講された。開講趣旨は、本連合農学研究科に在籍する学生に本学の教育理念に基づき、幅広い専門領域の先端知識に触れるとともに、各学生によるプレゼンテーションやポスターセッションなどを通じて発表能力、課題探求能力、創造性を養うことにある。令和７年度は琉球大学 50 周年記念会館にて対面で実施した。内容は、外部から招聘した講師による講義３コマと、学生による「専攻セミナー（１年生プレゼンテーション)」、「情報交換セミナー（２年生ポスターセッション)」で、参加学生数は 70 名であった。

初日は 14 時から受講受付ののち、14 時 30 分から開講式が行われた。開講式では、北原兼文連合農学研究科長による挨拶があり、小西代議委員から日程及び注意事項が説明された。

〇講義３コマについて

セミナーA：近畿大学生物物理工学部・尾崎嘉彦先生による講義「果物は身体に良いのか？悪いのか？～ヒトの健康への影響を多角的に考察する農学的アプローチ～」が行われた。果物に含まれるフルクトースの過剰摂取が健康リスクとなり得る一方、果物の摂取、特に果物の機能性成分が健康維持や疾病予防に寄与することが紹介された。その説明を通して、実学である農学において、健康への効果を評価する際の疫学的および生化学的アプローチ、それらの成果の社会実装までのプロセスの重要性が示された。受講生には、農学研究における成果の社会還元について再認識するよい機会になったと思われる。コーディネーターは佐賀大学農学部　古藤田信博代議委員。

セミナーB：北海道大学大学院医学研究院・田中敏先生による講義「人体病理学」が行われた。病理診断の対象となる疾病の中から炎症と腫瘍を取り上げ、具体例を織り込みながら病理診断の実際について紹介があった。その中で、病理診断の役割、特に正確な病理診断がその後の治療方針の設定、ひいては患者の利益につながることも説明された。また、近年のがんゲノム医療で用いられている、遺伝子に基づく分子病理診断についても解説があった。接する機会の少ない医学分野、中でも疾病の原因の特定から疾病により表出する組織、細胞やゲノム異常の判断までの広範な理解が求められる病理学から、視野を広く持って学ぶことが大事であることの理解が深まったと思われる。コーディネーターは鹿児島大学水産学部　小松 正治代議委員。

セミナーC：九州大学大学院理学研究院の立田晴記教授による講義「生物振動学：近年の進展と農学研究への応用」が行われた。生物音響学から派生した分野である生物振動学と農業分野での応用研究について紹介され、振動を活用した病害虫防除技術の開発研究について紹介があった。物理情報を利用した防除研究は、情報化学物質を用いた防除に比べ研究が遅れている分野であり、新しい分野の講義を聴けることで学生にとって貴重な機会となった。コーディネーターは鹿児島大学農学部 坂巻祥孝代議委員。

〇専攻セミナー（プレゼンテーション）について

今年度の１年生の専攻セミナーは、２日目の午前 9:00～10:30 並びに 10:40～12:20 の時間に２つのグループに分かれて行われた。多くの学生が、英語でのプレゼンテーションを行い、中には、日本語で発表する留学生も見られた。特に、日本人学生の中には、初めての英語によるプレゼンテーションとなる学生もおり、緊張している場面も見られたが、参加した学生からは、大変貴重な経験になったと達成

感を感じる学生も多く見られた。ただ、教員からの英語での質問に対しては、聞き取り、回答のいずれにおいても苦労する学生が多く見られたことから、今後、英語によるプレゼンテーションや、ディスカッションの機会を増やすことが重要であると感じた。

○情報交換セミナー（ポスターセッション）について

本年度の情報交換セミナーでは、２年生（３年生１名を含む）計 35 名が、第１日目 16 時 40 分から 18 時 10 分にかけて、琉球大学 50 周年記念館交流ラウンジにてポスター発表を行った。会場には全てのポスターを同時に掲示したが、発表時の混雑を避けるため、発表者を２グループに分けて実施した。また、昨年度より導入した「優秀ポスター発表賞」については、本年度も引き続き授与を行った。選考は農学特別講義（一般セミナー）を受講した学生および連大代議委員による投票により実施し、３名が受賞した。なお、今年度は、昨年度の反省を踏まえ、選考の公平性向上を目的として、代議委員票に適切な重みづけを行う改善を加えた。

事後アンケートでは、受講生の 89%が「意義がある」と回答し、「少し意義がある」を含めると、ほぼ全員がポスター発表の意義を認めていた。自由記述欄においても、学習効果、学生間の交流、研究意欲の向上など、全体として高い満足度が示された。一方で、会場の狭さや時間不足については、多くの学生から課題として指摘された。

以上より、本セミナーは内容面では非常に充実した成果を上げたと評価できる。一方で、会場環境や時間配分といった運営面には改善の余地がある。これらを見直すことで、今後さらに質の高い学びの場として発展することが期待される。

2025年度 農学特別講義時間割（日程表）

会　場：琉球大学　50周年記念館
Venue：Ryukyu University Researcher Exchange Facility 50th Anniversary Memorial Hall

11月10日(月) November 10(Mon)					14:00	14:30	15:00	16:30	休憩Break	16:40	18:10	
					受付 Reception	開講式 Opening	講師：尾崎　嘉彦 Lecturer：OZAKI　Yoshihiko 「果物は身体に良いのか？悪いのか？」 －ヒトの健康への影響を多角的に考察する農学的アプローチ－ 「Are Fruits Good or Bad for Us?」 －A Agricultural Approach to Multidimensional Evaluation of Their Impact on Human Health－			2年生ポスターセッション Poster sessions 2nd grade students		

	9:30	10:00	11:30	休憩Break	11:40	13:00	休憩Break	13:10	14:40	休憩Break	14:50	16:20	休憩Break	16:40	18:10
11月11日(火) November 11(Tue)	受付 Reception	専攻セミナー （1年生プレゼンテーション） Major Advanced Seminar （1st grade students Presentation）			昼食（交流会） Lunch（Meetup）			専攻セミナー （1年生プレゼンテーション） Major Advanced Seminar （1st grade students Presentation）			施設見学 Facility tours			施設見学 Facility tours	

	9:30	10:00	11:30		12:40	14:10	休憩Break	14:20	14:50
11月12日(水) November 12(Wed)	受付	講師：田中　敏 Lecturer：TANAKA　Satoshi 「人体病理学」 「Human Pathology」		昼食 Lunch	講師：立田　晴記 Lecturer：TATSUTA　Haruki 「生物振動学：近年の進展と農学研究への応用」 「Biotremology: Recent advances and applications in agricultural research」		休憩Break	閉講式 Closing 写真撮影 Group Photo	

令和７年度「農学特別講義」参加学生へのアンケートの集計結果は次表のとおりである。〔参加学生：70名　アンケート回答者：65名　アンケート回収率：93%〕

令和７年度農学特別講義アンケート調査結果

・セミナーの理解度について

〔回答項目〕	セミナーA	セミナーB	セミナーC
ほぼ理解できた	49名（75%）	32名（49%）	41名（63%）
半分程度理解できた	15名（23%）	32名（49%）	24名（37%）
理解できなかった	1名　（2%）	1名（2%）	0名（0%）

・専攻セミナー等について

〔回答項目〕	1年次 プレゼンテーション	2年次 ポスターセッション
意義がある	53名（82%）	58名（89%）
少しは意義がある	12名（18%）	5名（8%）
その他	0名（0%）	2名（3%）

・セミナーの企画・運営等について

〔回答項目〕	日程（時期）	日程（日数）
良い	57名（88%）	59名（91%）
悪い	4名（6%）	5名（8%）
その他	4名（6%）	1名（1%）

①セミナーの理解度について

セミナーは英語または日英併用による講義となっており、いずれも最先端の知見に基づく質の高い講義であった。受講生から「ほぼ理解できた」との回答は、セミナーAで75%、セミナーBで49%，セミナーCで63%であったが、「半分ほど理解できた」も含めると90%以上が理解できたと回答した。日本人学生の一部からは、日本語での説明の充実を求める意見があったが、幅広い学識と国際的な視野を考慮すると、現状の講義形式を維持するのが妥当と考える。

②専攻セミナー等について

１年次プレゼンテーションは、「意義がある」の回答が82%であり、積極的な質疑応答もあったことから、受講生から好評である旨の意見が多かった。英語でのプレゼンに関しても、好意的な意見が見られた。２年次のポスターセッションは、「意義がある」の回答が89%でああり、積極的な意見交換が行われていた。１年目は英語による研究紹介、2年目はポスターセッションという構成についても好意的な意見が占められた。

③セミナーの運営・企画等について

セミナーの開催時期については 88%の学生から「良い」との評価が得られ、日数については 91%の学生から「良い」との評価が得られた。

④セミナー全般について（学生の意見・感想）

セミナーのあり方については、好意的な意見が大勢を占めた。特に、開催時期を少しずらしたことから、学会との重複等の申し立ては見られなかった。また、交流会を昼食とした点が大変好評であり、円滑なコミュニケーションを構築する上で貴重な機会となった。今回は那覇市内の会場でなく、琉球大学千原キャンパスでの開催だったことから、宿泊場所からの移動に時間を要したが、セミナーの実施には大きな影響はなかった。

＜特筆すべき取組・改善事例＞

本年度の講義は、琉球大学農学部がコーディネーターを務め、50 周年記念館において開催された。３日間にわたる集中講義形式であり、受講生にとっては多忙な日程であったと推察されるが、３つの構成大学から参加した進学生、留学生、および社会人学生の連大生が一同に介する貴重な機会となり、組織としての連帯感醸成に繋がったものと考えられる。また、日英バイリンガルによる講義運営は、受講生の語学力向上にも貢献した。

これまでのアンケート結果に基づいた改善として、１年生の専攻セミナー（プレゼンテーション）において十分な質疑応答の時間を設定したところ、受講生からは大変高い評価を得た。また、今回新たに実施した泡盛酒造施設等の施設見学も、同様に好評を博した。しかしながら、施設見学については、開催地によっては会場からの距離、所用時間、および見学に適した施設等の有無といった制約もあることから、来年度以降の開催については、上記課題を踏まえ、その都度詳細な検討が必要であると判断された。

３．キャリア開発特論

令和７年７月２日（水）に「キャリア開発特論 」が多地点遠隔講義システムにより開催された。本講義は、大学・研究所・企業等で活躍中の方々を講師として招き、企業や社会でどのような人材が求められているか等、今後の研究者・指導者としての道を開くための講義であり、連大生の受講者に加え、学部及び修士の学生にもオープンにしている。

セミナーは４つの講演と質疑応答からなり、その概要は以下のとおりである。

講義１：柘植 信昭（ハウス食品グループ本社 研究開発本部）

題目： “ハウス食品”の研究・開発事例紹介 『涙のでないタマネギ開発』

本講義では、イグノーベル賞受賞により国内外で注目を浴びた、ハウス食品グループが開発した「涙のでないタマネギ」の話を中心に講義していただいた。またイグノーベル賞授賞の突然の連絡や式典でのエピソードをユーモア交えてお話いただいた。講師はその開発に最初から最後まで携わった企業研究者であり、催涙成分の生合成経路を、生物学的・化学的に緻密に検証し、ついにその経路を完全に明らかにした経緯を紹介した。研究はそこでとどまらず、理研との共同研究による放射線育種によって実際に「涙のでないタマネギ」を開発し北海道で商業的に栽培し市販するに至ったことや、催涙成分を利用

した「ドライアイ検査キット開発」という医療用臨床検査業界への展開は傾聴に値した。基礎研究から実用化まで長い年月がかかったが、ここまで行えた理由は、研究開発グループの情熱と企業トップの理解があってのこと、という秘話も披露していただいた。

講義２：筒井 功（国際農林水産業研究センター）
題目：フィールドに生きる：回り道をしながら見えてきたこと
本講義では、国際農林水産業研究センター水産領域に所属されている筒井博士に、フィールドに「身を置く」という異色の生き方について、これまでの取り組みを通してご紹介いただいた。特に東南アジアでの活動を多くのスライド写真で説明され、生物生産、利用、加工、流通にわたる現場主義を貫いた研究例を示された。エビは日本人一人あたり消費量が世界第二位でもあり、タイの大学との共同研究により低コストで簡単なエビ養殖技術の開発に取り組んでいるが、現地での養殖は病気などの発生により廃業になった池が多かったという。しかし逆転の発想で、そこで生えてきた藻類などをエビのエサにできないかと考え、エサ代などを節約できる低コストで高品質なエビの生産に成功した。研究は必ずしも高価な機器がなくてもできるものであり、また常識を疑うことも大事であることを本講義より学んだ。「思いがけない道にこそ未来」「1 歩踏み出す勇気が自分を育てる」「心でつながると世界がかわる」という３つのメッセージが連大生へのエールとなった。

講義３：成 泰敬（琉球大学 研究推進機構 共創拠点運営部門）
講義タイトル：持続可能な養殖飼料の未来
本講義では、成氏ご自身の大学院の院生時代から現在までのキャリアを振り返るとともに、これまでの研究についての紹介がありました。成氏の現在の研究テーマは持続可能な養殖資料の開発ですが、現在に至るまでに様々な未利用資源を扱ったことや、今とは異なる分野での研究経験があったことが、ご自身の研究の幅の広がりを作るきっかけになったとのお話がありました。また、成氏は韓国から日本へ留学して学位を取得されましたが、文化の違いなどで苦労しながらも先生や研究仲間など周りの人に助けられたことについて触れられ、経験に無駄はなく、さまざまな経験が将来の研究や人生に役に立つことを伝えられました。今後のキャリアを考える上で大変参考となる講義でした。

講義４：竹中 正巳（鹿児島女子短期大学 生活科学科）
講義タイトル：生物考古学今昔―形態から分子研究へ
本講義は、竹中氏の研究を中心に、生物考古学研究の時代変化について述べられた講義でした。生物考古学は、古墳や貝塚など古い墓から出土した古人骨の観察などの形態分析を行うことで、民族の推定のほか、生活様式や健康状態など、当時の環境や社会の様子を紐解く学問であることの紹介がありました。近年はストロンチウムや DNA の分析手法を取り入れることで、個体間の血縁関係までも明らかにすることが可能となり、これまでの手法では仮説に終わっていた部分を補うことが可能となりました。考古学は文系学問と考えられがちですが、今は自然科学的手法を織り交ぜた総合的学問領域へと変化し、文系的アプローチだけでなく理系的アプローチが必要になってきました。ただ、技術の進歩によって明らかにできることが増えた中で、今も昔も変わらず生物考古学に重要なことは、発掘調査および資料化の重要性であることを訴えられました。生物考古学という理系文系のハイブリッドな学問の面白さが伝わる講義でした。

キャリア開発特論2025　日程表
Advaned Lecture on Career Development 2025

	8:50	9:00	10:30		10:40	12:10		13:30	15:00		15:10	16:40
7月2日(水) July 2(Wed)	開講挨拶 Greetings	Lec1 “ハウス食品”の研究・開発事例紹介 『涙のでないタマネギ開発』 Introduction of Research and Development Case Studies in “House Foods” “The Development of the Tearless Onion.” ツゲ　ノブアキ 講師名　**柘植　信昭** Lecturer　TSUGE Nobuaki ハウス食品グループ本社　研究開発本部　基礎研究部 HouseFoods Group Inc.		休憩 Break	Lec2 フィールドに生きる：回り道をしながら見えてきたこと Living in the field: What I discovered along my winding life journey ツツイ　イサオ 講師名　**筒井　功** Lecturer　TSUTSUI Isao 国立研究開発法人国際農林水産業研究センター Japan International Research Center for Agricultural Sciences(JIRCAS)		昼食 Lunch	Lec3 持続可能な養殖飼料の未来 The Future of Sustainable Aquaculture Feed ソン　テギョン 講師名　**成　泰敬** Lecturer　Seong Taekyong 琉球大学研究推進機構　共創拠点運営部門 Univesity of the Ryukyus, Organization for Research Promotion		休憩 Break	Lec4 生物考古学今昔－形態から分子研究へ タケナカ　マサミ 講師名　**竹中 正巳** Lecturer　TAKENAKA Masami 鹿児島女子短期大学 Kagoshima Women's Junior College
	ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ Coordinator	古藤田　信博(佐) KOTODA Nobuhiro(Saga)			寺田　竜太(連) TERADA Ryuta(RENDAI)			酒井　一人(琉) SAKAI Kazuto(Ryukyus)			小松　正治(鹿水) KOMATSU Masaharu(Kagoshima Fish)	

※Lec4は日本語による講義です。
※Lec4 is a lecture in Japanese.

教室 Class Room
佐賀大学：
佐賀大学農学部１号館南棟１階学生演習室　１S-104教室
Saga University Faculty of Agriculture South Building#1 Seminar Room(2)
鹿児島大学(農)：
鹿児島大学連合農学研究科３階会議室
The United Graduate School of Agricultural Sciences Kagoshima University Meeting Room 3F
鹿児島大学(水産)
鹿児島大学附属図書館水産分館セミナールーム
Kagoshima University Fisheries Library　Seminar Room
琉球大学
琉球大学農学部棟2階　第2会議室
Room 210, Faculty of Agriculture Building (2nd floor Meeting Room)

４．分野別セミナー

平成 24 年度から、構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的とした「分野別セミナー」を開催している。令和７年度は、１件の分野別セミナーが開催された。

（1）セミナー名称：生物資源生命科学領域　分野別セミナー（農芸化学）
開催日時：令和８年２月 27 日（金）～２月 28 日（土）
会　　場：佐賀大学生物資源教育研究センター　唐津キャンパス　セミナー室

２月 27 日（金）：セミナー・招待講演　牧田 佳真 先生（大阪歯科大学歯学部・准教授）
タイトル「スーパーカオトロピック性を有するホウ素クラスターアニオン― 細胞質送達のための新たなキャリアへの展開」
セミナー・招待講演　五十棲 規嘉 先生（奈良県立医科大学未来基礎医学・助教）
タイトル「相分離性タンパク質が関わる神経変性疾患－新たな凝集阻害因子の発見－」
17 名の学生のポスター発表
２月 28 日（土）：佐賀北部地域の地域特有の農芸化学関連産業を視察。石井食品唐津工場・および松浦一酒造

招待講演では２人の講師をお招きし、農芸化学分野における最先端の講演を行っていただいた。細胞伝達にかかわる新素材ホウ素クラスターアニオンの講演、また、相分離性タンパク質が関わる神経変性疾患 ALS 治療への道筋といった非常に興味深い内容が発表された。連大学生や連大に進学する可能性の学生に非常に刺激になったことと思われる。また、17 名の学生のポスター発表も行い非常に活発に議論が行われた。２日目には佐賀北部地域特有の農芸化学関連産業として石井食品唐津工場・および松浦一酒造を視察し食の安全に対する意識や製造に関する現場での考え方を経験することができた。

５．修了生アンケート

例年、修了生を対象としたアンケートを実施している。これは、自己点検・評価の参考とするため、平成 18 年４月に、平成 11～17 年度修了者を対象に郵送により実施したのが始まりで、以後は修了時に学生から回答してもらう形を取っており、平成 24 年度からは、Web による入力方式で行っている。

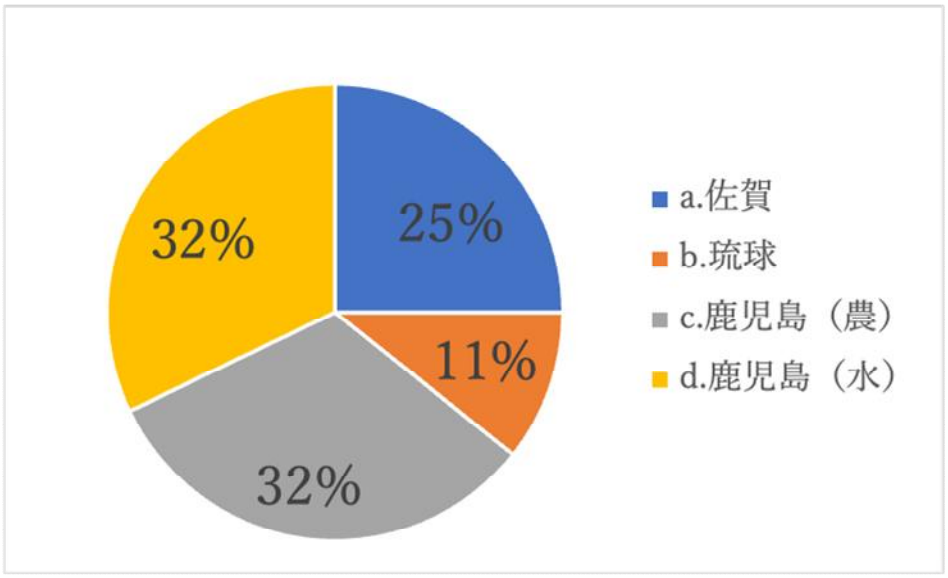
令和７年度修了生へのアンケート集計結果

令和７年９月修了生９名中、回答学生７名（回答率 78%）

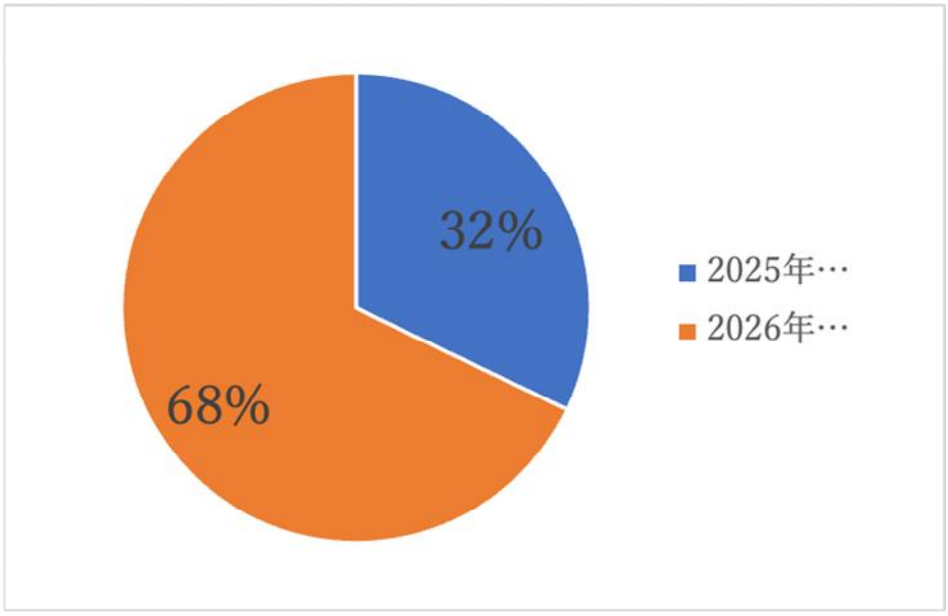
令和８年３月修了生 19 名中、回答学生 19 名（回答率 100%）

※単位取得退学後の学位取得者を含む

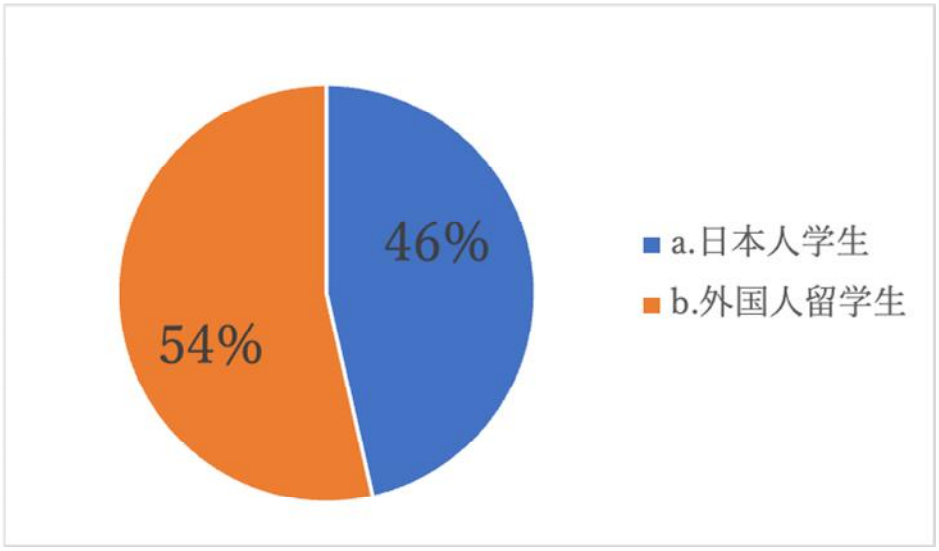
1. 所属構成大学



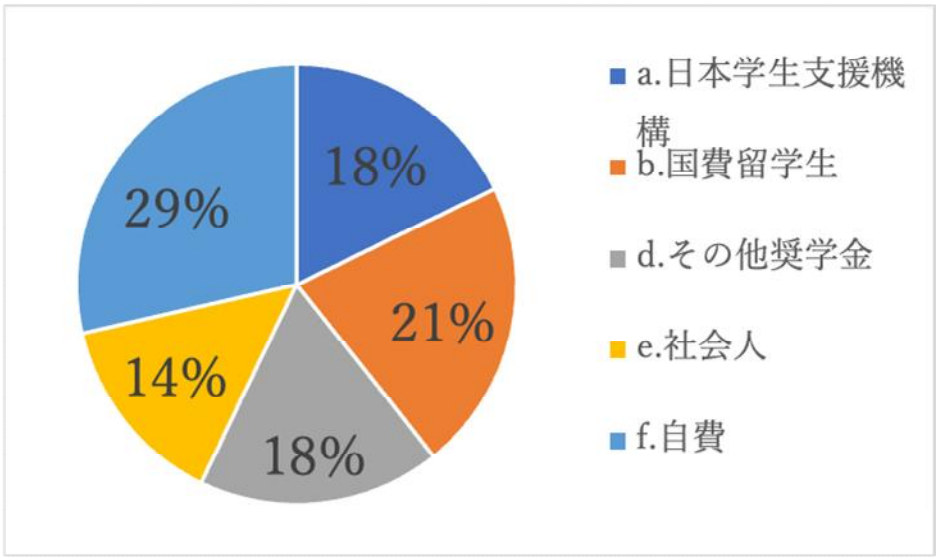
2. 修了年月



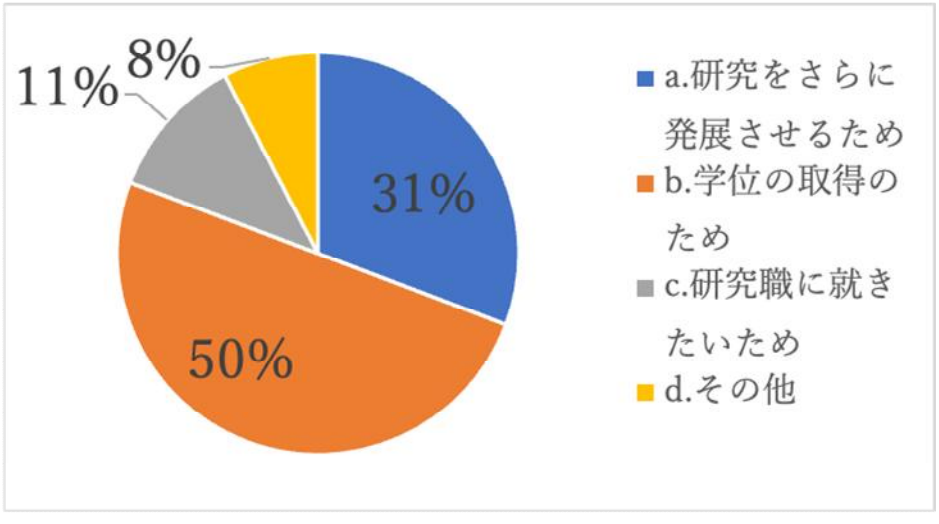
3. 日本人学生あるいは外国人留学生



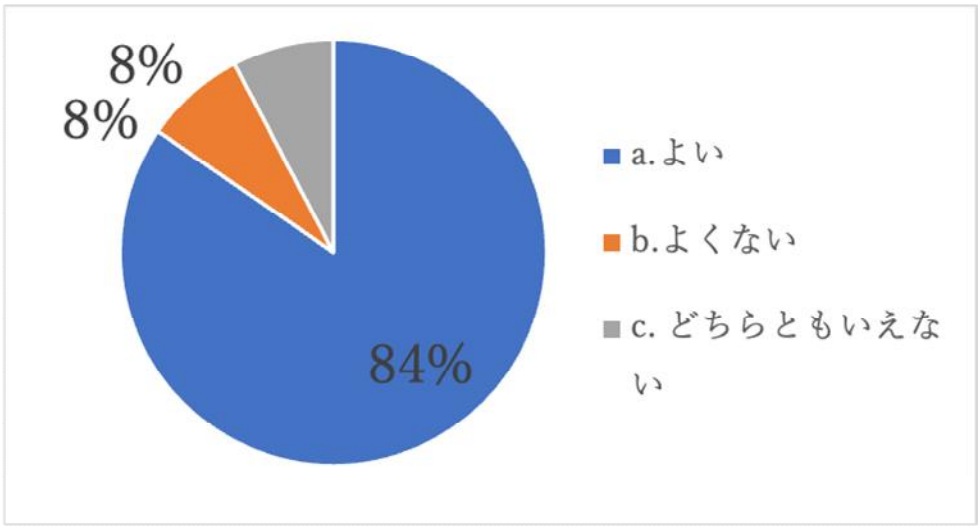
4. 奨学金受給状況



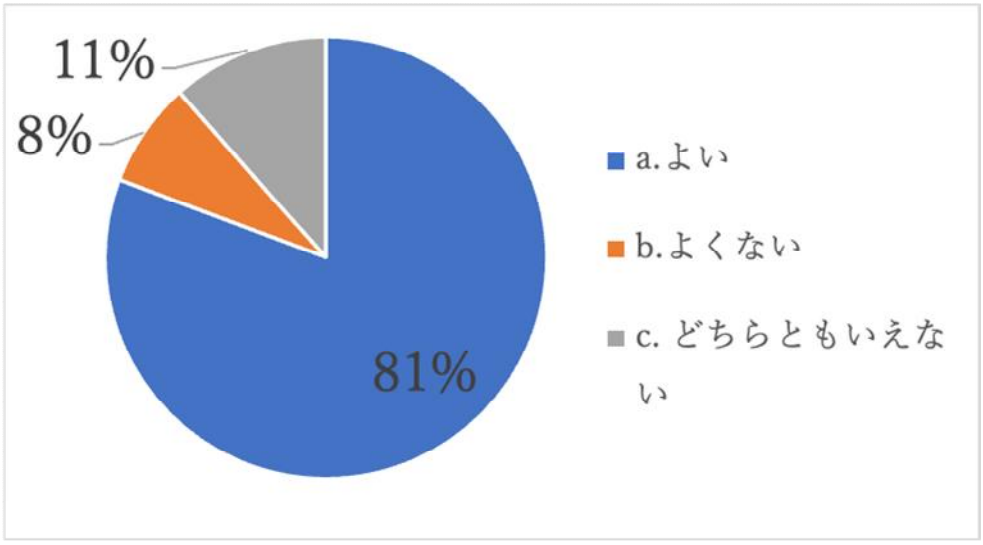
5. 連大への入学目的



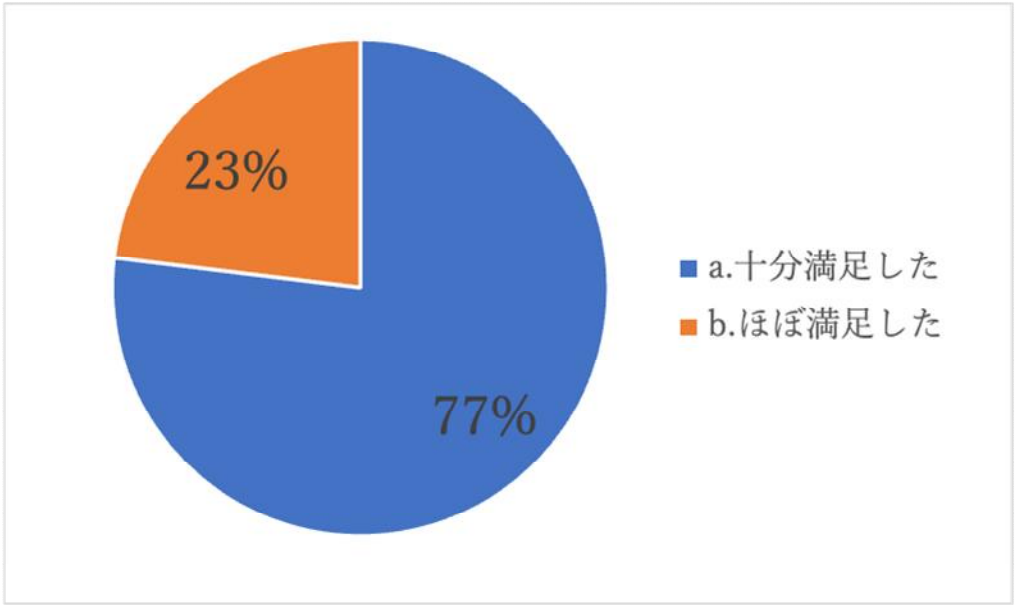
6. 農学特別講義（一般セミナー）の内容・方法について



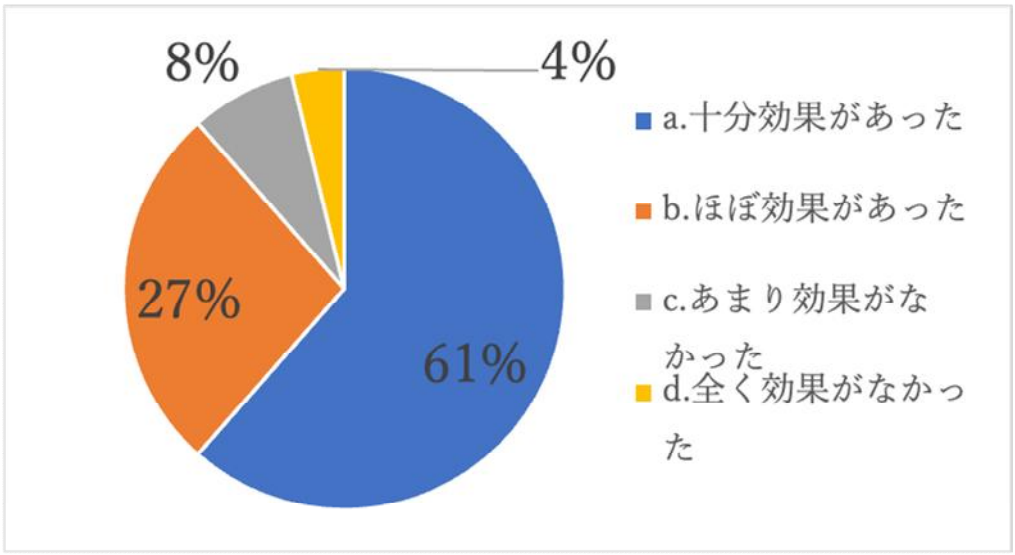
7. 専攻別講義・特論の内容・方法について



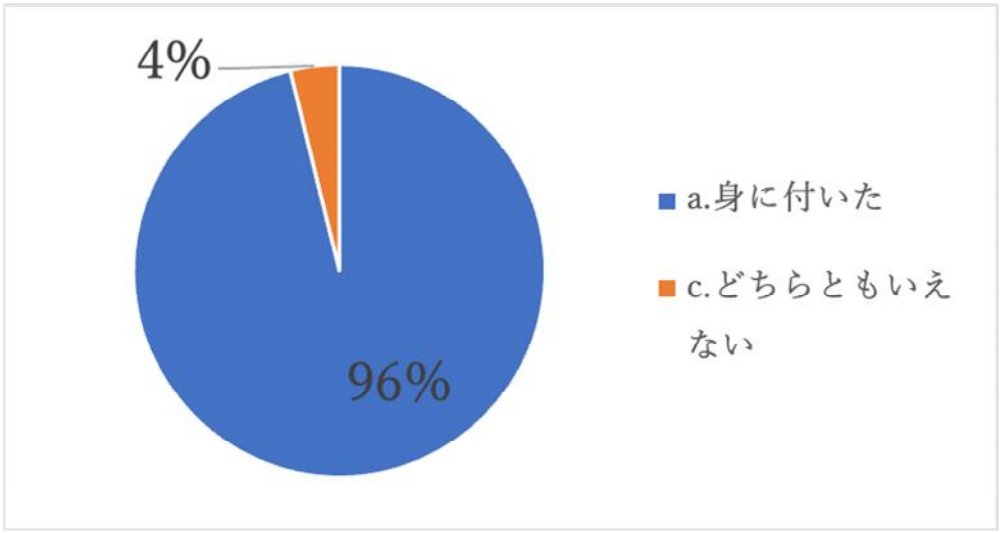
8. 全体的に見て教員の指導に満足しましたか？



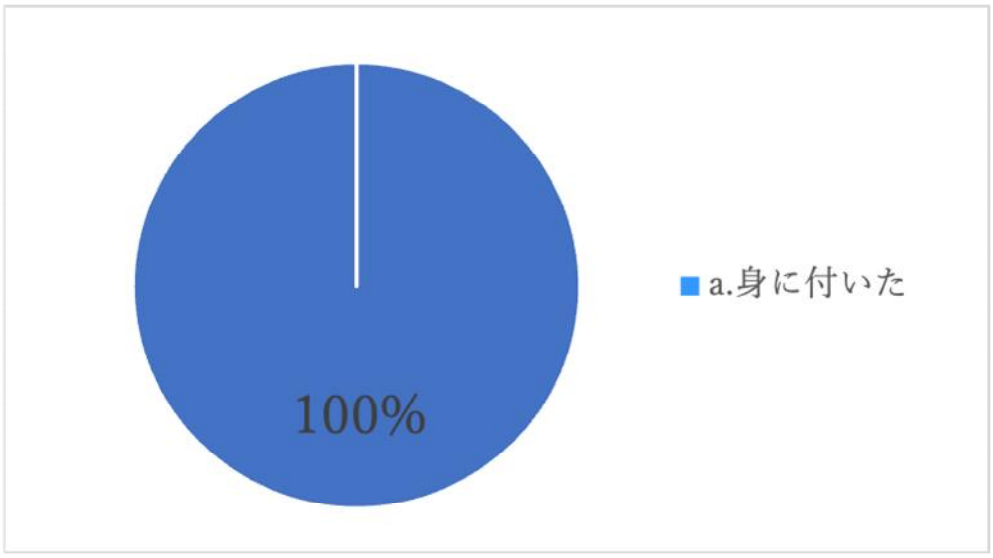
9. 中間発表はあなたの研究を進める上で効果がありましたか？



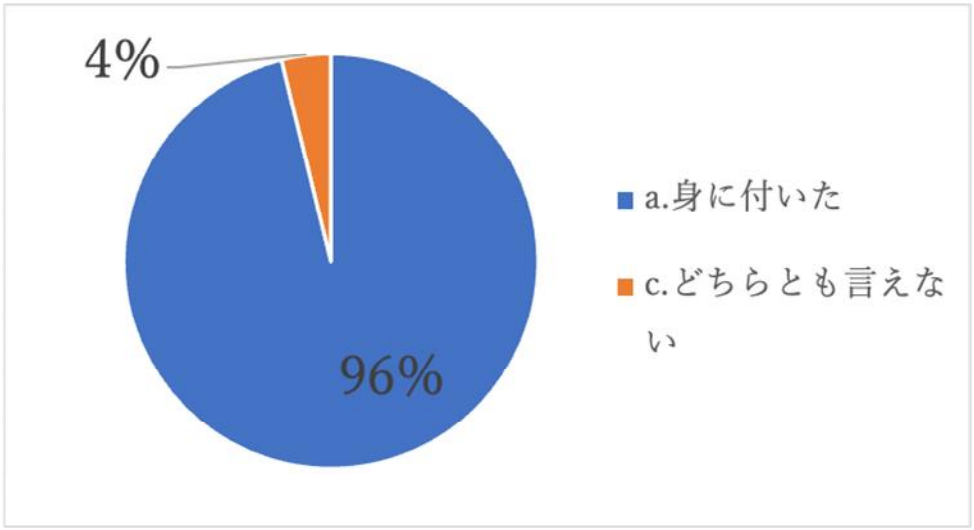
10. 実験又は調査を計画・遂行しデータを正確に解析・考察し、かつ説明する能力が身につきましたか？



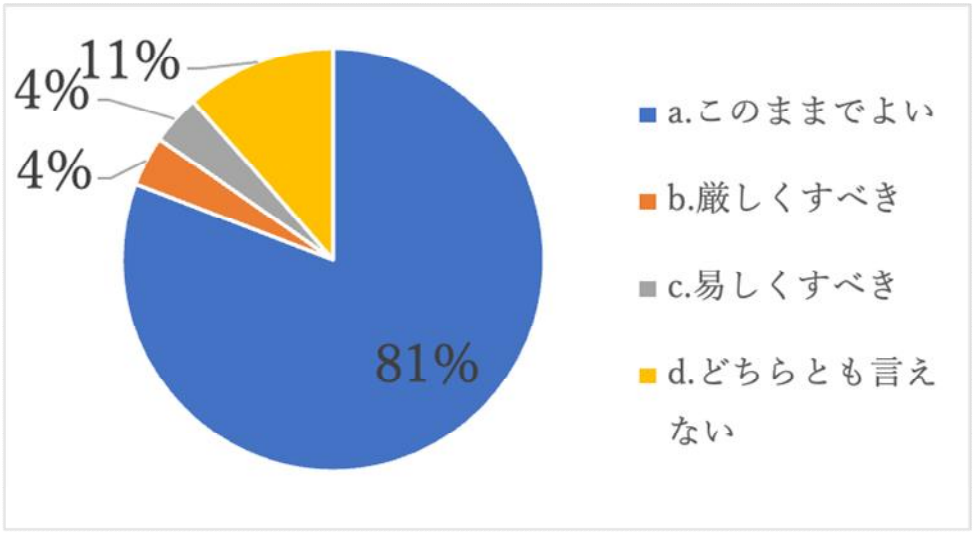
11. 専門的な知識及び技術を駆使して、課題を探求し、解決する能力が身につきましたか？



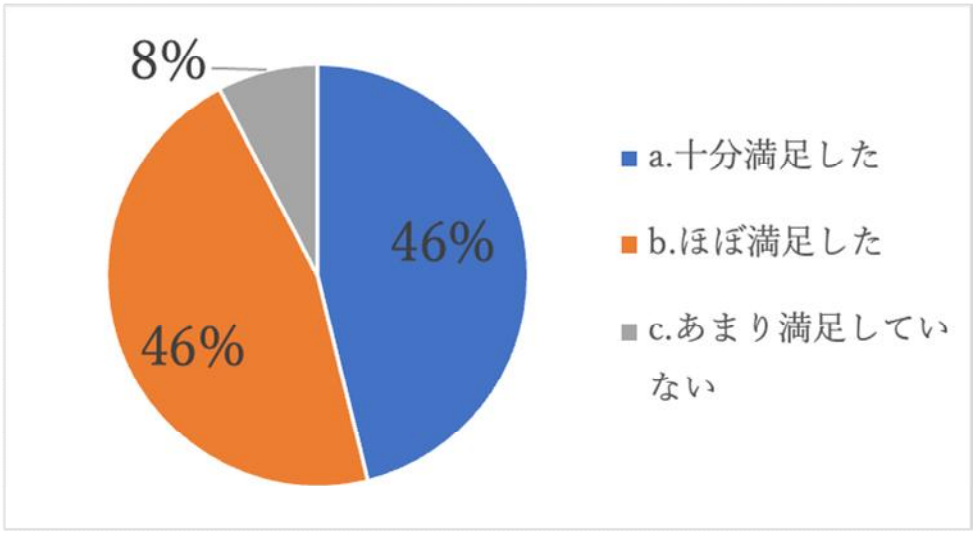
12. 社会の要求に対して様々な情報を収集・分析し、問題点と課題を理解し、適切に対応する能力が身につきましたか？



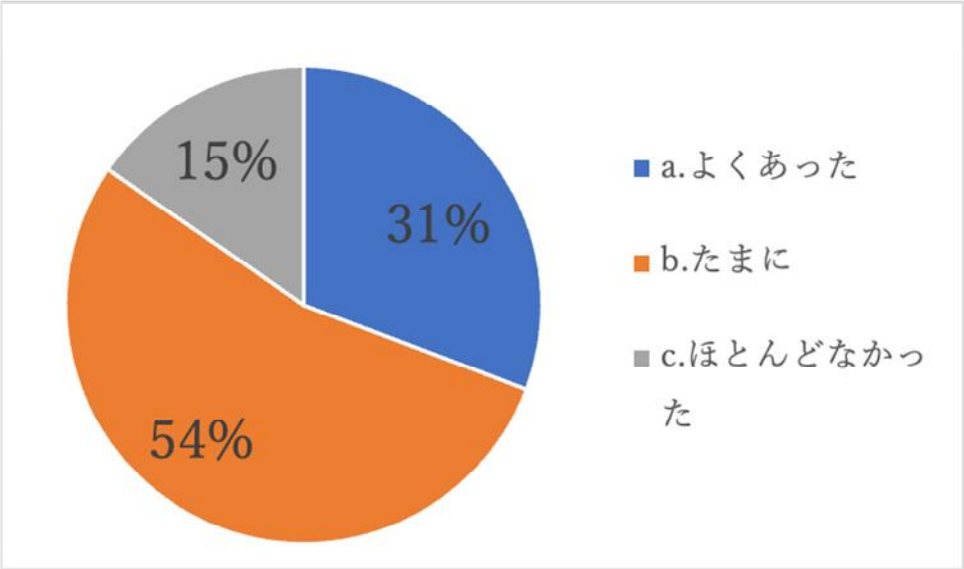
13. 学位申請条件のレフリー付き学会誌２編の要求はこのままでよいでしょうか？



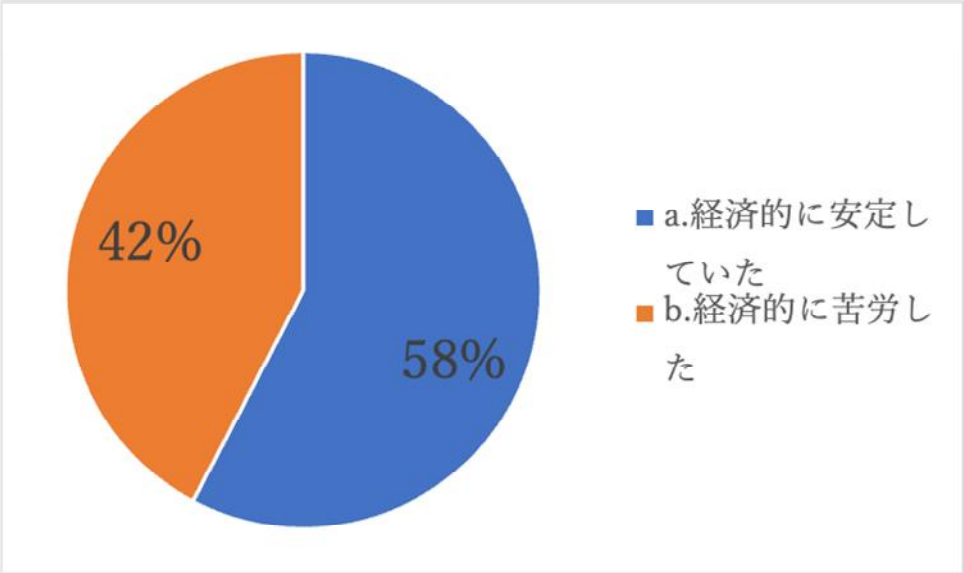
14. あなたの研究成果に満足していますか？また、得られたものがありましたか？



15. 他の構成大学とは情報交換や交流がありましたか？



16. 学生生活において経済的に苦労はありましたか。



アンケートの回答率は、令和７年９月修了生が 78%、令和８年３月修了生が 100%であり、高い回答率を得られた。また、日本人学生と留学生の比率は、それぞれ 46%と 54%であった。

連合農学研究科への入学の目的は、「学位の取得のため」と「研究をさらに発展させるため」が合計で 81%に達し、明確な目的を持って入学する学生がほとんどを占めた。また、「研究職につきたいため」という将来像（就職分野）を明確化していた学生も 11%見られた。

連合農学研究科の講義、セミナー、専攻別講義、特論の内容や方法については、肯定的な評価が農学特別講義で 84%、専攻別講義・特論で 81%となっており、満足度が高いと評価できる。また、中間発表は、89%の修了生が研究推進上で効果的であったと回答した。教員の指導についても、全員が「十分満足した」または「ほぼ満足した」旨の回答だった。修得した能力では、実験又は調査を計画・遂行しデータを正確に解析・考察しかつ説明する能力、専門的な知識及び技術を駆使して課題を探求し解決する能力、社会の要求に対して様々な情報を収集・分析し問題点と課題を理解し適切に対応する能力につ

いて、ほぼ全員が肯定的であり、学位授与方針（ディプロマポリシー）に即した学修成果がおおむね得られていると評価できる。

総じて、修了生自身による研究成果の満足度は92%に達し、今後も同水準で維持するために、令和８年度における FD 活動の一環として反映させるようにしたい。

６．連大教員資格取得者研修会

令和８年３月 23 日に、連大教員資格取得者研修会をオンライン（Teams）で実施した。３大学で構成される本研究科について理解を図るための研修会であり、今年度に連大指導教員資格を取得した教員９名のうち４名が参加した。連大教員としての責務、各種会議、入試、研究費・支援制度、カリキュラム・学位論文等について、専任教員より説明を行った。参加者との間で活発に質疑応答が行われ、連大についての理解を深める大変良い機会となった。なお、今年度より本研修会の受講を必須とし、他の用務により欠席した５名については本研修会をオンデマンド配信し、欠席者５名全員の受講完了を確認した。

７．ＦＤ活動参加状況とモニタリング項目について

令和７年度の専任教員のＦＤ活動参加状況は以下のとおりである。

合計参加率		**100.0**	**%**	**（基幹教員等**	**2**	**名中**	**2**	**名 参加）**
企画別参加率	農学特別講義	50.0	%	（基幹教員等	2	名中	1	名 参加）
	連大指導教員資格取得者研修会	100.0	%	（基幹教員等	2	名中	2	名 参加）
備考									
連合農学研究科は、専任教員数により回答									

また、モニタリング項目については以下のとおりである。

①卒業（修了）時の学生からの意見聴取の結果により、大学等の目的及び学位授与方針に即した学修成果が得られていることを確認しているか。	令和７年９月修了生及び令和８年３月修了生に「修了生アンケート」を実施し、学生の学修成果に対する認識を把握した。
②授業の内容及び方法の改善を図るためのファカルティ・ディベロップメント（FD）を組織的に実施し、その成果を把握しているか。	３構成大学の学生が一堂に会する「農学特別講義」の学生アンケート結果を基に授業の内容及び方法の改善を図った。

８．おわりに

本報告書では、農学特別講義、キャリア開発特論、分野別セミナー、修了生アンケート、連大教員資格取得者研修会等について取りまとめた。農学特別講義は、令和４年度より従来の対面スタイルに戻し、令和７年度も対面で琉球大学にて実施した。講師の講義を会場で直接聴講する教育効果は高く、学生からは対面方式の実施について高い評価が得られた。また、今回の情報交換セミナー（ポスターセッション）では、昨年度に引き続き、参加学生及び教員による投票を用いたポスター発表の評価制度を導入し

た。昨年度の振り返りやアンケート結果などを踏まえ、今年は代議委員票に適切な重みづけを行うことで、選考の公平性向上に努めた。今後も、必要に応じて受賞者の選考方法を継続的に検討し、発表者のモチベーション向上や参加者の活発な交流の促進に努めていきたい。

キャリア開発特論は、社会で幅広く活躍する学位取得者から経験やフィロソフィーを聴講する機会としている。本講義は、学生が学位取得後のキャリアパスを考える上で教育効果が高く、豊かな学識を備えた研究者や高度技術者の養成に寄与しており、民間企業も含めた幅広い職種への就職の動機づけとしても有意義である。

以上、連大のファカルティ・デベロップメント（FD）活動では、このような講義や研修会、アンケートを通じて教員や学生の意見を吸い上げ、連大として改善できる部分については随時見直しを図っており、教育の質の向上に努めている。今後もこのような考え方と方向性に沿って、FD 活動を行っていく予定である。

令和７年度　鹿児島大学大学院連合農学研究科ＦＤ委員会委員

委員長	北　原　　兼　文	研究科長
委　員	寺　田　竜　太	副研究科長
委　員	嬉　野　健　次	（琉球大学）
委　員	大　塚　　彰	（鹿児島大学）
委　員	小　西　　照　子	（琉球大学）
委　員	古　藤　田　信　博	（佐賀大学）
委　員	辻　　一　成	（佐賀大学）
委　員	吉　川　　毅	（鹿児島大学）